

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第101集

平手町遺跡

—西志賀遺跡北東地点の調査—

2002

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

序

平手町遺跡は都心にほど近い住宅地の一角に位置します。独立行政法人産業技術総合研究所中部センター平手サイトの環境整備工事に先立ち、愛知県埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財調査を実施いたしました。

平手町遺跡は、昭和初期から本格的に発掘調査が進められた西志賀遺跡の一角に当たります。今回の調査では、弥生時代の集落を囲む溝が確認されました。溝の発見により、弥生時代前期から中期の集落の北西端が判明しました。また、溝の中に捨てられた貝類をはじめとする自然遺物、土器など豊富な資料を得られたことは、当時の物質文化を知る手掛かりとなりました。

これら多岐にわたる調査成果を本書に掲載することが、地域誌研究の一翼を担い、多くの方々に活用され、ひいては埋蔵文化財保護に寄与することを願ってやみません。

最後になりましたが、平手町遺跡の発掘調査を実施するにあたり、各方面の方々にご配慮いただいたこと、関係者および関係諸機関のご理解とご協力に対して、厚く御礼申し上げます。

平成 14 年 8 月

財団法人 愛知県教育サービスセンター
理事長 井上銀治

例言

1. 本書は愛知県名古屋市北区平手町1丁目に所在する平手町遺跡－西志賀遺跡北東地点－の調査報告書である。
2. 発掘調査は独立行政法人産業技術総合研究所中部センター平手サイトの環境整備工事に伴う事前調査として、独立行政法人産業技術総合研究所中部センター平手サイト（旧通産省工業技術院名古屋工業試験所）より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成11（1999）年4月12日～9月30日、調査面積は計1,500 m²である。調査担当者は永井宏幸（調査研究員）、加藤博紀（調査研究員／当時）、赤塚次郎（主査）である。
4. 調査にあたっては、愛知県埋蔵文化財センター運営協議会委員、同専門委員ならびに次の各関係機関のご指導とご協力を得た。（順不同）
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター、
独立行政法人産業技術総合研究所中部センター平手サイト、
名古屋市教育委員会文化財保護室
5. 調査および本書作成において、次の方々、関係機関のご教示、ご協力賜った。（敬称略・順不同）
紅村 弘 石川日出志 佐藤由紀男 黒沢 浩 品川欣也 梶山 勝
浅野弘子 服部哲也 水野裕之 田原和美
名古屋市博物館 名古屋市見晴台考古資料館 明治大学考古学博物館
6. 遺物整理および本書の作成に関わる作業において、次の方々の助力を得た。
中村たかみ 山田有美子 斎藤佳美 牧 ゆかり 山口典子
なお、出土遺物の写真撮影は福岡 栄氏の手を煩わした。
7. 本書の執筆は、目次に示した。とくに明記していない場合は、永井宏幸が執筆した。
なお、名古屋大学渡辺 誠先生より玉稿を賜った。本書の編集は永井宏幸が担当した。
8. 発掘調査および本書で使用した方位は、国土座標第Ⅶ系、基準高は東京湾平均海面（T.P.）に基づく。ただし、表記は「日本測地系」とした。
9. 図版に掲載した遺物実測図および拓本の縮率は、原則として1/4を基本に、それ以外のものは、その都度明記した。
10. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いた番号を用いた。
11. 発掘調査の記録（実測図・写真など）は愛知県埋蔵文化財センターで保管、出土遺物（本書付属CD-ROMに保管箱番号・登録番号対照表を収録）は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

1. 調査の概要【1】

- 1 調査の経緯
- 2 調査の概要
- 3 基本層序
- 4 環境
- 5 西志賀遺跡調査の軌跡

2. 遺構【9】

- 1 遺構の概要
- 2 99A区第1面（弥生時代後期から古墳時代前期）の遺構
- 3 99A区第2面（弥生時代前期から中期）の遺構
- 4 99B区・99C区の遺構
- 5 試掘・立会調査
- 6 まとめ

3. 遺物【19】

- 1 資料提示の前提
- 2 弥生時代前期から中期
- 3 99B区・C区・試掘調査出土遺物
- 4 弥生時代後期から古墳時代前期（早野浩二）
- 5 骨角製品（川添和暁）
- 6 石製品（川添和暁）

4. 自然科学分析【37】

（株式会社バリノ・サーヴェイ）

5. まとめ【57】

付載1

西志賀遺跡（平手町地区）の自然遺物【59】

（渡辺 誠・岡田 賢・李 浩基・築瀬孝延）

付載2

西志賀遺跡資料調査報告【75】

（永井宏幸・田原和美）

図版

写真図版

報告書抄録

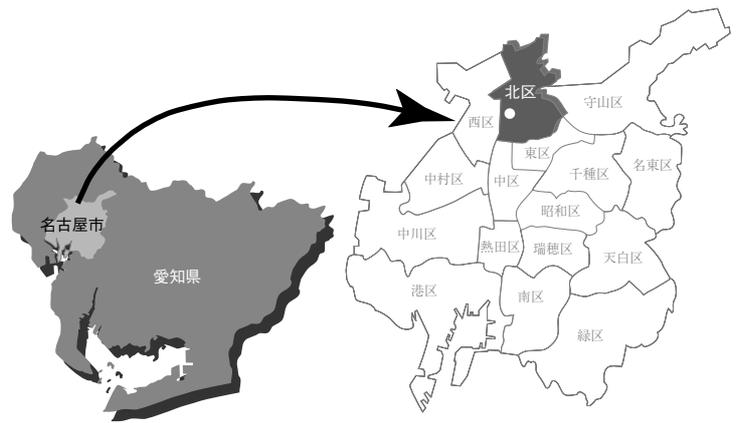
図版目次

図版 01	弥生時代前期 (1) SD06	図版 19	弥生時代中期 (15) SD03
図版 02	弥生時代前期 (2) SD06	図版 20	弥生時代中期 (16) 貝層
図版 03	弥生時代前期 (3) SD06	図版 21	弥生時代中期 (17) 貝層上
図版 04	弥生時代前期 (4) SD06	図版 22	弥生時代中期 (18) 貝層上他
図版 05	弥生時代中期 (1) SD03	図版 23	弥生時代中期 (19) SB01
図版 06	弥生時代中期 (2) SD03	図版 24	弥生時代中期 (20) SX01
図版 07	弥生時代中期 (3) SD03	図版 25	弥生時代中期 (21) SX01
図版 08	弥生時代中期 (4) SD03	図版 26	弥生時代中期 (22) B区・C区
図版 09	弥生時代中期 (5) SD03	図版 27	弥生後期～古墳前期 (1)
図版 10	弥生時代中期 (6) SD03	図版 28	弥生後期～古墳前期 (2)
図版 11	弥生時代中期 (7) SD03	図版 29	弥生後期～古墳前期 (3)
図版 12	弥生時代中期 (8) SD03	図版 30	弥生後期～古墳前期 (4)
図版 13	弥生時代中期 (9) SD03	図版 31	弥生後期～古墳前期 (5)
図版 14	弥生時代中期 (10) SD03	図版 32	弥生後期～古墳前期 (6)
図版 15	弥生時代中期 (11) SD03	図版 33	弥生後期～古墳前期 (7)
図版 16	弥生時代中期 (12) SD03	図版 34	骨角製品 (1)
図版 17	弥生時代中期 (13) SD03	図版 35	骨角製品 (2)
図版 18	弥生時代中期 (14) SD03	図版 36	石製品

写真図版目次

写真図版 1	遺構写真 (1)	写真図版 16	遺物写真 (7)
写真図版 2	遺構写真 (2)	写真図版 17	遺物写真 (8)
写真図版 3	遺構写真 (3)	写真図版 18	遺物写真 (9)
写真図版 4	遺構写真 (4)	写真図版 19	遺物写真 (10)
写真図版 5	遺構写真 (5)	写真図版 20	遺物写真 (11)
写真図版 6	遺構写真 (6)	写真図版 21	遺物写真 (12)
写真図版 7	遺構写真 (7)	写真図版 22	遺物写真 (13)
写真図版 8	遺構写真 (8)	写真図版 23	遺物写真 (14)
写真図版 9	遺構写真 (9)	写真図版 24	遺物写真 (15)
写真図版 10	遺物写真 (1)	写真図版 25	遺物写真 (16)
写真図版 11	遺物写真 (2)	写真図版 26	遺物写真 (17)
写真図版 12	遺物写真 (3)	写真図版 27	遺物写真 (18)
写真図版 13	遺物写真 (4)	写真図版 28	遺物写真 (19)
写真図版 14	遺物写真 (5)	写真図版 29	遺物写真 (20)
写真図版 15	遺物写真 (6)	写真図版 30	遺物写真 (21)

1. 調査の概要



1. 調査の経緯

平手町遺跡は、北緯35度12分00秒、東経136度54分20秒、標高5～6m（現況）、愛知県名古屋市北区平手町から西区貝田町にかけて所在する。遺跡は西志賀遺跡の北東部に相当する。

平手町遺跡を含む西志賀遺跡は、昭和初期段階、すでに遺跡として認識されている。昭和5（1930）年の遺跡発見以来、12回におよぶ同一地点の調査が昭和28（1953）年まで断続的に行われてきた。その後、全国的にも著名な弥生時代遺跡として認知されていたにもかかわらず、周辺の宅地化が相俟って、調査は中断することとなる。しかし近年、再開発事業に伴う緊急調査が名古屋市教育委員会により進められるようになった。今回の調査地点に西接する市営住宅貝田荘地点では、名古屋市教育委員会により改築工事に伴う発掘調査（1995年）が行われている（名古屋市教委1996）。

今回の調査対象地は周知の遺跡として登録されている西志賀遺跡・志賀公園遺跡の包蔵地付近に当たる。平成10（1998）年7月、名古屋市教育委員会は遺跡の確認調査を実施した。その結果、西志賀遺跡・志賀公園遺跡の範囲が続くことが判明した。その結果を受けて、環境整備事業に伴う発掘調査を実施することが、独立行政法人産業技術総合研究所中部センター平手サイト（旧通産省工業技術院名古屋工業試験所）と愛知県教育委員会・愛知県埋蔵文化財調査センターとの協議により決定した。

名古屋市教育委員会による試掘調査は、南西に隣接する西志賀遺跡、北東に隣接する志賀公園遺跡の2遺跡を対象として進めていた。しかし、当該地において両遺跡の範囲が明確には区分できないと判断したため、名古屋市教育委員会が愛知県教育委員会に対し、本調査開始直前の平成11（1999）年3月、当該地の町名をとり遺跡名を「平手町遺跡」とするように発議があった。愛知県教育委員会もこれを了としたことから、当埋蔵文化財センターは、遺跡名を平手町遺跡に変更して発掘届などの手続きをおこなった。

遺跡名の変更

発掘調査の結果、後述するように西志賀遺跡の居住域をめぐると思えられる環濠が検出され、当該地点は西志賀遺跡の北東部にあたると判断した。そのため、愛知県教育委員会などと協議し、「平手町遺跡－西志賀遺跡北東地点－」として報告することになった。

表1 調査進行表

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
予備調査など	■————■					
試掘・立会 (1,025m ²)			■-----■			
99A区 (217m ²)				■————■		
99B区 (72m ²)						■——■
99C区 (186m ²)				■——■		

2. 調査の概要

発掘調査は、工事の進行に先行して平成11（1999）年5月より開始した。計1,500m²である。調査は、環境整備事業の具体化にともない、試掘調査を計15ヶ所行ったうえで、本調査として99A～99C区を設定した（表1）。

（1）試掘・立会調査（図1）

試掘・立会調査は、環境整備事業対象地に15ヶ所設定した。環境整備事業における各地点の掘削深度が異なり、工事の対象にあわせて試掘溝の深さ、面積を設定し、パワー・ショベルによる掘削を行った。その結果、対象地の大半は遺跡の包含層および遺構面まで到達しないことが明らかになった。ただし、下記の3箇所については、遺物・遺構の存在が予想されたので、調査区を設定し、本調査を行った。

（2）99A区

99A区は第1面（弥生時代後期～古墳時代前期）、第2面（弥生時代前期～中期）の計2面にわたり発掘調査を行った。第1面では溝を2条、第2面では溝2条と竪穴住居1棟などを確認した。このうち、第2面の溝（SD03）は、西側に隣接する名古屋市営住宅貝田荘改築工事に伴う事前調査で確認された溝の延長と推定される。

（3）99B区

99B区は99A区から北西方向に落ち込む谷状の地形に相当する。遺構については確認できず、遺物が少量確認できるのみであった。

（4）99C区

99C区は環境整備事業の掘削深度がちょうど第1面の遺構検出面に相当した。したがって、これより下位に相当する調査は対象外となり、第1面の遺構を確認するにとどまった。

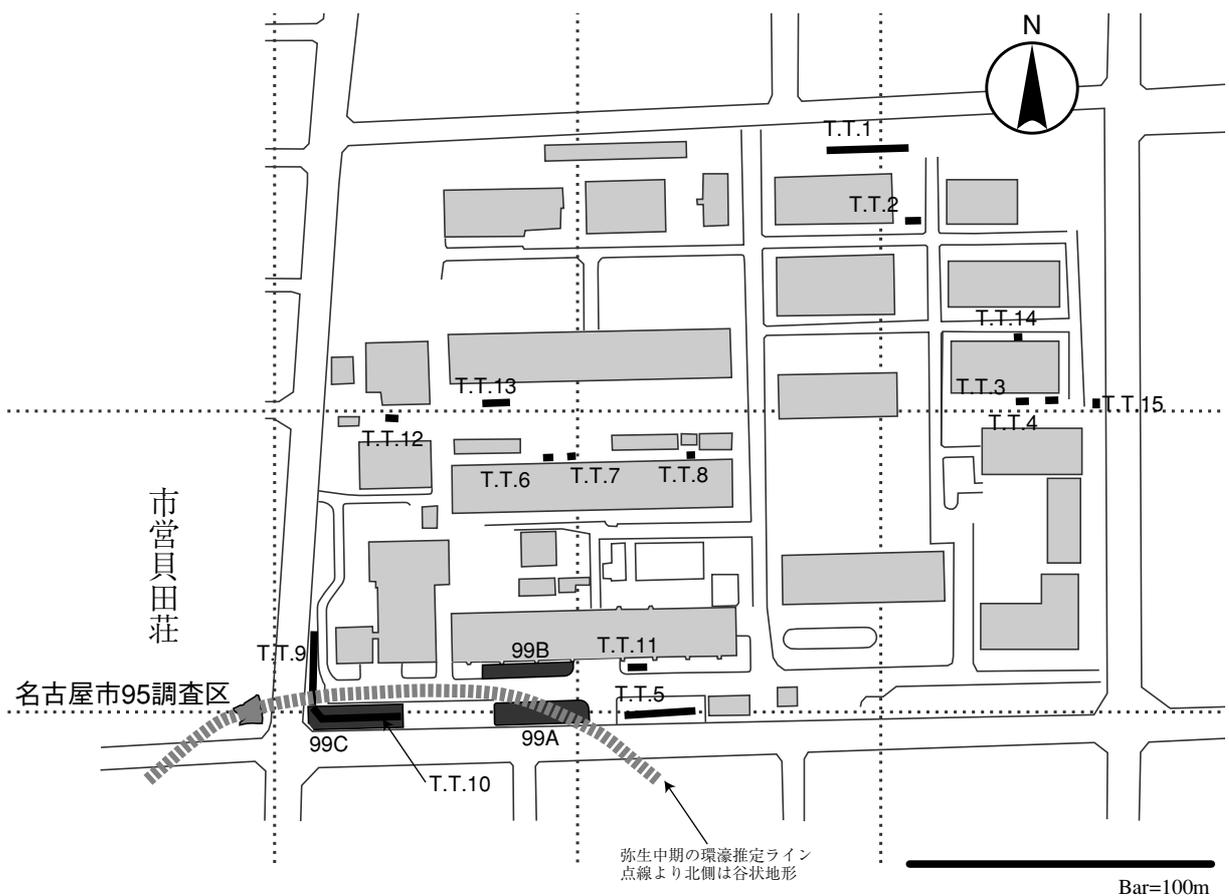


図1 調査区位置図

3. 基本層序

基本層序は、99A区および99C区をとりあげて示す。

表土は現況から60～80cmの客土が覆っていた。当敷地の造成時の盛土と考えられる。続いて、水田と考えられる旧耕作土および床土が20cm、灰～暗灰色シルト層が50cm前後堆積する。これより下位が包含層（黒褐色土層）および遺構検出面となる。標高で約3m前後に相当する。99C区と99A区を遺構検出面で比較すると、99C区の方が20cm前後高い。したがって、緩やかに東へ傾斜していることが読み取れる。これに99B区および99A区北西側の谷状の落ち込みを加えて考えると、99A区を境に北西方向へ谷状の地形が広がり、南西方向へは微高地が形成されていたことがわかる。

第1面は、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面である。遺構埋土は灰色シルトから暗灰色シルトで、遺構は黒褐色～黒色土層に掘り込まれている。黒色土層下位には混貝土層がSD03を覆うように堆積する。この黒色土層下位から第2面の弥生時代前期から中期の遺構が掘り込まれている。黒色土の下には青灰色砂質シルト～シルト層があり、第2面の遺構検出は青灰色砂質シルト層でおこなった。青灰色シルト下位（標高1m前後）から湧水が激しくなった。

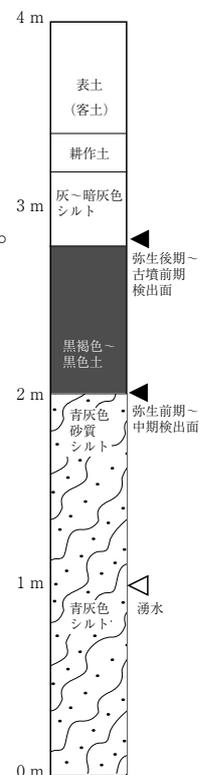


図2 基本層序
模式図

4. 環境

立地 平手町遺跡は、現況5m前後の沖積地に立地する。南へ2kmに位置する名古屋城は、台地（熱田層・中位段丘）の北西端にあり、ここから北へ向かって比高差約10mの沖積地につながる。市街地化された現在でも、名古屋城から北へ向かう道路は、台地縁辺から沖積地につながる高低差を体感することができる。一方、平手町遺跡の北側約1kmには庄内川と矢田川が合流する。明治年間までは、庄内緑地のすぐ東あたりが合流地点であった。昭和30年代以降宅地化が進み、遺跡周辺の現状は住宅が立ち並ぶ。北1kmに庄内川と矢田川の合流地点、南2kmに名古屋城と官公庁街、東400mに名古屋高速1号楠線、西1kmに地下鉄鶴舞線が走る庄内通に平手町遺跡は囲まれている。

周辺遺跡 弥生時代の遺跡は、庄内川をはさんで対岸に月繩手遺跡と朝日遺跡、また、名古屋城のある台地縁辺を北東に向かった場所に片山神社遺跡、名古屋城の南側に名古屋城三の丸遺跡がある。最も隣接する志賀公園遺跡と西志賀遺跡の間に谷状の地形が存在することは、志賀公園遺跡の発掘調査と今回の調査結果により判明している。ただし、志賀公園遺跡との関係は、西志賀遺跡が拡大した同一集落か、あるいは弥生時代中期以降に出現した別集落か、現状では不明である（永井ほか1998）。

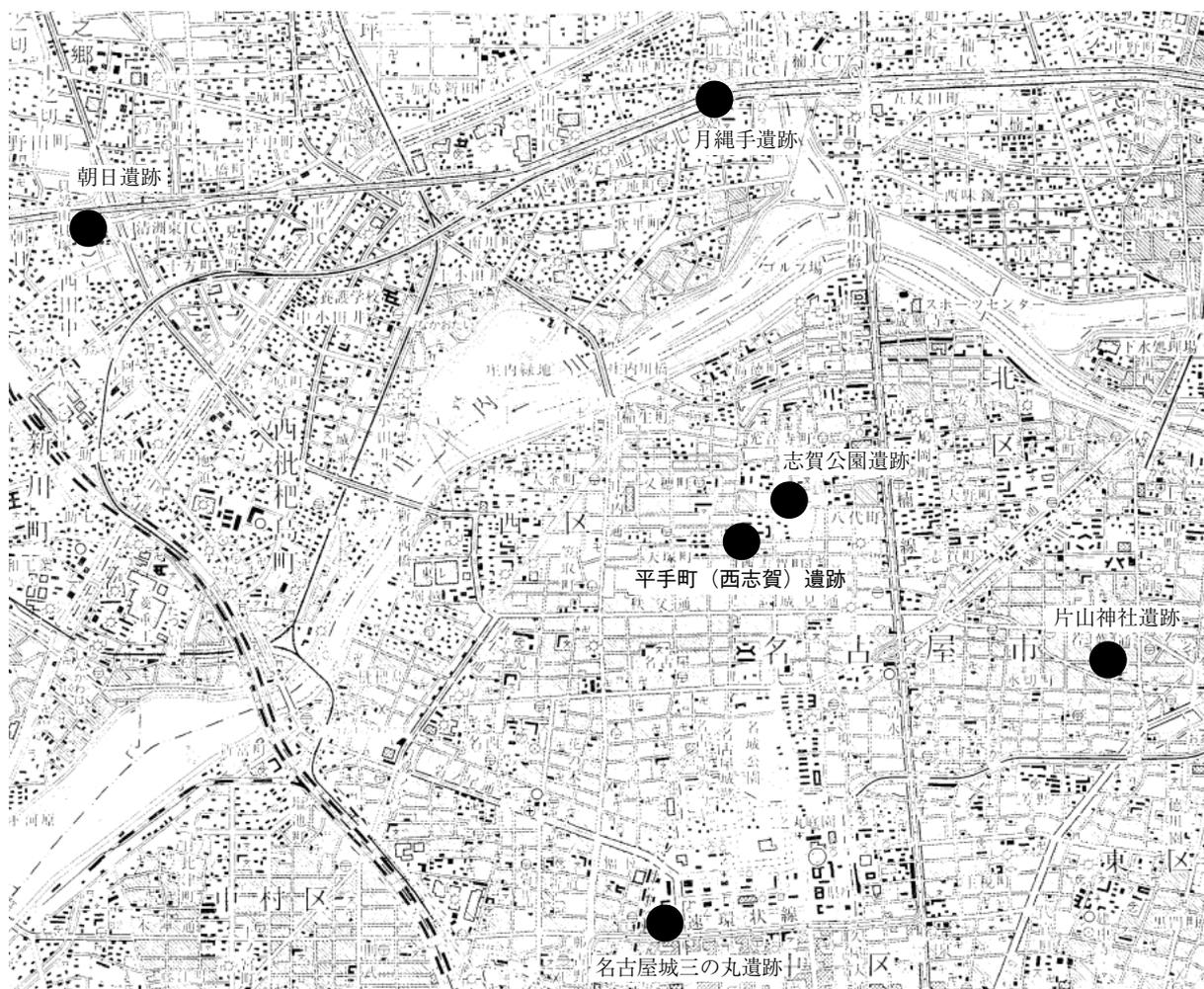


図3 平手町（西志賀）遺跡と周辺の弥生時代遺跡位置図 1:50,000

5. 西志賀遺跡調査の軌跡

(1) 西志賀遺跡の発見

西志賀遺跡の貝層の存在は、『尾張名所図絵』『尾張史』等の記載から、古くから知られていた。弘化3（1846）年の村絵図*に「字貝塚田」の地名がみえ、その存在を裏付ける。

本格的な調査が始まったのは、昭和に入ってからである。1930（昭和5）年、吉田富夫は現在の志賀公園内にある池を掘削する工事に立ち会った。当時、西志賀遺跡周辺は区画整理事業にともなう工事が進行中であった。吉田は、西志賀土地区画整理組合長近藤孝次郎の示唆を得て、西区貝田町を踏査し、貝層の存在を改めて確認した。その直後、小栗鐵次郎ら愛知県史蹟名勝天然記念物調査会によって初めて発掘調査が実施された。1930～31（昭和5～6）年に吉田富夫、島田貞彦・三森定男（京都大学）が調査、西志賀遺跡は縄文文化と弥生文化の接点を追及し得る内容を持つことが判明した。

(2) 貝塚の本格的調査

1930年代後半の全国的な土器編年・地域体型の整備に伴い、本遺跡が弥生前期の遠賀川系土器の東限であり、東日本弥生文化との接点であると考えられるようにいって、にわかに注目されるようになった。これより戦時中にかけて藤沢和夫、杉原莊介（明治大学）らによる学術調査や、樋口敬治による採集活動がおこなわれている。

戦後になって、東京大学・名古屋大学・明治大学・紅村弘・日本考古学協会が、西志賀遺跡の特徴とも言える先の問題に取り組むべく、相次いで調査に臨んでいる。この、1940年代後半から1950年代後半に実施された調査の地点はいずれも、おもに弥生前期貝層を調査目的としていたため、東西約32m・南北約23mという非常に狭い範囲に集中している。今日、全国的に弥生前期土器編年の指標遺跡として著名な西志賀遺跡であるが、実は戦後10年間弱に実施されたこれらの調査の成果が、現在遺跡全体のイメージとして定着している。

(3) 遺跡範囲の究明

その後遺跡周辺は急激に市街化していき、しばらくの間発掘調査を実施する機会は失われた。近年になってようやく名古屋市教育委員会によって2回の調査（1995年・2000年）がなされたものの、どちらも遺跡中心より離れた部分での小規模な調査にとどまっている。1995年の調査は、120m²の小規模調査であったが、中期の環濠と推定される溝が確認された。報告書によると、「居住域の北の端」であり、環濠がこれを区画する位置に相当する。平手町遺跡99A区は1995年調査区の東約100mに位置し、中期の環濠を確認した。99A区の北側に隣接する99B区では、A区から続く谷状の落ち込みを確認した。したがって、1995調査区と99A区を境に居住域は途切れると考えられる。

このように、遺跡の一端ではあるが、居住域の範囲が推定できる結果は増加しつつある。市街地化が進む遺跡としては、高蔵遺跡があげられる。30次を越える調査はほとんど小規模で、徐々に集落像が明らかになってきた。西志賀遺跡も今後の調査は、小規模な積み重ねにより、遺跡の全体像が明らかにされるであろう。

*徳川林政史研究所所蔵資料



図4 西志賀・平手町・志賀公園遺跡の調査地点 1:5,000

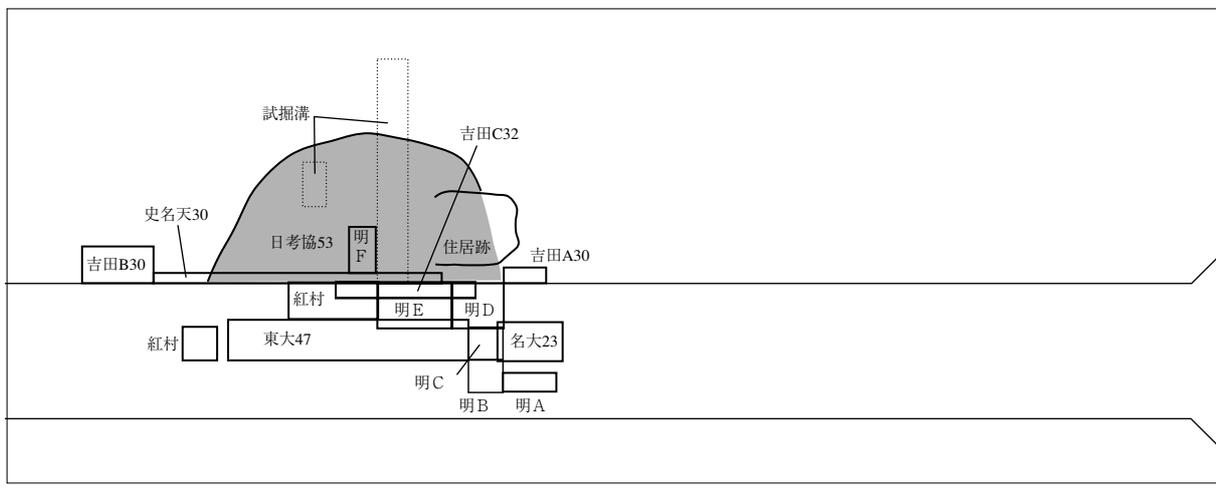


図5 西志賀貝塚周辺調査地点位置図 (明治大学資料を改変) 1:500

表2 西志賀遺跡調査の履歴

調査日など	調査主体者など	事項
1792（寛政4）年		『尾張名所図会』後編巻3・綿神社の項「（三郷悪水路開削時に）蛤の殻の多く出し所ありて今もそこを貝塚とよべり」
1843（天保14）年		『尾張志』（下）春日井郡綿神社の項「此西なる新川を掘りし時地中よりはまぐりのからの多く出し處ありて今もそこを貝塚と呼り」
1930（昭和5）年6月17日	吉田富夫	吉田富夫は西志賀土地区画整理組合組合長・近藤孝次郎より志賀公園遺跡西方に「貝塚」の地名があることを聞き（現・西区貝田町）、現地を踏査した結果土器・石器を採集し貝層の存在を確認。
1930（昭和5）年6月18日	愛知県史蹟名勝天然記念物調査会	愛知県史蹟名勝天然記念物調査会（小栗鐵次郎ら）西志賀貝塚を踏査、20日にはトレンチ発掘。【史名天30】
1930（昭和5）年12月12日	吉田富夫	吉田富夫が京都大学：島田貞彦・三森定男を招き、西志賀貝塚を視察。小規模な発掘調査実施。【吉田30A】
1930（昭和5）年12月14日	吉田富夫	吉田富夫・三森定男による発掘調査。【吉田30B】
1931（昭和6）年10月～ 1932（昭和7）年7月	樋口啓治	遺跡範囲内を流れる三郷悪水路の暗渠化工事実施、樋口啓治ら多数の遺物採集。【樋口A】
1932（昭和7）年3月4・5日	吉田富夫	吉田富夫・藤澤一夫による発掘調査。【吉田32C】
1933（昭和8）年12月12日	樋口啓治	樋口啓治により人骨検出、13日中谷内務部長・小栗鐵次郎らがこれを調査・採集。銅鏃・弥生前期の土器が共伴。【樋口B】
1941（昭和16）年		貝田町一丁目南50mほどの地点で防空壕を掘った際に伸展葬の人骨・少量の土器・石鏃・紡錘車など出土。
1943（昭和18）年9月7～12日	明治大学	杉原莊介による第1次発掘調査。【明A・F】
1947（昭和22）年8月	東京大学人類学教室	山内清男・渡辺直経・田辺義一らによる発掘調査。【東大47】
1948（昭和23）年	名古屋大学	澄田正一による発掘調査。
1948（昭和23）年11月2～7日	明治大学	杉原莊介による第2次調査。【明B・C・D・E】
1948（昭和23）年～ 1950（昭和25）年	紅村弘	紅村弘による数次にわたる発掘調査。【紅A・B】
1953（昭和28）年7月11日～ 8月4日	日本考古学協会	日本考古学協会により貝塚の北側を全掘。【日考協53】
1986（昭和61）年	名古屋市教育委員会	貝塚地区南東2筋違いの通りを名古屋市教育委員会が立会調査。【名市教委86】
1995（平成7）年4月17日～ 5月12日	名古屋市教育委員会	名古屋市教育委員会による発掘調査。中期の環濠を検出。【名市教委95】
1999（平成11）年4月12日～ 9月30日	愛知県埋蔵文化財センター	愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査。前期および中期の環濠を検出。【平手町遺跡として調査 県埋文99】
2000（平成12）年2月28日～ 3月3日	名古屋市教育委員会	名古屋市教育委員会による第2次調査。【名市教委00】

西志賀遺跡・志賀公園遺跡関連文献

西志賀遺跡・志賀公園遺跡に関わるもの

- 1931 小栗鐵次郎 「銅鏃を出した西志賀貝塚」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』9 愛知県
 1931 小栗鐵次郎 「名古屋市北部沖積層に於ける遺物包含地」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』9 愛知県
 1932 林魁一 「名古屋市西志賀貝塚」『考古学』第3巻第3号東京考古学会
 1933 吉田富夫 「尾張国名古屋市西志賀貝塚に就いて」『考古学雑誌』第23巻第6号考古学会
 1933 森本六爾 「弥生式土器葉状文の一新例—名古屋市西志賀貝塚発見品—」『考古学』第4巻第2号東京考古学会
 1933 藤澤一夫 「尾張発見の初痕のある土器」『日本原始農業』
 1934a 吉田富夫 「尾張西志賀貝塚発見の土器に就いて」『考古学』第5巻第1号東京考古学会
 1934b 吉田富夫 「尾張西志賀貝塚発見の土器に就いて(Ⅱ)」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
 1934a 藤沢一夫・小林行雄 「尾張国西志賀の遠賀川系土器」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
 1934b 藤沢一夫・小林行雄 「尾張国西志賀の櫛目式土器」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
 1934 小林行雄 「西志賀人生業問題資料」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
 1934 森本六爾 「西志賀弥生式土器号の後に」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
 1934 小林行雄 「弥生式彩色文土器一例」『考古学』第5巻第4号東京考古学会
 1934 小栗鐵次郎 「尾張西志賀貝塚発見の骨と銅鏃」『考古学』第5巻第5号東京考古学会
 1934 藤沢一夫 「尾張西志賀発見の石鏃」『考古学』第5巻第4号東京考古学会
 1934 樋口敬治 「尾張西志賀遺物図譜」『考古学』第5巻第10号東京考古学会
 1934 小栗鐵次郎 「名古屋市西志賀貝塚(其二)」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第12愛知県
 1934 森本六爾 「底部に布痕を有する土器の一形式」『考古学評論』第1巻第1号東京考古学会
 1935 吉田富夫 「尾張に於ける弥生式文化の型と時期」『考古学評論』第1巻第2号東京考古学会
 1935 吉田富夫 「尾三地方史前土器の一の種類の」『考古学』第6巻第1号東京考古学会
 1935 吉田富夫 「尾張国西志賀貝塚発見の土器に就いて」『考古学年報』第4冊日本考古学協会
 1937 吉田富夫 「尾張国西志賀発見の銅鐸形土製品」『考古学』第8巻第11号東京考古学会
 1938 森本六爾・小林行雄 「弥生式土器聚成図録」『東京考古学会会報』第1冊東京考古学会
 1939 吉田富夫・杉原莊介 「東海地方先史時代土器の研究」『人類学先史学講座』第13巻
 1941 吉田富夫 「尾張国西志賀に於ける初期弥生式文化の複合」『古代文化』第12巻第9号日本古代文化学会
 1949 杉原莊介 「尾張西志賀遺跡調査概報」『考古学集刊』第3冊東京考古学会
 1949 紅村 弘 「西志賀貝塚出土の一土器について」『考古学集刊』第3冊東京考古学会
 1949 杉原莊介 「尾張西志賀貝塚の層位」東京考古学会研究発表
 1952 山内清男 「第二トレンチ」『吉胡貝塚』文化財保護委員会吉川弘文館
 1953 吉田富夫 「西志賀貝塚回顧談」『人類学研究』1ノ3 南山大学人類学研究会
 1955 杉原莊介・岡本勇 「愛知県西志賀貝塚の遠賀川式土器」『日本考古学協会別編5第16回総会研究発表要旨』
 1955 澄田正一 「日本原始農業発生の問題」『名古屋大学文学部研究論集』XI 名古屋大学文学部
 1958 吉田富夫・紅村 弘 「名古屋市西志賀貝塚」『文化財叢書』第19号名古屋市文化財保存委員会
 1960 杉原莊介編 「日本農耕文化の生成」図録編・本文編東京堂
 1961 杉原莊介・岡本勇 「愛知県西志賀遺跡」『日本農耕文化の生成』本文編東京堂
 1963 岡本勇 「土器の底—愛知県西志賀貝塚の土器に対する実体的研究の一の試み」『物質文化』1
 1967 安達厚三 「尾張地方の初期須恵器について」『名古屋市博物館(仮称)建設準備ニュース』6号名古屋市教育委員会
 1969 深田正韶編 「尾張志」(下)歴史図書社
 1970 原田幹 「尾張名所図会」下巻愛知県郷土資料刊行会
 1986 西山克己 「西志賀遺跡出土の古式須恵器」『館報』No.1 明治大学考古学博物館
 1994 名古屋市博物館 『あゆみ湯の考古学』名古屋市博物館
 1994 木村光一編 『志賀公園遺跡発掘調査の概要』名古屋市教育委員会
 1995 山田鉦一編 『志賀公園遺跡 第2次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
 1996 木村光一編 『伊勢山中学校遺跡(第5次)埋蔵文化財発掘調査報告書24』名古屋市教育委員会
 1996 服部哲也編 『西志賀遺跡—発掘調査の概要—』名古屋市教育委員会
 1998 永井宏幸ほか 『志賀公園遺跡と西志賀遺跡、調査の軌跡と再評価』『年報平成9年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 2000 永井宏幸 『平手町遺跡』『年報平成12年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 2000 服部哲也 『西志賀遺跡(第2次)』『年報』17号名古屋市見晴台考古資料館
 2001 永井宏幸編 『志賀公園遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第100集)(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

全般に関わるもの

- 1934 北区役所教育課 『北区誌』北区役所総務課
 1955 本庄栄治郎監修 『大正昭和名古屋市史』第9巻名古屋市
 1962 愛知県文化財保存振興会編 『愛知の史跡と文化財』泰文堂
 1967 吉田富夫 「古代の北区」『むかしの北区』名古屋市北区役所
 1972 三谷石水 『金城の遺跡史話』金城小学校PTA・金城学区協議会
 1978 豊田市郷土資料館 『小栗鉄次郎コレクション展』豊田市教育委員会
 1978 小栗武夫編 『小栗鐵次郎の日誌抄』
 1982 名古屋市立博物館 『吉田富夫コレクション』名古屋市立博物館
 1984 澄田正一・伊藤安男 『東海の先史遺跡 総括編』(復刻版)紅村弘
 1985 長谷川國一 『北区の歴史』愛知県郷土資料刊行会
 1988 名古屋市博物館 『考古学の風景』名古屋市博物館
 1990 名古屋市教育委員会編 『名古屋の史跡と文化財(改訂版)』名古屋市教育委員会
 1994 北区制50周年記念事業実行委員会編 『北区誌』名古屋市北区役所
 1994 岩野見司・赤塚次郎 『日本の古代遺跡』48 愛知 保育社
 1997 新修名古屋市史編集委員会編 『新修名古屋市史』第1巻名古屋市

2. 遺構



1. 遺構の概要

平手町遺跡は環境整備工事の掘削深度を考慮し、試掘調査を行った。試掘調査後、遺構および遺物包含層に達する地区は3ヶ所に絞られた。これら3ヶ所について、それぞれ99A区、99B区、99C区を設定した。

遺構は、99A区および99C区で確認した。99B区は99A区から続く谷状の落ち込みの延長上に相当し、遺構がなかった。99C区については、環境整備工事の掘削深度がちょうど第1面の遺構検出面に相当した。これより下位に相当する調査は対象外となり、第1面の遺構を確認するにとどまった。したがって、遺構掘削を行った調査区は99A区の1ヶ所のみであった。

99A区では、2面にわたり遺構が確認できた。第1面では弥生時代後期の溝(SD04)を古墳時代前期に最掘削した溝(SD01)、第2面では弥生時代前期の溝(SD06)、中期の溝(SD03)、中期後葉の竪穴住居(SB01)などを検出した。なかでも、SD03は名古屋市95調査区SD02と同一遺構の可能性が高く、西志賀遺跡の居住域を区画する環濠として注目できる。

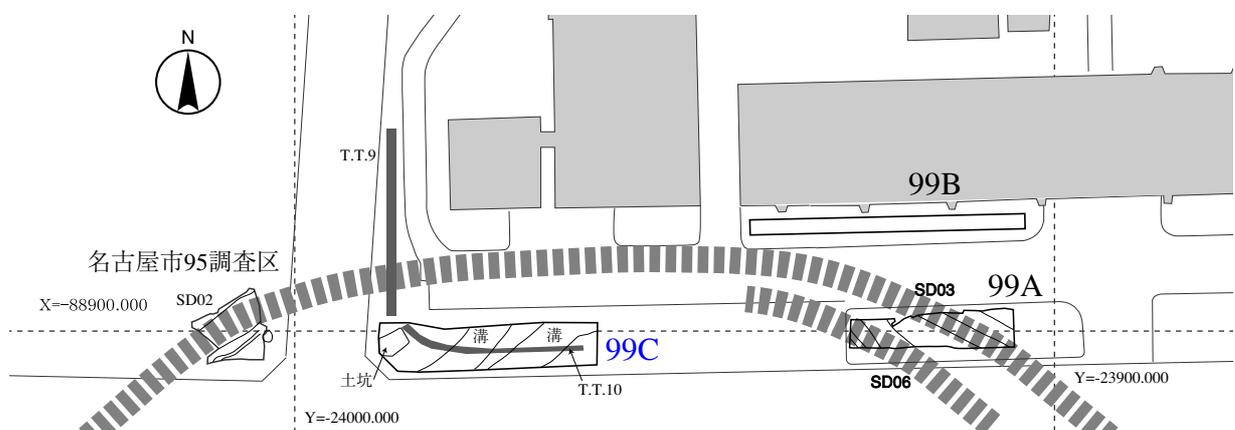


図6 調査区位置図 1:1,000

2. 99 A区第1面の遺構

第1面は弥生時代後期から古墳時代前期の遺構を検出した。遺構は溝3条（SD01・02・04）である。

(1) SD01・SD04

SD01はSD04を再掘削した、緩やかに落ち込む幅広の溝である。幅は6～7m、深さ1m前後を測る。調査当初は層番号5を掘削したところで止め、これより上位から出土する土器の時期と層番号5に混在して出土する土器の時期に断絶があり疑問が生じた。第2面の遺構検出時に、SD01の底面に沿ってさらに溝状の落ち込みを確認した。これがSD04である。上位のSD01がなだらかな断面形に対してSD04は箱掘りに近い断面形で、ほぼ直立する掘りかたとなる。平面形としては、ほぼSD01に重複する位置で直線的にのびる。ただし、調査区南壁近くで底面が上がり、南西方向へ屈曲する。SD04とSD01はこの調査区南壁で重複がなくなる。一方、調査区北壁では重複は続き、同一方向にのびていく。

出土遺物からSD01・SD04の性格は見出せない。すなわち、両遺構から出土した遺物はほとんどが完形品ではなく、破片資料であることから、溝に廃棄した遺物群として捉えるべきであろう。したがって今回の調査区内で、例えば、墳丘墓に伴う供献土器など、直接遺構との関わりを導く遺物の出土状態および遺物内容は確認できなかった。

遺物の時期については、SD01の掘削により混在する層位が認められるものの、時期ごとにまとまりのある層序も存在した。SD04は、下層が山中式中期、中層が山中式後期～廻間Ⅱ式前半、上層が廻間Ⅱ式後半にそれぞれが対応するとみられる。SD01は、下層から混入した山中式の土器群と廻間Ⅱ式前半に主体をおく土器群がある。

(2) SD02

SD02はSD01に直交して切り込まれる断面が逆台形溝で、深さ30cm、幅1.5m前後を測る。時期は、出土遺物から山中式あるいは廻間Ⅰ～Ⅱ式が比定できる。

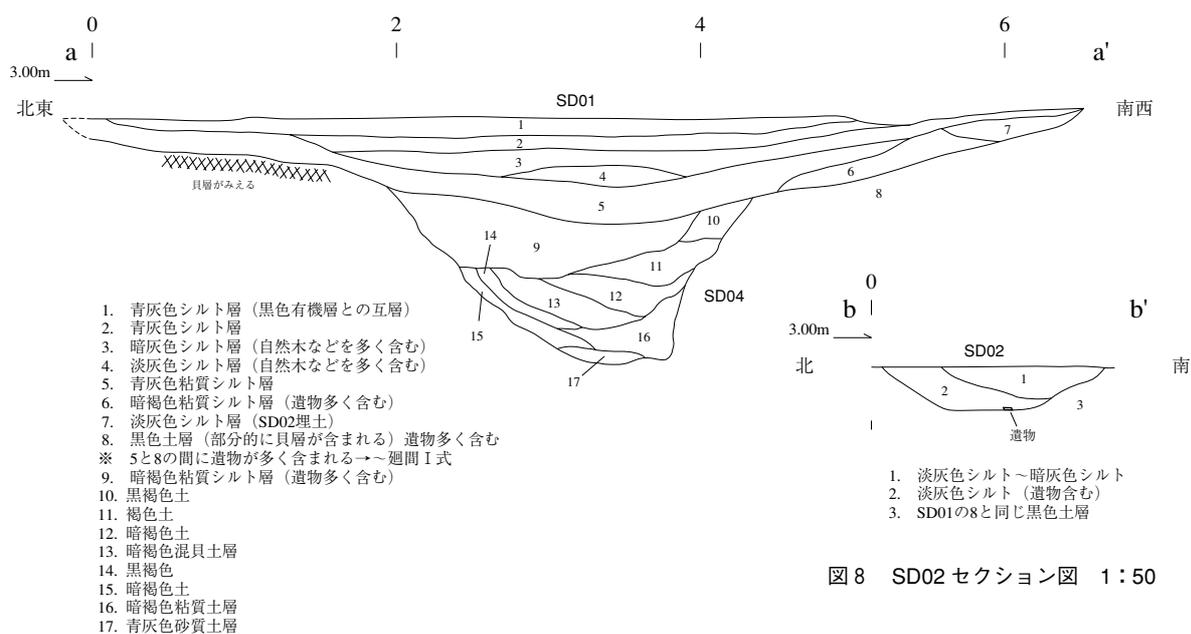


図7 SD01 セクション図 1:50

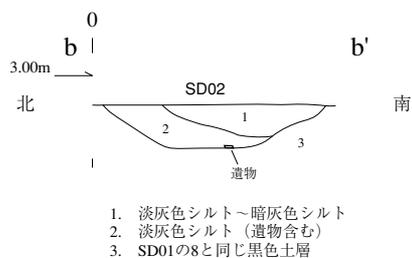


図8 SD02 セクション図 1:50

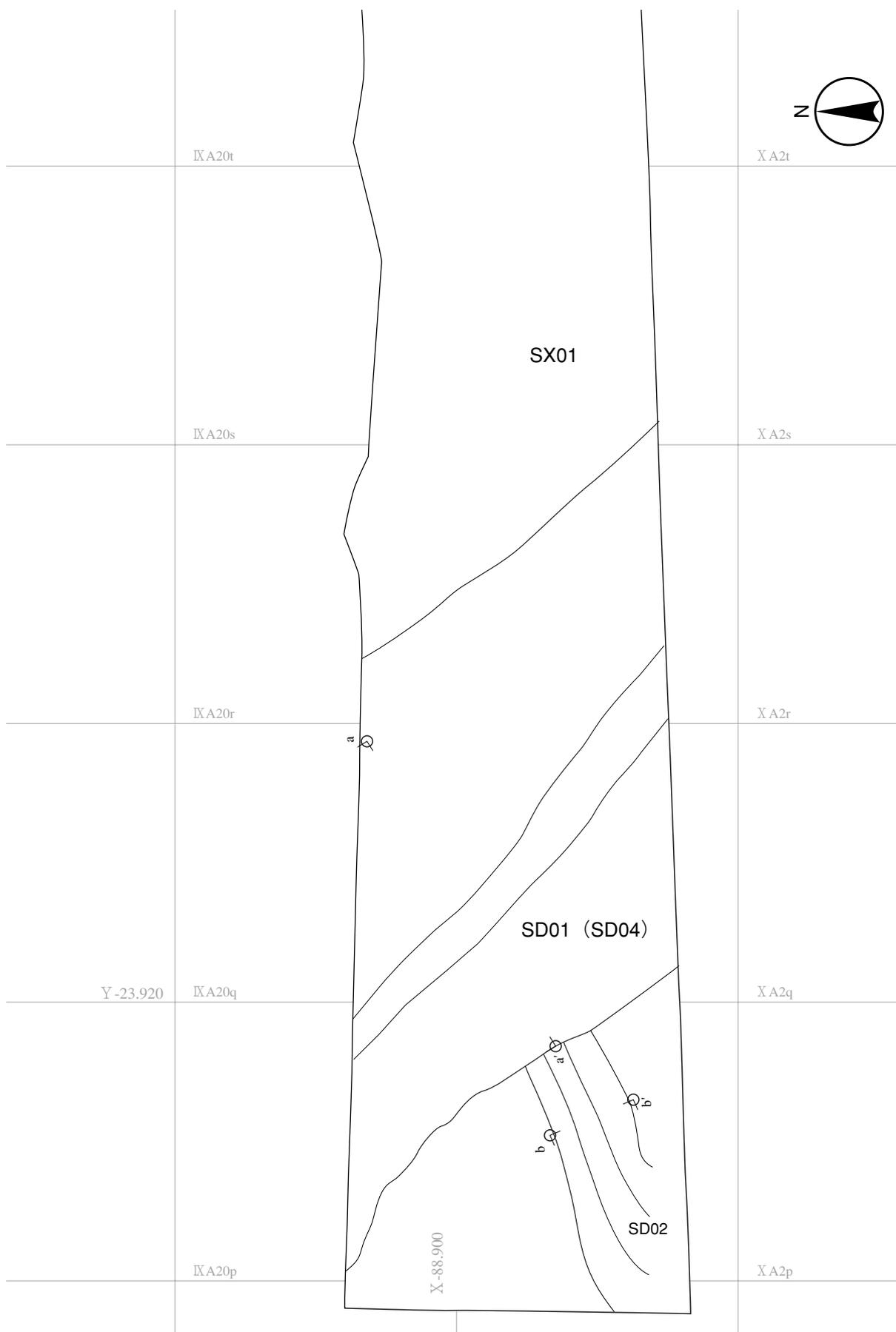


図9 99A区第1面遺構平面図 1:100 ※メッシュ5m

3. 99 A区第2面の遺構

(1) SB01

SB01はSD03の南西に接する竪穴住居。99A区の南壁以南に続く。平面形は方形と推定できるが、住居の北東コーナーがSD01およびSD04に削平され、確定できない。深さは20cm前後で、後世の遺構、SD01・02に上部を削平され、かろうじて床面に付属する遺構が残存する。

住居内に付属する遺構としては、住居のプランに沿ってのびるSD05、北東コーナーに近いP06、SD05の南側に位置し、調査区南壁に続くSK01がある。その他、P01～05は遺物の出土もなく、確定できない。SD05は住居壁際の壁溝と考えられる。P06は深さ60cmを測り、位置的にも支柱穴の可能性が高い。SK01は不定形な深さ15cm前後の浅い土坑。土坑内から破砕した大きな土器片が集中し、SB01覆土の土器片とも接合し、大型壺(291)であると判明した。

出土遺物からSB01の時期は、尾張第IV様式に比定できる。

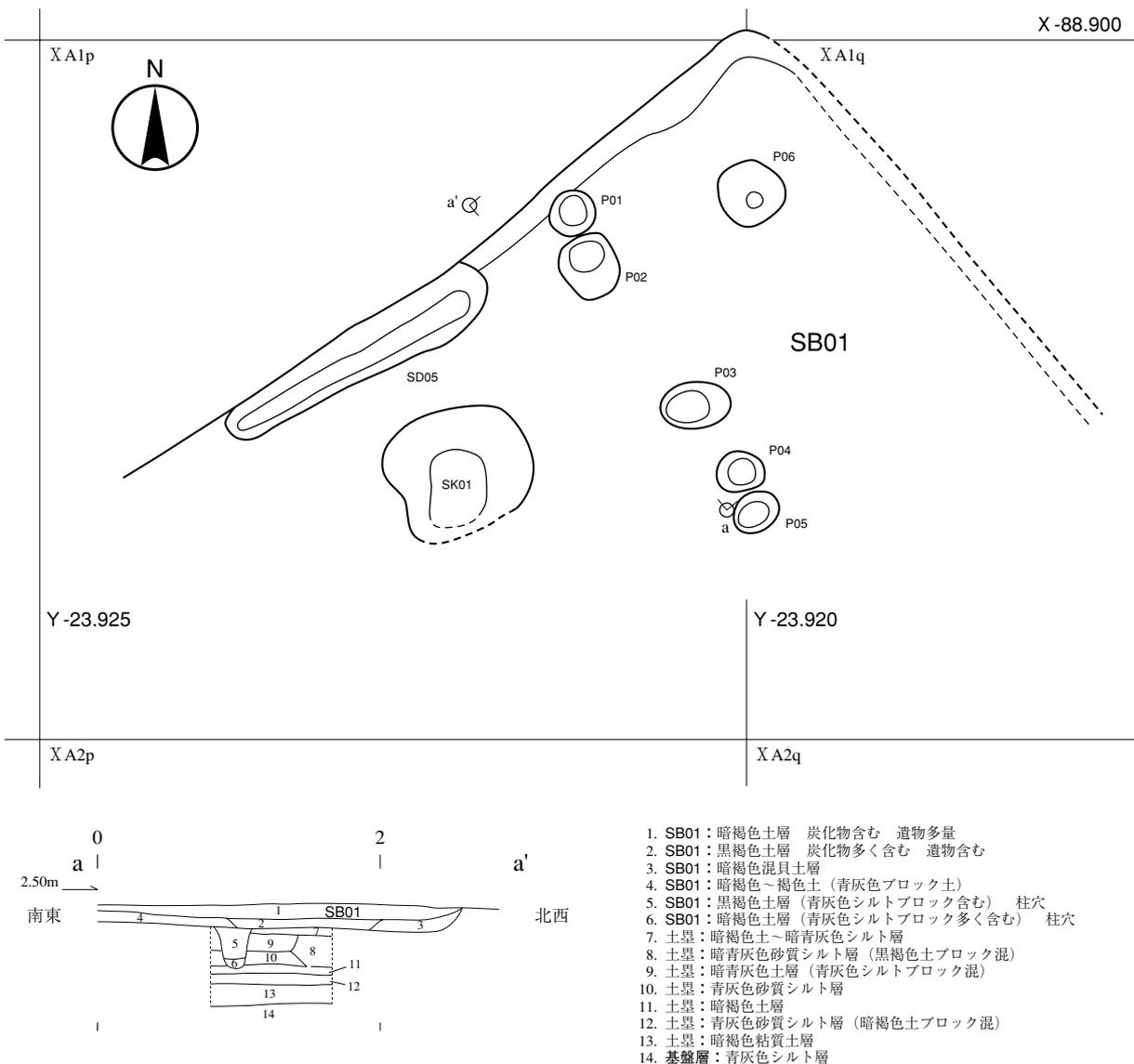


図10 SB01平面図およびセクション図 1:50 ※メッシュ5m

(2) SX01

SX01はSD01の北東に位置し、下位のSD03から緩やかに落ちる谷状の堆積である。調査当初は遺物が比較的多いことから廃棄土坑を想定した。しかし、99B区に広がる湿地状の堆積と酷似しており、SX01から谷状の落ち込みが続くと判断した。したがって、SD03は微高地の縁辺に構築され、SX01より北東部分は後背湿地につながる地形が想定できる。

出土遺物は、上層に山中式前期、下層に尾張第Ⅳ様式に比定できる資料群が出土している。後述するSD03がほぼ埋没する弥生時代中期後葉から、上層の後期前半にかけての埋没が考えられる。

(3) SD03

SD03は調査区を北西から南東に縦断する、今回の調査における最も注目される遺構である。溝の西寄りにはSD04の掘削により削平を受けているが、セクション図で示したように断面形態、堆積状況ともに把握できた。SD03はSX01の堆積より下位に位置し、SD03の埋没した後、SX01の堆積が始まることがセクション図から読み取れる。

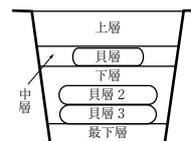
SD03の規模については、幅推定6m前後、深さ1.5m前後、断面が逆台形となる。中層より上位の堆積は緩やかに立ち上がる。SD03は、名古屋市教育委員会による平成7(1995)年調査区(以下、市教委95地点とする)SD02まで延び、西志賀遺跡の中期居住域を区画する溝として想定する。市教委95地点SD02との比較、溝の推定ラインについては、後述する遺構のまとめで検討する。

堆積は中位に貝層を含み、さらに溝の上位も貝層に覆われる状況であった。堆積順に示せば次のようになる。

最下層→貝層3→貝層2→下層(貝層3と貝層2がa-a'ライン以西で間層として堆積する)→中層→貝層→上層

貝層は調査区南壁では見られず、北壁に向かって厚く堆積する。おそらく、貝層3・貝層2はそれぞれ廃棄ブロックが想定でき、溝全体を均一的に覆うことはない。貝層中の自然遺物については「付載1. 西志賀遺跡の自然遺物」で詳細する。貝層はすべて洗浄した。その結果、微細な人工遺物が抽出できたと同時に、炭化米や、獣骨、魚骨など自然遺物を多く検出することができた。ここでは、貝層の主要な構成となる二枚貝について触れておく。貝層ではハマグリが多く、ヤマトシジミがこれに次ぐが、貝層2ではヤマトシジミが優先し、ハマグリがこれに次ぐ。貝層3ではハマグリが主体で、マガキがこれに次ぐ。傾向として、マガキからハマグリへの変化が読み取れる。

出土遺物は土器が圧倒的に多い。土器資料は、堆積層位によって中期前葉～後葉の时期的なまとまりが認められる。すなわち、最下層(尾張第Ⅱ-3様式)→貝層3(尾張第Ⅲ-1様式)→貝層2(尾張第Ⅲ-2様式)→下層(尾張第Ⅱ-3～Ⅲ-2様式)→中層(尾張第Ⅲ-2様式)→貝層(尾張第Ⅲ-3様式以降)→上層(尾張第Ⅳ様式)と漸進的な変遷をたどることができる。骨角製品はヤス類を中心に、石製品は石鏃を中心に出土した。



SD03 堆積模式図

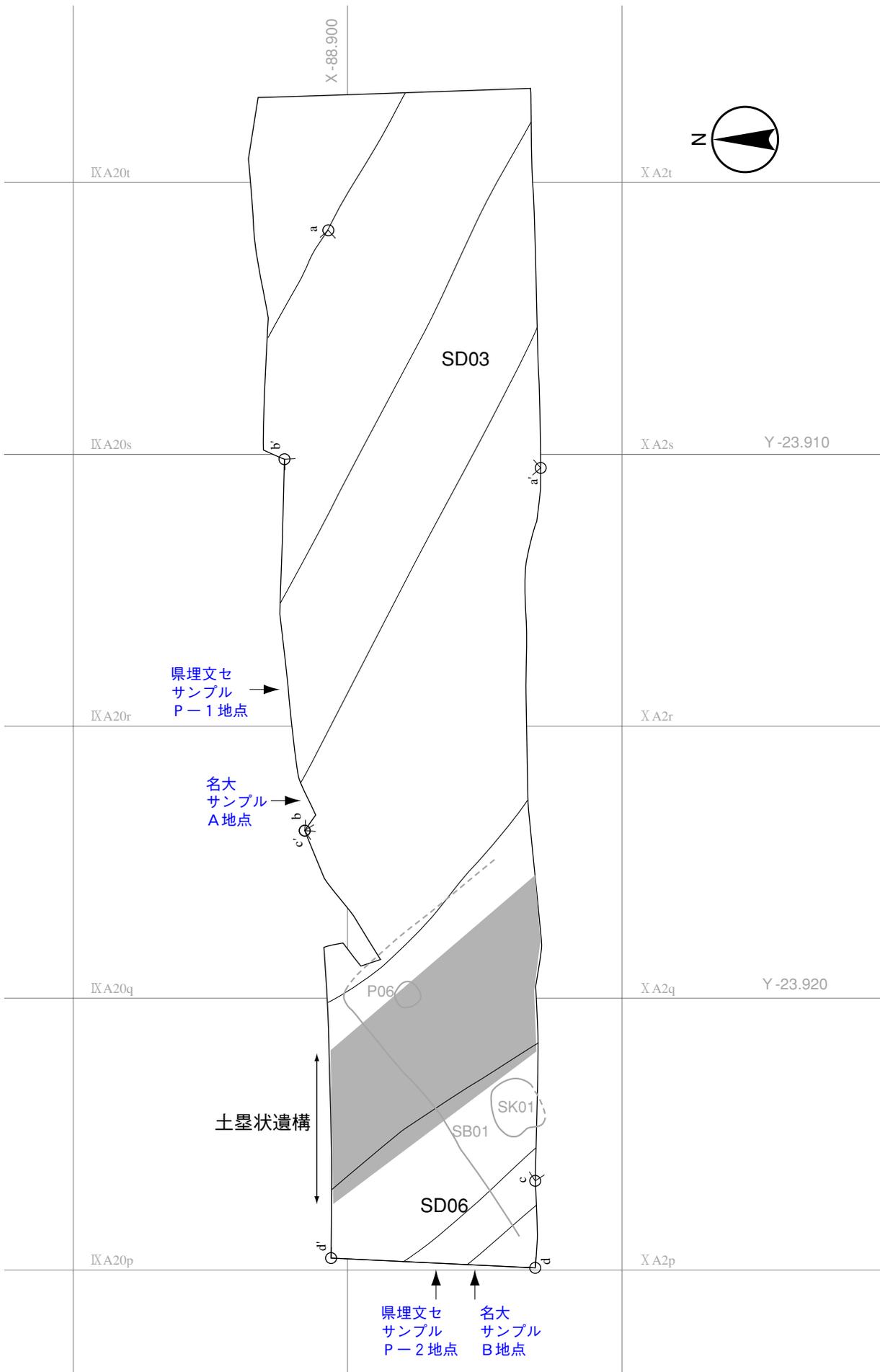


図 11 99A 区第 2 面遺構平面図 1 : 100 ※メッシュ 5 m

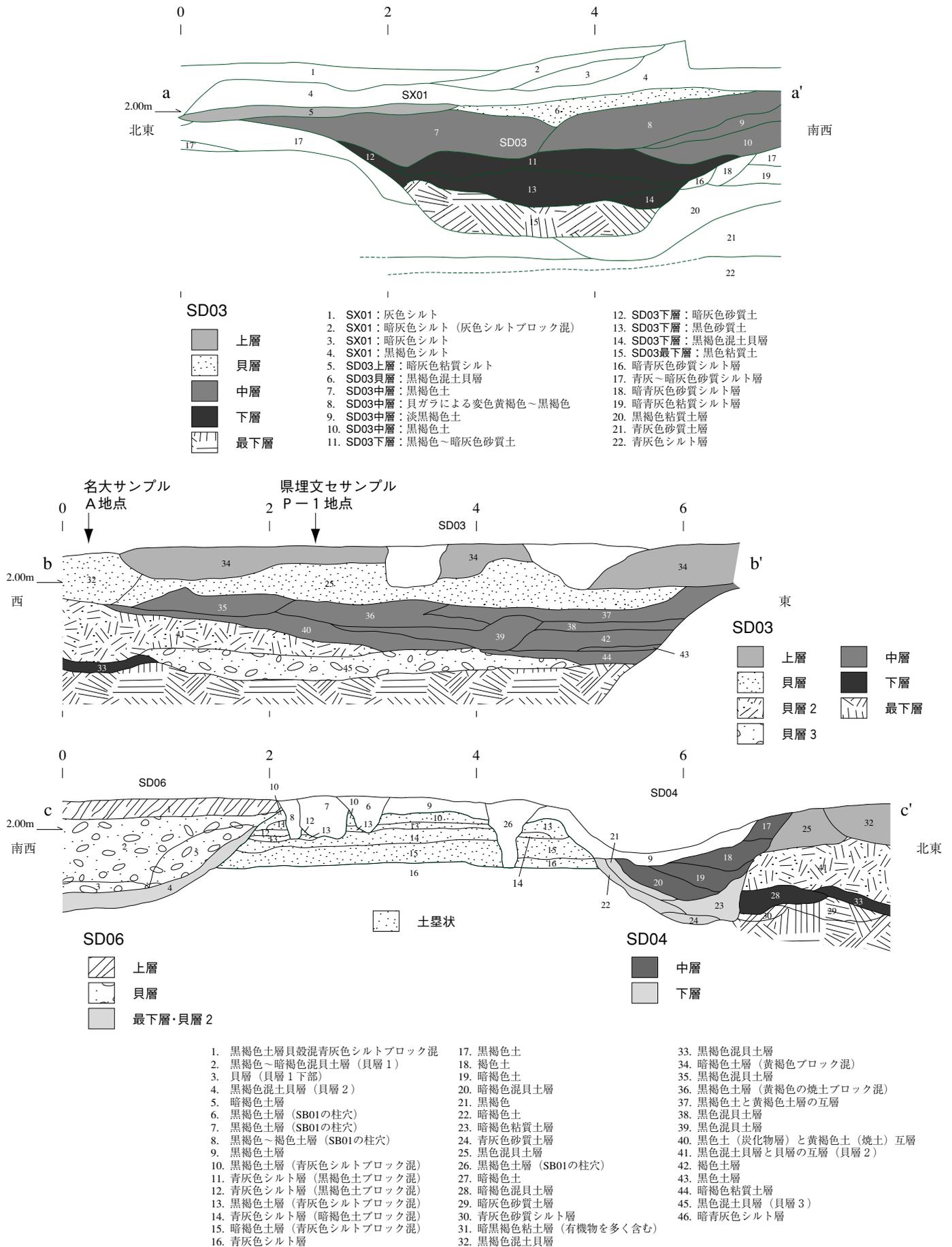


図12 SD03・SD04・土壘・SD06 セクション図 1 : 50

(4) 土塁状遺構 (図 12)

土塁状遺構は、SD03 と SD06 の間に位置する。SD04 および SB01 に上部を削平されている。図 12 の土塁状遺構は、層番号 10 ～ 15 が相当する。各層の厚さは、10 ～ 20 cm 前後を測り、黒褐色土と青灰色シルトの互層堆積が認められる。各層は、黒褐色土層に青灰色シルトブロック、青灰色シルト層に黒褐色土ブロックが混入し、人為的な互層堆積であると判断した。土塁の堆積は SD06 の下位から積み始めており、SD06 を掘削する過程の廃土を利用して北東側の谷状の落ち込みの縁辺を意識して構築したと考えられる。土塁は下位の幅 3.7m 以上、上位の幅 2.5m 前後の規模を測り、SD06 にそって続くと考えられる。

遺物は、SB01 の掘削により攪拌されているため土塁上位に中期以降の遺物を含む。土塁上位の遺物を除くと、前期の遺物のみであり、これを理由に前期の堆積と判断した。

(5) SD06 (図 12・13)

SD06 は、SD03 にほぼ併行して調査区の南西隅に位置する。さらに土塁状遺構が SD06 の北東側にそって認められる。SD06 は溝の両肩が確認できなかった。溝の規模は、推定幅 4 m、深さ 1.1 m 前後を測り、断面形は逆台形となる。

堆積は上位の黒色～黒褐色土と下位の暗褐色土の間に混貝土あるいは混土貝層がみられる。遺物は、貝層および貝層 2・最下層 (13 層除く) とした層位に多く含まれている。貝層は、おおむねマガキ主体 (上層) →ハマグリ主体 (貝層) →マガキ主体 (貝層 2) と二枚貝の構成比から読み取れる。詳細は、「付載 1. 西志賀遺跡の自然遺物」を参照されたい。

出土した土器から、おおむね前期後葉、尾張第 I - 5 様式 (最下層・貝層 2) から尾張第 I - 6 様式 (貝層) にかけて堆積したと考えられる。朝日遺跡では骨角製品について前期に比定できる資料が乏しかった。しかし、今回の資料群は比較的短期間に埋没した堆積層の中から出土した資料であるため、骨角製品の変遷を考える上で貴重な遺構となった。

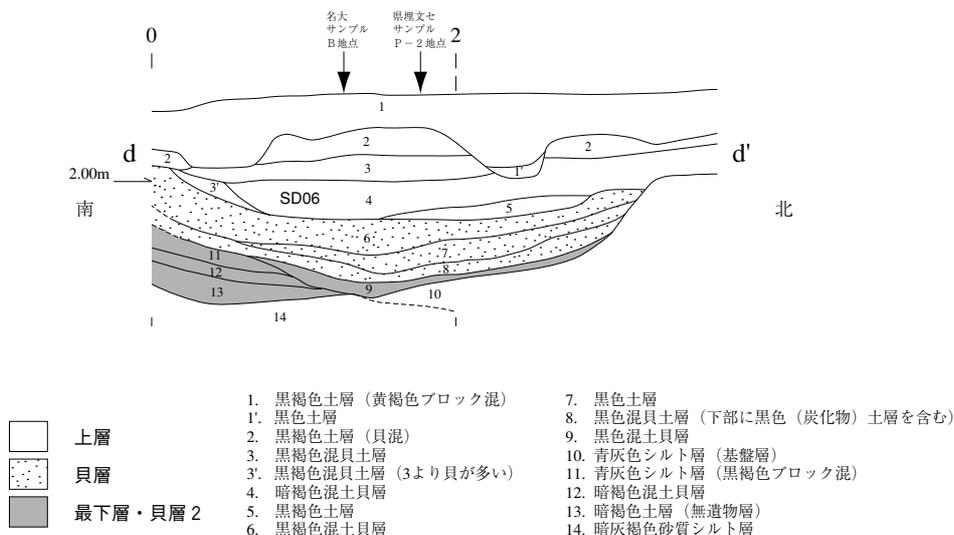


図 13 SD06 セクション図 1 : 50

4. 99 B区・99 C区の遺構

(1) 99 B区

99 B区は、SX01の記載で示したように、湿地状の堆積のため遺構面を確認できなかった。図14は99 B区の柱状図の右側に99 A区の遺構検出面の高さを比較したものである。暗褐色粘土層より下位の堆積は、湿地状の堆積を示しており、99 A区と比較してみると明らかに堆積状況が異なる（図2参照）。

遺物は、暗褐色粘土層から数点出土したのみで、南西側のSX01がより居住域に近いことがわかる。

(2) 99 C区（図6）

99 C区は第1遺構面検出までの掘削で終了した。遺構の時期や平面形を把握するため、調査区の中央にトレンチを入れ、補足的に遺構と思われる箇所さらに数ヶ所トレンチを入れた。その結果、溝が2条と土坑1基を確認した。遺構の時期は、溝が弥生時代中期後葉～古墳時代前期、土坑が弥生時代後期初頭（319）と考えられる。

99 C区から北へL字に屈折した箇所トレンチ（T.T.9）を入れた。その結果、99 B区と同様に、湿地状の堆積が認められた。したがって、99 C区の遺構群は西志賀遺跡における居住域の北端を示すと考えられる。

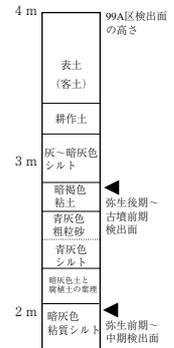


図14 99B区
基本層序模式図

5. 試掘・立会調査

試掘・立会調査は、環境整備事業対象地に15ヶ所設定した（図1参照）。

以下に、それぞれの結果を示す。

- T.T.1 調査対象深度のGL-1.5mまで掘削した。結果、古代～中世の自然流路を確認したものの、遺構は確認できなかった。出土した遺物は中世の灰釉系陶器片やすり鉢など数点のみ。
- T.T.2 調査対象深度のGL-1.5mまで掘削した。結果、T.T.1同様に自然流路を確認。遺物は、中世の灰釉系陶器片1点出土した。
- T.T.3・T.T.4 調査対象深度のGL-1.6mまで掘削した。結果、旧耕作土下（GL-1.6m）に古代～中世の遺構面と思われる層位を確認。遺物は出土しなかった。
- T.T.5 対象深度GL-0.75mまで掘削した。表土（客土）の下に旧耕作面を確認。
- T.T.6・T.T.7 対象深度GL-0.75mまで掘削した。いずれも管を埋設した際の埋立土内に留まる。
- T.T.8 対象深度GL-0.75mまで掘削した。建物基礎埋立の客土を確認。
- T.T.9・T.T.10 対象深度はGL-1.5mであったが、遺跡範囲を確認するため-2mまで掘削した。T.T.9では、GL-2mから弥生時代の遺物包含層を確認。T.T.10では、GL-1.5m前後に古墳時代の遺構面および弥生時代の遺物包含層を確認。
- T.T.11 対象深度GL-0.75mまで掘削した。旧耕作土面を確認。堆積状況はT.T.5と同じ。
- T.T.12 対象深度GL-0.75mまで掘削した。名工研造成時の客土を確認。GL-1.2mより下に旧耕作土を確認。
- T.T.13 対象深度GL-0.75mまで掘削した。GL-1.2mより厚さ5cmほどのコンクリート、これより下は名工研造成時の客土を確認。
- T.T.14 対象深度GL-0.75mまで掘削した。名工研造成時の客土を確認。-80cm以下に旧耕作土を確認。
- T.T.15 対象深度GL-0.75mまで掘削した。-50cmまでが名工研造成時の客土、-65cmまでが整地土、-65cmから旧耕作土。

6. まとめ

平手町遺跡の遺構は、都合2面確認した。第1遺構面とした弥生後期から古墳時代前期の遺構は、99A区と99C区に溝状遺構を4条検出した。第2遺構面とした弥生時代前期から中期の遺構は、住居跡1棟、溝状遺構2条を検出した。ここでは、99A区で検出した、西志賀遺跡の居住域を囲む環濠の可能性が高い弥生時代中期の溝SD03について、隣接する名古屋市教育委員会の平成7（1995）年調査地点（以下、市教委95地点とする）の成果を合わせて考えてみたい。

SD03の延長は、市教委95地点のSD02につながる遺構として考えたい。

(1) 産業技術研究所内での推定は、以下の3つからほぼ溝の北西側がほぼ西方向へ向かい、南東側が所外の南東方向へ延びると考える。

まず、99B区には確認できなかった。このことから、SD03は北西方向から西方向へ向きを変えると想定できる。次に、99C区では残念ながら第1遺構面の検出で調査を終了したので、SD03のプランは追えなかった。ただし、99C区に北接するT.T.9の断面から判断すると、99B区と同様に谷状の地形が始まる地点が予想され、99C区の北側にそいながら延びていると考えられる。最後に、南東側への延長はSX01が谷状地形の縁辺部と考えられるので、SX01側、すなわち北東側に延びることは考えられない。

(2) 市教委95地点SD02と比較してみる。

市教委95地点SD02の規模は、幅3.5～4m、深さ約1.2mを測る。埋土は上層（黒褐色土）中層（暗茶灰色砂質土）下層（茶褐色土～砂）の3層。出土土器から中・下層が中期中葉（尾張第Ⅲ-1～2様式）までに限られるのに対して、上層は中期後葉（尾張第Ⅳ様式）まで含む。一方、99A区SD03の規模は、幅推定5m前後、深さ1.5m前後を測る。埋土は上層（暗灰色粘質シルト）および貝層、中層（黒褐色土）、下層（黒褐色～暗灰色砂質土）および貝層2・3、最下層（黒色粘質土）の4層。出土土器から、最下層～中層が中期前葉から中葉（尾張第Ⅱ-3～第Ⅲ-2様式）を中心となるのに対して、貝層～上層は中期後葉（尾張第Ⅳ様式）まで含む。以上、2つの遺構を比較すると、断面形態、埋土および出土遺物の層位関係など共通する点が多い。

(3) 産業技術研究所内におけるSD03の推定方向と市教委95地点SD02との比較検討から、SD03は市教委95地点SD02と同一の溝である蓋然性が高い。

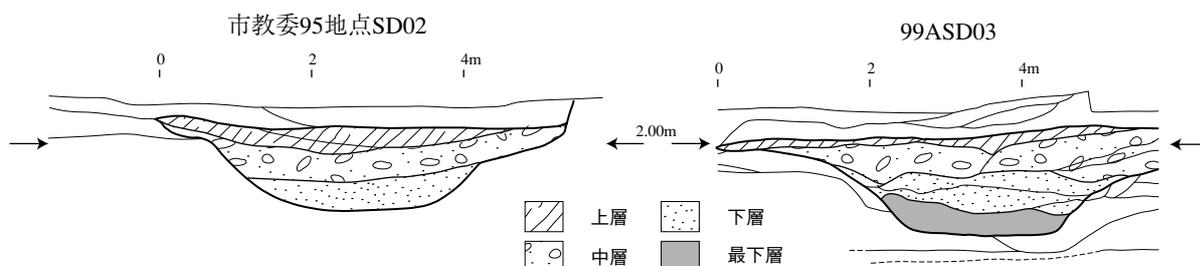
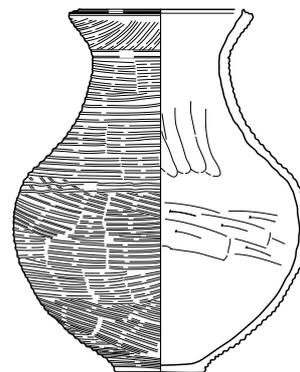


図15 99A区SD03と市教委95地点SD02のセクション図による比較 1:100

3. 遺物



1. 資料提示の前提

平手町遺跡の出土遺物は、弥生時代の遺物が大半を占める。なかでもSD03・SD06から出土した弥生時代前期から中期の土器は質・量ともに充実する。以下、99A区から出土した資料を、弥生時代前期～中期、弥生時代後期～古墳時代前期、石製品、骨角製品に分けて記述し、その後、99A区以外の地区は一括して提示する。

土器

土器資料の提示は、遺構・層位を基本とし、中期から後期、あるいは後期から古墳前期にまたがる資料群を各々時期ごとのまとまりで記述する。

用語・時期比定

土器の器種名（壺形土器・甕形土器など）といった用語や時期比定に関しては、弥生前期から中期までは永井宏幸・村木誠（永井・村木2002）、弥生後期から古墳前期までは赤塚次郎（赤塚1990・1992）に準拠した。

弥生前期の土器群は、遠賀川系土器を中心に、若干の条痕紋系土器が伴う。時期幅は尾張第Ⅰ－5～6様式に限定できる（表3）。遠賀川系高杯を欠くものの、器種はほぼ揃う。

弥生中期の土器群は、今回提示する資料のなかで最も豊富である。なかでも、尾張第Ⅱ－3様式から第Ⅲ－2様式の資料群は充実している。溝資料ではあるものの、層位ごとのまとまりは、おおよそ細別様式に対応する（表3）。

弥生後期から古墳前期の土器群は、「下層土器群」とした山中式前期と山中式中期、「上層土器群」とした廻間Ⅱ式前半を前後する時期のまとまりが確認できた。

石製品・骨角製品に関しては、資料数が少ないため、器種ごとに提示した。

石製品・骨角製品

石製品は石鏃が優位であるものの、管玉が3点出土していることに注目したい。

骨角製品はヤス類が充実していることと、「棒状鹿角製品」が2点（うち1点は可能性がある）出土している。西志賀遺跡では、これらを含めて計4点となり、1遺跡からの出土点数としては千葉県荒海貝塚に次いで多い事例となった（川添2001）。

永井宏幸・村木誠 2002 「尾張平野」『弥生土器の様式と編年』東海編 石黒立人・加納俊介編 木耳社

赤塚次郎 1990 「考察」『廻間遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集）財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1992 「山中式土器について」『山中遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集）財団法人愛知県埋蔵文化財センター

2. 弥生時代前期から中期

(1) SD06 (図版1～4)

SD06はほぼ尾張第I-5～6様式におさまる資料群。最下層および貝層2とした資料群が古相、貝層とした資料群が新相で、それぞれ尾張第I-5様式、尾張第I-6様式に対比できる。

系統区分 尾張平野の弥生前期資料は、遠賀川系土器、条痕紋系土器、突帯紋系土器、浮線紋系土器の4系統が認められる。尾張平野のみならず、伊勢湾周辺は1つの系統のみで器種組成が成り立つ遺跡は少なく、必ず複数の系統の土器群によって相互補完されている。したがって、器種の記述に際して遠賀川系壺、条痕紋系深鉢など、系統を冠して進める。

遠賀川系土器は、さらに2つの系統に細分できる。器形・紋様などが汎西日本通有の土器群「遠賀川系A類」と伊勢湾西岸域に淵源が想定される土器群「遠賀川系B類」に区分できる。後者については、紅村弘が「金剛坂式土器」「巫流遠賀川」などと称する土器群に近い区分である。

器種 弥生時代前期の器種は、壺形土器・甕形土器・鉢形土器・深鉢形土器が中心で、高杯形土器・壺蓋形土器・甕蓋形土器・内傾口縁土器が少量組成する*。これらの器種のうち今回の資料には高杯がみられなかった。

最下層・貝層2 (1～25)

遠賀川系B類壺の2型式 1～10は遠賀川系壺。2は上下両端をハケ工具により削り出す、幅広の削出突帯が頸部にみられ、この時期に特徴的な手法である。3も上端部分しか確認できないが、2と同様に削出突帯が頸部にみられる。8・9・10は、遠賀川系B類の大型壺。雲母を多く含み、焼締まりのある緻密な胎土、赤褐色の色調、半截竹管状工具を多用する、典型的な遠賀川系B類である。8と9は同一個体と考えられる。9は胴部が扁平に張り出す器形。一方、10は突帯紋系深鉢変容壺に系譜が追える壺。胴部から頸部にかけて緩やかに内傾し、口縁部が短く外反する器形。両者とも遠賀川系B類壺の代表的な2型式である。

11～14は遠賀川系A類鉢。口縁部が外反しない11と甕のように外反する12・13がある。11のように口縁部が外反しないものは、遠賀川系A類に少なく、条痕紋系土器に類例が見られるもの。一對の把手が付く13は中大型品に見られる。この時期の鉢は、口縁部内面以外のミガキ調整を省略する傾向が見て取れる。

15は甕蓋。頂部に環状の摘み部をもつ。16～22は甕。いずれも遠賀川系A類。図示できる資料に遠賀川系B類はなかった。18は頸部内面にミガキ調整を施し、煤の付着も見られなかったので、鉢の可能性はある。頸部の横位沈線帯は1条単位で施し、胎土に雲母を含まないので、遠賀川系B類の可能性は低い。19は氷式系深鉢の底部の可能性もある。

23～25は条痕紋系土器。23は壺の体部片で、二枚貝腹縁による横+斜位の縦位羽状紋が施されている。24・25は深鉢。両者とも、口縁部は強く外反しない、胴部の紋様は横位条痕を施すといった古い要素をもつ。一方で新しい要素として、口縁端面に押し引き紋をあわせもつ。

* 以下の記述では「～形土器」を省略して進める。

貝層 (26～45)

26～28は遠賀川系A類壺蓋。この時期無紋化傾向にあるが、27・28ともに沈線紋様が施される。

29～33は遠賀川系A類壺。29は口縁部に蓋用の孔が1ヶ所ある。31は口縁内面に注ぎ口状の突帯がめぐる。32は頸部に横位沈線帯に挟まれた貼り付け突帯がめぐる。突帯上には横方向の指腹押圧を施す。頸胴部界から縦方向の浮紋がある。遠賀川系A類には例が少ない。縦方向の浮紋が数ヶ所あり、その間を彩紋を施しているのか？

34は内傾口縁土器。外面はナデ調整で仕上げている。35・36は遠賀川系A類鉢。

37～40は遠賀川系A類甕。37のように頸部に横位沈線帯をもたない甕は西志賀遺跡に多い。38は胴部中位から底部にかけて縦方向の粗いミガキ調整がみられる。遠賀川系B類甕の特徴をあわせもつ。40の底部穿孔は焼成後。41～43は遠賀川系B類甕。口縁部は遠賀川系A類に比べ肥厚している。

44の類例は今回提示するSD03資料(98)の2点のみ。頸胴部界の段と施紋あるいは調整方向を変える点、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する器形は突帯紋系深鉢に類似する。口縁端部の二枚貝による条線は条痕紋系深鉢の特徴。胴部のハケ調整は遠賀川系甕の特徴。体部内面の二枚貝による調整は突帯紋系深鉢に若干見られる程度で主体となる調整手法ではない。以上の特徴から、遠賀川系甕と条痕紋系あるいは突帯紋系深鉢の折衷土器と考えられる。

遠賀川系と条痕紋系の折衷土器

45は条痕紋系深鉢。前出の24・25に比べ、口縁部の外反が強い。

上層 (46～49)

上層資料は、中期の資料が混在する。

46は尾張第Ⅲ様式の瓜郷式系壺で三河地域からの搬入品。47は遠賀川系A類壺。48は尾張第Ⅱ－3様式の厚口鉢。口縁外面に二枚貝条痕を施す。49は尾張第Ⅱ様式の甕。

土壘資料 (50～57)

本来であれば、項を改めるべきであるが、SD06とSD03の間に位置し、SD06掘削時に構築された土壘に関係する資料と考えられるため、ここで提示する。土壘の下位とした資料群(50～55)は前期の資料のみ。一方、土壘上位の資料群(56・57)は前期の資料に中期以降の資料が混在する。これは、土壘の上位に中期以降の遺構が掘り込まれ、調査時に認識できなかったためと考えられる。50・51は遠賀川系B類壺。52・53は遠賀川系A類甕。54は条痕紋系深鉢。55は条痕紋系内傾口縁土器。56は尾張第Ⅲ様式、櫛描紋系壺の底部。57は尾張第Ⅳ様式、櫛描紋系台付甕。

小結

SD06資料の特徴としては、最下層および貝層2とした資料群が尾張第Ⅰ－5様式、貝層とした資料群が尾張第Ⅰ－6様式に対比でき、比較的まとまった基準資料として評価できる。さらに、系統別による出土比率は既存資料と差異はなく、遠賀川系土器が条痕紋系土器を凌駕する。特筆される資料としては、44の遠賀川系甕と条痕紋系あるいは突帯紋系深鉢の折衷土器がある。付論で提示する吉田富夫コレクション(名古屋市博物館)資料の遠賀川系土器B類と条痕紋系土器との折衷土器(113)といった、異系統の融合が看取される資料群である。

(2) SD03 (図版 5～19)

SD03 出土資料は、層の下位から概ね、最下層、貝層 3、貝層 2、下層（貝層 3 と貝層 2 を含む）、中層、貝層、上層（貝層上）の順に堆積する。溝資料とはいうものの、時期ごとのまとまりのある安定した堆積が認められた。

まず、弥生中期の資料を系統区分し、代表的な器種について特徴を示す。その上で、各層位の特徴をあげ、資料のうち特記事項があれば個別に詳細な説明を加える。

系統区分 弥生中期の資料は、尾張第Ⅱ－3 様式から第Ⅳ様式まで認められる。系統としては、貝殻描紋系土器、櫛描紋系土器、条痕紋系土器、沈線紋系土器が尾張第Ⅱ－3 様式から第Ⅲ様式に認められ、第Ⅳ様式以降、凹線紋系土器が新たに加わる。

貝殻描紋系土器 貝殻描紋系土器は、近畿地方の櫛描紋系土器の影響によって成立する伊勢湾周辺の土器群である。指標としては、二枚貝を施紋と調整工具に多用する点があげられる。器種は壺・甕がある。壺の器形は、体部が無花果形をなし、頸部が直立し、口縁部がほぼ水平に開く。口縁部は端面に面取りをし、垂下するものもある。頸部は概ね二枚貝による横位直線紋帯が施す。甕は、「朝日形甕」と呼ばれている器種である。朝日形甕は尾張第Ⅰ様式の系統である条痕紋系土器の深鉢と遠賀川系土器 B 類の甕との系統融合により成立する。器面外面の調整痕から 1 次調整にハケ調整、2 次調整に二枚貝調整を用いる。器形は条痕紋系土器深鉢に近く、逆釣鐘形となる。口縁部は肥厚し、端面は面取りしない。口縁部には円周 4 分割あるいは 2 分割の位置に指押圧を加える。

朝日形甕 朝日形甕は、「朝日形甕」と呼ばれている器種である。朝日形甕は尾張第Ⅰ様式の系統である条痕紋系土器の深鉢と遠賀川系土器 B 類の甕との系統融合により成立する。器面外面の調整痕から 1 次調整にハケ調整、2 次調整に二枚貝調整を用いる。器形は条痕紋系土器深鉢に近く、逆釣鐘形となる。口縁部は肥厚し、端面は面取りしない。口縁部には円周 4 分割あるいは 2 分割の位置に指押圧を加える。

櫛描紋系土器 櫛描紋系土器は、尾張第Ⅱ－3 様式から尾張第Ⅲ－1 様式にかけて貝殻描紋系土器と漸進的に移行し、系統の主流を占める土器群である。指標としては、櫛状工具を主な施紋・調整工具として用いる点にある。器種は壺・甕・高杯がある。壺は貝殻描紋系土器と同様に胴部が無花果形をなし、頸部が直立し、口縁部がほぼ水平に開く器形が見られる太頸壺と、体部が算盤玉、頸部が細くのび、口縁部が受口状をなす細頸壺がある。胴部の紋様は「付加沈線研磨技法」が採用される。付加沈線研磨技法とは、横方向の櫛描紋帯の上下に沈線を付加し、紋様帯間にミガキを加えるもので、胴部の横位紋様帯を視覚的に強調する効果を産み出す。甕は頸部のくびれが強いものと弱いものがある。前者は近畿地方、後者は貝殻描紋系甕と同様、遠賀川系 B 類に系譜を求められる。いずれも体部はハケ調整を施す。高杯は平手町遺跡に限らず、類例は少ない。第Ⅳ様式以降の凹線紋系高杯から組成率が高くなる。おそらく、台付鉢が主流で漸進的に代替していくと考えられる。

付加沈線研磨技法

条痕紋系土器 条痕紋系土器は、前期から続く、伊勢湾北岸から東岸域にかけて主体を占める土器群である。中期以降、特に尾張第Ⅲ－1 様式から二枚貝を多用する尾張平野南西部と櫛状工具を多用する尾張平野北東部から美濃中・東部の差異が深鉢に明確化する。器種は壺・深鉢・鉢がある。壺は尾張第Ⅱ－3 様式から尾張第Ⅲ－1 様式にかけて受口状あるいは袋状口縁の太頸壺が主流をなす時期であるが、平手町遺跡では客体的な存在である。そのなかで頸部が細長くなる「長頸壺」が注目できる (91～93)。「平沢型」などと呼ばれる中部日本および関東の広範囲に広がりを持つ壺に関連する資料である。深鉢は前述したように、地域の特徴が明確になる。櫛状工具を多用する深鉢は、搬入品として持ち込まれる。

長頸壺

凹線紋系土器 凹線紋系土器は尾張第Ⅳ様式以降に出現する西日本全域に広がる広域の土器群である。壺・高杯の口縁部に幅広の凹線が数条巡る土器群と体部にタタキ成形・調整痕を持つ甕が

代表的な器種である。

最下層 (58～76)

尾張第Ⅰ様式資料の混入(68・69)が認められるものの、おおむね尾張第Ⅱ-3～Ⅲ-1様式に比定できる資料。尾張第Ⅱ-3様式が中心。

58はおそらく遠賀川系土器の系譜をもつ壺で、作りが粗雑。67は貝殻描紋系壺の体部。縦方向のハケ調整後、体部最大径付近に二枚貝による横位紋様帯を施し、紋様間および体部上位に粗雑なミガキ調整を行う。68・69は尾張第Ⅰ様式の甕。

貝層3 (77～115)

尾張第Ⅱ-3～Ⅲ-1様式に比定できる資料。最下層同様に尾張第Ⅰ様式資料の混入(81・98)が認められる。最下層資料より尾張第Ⅲ-1様式の比率が高い。

87は、沈線紋系壺。沈線紋系土器は壺が中心の土器群で、その他に深鉢・鉢がある。かつて「大地式土器」と呼称された土器はこの中に含まれる。尾張地域の場合、尾張第Ⅰ-5様式に出現し、尾張第Ⅲ-1様式以降、器形・紋様の規範が崩れ、条痕紋系土器や櫛描紋系土器に取り込まれながら尾張第Ⅲ-2様式まで残存する。

90は条痕紋系土器の長頸壺。口縁部と底部を欠く。器形は細長い頸部をもち、頸部から胴部にかけて撫肩状に大きく開く。頸部上位には帯状に隆起する箇所も見られる。紋様構成は胴部上位に施されたX字状の単位紋(5単位)が基軸となる。頸部は上下に配されたヘラ状工具による沈線帯の間に、同一工具による4条の波状紋と波状紋下に擬縄紋(貝による充填紋)を配する。頸部界の沈線と胴下半の貝による条痕の間にはヘラ状工具によるX字状の単位紋と擬縄紋(貝による充填紋)、その下位に3条の波状紋を施す。頸部の波状紋頂部とX字状の単位紋が交差する部分には貝押圧を施した円形浮紋が5箇所配されている。頸部界の沈線上位の無紋帯およびX字状の単位紋内はミガキ調整を最終段階に行う。

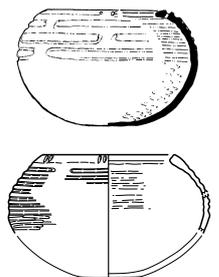
91は条痕紋系土器の長頸壺。器形は口縁部が短く外反し、頸部がほぼ直立して細長く、胴部にかけて大きく開く撫肩を呈する。口縁外面に指腹による連続押圧をもつ突帯が1条めぐり、口縁内面に貝の背面圧痕を矢羽根状に配する。頸部は櫛による横線を6帯めぐらせる。頸部下位には4本1単位とする縦方向の沈線、沈線区画された櫛による横線と沈線区画されていない横線の間に、櫛による波状紋と擬縄紋(貝の背面による充填紋)が続く。胴部下半は欠損するが、おそらく貝による左上がりの斜位条痕が施されていると思われる。沈線区画された横線上には円形?の部分赤彩が残る。なお、頸部内面には液状物質の垂れた痕跡が認められる。

92は口縁部～頸部、体部下半の一部を欠く条痕紋系土器の長頸壺。器形は細長い頸部をもち、頸部から胴部にかけて撫肩状に大きく開く。器面は全面に貝殻腹縁による横方向の条痕紋を施した後、頸部界付近にヘラ状工具による横方向の沈線を3条描き、その間を弧状沈線が2段めぐる。

93は条痕紋系土器の長頸壺。口縁端面に貝による連続刺突、頸部外面に二枚貝の横位条痕が施されている。

94・95はいずれも条痕紋系壺。口縁外面(94)・口縁内面(95)にヘラ状工具による縦方向の沈線を帯状に施す。96は鉢。器面外面と口縁端面に赤彩を施す。口縁下に刺突を

長頸壺



朝日(上)と平手町(下)の鉢

2×1単位で4～5ヶ所、胴部上位に紋様単位は不明ではあるが、工字紋風の沈線帯が施される。内外面ともに横方向の丁寧なミガキ調整が行われている。類似資料としては朝日遺跡(『朝日V』掲載番号2352)にある。97は櫛描紋系高杯の脚部。

98はSD06貝層(44)資料と類似する、遠賀川系甕と条痕紋系深鉢の折衷形土器である。頸部の紋様は貝殻腹縁?による横位直線帯。99は櫛描紋系甕。口縁端部に指頭摘みがある。100は貝殻描紋系甕。101は条痕紋系深鉢。口縁端部に円周2あるいは4分割の位置に指頭摘みがある。

102～107は櫛描紋系甕。102は胎土に雲母を多く含むことから伊勢湾西岸産と考えられる。103は口縁両端に連続指頭押圧が施す。106・107は底部付近にハケ調整後ミガキ調整を加える。102と同様、胎土に雲母を多く含むことから伊勢湾西岸産と考えられる。108～110は条痕紋系深鉢。いずれも櫛状工具を多用する尾張平野北東部から美濃中・東部産。111は条痕紋系深鉢。108～110の成立する直前段階。縦位羽状条痕が形骸化しつつ、口縁内面に櫛による刻みを施す。112～115は条痕紋系深鉢で、貝殻腹縁を多用する尾張平野南西部産。112は口縁端面に貝殻背面押圧を加える。

貝層2(116～162)

尾張第Ⅲ-1～3様式の資料群。櫛描紋系土器のうち、細頸壺を通観すると、資料の中心は尾張第Ⅲ-2様式。

116は貝殻描紋系壺。同例は尾張第Ⅲ-1様式にほぼ消滅する型式。117～127は櫛描紋系壺。頸部が強くすぼまる127を除くと尾張第Ⅲ-2様式に比定できる細頸壺。胴部資料は233のみであるが、前時期に比較して、直線紋が推定4段と多段化傾向にあると読み取れる。128は「瓜郷式」系成立直前段階の壺の口縁部。口縁から頸部にかけて縦方向の櫛状工具による条痕紋を施す。口縁端部も同一工具による条線があり、その後円周2あるいは4分割の位置に指腹押圧を加える。129～131条痕紋系壺。130の口縁直下に施す右上りの斜条痕は尾張第Ⅱ様式に跳ね上げ紋*の形骸化した紋様。頸部上位と頸胴部界に半截竹管状工具による区画線があり、頸胴部は振幅が不揃いな波状紋風に施している。底部は木葉痕をなで消した痕跡がある。132は沈線紋系鉢。沈線紋間にLR縄紋の充填を施す。

133～141は櫛描紋系甕。139～141の底部外面はミガキ調整が行われている。そのうち140は底部外面中央部分を上底気味に磨き込み、外縁に木葉痕が残る。145～150は貝殻描紋系甕。145・150は縦方向のハケである一次調整痕が明瞭に観察できる。151～162は条痕紋系深鉢。器面調整あるいは口縁部周辺の施紋に二枚貝を用いる151・155・157・158・162以外は櫛状工具によるもの。

下層(163～190)

貝層2と3にまたがる層位で、時期幅がある。図化可能な資料群は貝層3に様相に近い。尾張第Ⅱ-3様式～尾張第Ⅲ-2様式の幅をもつが、尾張第Ⅱ-3～Ⅲ-1様式の比率が高い。

163～176は壺。櫛描紋系は163・165・167・169・170。163は口縁端面に沈線2条→ハケ状工具による刻みを施す、伊勢湾西岸産。319は口縁内面、円周2あるいは4分割の位

*跳ね上げ紋とは振幅が長く波長の短い波状文の形骸化した文様で、振幅が上から下へ「J」字を描いたものが連続する文様である。

置に瘤状突起を2つ単位で加える。169は頸部縦方向ハケ調整の後、頸胴部界から下位に横方向のミガキ調整を行う。170は細頸壺、頸部の櫛状工具による横線帯は6段あり、櫛のピッチが短い。貝殻描紋系は164・166・171・172・173。166は口縁端部に二枚貝による条線を施した後、上下端部にハケ状工具による刻みを施す。172は頸部の二枚貝条痕の後、上下に沈線区画を施す。173は172のような沈線区画はない。174・175は「瓜郷式」系。今回の調査では、類例が少ない。三河地域からの搬入品。尾張南西部では壺の類例は散見するが、壺以外は見られない。176は条痕紋系あるいは沈線紋系。胴部上位の紋様帯はヘラ状工具によるもので、紋様は7単位で構成されているか？

177は条痕紋系厚口鉢。178～181・184・185は櫛描紋系甕。182・183・186は貝殻描紋系甕。186は口縁内面に貝殻腹縁による刺突紋がめぐる。187～189は条痕紋系深鉢。188・189は底部に焼成後穿孔がある。190は器面に縦方向のミガキ調整を行う、櫛描紋系？甕。

中層 (191～204)

尾張第三－1～3様式の資料群。資料の中心は尾張第三－2様式か。

191～195は壺。191・192・195は櫛描紋系。193は条痕紋系。194は「瓜郷式」系。196～198・201は櫛描紋系甕。199・200・202は条痕紋系甕。203・204は尾張北部から美濃中東部の条痕紋系深鉢。

貝層 (205～221)

尾張第三－3～第四様式の資料群。資料の中心は尾張第三－4様式以降か。

205は円窓付壺、尾張第四様式。焼成前穿孔。206は櫛描紋系壺。細頸で受口状の口縁を有するもので、胴部上位の横位紋様帯は横位櫛描紋が省略され、横方向のミガキ調整と付加沈線のみが施されている。207は内面に断面三角形の突帯が1条めぐる鉢。208～214・220は櫛描紋系甕。209～211はいわゆる「朝日形甕」の最末型式に相当する。212の底部外面は木葉痕がある。215・216は三河地方の鍋（鉢）を模倣したもの。217～219は尾張北部から美濃中東部の条痕紋系深鉢、尾張第四様式。221は胴部上位に短いピッチの粗いハケ状工具を使用した横線、口縁上端に刻みをめぐらせる、伊勢湾西岸産の甕。

上層 (222～232)

尾張第四－2～3様式を中心とした資料群。SD03がほぼ埋没した後の堆積。

222・223は櫛描紋系壺。222は頸部に半截竹管状工具による横線を6条以上施す。223は受口状口縁の屈曲部に沈線を1条、その上に刻みをめぐらせる、頸部から胴部上位にかけてヘラ状工具の横線を多条にめぐらせる。これらの特徴から伊勢湾西岸産と考えられる。224は内面に断面三角形の貼付突帯をめぐらせる高杯の杯部。225は凹線紋系壺の脚部か？226～228は櫛描紋系甕。226は台付甕の台部。229～232は凹線紋系甕。231はタタキ→ハケの順で、そのほかはハケ→タタキの順で調整が行われる。

その他 (233～249)

SD03内に設定したトレンチ出土資料で、層位が不明な中期資料。

233～242は壺。240は「瓜郷式」系壺の胴部片。243は鉢。244～247は甕。248・249は深鉢。

小結

SD03は先述したように、溝資料ではあるが比較的層位ごとにまとまりがある。特に、

最下層→貝層3→貝層2への変遷は、既存の資料では得られなかった層位的な裏付けが証明された。したがって、尾張第Ⅱ-3～第Ⅲ-2様式の変遷を考える上で貴重な資料となった。

(3) 貝層 (図版 20 250～262)

貝層はSD03上および周辺にみられる混貝土層。資料は尾張第Ⅲ～Ⅳ様式が混在する。250・251は壺。252は高杯。尾張第Ⅲ様式の鏝の付く櫛描紋系。253は凹線紋系壺?の脚部。254～262は甕。262は尾張第Ⅳ-2様式併行の三河地域からの搬入品。

(4) 貝層上 (図版 21・22 263～280)

貝層上は先述の貝層の上位を覆う層。資料は尾張第Ⅲ～Ⅳ様式が混在する。

263～269は壺。263は条痕紋系、すべて二枚貝施紋。264は頸部の二枚貝による横位直線紋ののち、半截竹管状工具による縦方向の直線を3対入れる。265は櫛描紋系の細頸壺で、胴部上位の櫛状工具による縦位の波状紋は6単位?ある。266は「瓜郷式」系の細頸壺。267は凹線紋系?で、口縁内面に扇状紋を2段めぐらせる。268は尾張南西部の条痕紋系細頸壺。沈線間の刺突紋は貝殻腹縁による。269は櫛描紋系、胴部の紋様構成が「沈線+磨消帯」となる。270は小型の蓋。

271～280は甕・深鉢。273は口縁端部に指腹押圧紋をめぐらせる尾張第Ⅲ-4様式以降の尾張平野南西部産の鍋。1対の把手が付くものは稀。

(5) SD01 (図版 22 281～283)

SD01資料は下位の資料の混入。すべて尾張第Ⅳ様式の凹線紋系土器。281は大型の壺。282は鏝がめぐる高杯。283は甕。

(6) 99A区トレンチほか (図版 22 284～290)

99A区のとレンチ・検出資料。284の尾張第Ⅱ-3様式の櫛描紋系壺以外は、尾張第Ⅳ様式の土器。289は系統不明の受口状口縁甕。290は図上の右・下に加工痕がある土製円板。

(7) SB01 (図版 23 291～294)

SB01はSB01内のSK01資料も含む。尾張第Ⅳ様式の土器群。

291はSK01に胴部下半、口縁部から胴部上半はそれ以外から出土。器高が推定51.5cmの大型壺。292は小型壺。293は「瓜郷式」系土器の壺。294は甕。

(8) SX01 (図版 24・25 295～314)

SX01は主に下層資料が中心。上層資料は弥生時代後期(山中式)以降の資料が中心となるため、後述した。ただし、若干の後期初頭に比定できる資料を含む。「八王子古宮式」に併行する299が相当する。したがって、尾張第Ⅳ様式を中心とする資料ではあるが、尾張第Ⅴ-1様式が混在する。

295～300は壺。295・296・298は櫛描紋系。297は「瓜郷式」系。296・301は凹線紋系。299は凹線紋系の系譜を持つ、尾張第Ⅴ-1様式に比定できる壺。301は凹線紋系高杯。302～305は台付甕。304の台は焼成前穿孔がみられる。306～314は凹線紋系甕。ただし、308は縦ハケ→短い横ハケがめぐる伊勢湾西岸産。

(9) まとめ

前期から中期までの土器について、総括する。

前期については、いわゆる西日本で「前期末」とされている時期に相当する。すなわち、各地域で個性的な遠賀川系土器が出現し、地域色が見出される時期である。

伊勢湾周辺では、「亜流遠賀川」と呼ばれてきた遠賀川系土器B類が成立し、尾張平野部を中心に、西は奈良（唐古・鍵遺跡）・滋賀方面（小津浜遺跡など）、東は神奈川方面（平沢同明遺跡など）、北は新潟方面（境A遺跡）へと、より東に重心を持ちながら分布範囲を広げている。遠賀川系土器B類は、壺と甕が広域に分布する。このうち壺は、今回提示した2型式のうち、8・9のような頸の直立し、胴部が扁平に張り出す型式のみ広域に分布する。なかには、遠賀川系土器B類の壺には稀な口縁部に焼成前穿孔をもつ、すなわち蓋付きの大型壺が遠方まで運ばれていく。遠賀川系土器B類には土製の壺蓋が組成しないので、木製蓋を利用したのであろうか？遠賀川系土器B類の器種が伊勢湾西岸域以外で揃うのは、尾張平野南西部、とりわけ朝日遺跡と西志賀遺跡だけである。

遠賀川系B類壺

条痕紋系土器については、従来からの指摘があるように、土器全体の1割に満たない構成比であった。44・98のように遠賀川系・条痕紋系が折衷した甕が存在する遺跡は稀である。尾張平野北部、一宮周辺にみられる氷式系と遠賀川系が折衷して成立するいわゆる「削痕系土器」の生成過程と類似する。

中期については、「漸進的な変化」として捉えたSD03の堆積状況が特筆できる。最下層（尾張第Ⅱ-3様式）→貝層3（尾張第Ⅲ-1様式）→貝層2（尾張第Ⅲ-2様式）への変遷は、既存の資料では得られなかった層位的な裏付けが証明された。一宮市猫島遺跡がほぼこの時期幅を備える資料群である。

猫島遺跡

中期の土器群で最も注目できる資料は、90～94の長頸壺である。厳密に言えば、在来の条痕紋系壺として評価されるが、広域に目を転じれば、南関東から中部高地、さらに伊勢湾までおよぶ「平沢型壺形土器」に類似する。

長頸壺

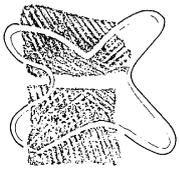
ここで、平手町遺跡出土の「長頸壺」資料から読み取れる要素を抽出してみよう。

まず、器形から見ていく。細長くのびる頸部と頸部径：胴部径＝1：3の器形を特徴とする「長頸壺」は前期の条痕紋系土器にさかのぼると指摘したことがある（永井2000）。しかし、全形を知り得る土器は少ない。ただ、長頸指向は伊勢湾周辺の条痕紋系土器にも存在することは明言できる。

頸部にみられる隆起は、前期にさかのぼる類例はなく、尾張Ⅲ期以降の条痕紋系「長頸壺」、あるいは櫛描紋系細頸壺（貝田町式）の一部、さらに「瓜郷式」系壺へとつながる器形である。以上の継続性から条痕紋系壺に出現した要素と想定する。

次に、施紋具について見てみよう。尾張平野の前期から中期前半にかけて、条痕紋系土器の外面をハイガイなど放射肋をもつ二枚貝の腹縁による紋様が主体となる。2・3ではヘラ状工具と櫛状工具を併用しているが、二枚貝腹縁および背面を利用した紋様は存在する。この点については、条痕紋系土器の他の器種にも同様の指摘ができる。

最後に、紋様を取り上げてみる。擬縄紋は縄紋との関係が問題となるが、いずれも前期



阿弥陀寺遺跡の
X字状単位紋

にさかのぼることはなく、尾張第Ⅱ様式以降みられる手法であり、条痕紋系土器に採用されることが多い。

上記の要素はいずれも尾張第Ⅲ様式あるいは第Ⅱ-3様式にさかのぼってみられる在来の要素として導き出されるものであるが、90の胴部上位に施されているX字状の単位紋は在来の要素として捉えられない。既存の資料では、阿弥陀寺遺跡に2点あるにすぎない。定着する紋様でもなく、所属不明の紋様である。

では、尾張平野周辺の長頸壺を比較してみよう(図16)。長頸壺は佐藤由紀男によると、尾張第Ⅱ-3様式(朝日編年Ⅲ期)あるいは尾張第Ⅲ-1様式に尾張平野縁辺で成立すると言う(佐藤1996)。現段階で尾張第Ⅱ-3様式にさかのぼる確実な資料がないため、断言はできない。佐藤が出現期の資料として提示した資料は、朝日遺跡資料(1)である。たしかに口縁部直下に押圧突帯をめぐらし、縦位と横位の条痕を施した尾張Ⅱ-3様式にさかのぼる特徴を持つ。しかし、横位の条痕は上下に沈線で区画される手法が用いられており、尾張第Ⅲ-1様式以降の特徴も併せ持つ。したがって、尾張平野周辺における「長頸壺」の出現は、尾張第Ⅲ-1様式以降と考えたい。

6は佐藤が「平沢型」壺形土器とする資料である。詳細な検討を加え、尾張第Ⅲ-1様式併行の豊川・天竜川流域間で製作された土器としている。

3は尾張平野南部の土器。頸部が帯状に隆起し、この部分に羽状沈線を施す。その他、頸部に斜格子紋、頸胴部界に複合鋸歯紋を施す典型的な条痕紋系長頸壺である。これは、おそらく8→11へと型式変化をたどると思われる。

9は尾張平野北部から山間部にかけての資料で、おそらく「平沢型」壺形土器に類似する条痕紋系長頸壺と思われる。

4・5は尾張第Ⅲ-1様式の条痕紋系長頸壺で、胴部単位紋に環状弧紋(4)、同心円紋(5)を持つ。5は同心円紋中央およびその外側の連弧帯に二枚貝背面圧痕を加える。

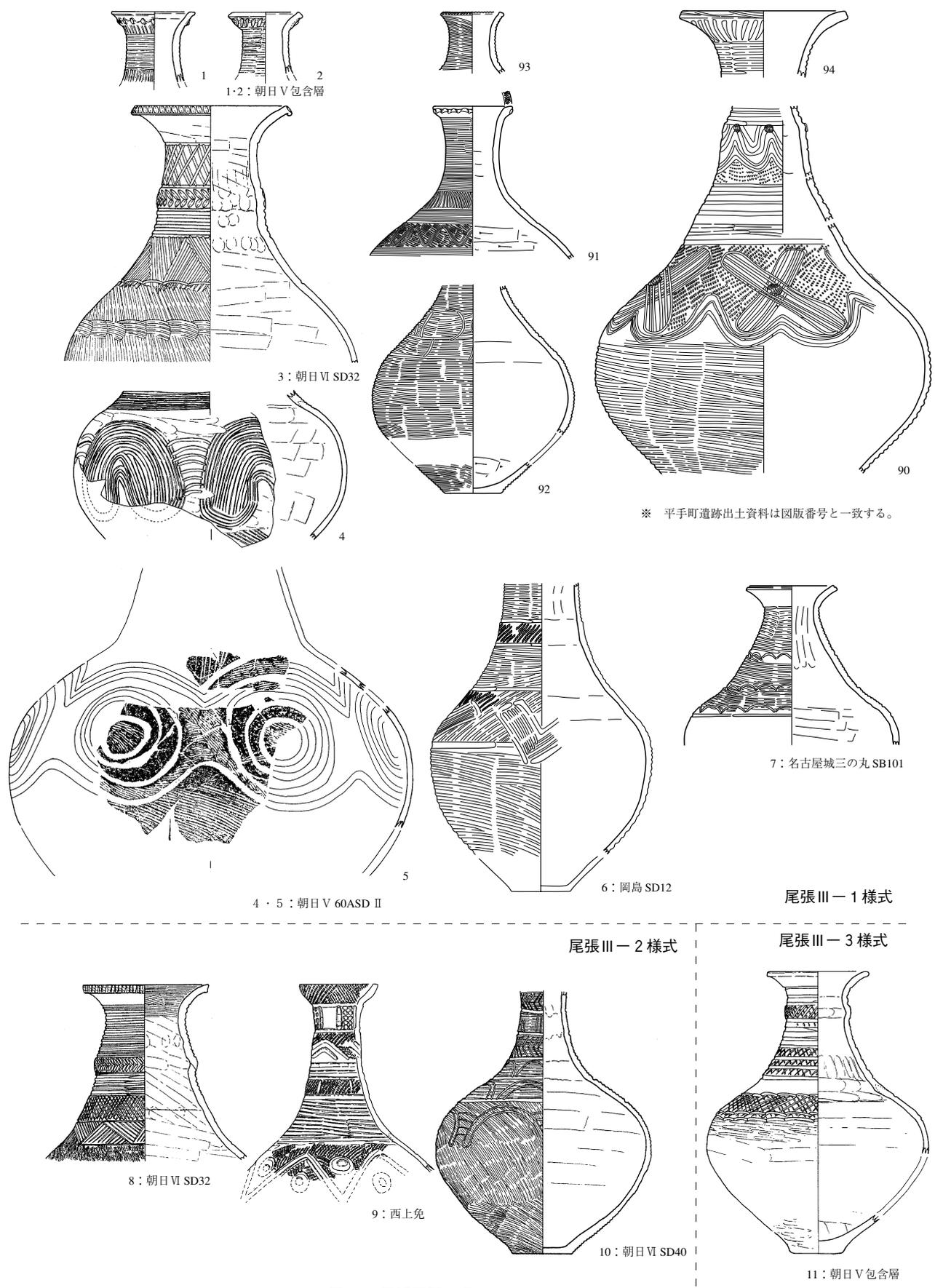
さて、紋様構成のうち、環状弧紋や連弧紋は比較的尾張平野周辺に定着する紋様である。一方、同心円紋や岡島遺跡の「弧状沈線」単位紋、さらに平手町遺跡のX字状単位紋など当該地域に単発的な紋様はどのように理解したらよいのであろうか？

佐藤の言葉を借りれば、「長頸壺の出現は単系的な土器の変化で説明できるものではなく、伊勢湾周辺以東、関東から南東北に至る広範な地域の相互の影響関係(相互作用)が重視され」(佐藤1996)、「長頸壺」のみではなく、おそらく様々な器種におよぶ地域間交流が根底にあると思われる。

以上、前期から中期の土器について特筆できる資料について検討した。いずれの資料も、地域間交流を基軸とした広域に展開する問題点を指摘した。平手町遺跡の土器群から派生する課題は、今回指摘したことに留まらない。特に、隣接する志賀公園遺跡、朝日遺跡との比較検討を行う必要がある。

佐藤由紀男 1994「長頸壺の出現とその意義」『地域と考古学』

佐藤由紀男 1996「長頸壺の出現に関する覚書き」『YAY!』



※ 平手町遺跡出土資料は図版番号と一致する。

4・5：朝日V 60ASD II

7：名古屋城三の丸 SB101

6：岡島SD12

尾張III-1様式

尾張III-2様式

尾張III-3様式

8：朝日VI SD32

9：西上免

10：朝日VI SD40

11：朝日V包含層

図16 尾張平野周辺の長頸壺 1：6

3. 99 B区・C区・試掘調査出土遺物

(1) 99 B区

弥生時代前期から中期の遺物が、99A区から続く谷状の落ち込みに相当する堆積から出土した。315は遠賀川系壺の頸部。頸部の沈線帯は12本を数える。頸胴部界にはハケによる段が作りだされる。316は遠賀川系甕の底部。315・316はいずれもSD06貝層資料と同時期の尾張第Ⅰ-6様式に比定できる。317は櫛描紋系壺。受口状の口縁が直立する器形、口縁部から頸部にかけて不揃いな櫛描波状紋、頸部に櫛状工具による廉状紋といった特徴から尾張第Ⅳ様式に比定できる。318は、口縁端面の刻み、胴部の縦方向のハケ調整からおそらく遠賀川系甕と考えられる。

(2) 99 C区

99 C区から出土した遺物は、第1面の検出に伴う遺物がほとんどである。そのなかで、第1面から遺構の時期を把握するために掘削したトレンチに比較的器形のわかる資料を提示する。319は八王子古宮式と称されている尾張第Ⅴ様式の台付甕。口縁端面を丸くおさめ少し肥大する。胴部外面は縦方向の板ナデ、台部付近に板ケズリをおこなう。底部は焼成後穿孔がみられる。320は凹線紋系台付鉢の台部。台部に6ヶ所円形の透し穴、台部端に3条の凹線紋が施される。321は凹線紋系甕。口縁端部に刻みを施す。胴部は左斜め上がりのタタキののち、縦方向のハケ調整を行う。内面は縦方向のケズリ調整。

(3) 中世陶器

写真で提示した資料で、いずれもT.T. 1から出土した。志賀公園遺跡2000年度の調査区に最も近く、中世以降の自然流路に伴う資料。いずれも中世後期に比定できよう。

表3 弥生時代前期末～中期中葉の尾張地域編年対照表

尾張様式	旧名称	紅村1958	杉原・岡本1961	杉原1964	久永1979	尾張編年石黒1996	基準資料	平手町遺跡
Ⅰ-5	水神平式／西志賀式	貝殻山式／西志賀式	西志賀Ⅰ式	第Ⅰ様式	二反地三式	Ⅰ-3／Ⅰ-4	朝日遺跡6 SD101古相	SD06最下層・貝層2
Ⅰ-6	水神平式／西志賀式	貝殻山式／西志賀式	西志賀Ⅰ式	第Ⅰ様式	二反地三式	Ⅰ-4	朝日遺跡6 SD101新相	SD06貝層
Ⅱ-1	朝日式	朝日式	西志賀Ⅱa式	第Ⅱ様式	二反地四式／朝日式	Ⅱ-1	朝日遺跡Ⅴ SD 6 61A区	
Ⅱ-2	朝日式	朝日式	西志賀Ⅱa式	第Ⅱ様式	二反地四式／朝日式	Ⅱ-2	朝日遺跡Ⅴ SDⅢ60B区	
Ⅱ-3	朝日式／貝田町式	朝日式／貝田町式	西志賀Ⅱa式	第Ⅱ様式	二反地五式／朝日式	Ⅱ-3	朝日遺跡6 SD105(朝日遺跡Ⅴ SDⅣ60A区中層群)	SD03最下層
Ⅲ-1	貝田町式	貝田町式	西志賀Ⅱa式／Ⅱb式	第Ⅲ様式	二反地六式／西志賀Ⅱb式／瓜郷式	Ⅲ-1	朝日遺跡Ⅴ SDⅡ60A・SDⅡ60BⅠ～Ⅱ層、朝日遺跡6 SD103下層	SD03貝層3
Ⅲ-2	貝田町式	貝田町式	西志賀Ⅱb式	第Ⅲ様式	二反地六式／西志賀Ⅱb式／瓜郷式	Ⅲ-2	朝日遺跡82SK231・Ⅴ60ESD06b・ⅤSDⅡ60BⅠb層・6 SD32、阿弥陀寺遺跡SB29下層・SK74・SK151・SD04	SD03貝層2
Ⅲ-3	貝田町式	貝田町式	西志賀Ⅱb式	第Ⅲ様式	二反地六式／西志賀Ⅱb式／瓜郷式	Ⅲ-3	阿弥陀寺遺跡SB56・SB29上層・SB49・SK107、朝日遺跡Ⅴ SDⅡ60BⅠa層	SD03貝層2
Ⅲ-4	貝田町式	貝田町式	西志賀Ⅱb式	第Ⅲ様式	二反地六式／西志賀Ⅱb式／瓜郷式	Ⅲ-4	阿弥陀寺遺跡SB33・SB12、朝日遺跡Ⅴ60ESZ107・108間溝	
Ⅲ-5	貝田町式	貝田町式	西志賀Ⅱb式	第Ⅲ様式	二反地六式／西志賀Ⅱb式／瓜郷式	Ⅲ-5	阿弥陀寺遺跡SB67、朝日遺跡6 SD17・SD25	

4. 弥生時代後期から古墳時代前期

平手町遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期(山中式から廻間式)にかかる土器群を提示する。これらは、原則的には厳密な一括資料としての信頼がおけるものではないが、そのなかでSX01上層、SD04下層として提示する土器群(これらを下層土器群とする)は、前後する型式群との混在が少なく、それぞれ山中式前期、山中式中期におけるごく限定された型式の範疇での理解が可能である。また、SD01、SD02、SD03上層、SD04中上層の一群(これらを上層土器群とする)は、下層から混入した土器群を除けば、廻間Ⅱ式前半を前後する時期にまとまりを有するものとみてよからう。

以下、赤塚次郎の器種分類、細分案を参考にしつつ、これらの資料の記述をすすめる。

貝層上 (322～325)

山中式前期1段階に相当する一群。出土状況における共伴は厳密ではないものの、周辺出土のほぼ同時期に対比しうる土器をも含めた。322は杯部が椀状となる高杯(台付鉢)で外面全体が赤彩される。323も322と同様の形態で、外面に赤彩。脚部上端にはクシ状工具による刺突がめぐる。324は口縁部が内傾する小型の台付鉢。口縁部外面に斑文赤彩が施される。325は盤状の杯部をもつ高杯。

SX01上層 (326～329)

山中式前期1段階に対比される土器群。326は山中式の典型的な甕(山中型台付甕)。体部内面のヘラケズリは頸部よりやや下位の位置までにおよぶ。328は透孔をもたない中実の脚部で、外面全体が赤彩される。台付鉢の脚部であろう。

SD01 (330～354)

下層から混入した山中式の土器群(330～340)と廻間Ⅱ式前半に主体をおく土器群(341～354)がある。330～333は山中型台付甕。体部内面のヘラケズリは頸部直下までにおよぶ。336～339は杯部外面が加飾される高杯で、336が山中式中期2段階、337、338が山中式中期、339が山中式後期に対比されよう。340は小型の高杯、あるいは台付壺の脚部。343は受口状に内彎する口縁部をもつ甕。344はS字状口縁台付甕でB類古段階に相当する。345、346はパレス・スタイル壺。345は口縁部下段の内外面、口縁部外面に貼り付けられた棒状浮文とその周囲が赤彩される。347は有段口縁をもつ鉢状の器形で、内面ヘラケズリ調整。他地域に系譜をおくものであろう。352は椀形高杯で、やや浅い杯部、顕著な口縁部の内彎が特徴的。杯底部内面には放射状のヘラミガキが施される。

SD02 (355～357)

山中式の土器(355)と廻間Ⅰ～Ⅱ式の土器(356、357)がわずかにある。355は山中式の有段高杯で、杯口縁部下端にはヘラ状工具によるキザミが施される。356は廻間Ⅰ式後半の有段高杯。

SD03上層 (358～366)

SD03の上層から廻間Ⅱ式前半を主体とする土器群が抽出された。358は大型の壺で、口縁部は折り返しによって肥厚する。359は口縁部外面にヘラ状工具によるキザミが二段にわたって施される。胎土がやや粗悪なものの、二重口縁加飾壺の口縁部とした。360はヒサゴ壺で体部最大径を下位におく。361は内彎気味のやや短い口縁部をもつ壺。365、366

は有段高杯で、365は口縁端部が鋭利に仕上げられている。366は脚部の内彎がほとんど消失している。

SD04

SD04では、下層が山中式中期、中層が山中式後期～廻間Ⅱ式前半、上層が廻間Ⅱ式後半にそれぞれが対応するとみられる。なかでも山中式中期の一群が卓越した内容をもつ。

SD04 下層 (367～392)

山中式中期2～3段階に属す比較的良好な土器群。甕(367～372)は山中型台付甕によって占められる。いずれも口縁部周辺の強いヨコナデ、頸部にまでおよぶヘラケズリなどきわめて画一的な特徴をもつ。パレス・スタイル壺は口縁部の形態、体部の文様構成、胎土などに型式的な変異が認められる。373は擬凹線のない口縁部、黄橙色の胎土といったパレス・スタイル壺として定型化する以前の要素が多く認められる。一方、374、375は灰白色の胎土で、体部文様はそれぞれ直線文と波状文、直線文と刺突列の組合せとなる。376は貼り付けによる垂下口縁帯が赤彩される。377～383は有段高杯。379には斑文赤彩が残る。全体に加飾性に富み、杯部外面の波状文のほか、杯部下端の沈線、口縁部先端付近内面の沈線が施される傾向が顕著。384、385はワイングラス形高杯。388は柱状の中空脚をもつ器台。389は蓋で、内面が塗り分けされる。小孔が1孔残存する。



写真1 椀形高杯杯部外面 (352)



写真3 低脚高杯杯部外面 (405)



写真2 パレス・スタイル壺口縁部内面 (375)

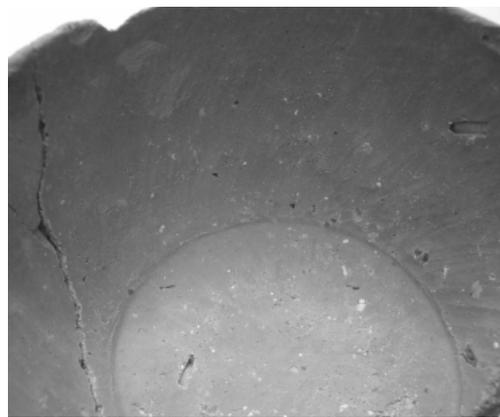


写真4 低脚高杯杯部内面 (405)

SD04 中層 (393～404)、上層 (405・406)

中層の土器群は下層の一群との明確な弁別は難しいが、山中式後期4～5段階に主体をおく一群(393～399)と、廻間Ⅱ式前半に主体をおく一群(400～404)とに大別できる。上層とした一群(405、406)には廻間Ⅱ式後半までの資料が含まれる。

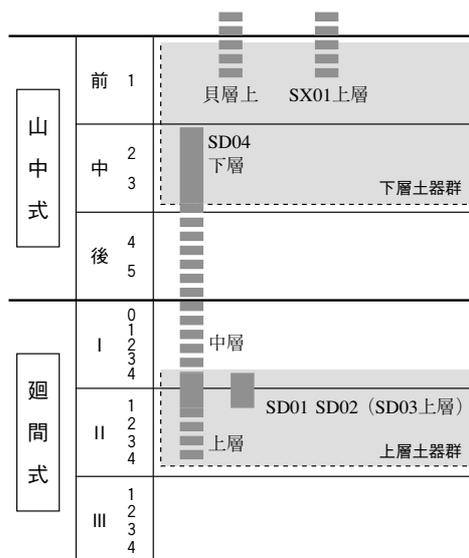
有段高杯(395、396、398、399)は上層の一群と比較して脚部の開きが大きくなる傾向にある。398、399は山中式でも最末に近い形態であろう。

400、401はS字状口縁台付甕B類古段階に相当。404はヒサゴ壺の口縁部。405有稜低脚高杯で、廻間Ⅱ式前半にみられる通有の型式。口縁部外面と脚部下半外面の文様はヘラ状工具による直線文と貝殻による刺突列の組合せによって構成される。406はパレス・スタイル壺で、体部文様はヘラ状工具によって山形文がえがかれ、その下位に刺突がめぐるのがみえる。頸部には突帯が貼り付けられていた痕跡が残る。

小結

ここに提示した土器群は、周辺の西志賀遺跡や志賀公園遺跡などを含めた「志賀遺跡群」一帯における弥生時代後期から古墳時代前期の土器群としてはもっとも良好な一群としてよかろう。ただし、山中式中期までは弥生時代中期から継続した土器群の推移が追えることと対照的に、山中式後期以降においては土器群の推移を継続的に追うことは困難となる*。また、上層土器群とした廻間Ⅱ式前半に主体をおく一群は、明確な遺構にともなうものではなく、山中式中期以前と山中式後期以降の遺跡の動態を単純に比較できないことは明らかである。その上層土器群の来歴については不明な点が多く、今後周辺地域における調査を注視していく必要はあろうが、平手町遺跡、あるいは志賀遺跡群の動態の一画期を、SD04の機能停止を意味する下層土器群の廃棄、すなわち山中式中期の段階に求めたい。

表4 尾張平野における編年対照表



* これまでの愛知県埋蔵文化財センターや名古屋市教育委員会による志賀公園遺跡の調査においても、山中式から廻間式の遺構・遺物は散発的に検出されるものの、遺跡の実体については不明な部分が多い(永井幸幸編 2001『志賀公園遺跡』(愛知県埋蔵文化財調査報告書第90集) 愛知県埋蔵文化財センターほか)。

5. 骨角製品

今回、出土した点数は計41点であり、そのうち38点を図化した。

ヤス類 (1～20)

最大径による分類

最大径・および使用材質によって分類される。最大径では、(i) 3～4 mmのもの、(ii) 5～6 mmのもの、(iii) 7～8 mmの、3種類に分けられる(図17)。点数は、(ii) 5～6 mmのものが12点と最多である一方、(iii) のなかで8 mmのものも3点存在することは、捕獲対象物および装着方法の違いが想定できる可能性がある。使用材質は、シカの中手骨・中足骨などの管状骨が多いと思われるが、2のようにエイ類の尾棘を用いている例もある。4・7～9・11～13・16～19には黒色化した部分があり、被熱によると考えられる。20は平面形が長三角形を呈する小型の刺突具で、一方の断面形状が楕円形を呈するものの、もう一方の断面形状は薄くなっていることが特徴である。組合せの刺突具の可能性も考えられる。

ヘラ状製品 (21・22)

21は中手骨・中足骨などシカの管状骨を使用している。全体に扁平で、両面ともに研磨痕が著しい。被熱のため、全面は黒色化している。22は鹿角の角幹部分を使用している。特に髓側を平滑にし、端部は薄くかつ鋭く仕上げている。両面ともに研磨痕が著しい。

鏃 (23・24)

23は有茎鏃で茎部を欠損している。基部の作り出しが明瞭である。稜線は明瞭で、断面形は六角形を呈する。全面に加工時の研磨痕が認められる。24も有茎鏃で先端部側が欠損している。鹿角製か。縦方向の研磨痕が多く見られる。一部、被熱により黒色化した部分がある。

針 (25～27)

25・26は細身の針である。25は断面三角形を呈するもので、胴部から先端部に向かって細く鋭くなっている。26は断面楕円形を呈し、表面は平滑に整形されている。全面、被熱により黒色化している。27は、断面が扁平なかまぼこ状を呈する。作りが丁寧である。

弭形鹿角製品 (28)

28は鹿角の先端部を素材としている。先端部を鋭く仕上げ、少なくとも4ヶ所以上の穿孔を施し、その上下に4本一単位で、沈線を巡らせている。沈線は、鋭い工具により刻まれたものと思われる。

「浮袋の口」 (29・30)

いわゆる「浮袋の口」といわれているものが2点出土している。29はごく小片で、復元径2.0cmほどの挟りのみられる栓状の形態になるものと思われる。全面平滑に作られており、挟りの部分にのみ若干の工具痕が残る。30は2分の1程度の残存で、復元径1.4cmほどになるものと思われる。外面全体に研磨痕が残る、小さい穿孔が1ヶ所ある。内面には幅3 mmほどの工具痕が見られる。29・30ともに鹿角製である。

垂飾 (31・32)

31は鳥類の管状骨の上下を切断して垂飾としたものである。切断部には擦切り痕が残

されている。32は軟骨魚類の脊椎骨に2ヶ所穿孔し、垂飾としたものである。穿孔は、上面・側辺それぞれから行っている。一部に被熱部分がある。

棒状鹿角製品 (33)

33は、右鹿角の角幹を使用している。研磨により鹿角の凹凸をなくし、全面を平滑にした端部に頭部が作り出されている。頭部は一部欠損しているが、この部分には本来穿孔がなされていたと思われる。残存部中央には1.5×2 cm、深さ3 mmの抉りがある。欠損部側には1.5×1 cmのボタン状の装飾が見られ、長軸方向に直交して沈線が3本施されている。このボタン状の装飾は対称方向にもう一つ存在したものと考えられる。

ボタン状の装飾

縄文晩期末から弥生中期までの棒状鹿角製品に関して、川添和暁による集成がある(川添2001)。部位Ⅰ～Ⅳが構造としてみられることは、集成した資料と同様である。今回報告する資料は、形態分類上、A類の範疇に入るものと考えられる。特に、部位Ⅲ(文様帯部分 この資料では欠損している端部側を示す)がボタン状の装飾になっていることが、大きな特徴である。

その他用途不明品

34は鹿角の角幹を使用し、全面が研磨されている。33と同じく頭部が作り出され、斜めに穿孔が施されていることから、棒状鹿角製品になる可能性が高い。35は全面縦に研磨痕が見られ、作りが精緻である。断面は扁平なかまぼこ形を呈する。36は径1 cmほどの円盤状に整形されたもので、若干反りが見られる。全面研磨されている。一部、被熱により黒色化している部分がある。鹿角製と思われる。37は斧足網(二枚貝)貝殻を板状にしたものと思われる。片面には研磨による線状痕が多く見られる。38は鹿角の先端部を切断したものである。表面の加工などは施されておらず、製作前の未成品である可能性がある。

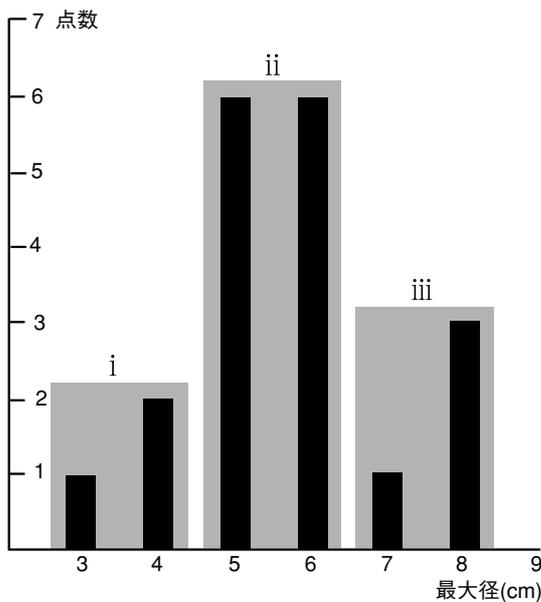


図 17 ヤス分類グラフ

6. 石製品

今回出土した石器29点のうち、剥片石器は計25点、管玉をはじめとする垂飾品は計4点である。

石鏃（1～17）

五角形鏃 17点のうち、無茎鏃は7点・有茎鏃は10点であり、平面形態が五角形状を呈するものが見られる。有茎鏃には11・12・15～17の様に長さ3.5cm以上に長身化しているものも見られる。表裏両面とも中央部に稜をもち断面菱形を呈するものがある一方、片面の中心部にしか稜がなく、反対面は平坦で、断面三角形形状を呈するものがある。3は横長剥片の瘤状
瘤状 周辺に二次調整を若干加えて整形している。4の中心部には、製作時に瘤状に残された部分が見られる。14は剥離による調整後、中央部付近に一部研磨痕がみられる。1は黒曜石製、2～4・8～12は下呂石製、5・15・16はチャート製、6・7・13・14は泥岩製、17はホルンフェルス製である。

石錐（19～22）

小型で機能部の作り出しが明瞭に見られないもの(19・20)と、それよりも若干大きく機能部に作り出しの見られるもの(21・22)との二形態が見られる。いずれも錐部の摩滅が著しく、使用の痕跡が残されている。すべて下呂石製で、21は一側面に白色の礫面が見られる。

スクレイパー（18・23・24）

18は平面形態が三角形を呈し石鏃に類似しているものの、若干厚手であり両面の中央に稜はなく、縁辺部を中心に調整が施されている。24は縦長の弯曲する長剥片の一辺に剥離を加えて刃部を形成している。18・23はチャート製、24は下呂石製。

打製石斧（25）

刃部側が欠損しているものと思われる。側面および上端に剥離を加えている。短冊形の打製石斧に、再加工を施した可能性もある。側面観には若干反りが見られる。ホルンフェルス製。

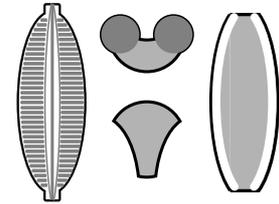
管玉（26～28）

3点出土している。石材はすべて熔結凝灰岩で、表面は丁寧に磨かれている。26は3点の中では最も長い。一方の端部には穿孔時もしくは製作時の欠損が見られる。

その他（29）

ヒスイ製の石製品が1点出土している。全面が丁寧に磨かれており、勾玉の可能性も考えられるか。

4. 自然科学分析



パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平手町遺跡は、熱田台地北端に近い沖積地に立地する。ここでは「弥生の小海退」の時期になると溝内にカキやハマグリを主体とする貝塚が形成される。今回は、貝塚形成期の時代観と古環境を推定する目的で、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

試料は、99 A 区の P-1 地点と P-2 地点から採取された試料である。P-1 地点は SD03 内から採取されたもので、放射性炭素年代測定試料 5 点（試料番号 $^{14}\text{C}-1 \sim ^{14}\text{C}-5$ ）と、微化石分析を行う試料 9 点（試料番号 1 ~ 9）が採取された。P-2 地点では西壁から採取されている。7 層より下位は溝 SD06 の覆土である。ここからは、放射性炭素年代測定試料 4 点（試料番号 $^{14}\text{C}-1 \sim ^{14}\text{C}-4$ ）、微化石分析を行う試料 9 点（試料番号 0 ~ 8）が採取された。各地点の柱状図ならびに試料採取層位を図 1・2 に示す。今回は採取試料すべてを分析の対象とした。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。なお、計算には、放射性炭素の半減期として、LIBBY の半減期 5,570 年を使用した。また、付記した

誤差は β 線の計測値の標準偏差 σ に基づいて産出した年代で、標準偏差に相当する年代（真の値が 66.7% の割合でこの範囲内にあるということ）である。

同位体比は標準値からのずれをパーミルで表した年代である。 $\delta^{14}\text{C}$ の値は放射線の測定で求めた資料炭素中の ^{14}C 濃度を A、現在の炭素の標準の濃度 A (std) とし、以下に示す式で求めた。

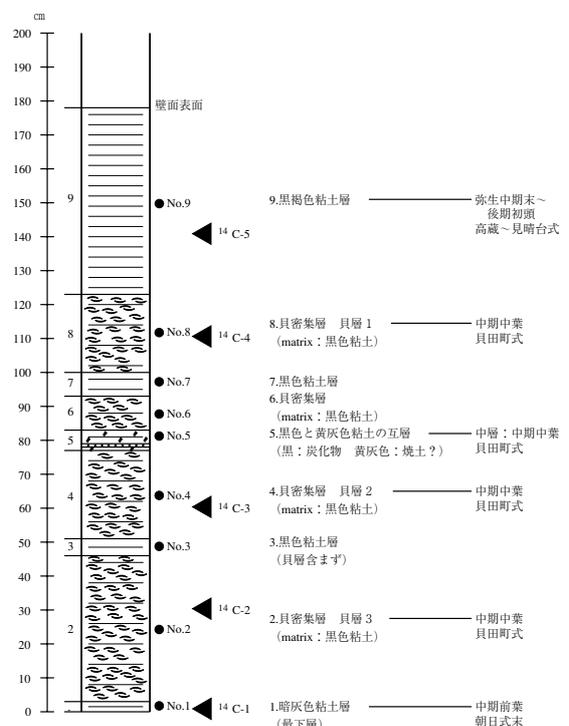


図 1 P-1 地点の柱状図と試料採取層位

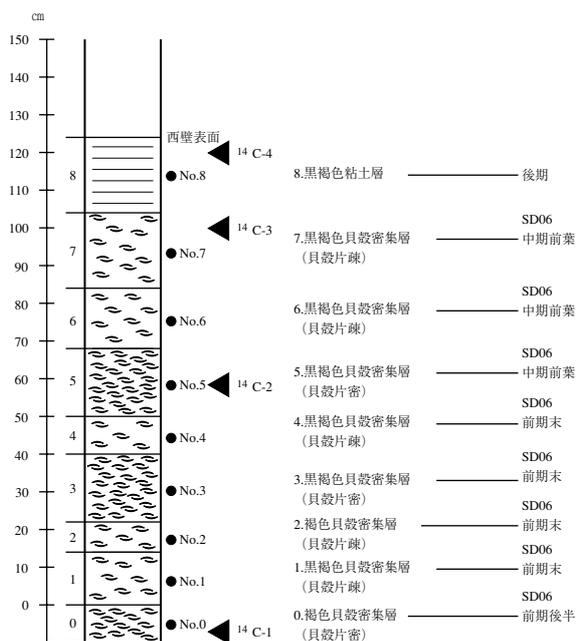


図2 P-2地点の柱状図と試料採取層位

$\delta^{13}\text{C}$ の値は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に産出した値である。 $\Delta^{14}\text{C}$ は、 $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ パーミルであったときの ^{14}C 濃度を計算した値である。この濃度を用いて同位体効果を考慮した年代値を求めている。表中の年代値は、未補正のものと同位体効果による測定誤差を補正した2つの値を載せている。なお、貝が密集している試料に関しては、土壌と貝を分離して、それぞれを測定している (Code No. に a, b が付してある)。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で7 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査して、珪藻殻が半分以上残存するものを200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer

(1992)、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986,1988,1991a,1991b) などを用いる。堆積環境の解析にあたり淡水生種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については Asai, K. & Watanabe, T. (1995)、生活型などについては VOS, P.C. & DE WOLF, H. (1993) の環境指標種を参考とする。

(3) 花粉分析

試料を湿重で約10 g 秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離 (臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理 (無水酢酸:濃硫酸 = 9:1) の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

(4) 植物珪酸体分析

試料を湿重約5 g 秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理 (70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈して、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入し、プレパラートを作製する。これを400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1と図3に示す。分析試料の中で、貝殻は海洋の炭素が起源になっている。海洋中の放射性炭素濃度は、大気中の炭酸ガス濃度と異なるため、同位体補正のみを行うと、暦年代との差がかえって大きくなってしまいう傾向にある。そのため、同位体補正を行わない年代値の方が、暦年代値との差が小さくなる場合が多い。このことから、土壌の測定値は同位体補正を行なった値を用い、貝殻の測定値は同位体補正を行わない値を用いることにする。表中には双方の値を載せているが、図中には一方のみを記した。

(2) 珪藻分析

結果を表2・3、図4・5に示す。以下に各地点の結果を述べる。

・P-1 地点

珪藻化石は9試料(試料番号1～9)とも豊富に産出する。完形殻の出現率は70%以上と化石の保存が良い。産出分類群数は、30属107種類である。珪藻化石群集は、試料番号1と試料番号2～9とで違いが認められる。

試料番号1は、淡水生種が約80%と優占するが、淡水～汽水域に生育する種も産出する。淡水生種の生態性に注目すると、貧塩不定性種(多少の塩分であれ

表1 放射性炭素年代値測定結果

試料名	性状	年代値 (未補正)	年代値 (同位体補正)	$\delta^{14}\text{C}$	$\delta^{13}\text{C}$	$\Delta^{14}\text{C}$	Code No.	
P-1	^{14}C -1	土壌	2300±50 y.B.P.	2250±50 y.B.P.	-249.3±5.0	-28.1	-244.7±5.0	Gak-20515
	^{14}C -2	貝	2320±50 y.B.P.	2700±50 y.B.P.	-251.3±4.9	-0.7	-287.9±4.9	Gak-20516a
	^{14}C -2	土壌	2620±50 y.B.P.	2630±50 y.B.P.	-278.2±4.5	-24.1	-279.5±4.5	Gak-20516b
	^{14}C -3	貝	2290±60 y.B.P.	2640±60 y.B.P.	-248.4±5.3	-2.5	-282.3±5.3	Gak-20517a
	^{14}C -3	土壌	2050±70 y.B.P.	2140±70 y.B.P.	-225.1±6.9	-19.3	-234.0±6.9	Gak-20517b
	^{14}C -4	貝	2130±60 y.B.P.	2450±60 y.B.P.	-233.5±5.5	-4.9	-264.5±5.5	Gak-20518a
	^{14}C -4	土壌	2000±60 y.B.P.	2040±60 y.B.P.	-220.8±6.0	-22.6	-224.5±6.0	Gak-20518b
	^{14}C -5	土壌	2230±70 y.B.P.	2250±70 y.B.P.	-242.5±6.5	-23.8	-244.4±6.5	Gak-20519
	P-2	^{14}C -1	貝	2510±60 y.B.P.	2890±60 y.B.P.	-268.8±5.1	-0.9	-304.0±5.1
^{14}C -1		土壌	2400±60 y.B.P.	2570±60 y.B.P.	-258.5±5.8	-14.6	-273.9±5.8	Gak-20520b
^{14}C -2		貝	2310±60 y.B.P.	2700±60 y.B.P.	-250.2±5.5	-0.4	-287.3±5.5	Gak-20521a
^{14}C -2		土壌	2620±80 y.B.P.	2670±80 y.B.P.	-278.1±6.9	-21.8	-282.8±6.9	Gak-20521b
^{14}C -3		土壌	2360±70 y.B.P.	2340±70 y.B.P.	-254.9±6.1	-26.1	-253.2±6.1	Gak-20522
^{14}C -4		土壌	2430±70 y.B.P.	2440±70 y.B.P.	-261.0±6.3	-24.4	-261.9±6.3	Gak-20523

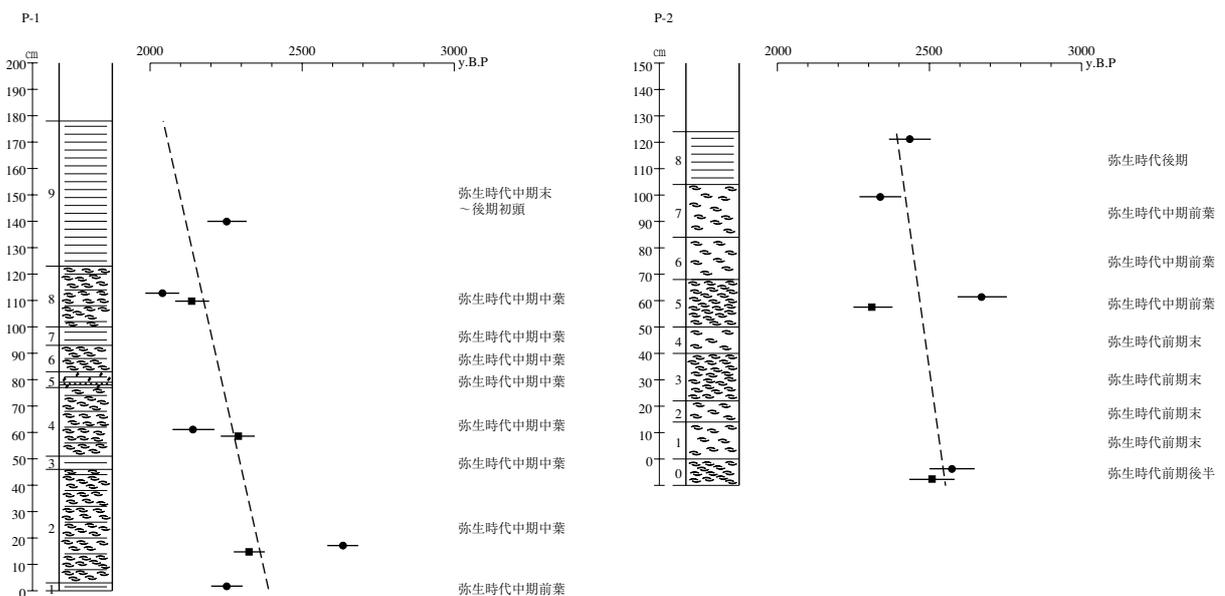


図3 放射性炭素年代測定結果と層位関係

●は土壌(同位体補正值)、■は貝(未補正)を示す。点線は結果をもとに最小二乗法を用いて計算した近似直線である。

ば耐えられる種)、真+好アルカリ性種 (pH7.0以上のアルカリ性水域に生育する種)、流水不定性種 (流水にも止水域にも生育する種)と真+好流水性種 (流水域に生育する種)が多産する。産出種の特徴は、好流水性で中～下流性河川指標種群 (安藤, 1990: 河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標する種)の *Achnanthes lanceolata*、流水不定性の *Navicula kotschyi*、流水不定性で中栄養～富栄養水域に生育する *Nitzschia umbonata*、*Sellaphora pupula*、*Navicula veneta*が10%前後産出することを特徴とする。

試料番号2～9は、淡水生種が急減し、淡水～汽水生種が上位に向かって増加する。また、分布が陸域にほぼ限られる耐乾性の高い陸生珪藻A群 (伊藤・堀内, 1991)が30%前後産出する。産出種の特徴は、塩分耐性の高い *Nitzschia frustulum*が20～60%と優占することである。これに次いで、陸生珪藻A群の *Amphora montana*が20%前後と多産する。なお、下位の試料番号2では、試料番号1で多産した流水不定性の *Navicula kotschyi*が多産する。なお、第三紀層に含まれる絶滅種の *Denticulopsis*属も混入している。

・P-2 地点

珪藻化石は9試料 (試料番号0～8)とも豊富に産出する。完形殻の出現率は大部分が70%以上で化石の保存が良い。産出分類群数は、37属113種類である。珪藻化石群集は、試料番号0、試料番号1～4、試料番号5～7、試料番号8で違いが認められる。

試料番号0は、淡水～汽水生種が約50%と優占し、陸生珪藻A群が約30%と多産する。産出種の特徴は、*Nitzschia frustulum*が50%と優占し、次いで陸生珪藻A群の *Amphora montana*が20%と多産する。

試料番号1～4は、前試料で優占した *Nitzschia frustulum*がやや減少し、これに伴って、海水浮遊性で内湾指標種群 (小杉, 1988; 内湾水中で浮遊生活する種)の *Thalassionema nitzschioides*、海水～汽水生で海水

藻場指標種群 (小杉, 1988; 海藻などに付着生活する種)の *Cocconeis scutellum*が10%前後産出する。また、陸生珪藻A群の *Amphora montana*が引き続き20%前後と多産する。なお、第三紀層に含まれる絶滅種の *Denticulopsis*属も混入している。

試料番号5～7になると、再度 *Nitzschia frustulum*が50%前後と優占するようになる。これに次いで、*Amphora montana*が約30%と多産する。

試料番号8になると、再度 *Thalassionema nitzschioides*が約15%検出される。また、第三紀層に含まれる絶滅種の *Denticulopsis*属も混入している。

(3) 花粉分析

結果を表4・5に示す。花粉化石は全体的に保存状態が悪くほとんど検出されない。P-1地点をみると、試料番号9は比較的多くの花粉化石が得られている。木本花粉ではイボタノキ属が多く、マツ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、マキ属、スギ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科がそれに次いで多くなっている。草本花粉は、イネ科の割合が高く、それに次いでクワ科の割合が高い。試料番号2は、マツ属やイネ科がやや多いものの、種類数・個体数ともに少ない。試料番号3～9では、イネ科がやや多くみられる試料もあるが、花粉化がほとんどみられない。なお、試料番号1と2では、少量ながら寄生虫卵が検出されている。P-2では、全試料ともに種類数・個体数が少なく、マツ属やイネ科が多少みられる程度である。

(4) 植物珪酸体

結果を表1、図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。以下に、各遺構の植物珪酸体の産状を述べる。

・P-1 地点

短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体ともに下部では多産するが、上部では少ない。短細胞珪酸体では、イネ属、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属が多く検出される。

表2 P-1地点の珪藻分析結果(1)

種 類	生 態 性			環境 指標種	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	塩分	pH	流水										
<i>Actinocyclus ingens</i> Rattray	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Denticulopsis</i> spp.	Euh				1	1	1	1	-	3	2	-	-
<i>Grammatophora oceanica</i> (Ehr.)Grunow	Euh				-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Grammatophora</i> spp.	Euh				-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula pseudomy</i> Hustedt	Euh				-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Synedra formosa</i> Hantzsch	Euh				-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Thalassionema nitzschioides</i> (Grun.)Grunow	Euh			A,B	2	2	1	2	1	1	4	-	-
<i>Thalassiosira</i> SDD	Euh				-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	Euh-Meh			C1	1	3	-	-	2	6	18	3	-
<i>Cocconeis scutellum</i> var. <i>ornata</i> Grunow	Euh-Meh			C1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Diploneis smithii</i> (Breb.)Cleve	Euh-Meh			E2	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Catenua adhaerens</i> Mereschkowsky	Meh				-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema exignum</i> var. <i>minutissimum</i> Grunow	Meh				-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula peregrina</i> (Ehr.)Kuetzing	Meh				-	-	1	-	-	-	-	2	-
<i>Nitzschia lorenziana</i> Grunow	Meh			E2	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Bacillaria paradoxa</i> Gmelin	Ogh-Meh	al-bi	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	3	2
<i>Gomphonema pseudoaugur</i> Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula capitata</i> Ehrenberg	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1	3
<i>Navicula capitata</i> var. <i>luneburgensis</i> (Grun.)Patrick	Ogh-Meh	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula gregaria</i> Donkin	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	1	3	10	4	2	2	1	8
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2	-	1	3	2	1	3	14	14
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-Meh	al-bi	ind		118	89	106	101	130	91	64	47	4
<i>Nitzschia obtusa</i> var. <i>scalpelliformis</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	unk	S	1	5	4	3	6	-	-	4	8
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-Meh	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	1	1	1	-	1	3	-	-
<i>Achnanthes exigua</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	2	3
<i>Achnanthes hungarica</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	5	1	-	2
<i>Achnanthes inflata</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	1	-	-	3	8	34
<i>Achnanthes lanceolata</i> var. <i>elliptica</i> Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Achnanthes laterostrata</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	2	1	2	-	-	-	-	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	1	2
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	47	56	54	63	46	50	44	35	-
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	2	2	-	1	-	2	3	3	3
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	-	-	-	-	1	1	-	-
<i>Aulacoseira italica</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	-	1	-	1
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	1	-	-	1	1	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Eunotia incisa</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Oestr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>rumpens</i> (Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	4
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	1	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria parasitica</i> (W.Smith)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Frustulia constricta</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>saxonica</i> (Rabh.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Frustulia weinboldii</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	1	-	2	7
<i>Gomphonema parvulum</i> var. <i>lagenula</i> (Kuetzing)Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	2	1
<i>Gomphonema productum</i> (Grun.)hange-B.& Reichardt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Gomphonema sarcophagus</i> Gregory	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	10	19	9	8	9	9	10	8	2
<i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K,U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	1	-	-	-	-	-	-	3	1
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	-	1	-	-	1	-	-
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Amott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	3	4	6	1	-	7	8	5	1

表2 P-1地点の珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境 指標種	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	塩分	pH	流水										
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	3	5
<i>Navicula difficillima</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	1	-	1	-
<i>Navicula elginensis var. neglecta</i> (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula kotschy</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	1	-	24	22
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	5	11	1	5	2	4	4	2	1
<i>Navicula mutica var. ventricosa</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	-	-	-	1	-	-	1
<i>Navicula plausibilis</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula seminulum</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	-	-	-	-	1	1	-	-	1
<i>Navicula tantula</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula tenelloides</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	J,U	-	-	-	-	-	-	1	-	1
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Navicula viridula var. rostellata</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	-	3	3	1	1	4	-	-
<i>Navicula</i> sp.-1.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	8
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	-	1	1	-	1	-	-	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	2	-	-	-	-	2	-	1
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	-	1	-	1	-	-	1	1
<i>Nitzschia brevisima</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	1	-	1	1	-	-	1	1
<i>Nitzschia intermedia</i> Hantzsch ex Cleve et Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	1	-	3
<i>Nitzschia linearis</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia palustris</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia tubicola</i> Grunow	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Nitzschia umbonata</i> (Ehr.)Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	1	-	2	14
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	1	-	-	1
<i>Pinnularia gibba var. linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	3
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	1	-	-	3	3	4	1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	2	1	-	-	-	1	1	1
<i>Pinnularia subtomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora laevisima</i> (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Sellaphora pseudopupula</i> (Krasske)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	1	-	-	1	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	3	15
<i>Stauroneis lauenburgiana</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Stauroneis legumen</i> (Ehr.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	2	-	1
<i>Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii</i> Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	-	1	-	1
<i>Stauroneis smithii</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	4	1
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	1	2	-	-
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Surirella bohemia</i> Maly	Ogh-ind	ind	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Surirella ovata var. pinnata</i> (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	3
海水生種合計					3	3	2	4	2	4	10	0	1
海水～汽水生種合計					1	3	0	1	2	6	19	3	0
汽水生種合計					0	1	1	0	0	1	0	2	1
淡水～汽水生種合計					122	97	115	118	142	95	73	71	40
淡水生種合計					77	100	80	88	62	95	102	130	178
珪藻化石総数					203	204	198	211	208	201	204	206	220

凡例

- H.R. : 塩分濃度に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 C.R. : 流水に対する適応性
- Euh : 海水生種 al -bi : 真アルカリ性種 l - bi : 真止水性種
- Euh- Meh : 海水生種～汽水生種 al -il : 好アルカリ性種 l - ph : 好止水性種
- Meh : 汽水生種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
- Ogh- Meh : 淡水～汽水生種 ac -il : 好酸性種 r - ph : 好流水性種
- Ogh- hil : 貧塩好塩性種 ac -bi : 真酸性種 r - bi : 真流水性種
- Ogh- ind : 貧塩不定性種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種
- Ogh- hob : 貧塩嫌塩性種
- Ogh- unk : 貧塩不明種
- 環境指標種群
- A: 外洋指標種, B: 内湾指標種, C1: 海水藻場指標種, E2: 汽水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)
- J: 上流性河川指標種, K: 中～下流性河川指標種, M: 湖沼浮遊性種,
- N: 湖沼沼沢湿地指標種, O: 沼沢湿地付着性種, (以上は安藤, 1990)
- S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1995)
- R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI: 未区分陸生珪藻、伊藤・堀内, 1991)

表3 P-2地点の珪藻分析結果(1)

種 類	生 態 性			環境 指標種									
	塩分	pH	流水		8	7	6	5	4	3	2	1	0
<i>Actinocyclus ingens</i> Ratray	Euh				2	-	-	-	-	-	2	-	1
<i>Actinocyclus</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Actinopychus senarius</i> (Ehr.)Ehrenberg	Euh			A	1	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora marina</i> W.Smith	Euh				-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Biddulphia</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Cocconeis costata</i> Gregory	Euh				-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Cocconeis tenuis</i> Hustedt	Euh				-	-	1	-	-	-	-	1	-
<i>Cymatotheca weissflogii</i> (Grun.)Hendey	Euh			B	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Denticulopsis cf. lauta</i> (Bail.)Simonsen	Euh				3	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Denticulopsis cf. praedimorpha</i> (Akiba ex Barron)Barron	Euh				3	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Denticulopsis</i> spp.	Euh				11	-	-	1	3	1	6	1	-
<i>Dimerogramma hyalinum</i> Hustedt	Euh			D1	-	-	-	-	-	1	1	-	1
<i>Diploneis weissflogii</i> (A.Schmidt)Cleve	Euh				-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Glyphodesmis williamsonii</i> (W.Smith)Grunow	Euh			D1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Grammatophora oceanica</i> (Ehr.)Grunow	Euh				-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Grammatophora</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>Navicula cancellata</i> Donkin	Euh				-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Paralia sulcata</i> (Ehr.)Cleve	Euh			B	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Plagiogramma stauroborum</i> (Greg.)Heiberg	Euh				1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Podosira cf. stelligera</i> (Bail.)A.Mann	Euh				-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Thalassionema nitzschioides</i> (Grun.)Grunow	Euh			A,B	25	-	-	2	4	7	18	6	1
<i>Thalassionema nitzschioides</i> var. <i>parva</i> Heiden and Kolbe	Euh				1	-	-	1	-	1	-	-	-
<i>Thalassiosira</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	1	2	-
<i>Amphora proteus</i> Gregory	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	Euh-Meh			C1	3	1	1	7	3	26	7	23	9
<i>Cocconeis scutellum</i> var. <i>ornata</i> Grunow	Euh-Meh			C1	1	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Diploneis interrupta</i> (Kuetz.)Cleve	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Achmanthes amoena</i> Hust.	Meh				-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Achmanthes brevipes</i> var. <i>intermedia</i> (Kuetz.)Cleve	Meh			D1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Achmanthes delicatula</i> Kuetzing	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Amphora</i> spp.	Meh				-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Caloneis permagna</i> (Bailey)Cleve	Meh				-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Caloneis westii</i> (W.Smith) Hendey	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Catenula adhaerens</i> Mereschkowsky	Meh				-	-	-	-	-	1	1	-	-
<i>Fragilaria fusciculata</i> (Agardh)Lange-B.	Meh				2	-	-	1	-	1	6	8	-
<i>Fragilaria subsalina</i> (Grun.)Lange-Bertalot	Meh				-	-	-	-	-	1	-	1	-
<i>Navicula</i> spp.	Meh				-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula</i> sp.-1	Meh				-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia granulata</i> Grunow	Meh			E1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Opephora martyi</i> Heribaud	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pseudopodosira kosugii</i> Tanimura et Sato	Meh			E2	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Rhopalodia minusculus</i> (Kuetz.)O.Muller	Meh				-	-	-	-	1	4	1	1	2
<i>Bacillaria paradoxa</i> Grmelin	Ogh-Meh	al-bi	l-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Cyclotella meneghiniana</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	L,S	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula capitata</i> var. <i>hungarica</i> (Grun.)Ross	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	2	-	1	-
<i>Navicula gregaria</i> Donkin	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	1	3	-	-	-	1	-	1
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	1	2	1	-	1	-	-	2
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-Meh	al-bi	ind		68	113	89	99	74	57	21	63	104
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	al-bi	ind	S	2	6	2	-	5	4	2	4	7
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	1	1	12	4	-
<i>Achmanthes clevei</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achmanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	1	-	-	1	-
<i>Achmanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	-	6	-	-	-	1
<i>Achmanthes oblongella</i> Ostrup	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Achmanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	28	56	59	50	50	42	34	44	43
<i>Amphora pediculus</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Aulacoseira alpigena</i> (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	2	-	-	1	1	1	11	5	1
<i>Aulacoseira crassipunctata</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Aulacoseira crenulata</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Aulacoseira italica</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	1	2	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira laevisissima</i> (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	1	1	-	-	-	-	-
<i>Diploneis parma</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Diploneis yatukaensis</i> Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Eunotia bigibba</i> Kuetzing	Ogh-hob	ac-bi	ind	RA	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia flexuosa</i> (Breb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Eunotia incisa</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	1	-

表3 P-2地点の珪藻分析結果(2)

種 類	生 態 性			環 境 指標種										
	塩分	pH	流水		8	7	6	5	4	3	2	1	0	
<i>Eunotia monodon</i> var. <i>tropica</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Eunotia papilio</i> (Grun.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	1	-	2	-	-	
<i>Eunotia praeurupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Eunotia praeurupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	-	-	-	-	1	-	1	1	-	
<i>Eunotia praeurupta</i> var. <i>inflata</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RI	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	1	-	-	1	2	4	3	1	1	
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Gomphonema contraterris</i> Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	1	-	2	1	2	2	1	
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	2	-	-	
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	21	14	25	15	14	18	16	6	13	
<i>Navicula bryophila</i> Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	-	1	-	-	-	1	8	-	2	
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	1	-	1	6	6	-	1	-	
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arnot)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	1	2	1	9	2	4	3	-	
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	1	-	-	-	-	1	
<i>Navicula ignota</i> var. <i>palustris</i> (Hust.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Navicula jaernefeltii</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Navicula kotschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	8	5	4	10	11	4	7	2	1	
<i>Navicula mutica</i> var. <i>ventricosa</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Navicula plausibilis</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Navicula pseudoscutiformis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Navicula saxophila</i> Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	1	-	-	-	1	-	
<i>Navicula seminulum</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	2	-	
<i>Neidium productum</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	2	4	1	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia brevisima</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	2	-	-	1	4	-	-	1	-	
<i>Pinnularia acrophaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	2	-	-	
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	3	-	
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	-	-	1	1	-	-	1	-	
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>dissimilis</i> H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	1	-	1	
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Pinnularia neomajor</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	1	-	1	6	1	-	
<i>Pinnularia schoederii</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i> (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	1	-	1	
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Stauroneis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Tabellaria flocculosa</i> (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
海水生種合計					47	0	2	5	7	14	34	14	4	
海水～汽水生種合計					4	1	1	8	3	27	7	24	10	
汽水生種合計					3	0	0	3	1	10	10	12	3	
淡水～汽水生種合計					70	121	96	100	81	66	36	72	114	
淡水生種合計					76	82	101	89	116	86	116	85	71	
珪藻化石総数					200	204	200	205	208	203	203	207	202	

凡例

- H.R. : 塩分濃度に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 C.R. : 流水に対する適応性
 Euh : 海水生種 al - bi : 真アルカリ性種 l - bi : 真止水性種
 Euh- Meh : 海水生種-汽水生種 al - il : 好アルカリ性種 l - ph : 好止水性種
 Meh : 汽水生種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
 Ogh- Meh : 淡水-汽水生種 ac - il : 好酸性種 r - ph : 好流水性種
 Ogh- hil : 貧塩好塩性種 ac - bi : 真酸性種 unk : 流水不明種
 Ogh- ind : 貧塩不定性種 unk : pH不明種
 Ogh- hob : 貧塩嫌塩性種
 Ogh- unk : 貧塩不明種
- 環境指標種群
 A: 外洋指標種, B: 内湾指標種, C1: 海水藻場指標種, D1: 海水砂質干潟指標種, E1: 海水泥質干潟指標種
 E2: 汽水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)
 K: 中～下流性河川指標種, L: 最下流性河川指標種, M: 湖沼浮遊性種, N: 湖沼沼沢湿地指標種
 O: 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe T., 1995)
 R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分珪藻、伊藤・堀内, 1991)

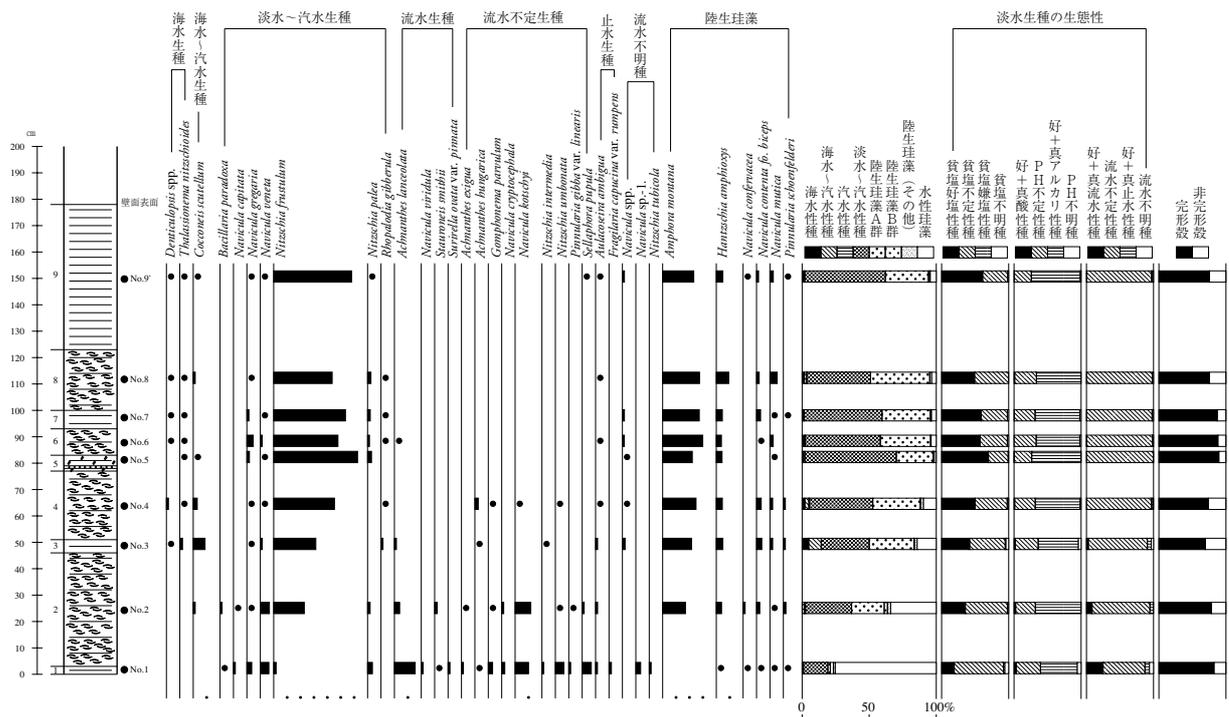


図4 P-1地点の主要珪藻化石群集の層位分布

海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。

いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

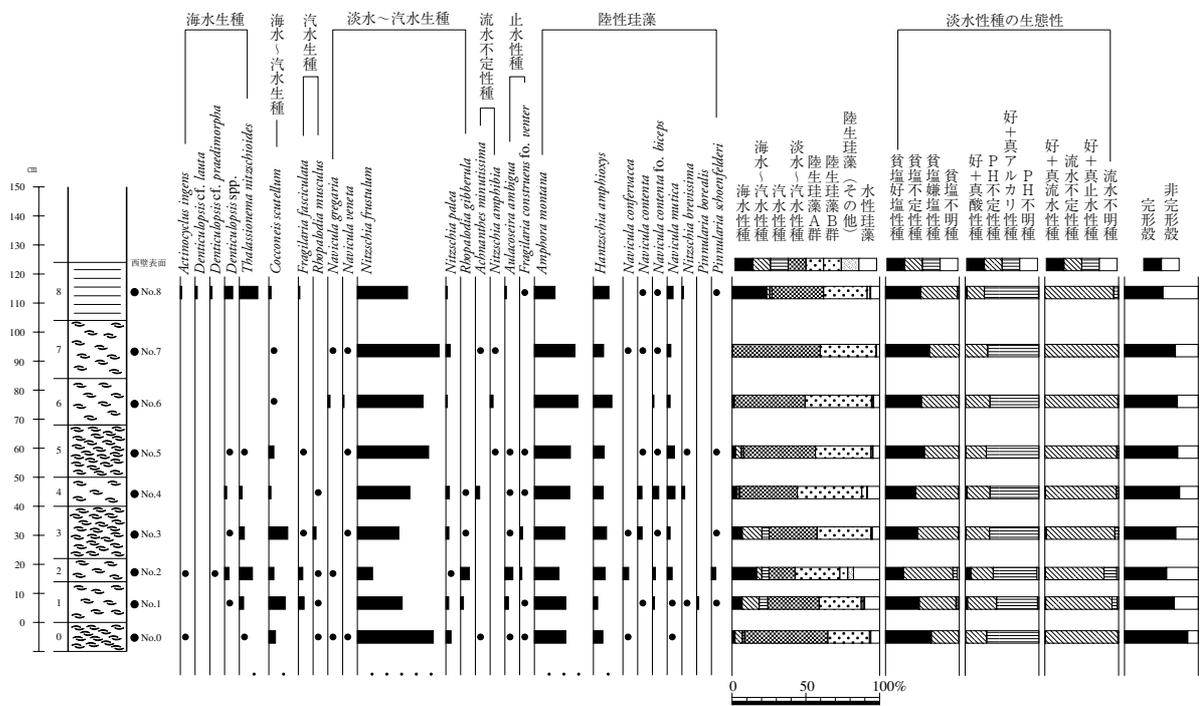


図5 P-2地点の主要珪藻化石群集の層位分布

海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。

いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

この傾向は検出数の少ない試料番号4～9でも同様である。一方、機動細胞珪酸体では、イネ属、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族がみられるこの傾向は検出数の少ない試料番号3～9でも同様である。なお、試料番号1をのぞく試料で、稲稈殻に形成されるイネ属類珪酸体が多産し、特に試料番号8～3で顕著である。

・P-2 地点

試料番号0、1で検出個数が少ないが、その他の試料では、比較的多くみられる。短細胞珪酸体では、P-1地点と同様、イネ属、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属が多く検出される。一方機動細胞珪酸体では、イネ属、タケ亜科、ウシクサ族が多産する。なお、試料番号0をのぞく試料で、稲稈殻に形成されるイネ属類珪酸体が多産する。

4. 考察

・堆積物の時代観

考古の編年でみた場合、P-2地点(SD06)は弥生時代前期末～中期前葉、P-1地点(SD03)は弥生時代中期中葉が時代の中心である。放射性炭素年代を柱状図の横に付したが(図3)、このままでは傾向が読み取りにくい。そこで、縦軸を深度、横軸を年代値とし最小二乗法を用いて近似直線を引いた。年代測定値から得られた近似直線の式は、P-1地点が $y = -1.9x + 2386$ 、P-2地点が $y = 1.25x + 2544$ である。この結果をみると、P-2地点の方がP-1地点よりも全体的な値が古いことがわかり、考古の編年と照らし合わせてみても調和的である。ただし、P-2地点の8層は弥生時代後期とされるが、やや古い年代値が出ていることになる。土壌を用いた年代測定の場合、堆積物が粗粒で有機物が少ないほど古い年代値が得られる場合が多い(中井, 1999)。おそらく、堆積時に生産された有機物の他に、二次的に混入したものが多く含まれていたため、全体として古い年代値が得られた

ものと考えられる。また、近似直線の傾きをみると、P-2地点が-1.25、P-1地点が-1.9でSD03の方が貝塚の堆積速度が速かった可能性がある。なお年代測定の結果をみると、弥生時代中期の時代観より全体的に約400年ほど古くなっている。これについては、これまで行った年代測定の成果も併せ、暦年代補正なども考慮しながら今後検討していく必要がある。

・堆積環境

P-1地点(SD03)の堆積環境は、1層と2～9層で違いがある。1層(試料番号1)は、淡水生種が多く、その中でも流水不定性種や中～下流性河川指標種群を含む流水性種の割合が高く、止水性種は殆ど産出しなかった。このような特徴から、溝内は流水の影響を受けいたと考えられる。したがって、1層は溝が形成されつつある時期の堆積物であるといえる。2層～9層(試料番号2～9)になると、塩分耐性の高い*Nitzschia frustulum*が優占することを特徴とする。本種の塩分濃度に対する適応能力は、淡水域から河口部汽水域(後藤, 1986)まで広範囲に分布し、栄養的には富栄養の水k域に生育するものである。本種以外には内湾指標種群の*Thalassionema nitzschioides*、海水～汽水生で海水藻場指標種群の*Cocconeis scutellum*などを伴う。また、陸の乾いた環境に耐性のある陸生珪藻A群の*Amphora montana*が多産する。濃尾平野における弥生時代中期の地形環境変化をみると、縄文時代末以降沖積地に形成された小谷の埋積が顕著に進んだ時期で、沖積地にも貝塚など生業の痕跡が多数残されるようになる(海津, 1994)。溝の埋積もこのような一連の変化によるものと考えられる。珪藻化石群集の特徴からすると、溝内は乾燥していた時期もあったが、度重なる氾濫の影響によって埋積が進むような状態であったと考えられる。水質的には河口部汽水域のような環境で、富栄養であったと推測される。なお、海水生種や汽水生種の検出は、海成層からの二次堆積のほか、破棄された貝殻に伴うものと

表4 P-1地点の花粉分析結果

種 類	試料番号	9	8	7	6	5	4	3	2	1
木本花粉										
マキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	12
モミ属		-	-	-	-	-	-	-	5	6
ツガ属		-	-	-	-	-	-	-	-	4
マツ属単維管束亜属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属複維管束亜属		-	-	-	-	-	-	-	-	17
マツ属(不明)		-	-	1	1	1	-	-	14	36
コウヤマキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	2
スギ属		-	-	-	-	-	-	-	5	12
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	-	-	-	-	-	2	18
ヤナギ属		-	-	-	-	-	-	-	2	8
ヤマモモ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
クルミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	3
クマシデ属-アサダ属		-	-	-	-	1	-	-	1	6
カバノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
ハンノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	2
ブナ属		-	-	-	-	-	-	-	-	15
コナラ属コナラ亜属		-	-	1	-	-	-	-	-	7
コナラ属アカガシ亜属		-	-	-	-	-	-	-	2	26
シノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
ニレ属-ケヤキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	5
アカメガシワ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
クロウメモドキ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1
ツタ属		-	-	-	-	-	-	-	-	6
ノブドウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
ウコギ科		-	-	-	-	-	-	-	-	3
イボタノキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	84
ガマズミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
スイカズラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	6
草本花粉										
ガマ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
イネ科		-	7	5	29	52	6	6	52	88
カヤツリグサ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1
ミズアオイ属		-	-	-	-	-	-	-	-	3
クワ科		-	-	-	-	-	-	-	4	24
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	-	-	-	-	-	-	1	7
タデ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
アカザ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1
ナデシコ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1
キンボウゲ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1
バラ科		-	-	-	-	-	-	-	-	5
マメ科		-	-	-	-	-	-	-	-	2
アオイ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1
セリ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1
オオバコ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属		-	-	-	-	-	-	-	4	9
オナモミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
キク亜科		1	-	-	-	-	-	-	-	1
カンボウ亜科		-	-	-	-	-	-	-	-	1
不明花粉		-	-	-	-	-	-	-	1	11
シダ類胞子										
ミズワラビ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1
サンショウモ		-	-	-	-	-	-	-	-	1
他のシダ類胞子		-	-	-	2	1	-	-	-	39
合 計										
木本花粉		0	0	2	1	2	0	0	40	318
草本花粉		1	7	5	29	52	6	6	65	155
不明花粉		0	0	0	0	0	0	0	1	11
シダ類胞子		0	0	0	2	1	0	0	40	84
総計(不明を除く)		1	7	7	32	55	6	6	145	557
その他										
蜘蛛卵		-	-	-	-	-	-	-	1	9
鞭虫卵		-	-	-	-	-	-	-	4	23

表5 P-2地点の花粉分析結果

種 類	試料番号	8	7	6	5	4	3	2	1	0
木本花粉										
モミ属		-	-	-	-	-	-	2	-	-
ツガ属		-	-	-	-	-	-	1	1	-
マツ属		1	-	-	2	-	-	10	-	-
ブナ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	-	-	-	1	-	-
草本花粉										
イネ科		1	7	7	3	-	3	21	24	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	-	-	-	-	-	1	-	-
ナデシコ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科		1	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属		-	2	-	-	-	-	-	1	-
シダ類胞子										
シダ類胞子		6	1	2	3	1	-	25	2	-
合 計										
木本花粉		1	0	1	2	0	0	14	1	0
草本花粉		3	9	7	3	0	3	22	25	1
シダ類胞子		6	1	2	3	1	0	25	2	0
総計(不明を除く)		10	10	10	8	1	3	61	28	1

表6 P-1地点の植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号	9	8	7	6	5	4	3	2	1
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属		38	21	6	4	5	13	24	34	7
キビ族チゴザサ属		2	-	-	-	3	2	1	-	5
タケ亜科		14	13	1	2	6	11	23	47	79
ヨシ属		6	12	7	2	5	9	10	22	50
ウシクサ族コブナグサ属		-	1	-	-	-	2	46	3	-
ウシクサ族ススキ属		19	30	10	8	10	35	-	36	36
イチゴツナギ亜科		-	-	-	-	-	-	-	2	4
不明キビ型		23	63	15	14	21	35	72	43	83
不明ヒゲシハ型		10	19	5	3	3	19	26	33	40
不明ダンチク型		6	19	11	2	8	18	26	26	36
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属		8	16	9	7	15	20	10	22	11
タケ亜科		4	3	2	2	5	7	3	29	41
ヨシ属		1	1	2	-	5	1	1	3	16
ウシクサ族		9	17	3	1	11	17	6	35	15
不明		4	2	5	1	7	9	3	26	33
合 計										
イネ科葉部短細胞珪酸体		118	178	55	35	61	144	228	246	340
イネ科葉身機動細胞珪酸体		26	39	21	11	43	54	23	115	116
総 計		144	217	76	46	104	198	251	361	456
組 織 片										
イネ属類珪酸体		270	1023	1089	1042	1126	1027	1165	295	8
イネ属短細胞列		1	-	1	1	1	-	-	8	2
不明組織片		57	235	194	333	46	102	152	71	20

表7 P-2地点の植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号	8	7	6	5	4	3	2	1	0
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属		14	46	40	19	12	10	13	2	5
キビ族チゴザサ属		1	1	2	3	7	-	2	-	2
タケ亜科		88	30	23	28	31	23	69	-	59
ヨシ属		46	12	16	23	22	12	44	1	22
ウシクサ族コブナグサ属		-	3	3	3	4	2	4	-	1
ウシクサ族ススキ属		46	52	38	54	24	50	19	3	16
イチゴツナギ亜科		4	3	1	3	-	1	-	-	-
不明キビ型		55	72	51	50	74	75	54	8	24
不明ヒゲシハ型		32	45	29	38	24	33	20	2	24
不明ダンチク型		24	28	28	20	31	28	23	2	29
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属		10	24	64	36	32	13	27	4	3
タケ亜科		36	10	10	14	15	23	39	-	12
ヨシ属		3	-	3	6	2	3	8	-	1
ウシクサ族		39	53	43	28	19	29	9	-	5
不明		20	16	6	25	40	35	26	2	6
合 計										
イネ科葉部短細胞珪酸体		310	292	231	241	229	234	248	18	182
イネ科葉身機動細胞珪酸体		108	103	126	109	108	103	109	6	27
総 計		418	395	357	350	337	337	357	24	209
組 織 片										
イネ属類珪酸体		74	224	324	243	72	123	56	726	4
イネ属短細胞列		-	3	10	3	4	2	1	-	2
イネ属機動細胞列		-	-	-	-	2	-	-	-	-
不明組織片		19	80	122	186	204	527	-	-	-

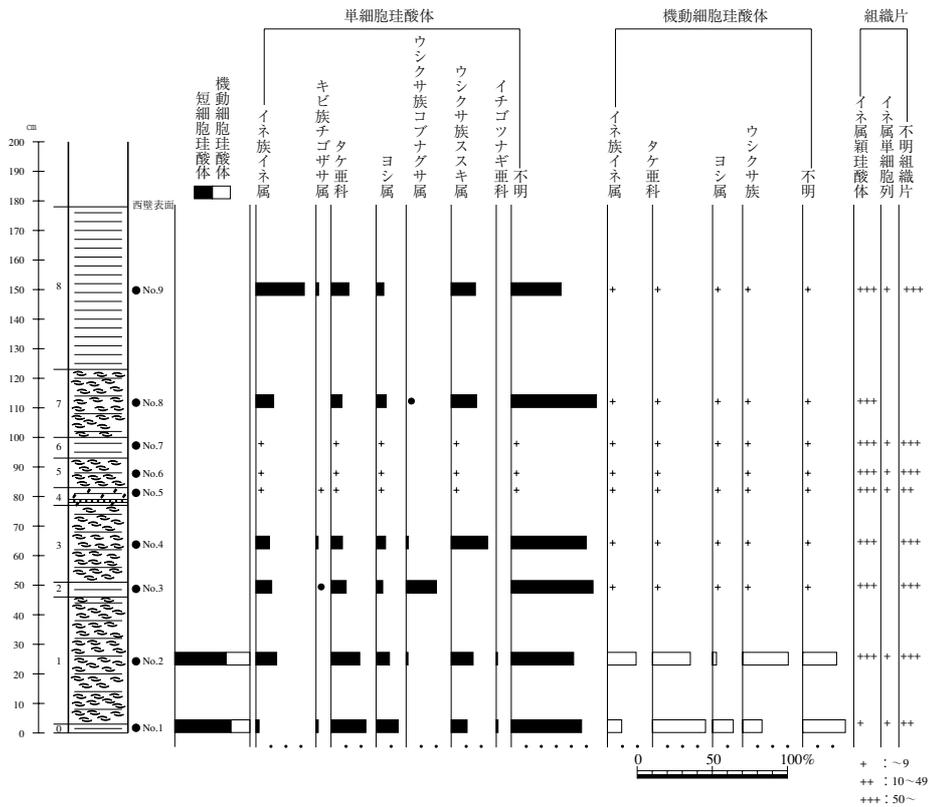


図6 P-1地点の植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++の記号で示す。

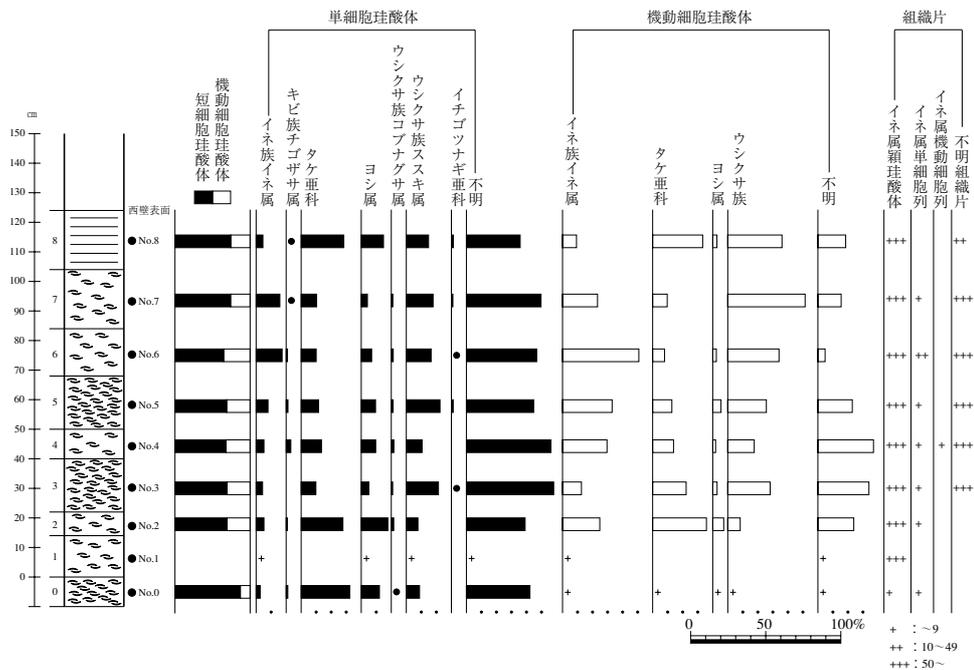


図7 P-2地点の植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++の記号で示す。

考えられる。また、P-1地点にみられる多量の貝殻層は、食用残渣を破棄した貝塚であると考えられている。貝殻の密集層と貝殻を含まない層と比較すると、珪藻化石群集に大きな違いがみられない。このことから、貝塚の形成は堆積環境の変化に関係なく進んでいった可能性がある。

なお、P-1地点からは寄生虫卵が検出される。寄生虫卵はトイレ遺構等では1ccあたり1万個以上と多量に検出されるが、それ以外では100個以下であるといわれている（金原・金原，1994）。今回の結果を換算すると、1試料あたり多くても十数個程度であることから、トイレ遺構などのように尿尿が埋積している可能性は薄い。トイレ遺構以外から、少量ではあるが寄生虫卵が検出された例としては、大阪府田井中遺跡（辻本・田中，1997）や東京都葛飾区上千葉遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社，1996）などがある。人の尿尿の一部が溝に混入し、これが富栄養化を引き起こす要因になっているとも考えられるが、回虫などの寄生虫はヒト以外にも寄生（種類は違うが）することから、断定はできない。類例の蓄積を待つて再検討の必要がある。

一方、P-2地点（SD05）の0層～8層（試料番号0～8）もP-1地点の貝層と群集が近似しており、同様な環境が示唆される。また層位ごとに貝の密度が異なるが基本的な群集に変化がないことから、P-1地点と同様、貝が破棄された量と堆積環境との間に因果関係はみられなかった。また、発掘所見や年代測定の結果から、P-2地点の貝層はP-1地点と比べやや古いと考えられているが、珪藻分析の結果からは堆積環境などに大きな違いはみられなかった。約2,100年前には、一時期海水準が上昇したという成果が名古屋市内の沖積層から得られている（岡田・森，1987）。このことから、縄文時代末以降の海退によって沖積地に浅谷が形成されていったものが、海進の影響によって埋積へと転じたことが推測されており（海津，

1994）、このような変化が堆積環境の変化に現れる可能性もある。今回の結果では微細な堆積環境の変化をとらえることが難しかったが、貝類の組成や他の遺構との比較によって、今後明らかにしていきたい。

・周辺植生

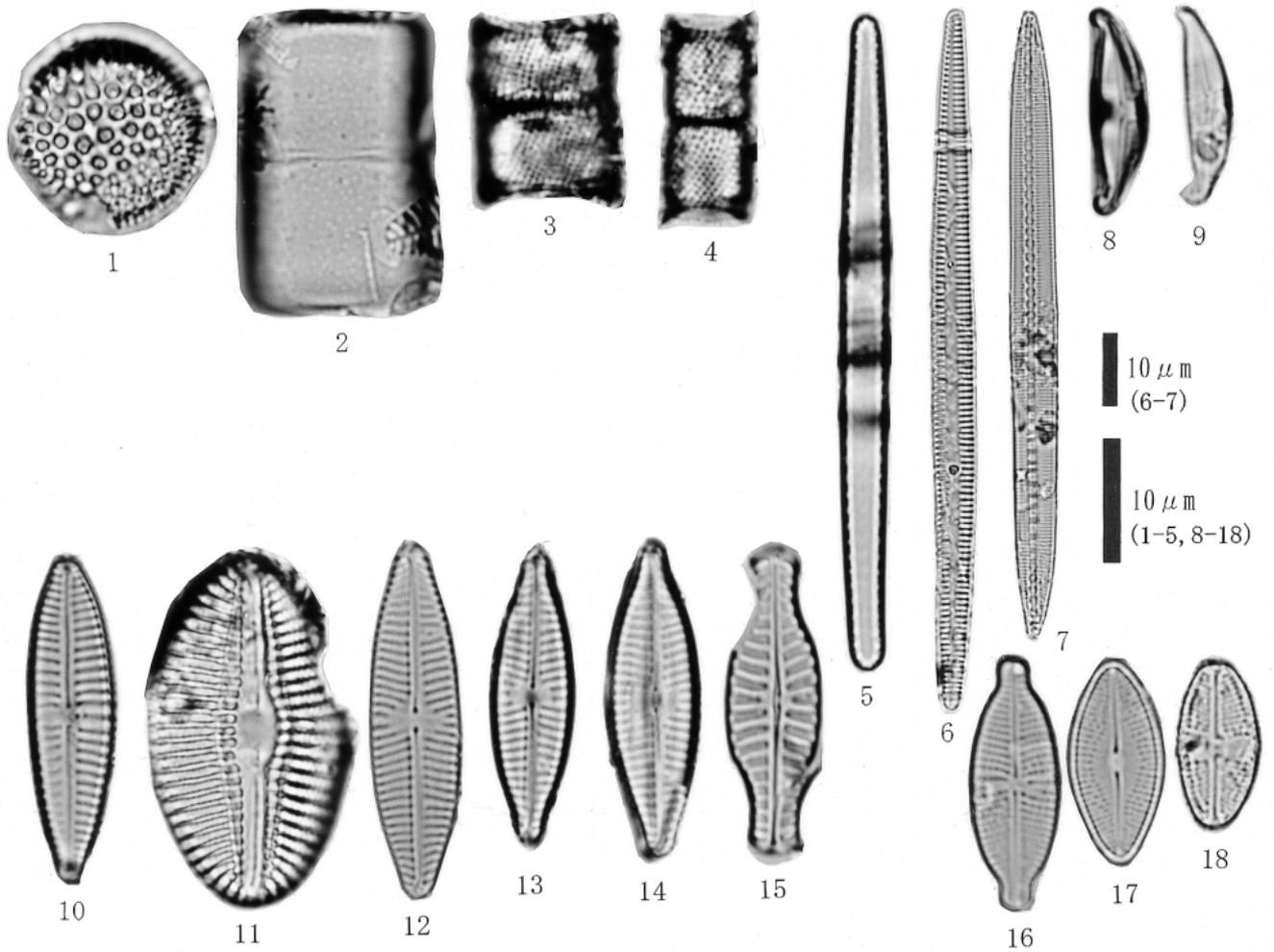
今回花粉化石はほとんど検出されなかった。花粉分析の成果をみると、比較的多く検出されているのはP-1地点の試料番号1のみである。花粉化石は好気的条件下での風化に弱いことからすると、二次的な作用で大部分が分解されてしまったと考えられる。これまで朝日遺跡（吉野・萬谷，1992）、町田遺跡（森，1992）等で行われた花粉分析の成果をみると、木本類ではコナラ亜属、アカガシ亜属が多く、マツ属やモクセイ科などを伴っている。また草本ではイネ科の割合が高い。特に草本類（特にイネ科）は弥生時代以降増加傾向を示すが、増加開始時期が稲作の開始層準と一致することから、森林が人為的に切り開かれたことによる草地の拡大が指摘されている（森，1992）。今回の成果は出現率にやや違いがあるものの、多産する種類は近似している。このことから、遺跡周辺は基本的にはイネ科を中心にした草地で、河畔や山地などにコナラ亜属、アカガシ亜属などが生育していたと考える。

一方、植物珪酸体をみると、P-1、P-2ともにイネの類に形成される珪酸体が非常に多く出される。またイネ属の葉に作られる植物珪酸体は、短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体ともに多産しているほか、組織内で珪酸体が列をなしているものも検出されている。水田耕作土などでは、イネ属由来の植物珪酸体が多産するケースが多いが、今回の場合は特に穎珪酸体が非常に多く、特異的である。稲籾（穎）や稲藁は古来よりさまざまな生活資材として利用されていることから考えると、稲籾や稲藁が遺跡内で利用され、貝とともに溝に破棄された可能性がある。今回検出個数が少ないながらもイネ科花粉がほとんどの試料から検

出されたが、稲朶の中には花粉がかなり残存することからすると(中村, 1980)、検出されたイネ科花粉は稲朶内に残存していたものに由来する可能性がある。その他検出された植物珪酸体をみると、タケ亜科やウシクサ族(ススキ属など)、ヨシ属などが検出される。これらは微高地上や沖積低地など周辺に生育していたものに由来すると思われる。

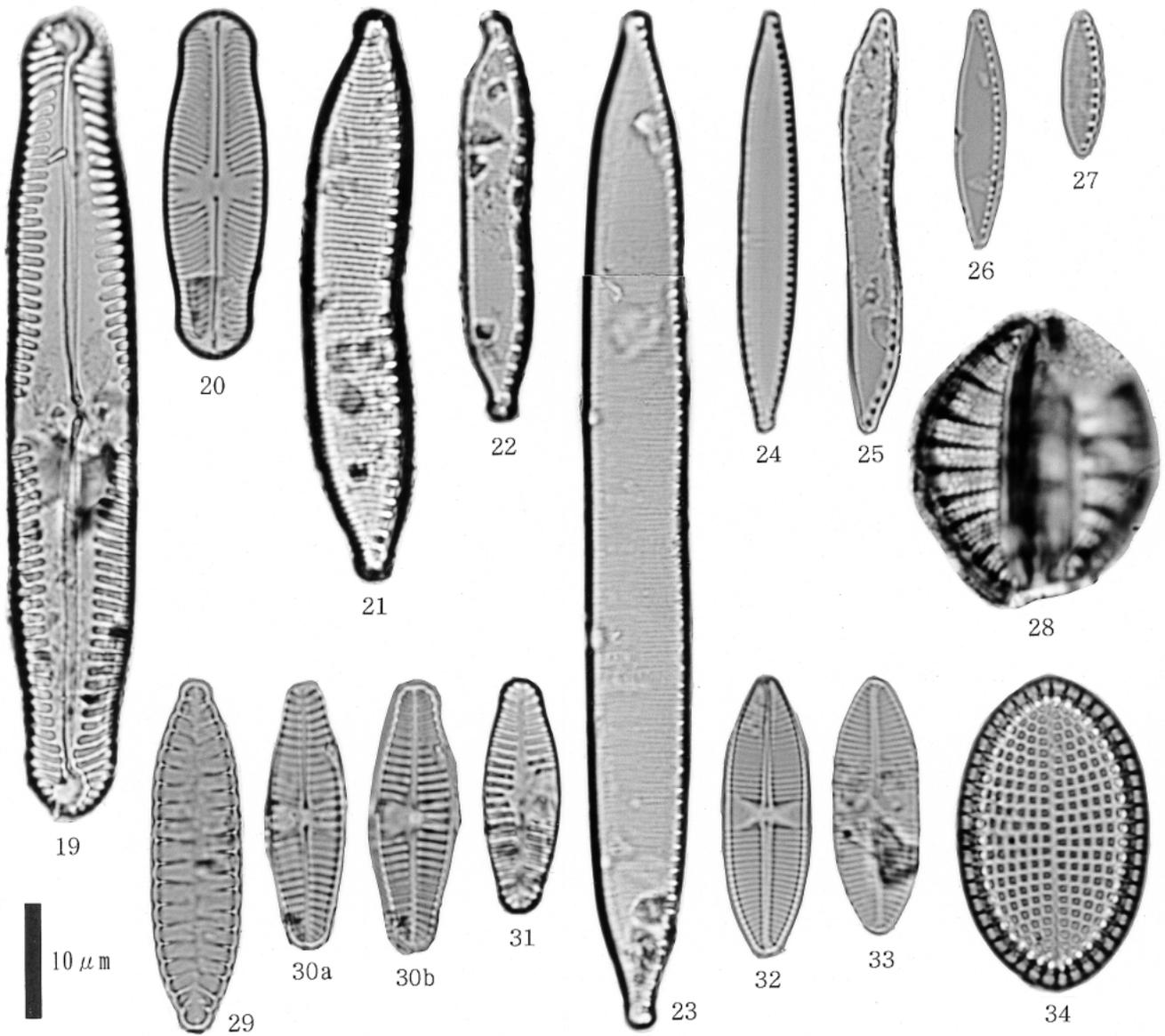
<引用文献>

- 安藤一男(1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- Asai,K. and Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.
- 伊藤良永・堀内誠示(1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 金原正明・金原正子(1994) 堆積物中の情報の可視化. 可視化情報, 14, p.9-14.
- 近藤鎌三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1-353., BERLIN · STUTTGART.
- 後藤敏一(1986) 熊野川河口の珪藻群集. 珪藻学会誌, 2, p.103-115.
- Lange-Bertalot,H. & Steindorf,A. (1996) Rote Liste der limnischen Kieselalgen (Bacillariophyceae) Deutschlands. Schriften-Reihe fuer Vegetationskunde, 28, p.633-677.
- 森 勇一(1992) 花粉分析. 「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 29集 勝川遺跡」p.67-76, 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター.
- 中村 純(1980) 花粉分析における稲作史の研究. 「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 - 総括報告書 -」, p.185-204.
- 中井信之(1999) 放射性炭素法. 「考古学と年代測定学・地球化学」, 松浦秀治・上杉陽・薬科 哲男 編, p.26-43, 同成社.
- 岡田篤正・森 忍(1987) 名古屋市堀田通の沖積層の14 C年代と珪藻分析 - 日本の第四紀層の14 C年代(163)-. 地球科学, 41, p.71-73.
- パリオ・サーヴェイ株式会社(1996) 自然科学分析. 「葛飾区遺跡調査会調査報告第35集 上千葉遺跡葛飾区西亀有1丁目12番地点発掘調査報告書」p.242-275, 葛飾区遺跡調査会.
- 辻本裕也・田中義文(1997) 田井中遺跡95-2区・志紀遺跡95-2区における古環境復元. 「大阪文化財調査研究センター調査報告書第23集 田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次) 陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書」, p.242-277, 大阪文化財調査研究センター.
- 海津正倫(1994) 沖積低地の古環境学. 270p., 古今書院.
- Vos,P.C. and H.de Wolf(1993) Reconstruction of sedimentary environments in Holocene costal deposits of the southwest Netherlands; the Poortvliet boring, a case study of palaeoenvironmental diatom research. Twelfth International Diatom Symposium, p.297-296.
- 吉野道彦・萬谷さつき(1992) 花粉化石からみた朝日遺跡. 「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 31集 朝日遺跡 自然科学編」, p.59-69, 財団法人愛知県埋蔵文化財センター.



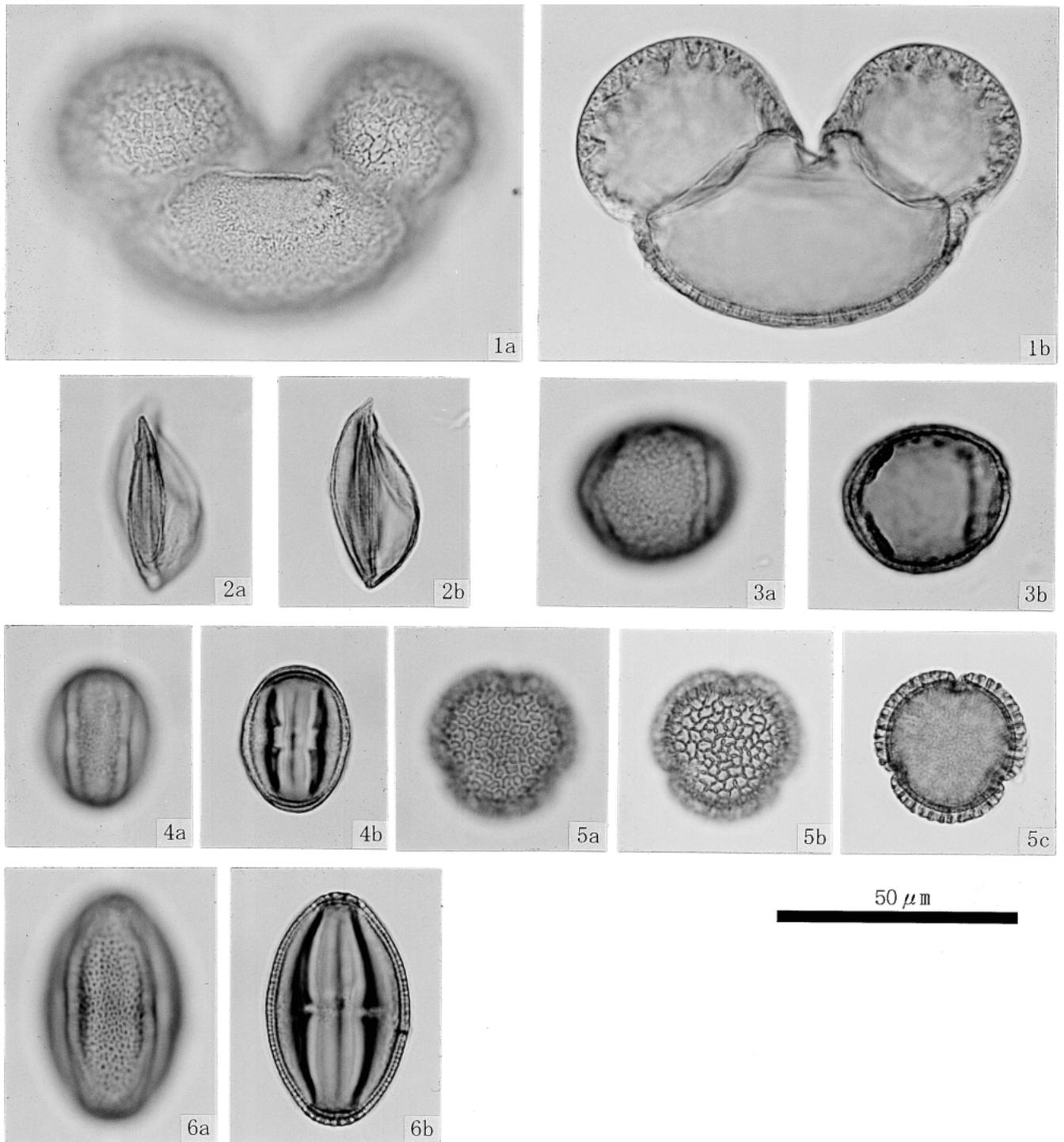
1. *Actinocyclus ingens* Rattray (P-2;8)
2. *Melosira varians* Agardh (P-1;1)
3. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (P-2;3)
4. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (P-2;8)
5. *Thalassionema nitzschioides* (Grun.) Grunow (P-2;1)
6. *Fragilaria fasciculata* (Agardh) Lange-B. (P-2;1)
7. *Bacillaria paradoxa* Gmelin (P-1;1)
8. *Amphora montana* Krasske (P-2;1)
9. *Achnanthes montana* Krasske (P-1;1)
10. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (P-1;1)
11. *Diploneis smithii* (Breb.) Cleve (P-1;6)
12. *Navicula veneta* Kuetzing (P-1;1)
13. *Navicula veneta* Kuetzing (P-2;3)
14. *Navicula gregaria* Donkin (P-1;1)
15. *Navicula capitata* Ehrenberg (P-1;1)
16. *Navicula kotschyi* Grunow (P-1;1)
17. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (P-1;1)
18. *Navicula mutica* Kuetzing (P-1;9)

写真5 珪藻化石(1)



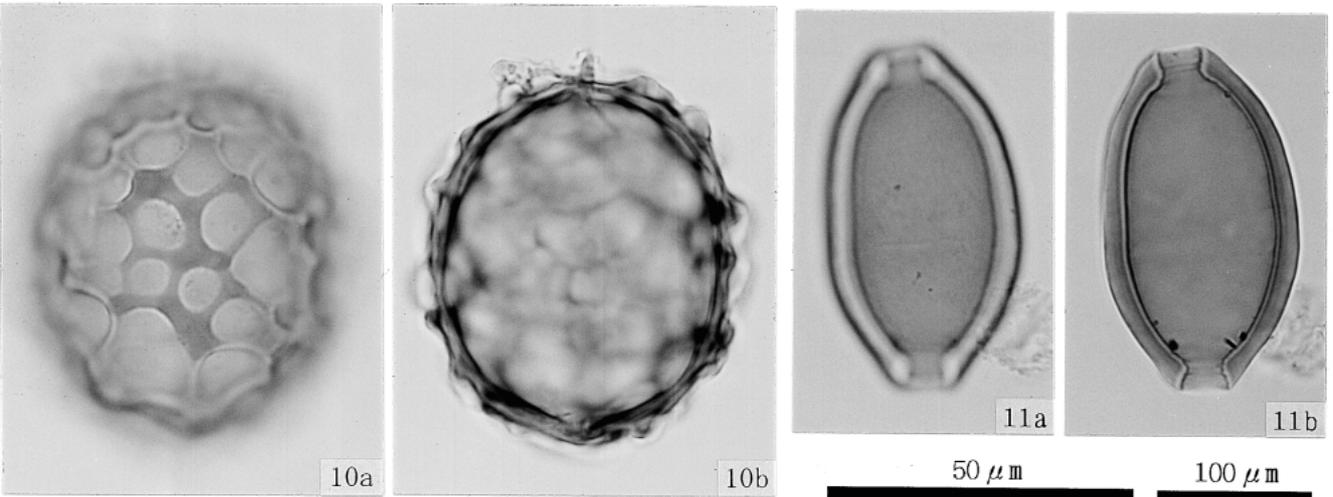
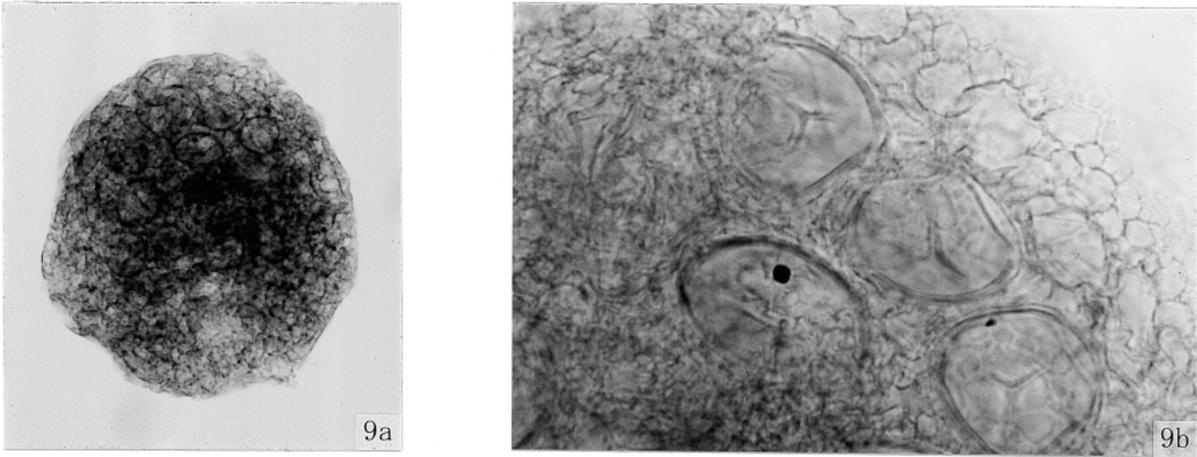
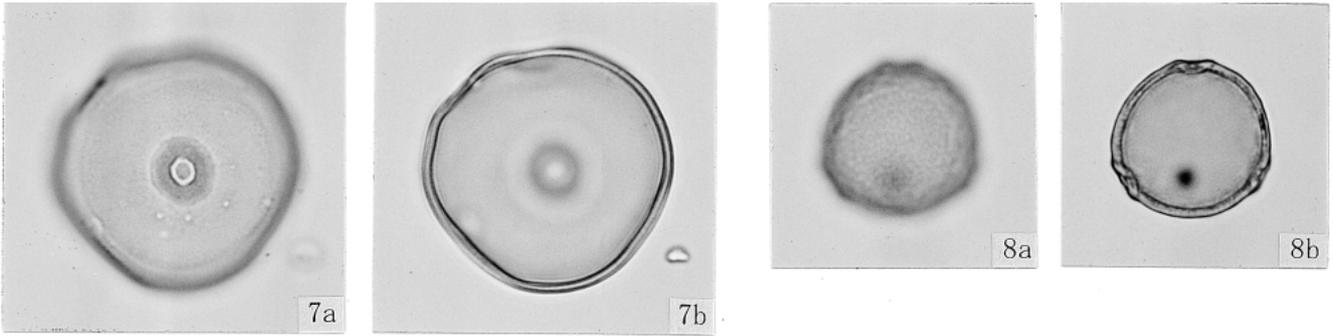
19. *Pinnularia gibba* var. *linearis* Hustedt (P-1;1)
 20. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschowsky (P-1;1)
 21. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (P-2;3)
 22. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (P-2;3)
 23. *Nitzschia umbonata* (Ehr.) Lange-B. (P-1;1)
 24. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith (P-1;1)
 25. *Nitzschia brevissima* Grunow (P-2;8)
 26. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith (P-2;8)
 27. *Nitzschia frustulum* (Kuetz.) Grunow (P-2;1)
 28. *Rhopalodia musculus* (Kuetz.) O. Muller (P-2;1)
 29. *Surirella angusta* Kuetzing (P-1;1)
 30. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (P-1;1)
 31. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (P-1;1)
 32. *Achnanthes hungarica* Grunow (P-1;1)
 33. *Achnanthes hungarica* Grunow (P-1;1)
 34. *Cocconeis scutellum* Ehrenberg (P-2;1)

写真6 珪藻化石(2)



- | | |
|----------------------|----------------------------|
| 1. マツ属 (P-1;1) | 2. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 (P-1;1) |
| 3. コナラ属コナラ亜属 (P-1;1) | 4. コナラ属アカガシ亜属 (P-1;1) |
| 5. イボタノキ属 (P-1;1) | 6. ツタ属 (P-1;1) |

写真7 花粉化石 (1)

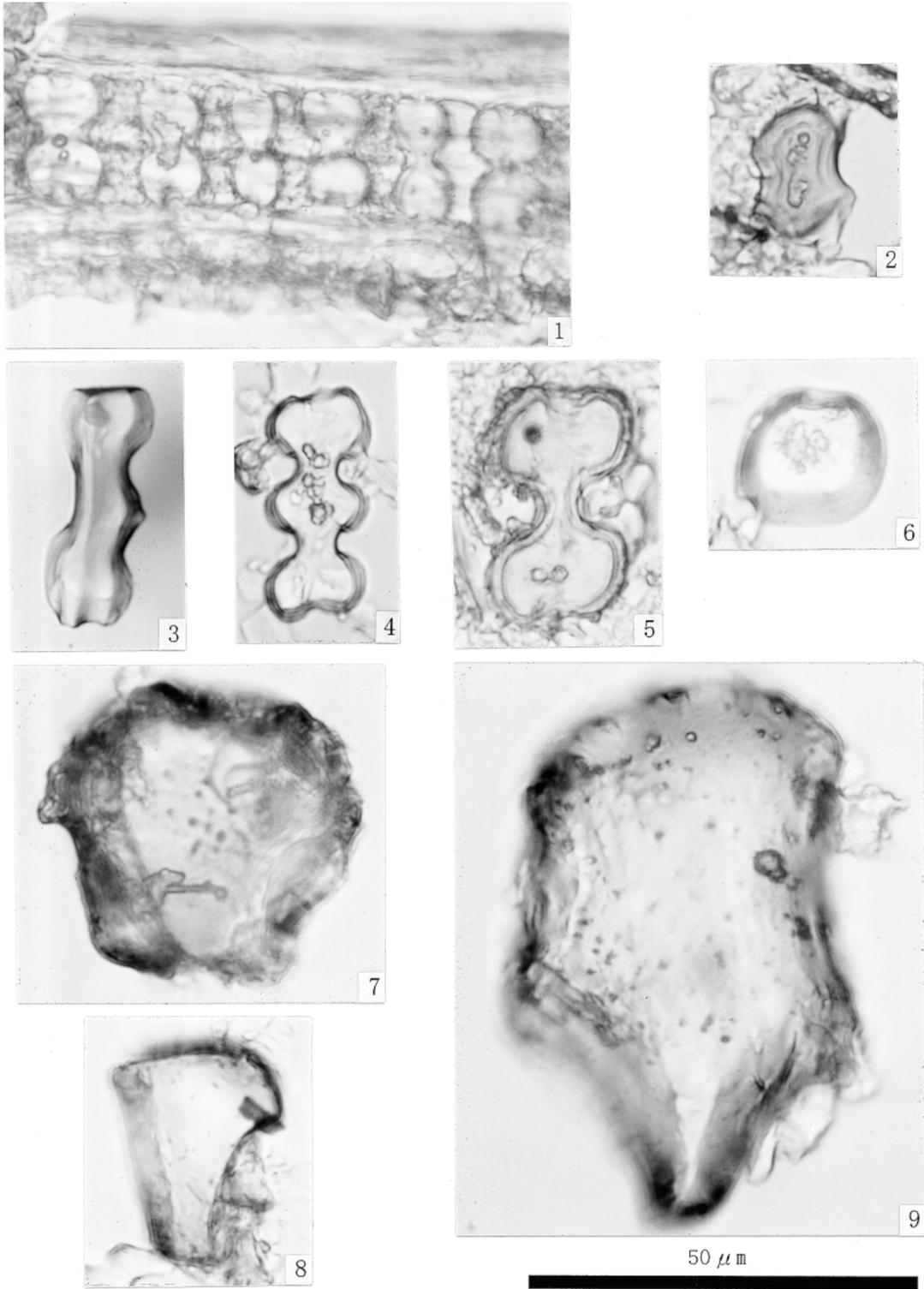


7. イネ科 (P-1;1)
 9. サンショウモ (P-1;1)
 11. 鞭虫卵 (P-1;1)

8. クワ科 (P-1;1)
 10. 蛔虫卵 (P-1;1)

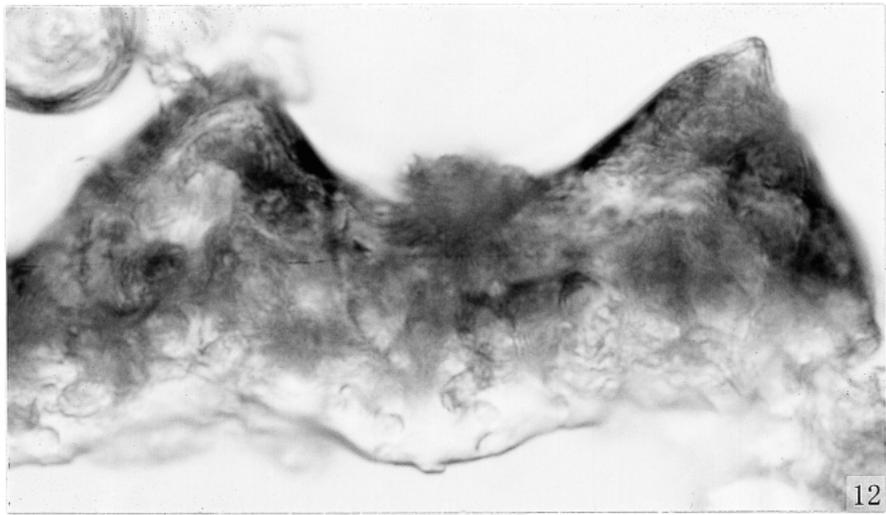
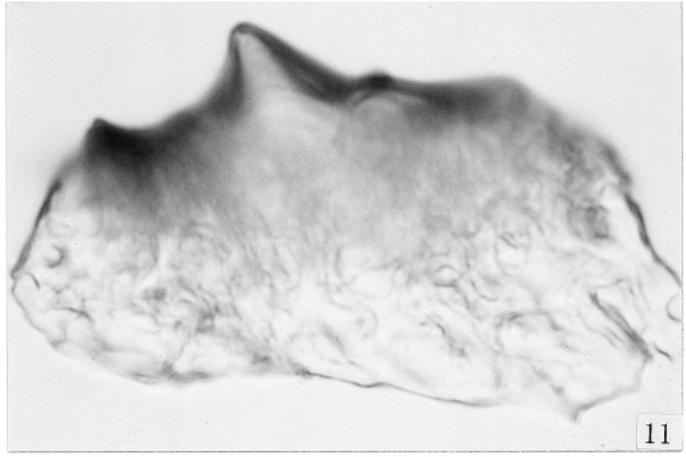
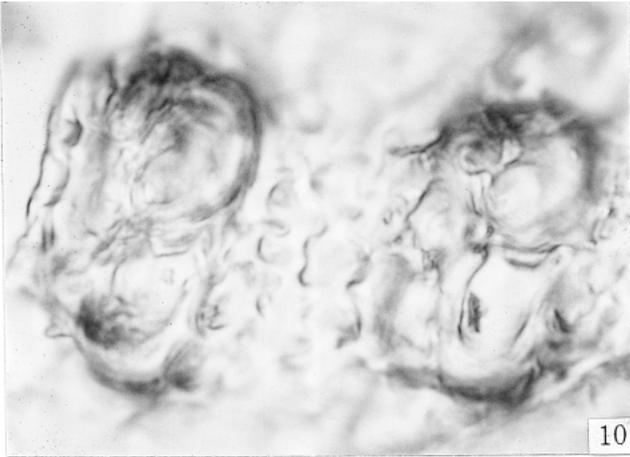
50 μm (7, 8, 9a, 10, 11)
 100 μm (9b)

写真8 花粉化石(2)・寄生虫卵



- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (P-1;2) | 2. チゴザサ属短細胞珪酸体 (P-2;4) |
| 3. コブナグサ属短細胞珪酸体 (P-2;6) | 4. ススキ属短細胞珪酸体 (P-2;3) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体 (P-1;2) | 6. ヨシ属短細胞珪酸体 (P-2;3) |
| 7. タケ亜科機動細胞珪酸体 (P-1;2) | 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (P-2;3) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体 (P-2;5) | |

写真9 植物珪酸体 (1)



50 μ m

10. イネ属穎珪酸体 (P-1;8)
12. イネ属穎珪酸体 (P-1;5)

11. イネ属穎珪酸体 (P-1;8)

5. まとめ

今回の調査は、試掘・立会調査を除けば、500 m²に満たない小規模な面積であった。しかし、調査面積とは裏腹に、多くの調査成果をあげることができた。以下に、本報告の要約をあげ、さらに平手町遺跡・西志賀遺跡・志賀公園遺跡の成果を含めて今後の課題としたい。

(1) 今回の調査で最も注目できる遺構としては、99A区SD03があげられる。弥生時代中期中葉の遺物を多く含み、貝類を中心とした廃棄ブロックが大きく2ヶ所確認できた。規模と断面形態、さらに廃棄された遺物の年代観からSD03は、西側約100mに隣接する西志賀遺跡の名古屋市95調査区において確認されたSD02と同一遺構であると考えられる。

したがって、西志賀遺跡を囲む溝、すなわち環濠として捉えることができ、居住域を区画する溝が西志賀遺跡に認められた。

(2) SD03の南西に並行するSD06は、弥生時代前期後葉の溝である。調査区内では、溝の断面形態の全容が明らかにならなかったが、SD03掘削以前の溝で、SD03に沿うように伸びる環濠と想定できる。したがって、環濠はSD06が掘削され、廃棄による埋没した後にSD03を掘削したと考えられる。換言すれば、西志賀遺跡の居住域を区画する溝はSD06からSD03へと拡張されたことになる。

(3) SD03とSD06の間に版築状の堆積が認められた。土層中の遺物から前期に構築された土壘状遺構とSD06掘削時の廃土を利用して構築したと考えられる。

(4) 99A区SX01および99B区の堆積状況から、SD03の北側は谷状の落ち込みが形成されていることがわかった。すなわち、SD03およびSD06は微高地の縁辺に構築され、環濠が自然地形に合わせて配置されていることが想定できる。

(5) 上記の遺構群は第2遺構面として調査した。これらの上位には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構群、第1遺構面が展開する。第1遺構面と第2遺構面の間には黒褐色～黒色土が50～70cm堆積する。遺構のあり方から中期と後期に断絶が認められる。

(6) 今回出土した遺物は、弥生時代に属するものがほとんどであった。なかでも、SD03・06から出土した遺物が大半を占める。そのなかで、貝層に伴って出土した骨角製品は時期が

骨角製品 比定できる好例として注目できる。骨角製品はヤス類を中心に、「棒状鹿角製品」が2点出土した。西志賀遺跡では合計4点となり、1遺跡からの出土点数としては千葉県荒海貝塚について多い例となった。「棒状鹿角製品」の出土は縄文時代のいわゆる「第2の道具」の終末段階を示す好例である。

前期後葉の土器群 (7) 弥生時代前期後葉の土器群は、SD06からまとまって出土した。溝の埋没から2つ時期に分けられる。最下層および貝層2が古相、貝層3が新相としてまとめることができ、それぞれ尾張第I-5様式、尾張第I-6様式に比定できる基準資料として注目できる。

中期中葉の土器群 (8) 弥生時代中期中葉を中心とした土器群は、SD03からまとまって出土した。溝の堆積が貝類の廃棄ブロックをともなっていたのが幸いして、一括性の高い資料群となった。最下層→貝層3→貝層2への変遷は、既存の資料では得られなかった層位的な裏付けが証明された。したがって、尾張第II-3～第III-2様式の変遷を考える上で貴重な資料となった。

長頸壺 (9) 弥生時代中期中葉の土器群のなかで注目される資料として、「長頸壺」があげられる。尾張平野南西部に特徴的な二枚貝を原体とする施紋・調整を施す壺であるが、中部日本から南東北まで短期間に出現する「長頸壺」と共通するモチーフを共有する。出自などは明らかではないが、中期前葉から中葉の各地域の在来系統が融合し展開する初期段階の「長頸壺」として注目できる。

(10) 平手町遺跡、西志賀遺跡、さらに志賀公園遺跡を含めて、これら隣接する遺跡の関係について時期を追って概観する。

弥生時代前期 弥生時代前期は、1930から40年代に調査された貝塚地点を中心に、居住域が想定できる。貝塚地点では、貝層の下位から竪穴住居が確認されている。さらに、前期後葉になると環濠(SD06)を掘削し、居住域に区画を伴う。この現象は朝日遺跡などでも認められるように、前期を通じて継続する集落では集落の出現時期には環濠が認められない傾向がある。

弥生時代中期 弥生時代中期は、前期の環濠の外側に拡張された環濠(SD06)が掘削される。中期前葉は志賀公園遺跡で居住域と墓域が見つかっている。平手町遺跡の環濠から北側に谷地形を想定すると、対岸に相当する地点となる。志賀公園遺跡の調査所見から幅約100mの微高地が北西から南東に向けて認められ、ここに集落は営まれている。別集落として捉えるのか、集落域の拡大として捉えるのか、今後の課題である。

弥生時代中期後葉から後期にかけて、平手町および西志賀遺跡の実態は不明である。唯一99A区SB01は居住域の一角が存在する。一方、対岸に位置する志賀公園遺跡は居住域がみられず、墓域が展開する。また、中期後葉に比定できる水田が微高地の縁辺に見られる(志賀公園遺跡2000年度調査地点)。

以上、平手町遺跡に隣接する調査成果を弥生時代に限って概観した。西志賀遺跡と平手町遺跡は実態が把握できるほど調査が進んでいない。今後の調査によって解明される事象は計り知れない。今しばらくは、既存の資料の再検討をもって将来の調査研究に備えたい。

付載 1 . 西志賀遺跡（平手町地区）の自然遺物

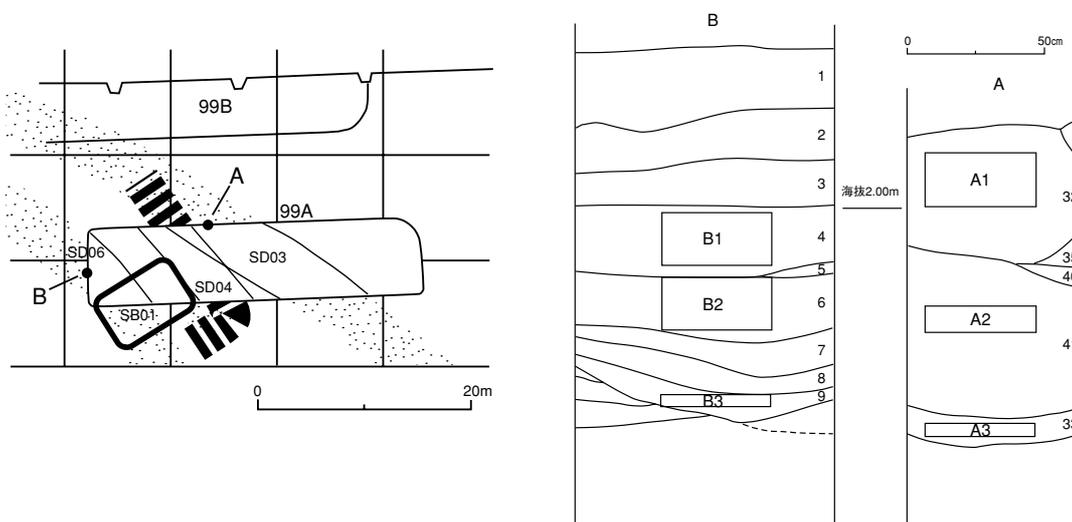
渡辺 誠・岡田 賢
李 浩基・篠瀬孝延
(名古屋大学文学部考古学研究室)

1. 資料の概要（第1図、第1・2表）

本稿で報告する資料は、平成11年に愛知県埋蔵文化財センターによって発掘された弥生時代集落としての西志賀遺跡（平手町地区）の、北端を示す2本の環濠（SD03・06）内に堆積した貝層中より発掘された自然遺物である（第1図）。これらの資料は2群に大別される。第1は、土器片などと同様に一般的に発掘された資料（資料A）で、第2は、ブロック・サンプリングによる資料（資料B）である。2本の環濠の時期は、SD03は弥生中期中葉の貝田町式期、SD06は同前期末葉の西志賀式期である。定量的検討にブロック・サンプリング（資料B）は重要であるが、大型である哺乳類の検討には一般的資料（資料A）が重要になる。

ブロック・サンプリング資料は、2本の環濠内貝層よりそれぞれ3ブロック採集された。それぞれのサイズなどは第1表に示すとおりである（第1表）。なおこれらを含む上下の層の特徴は、第2章第3節を参照されたい。

ブロック・サンプリング資料は、A・B 2地点において層位別に各3件採集され、それぞれのサイズは第1表に示すとおりである。それぞれの遺物は第2表に示すとおりである。



第1図 ブロック・サンプリングの位置と層序（層序名は第2章第3節を参照）

第1表 ブロック・サンプリング一覧表

種類	人工遺物		自然遺物												
	土器片	フレイク	貝類	微小貝	フジツボ類	カニ類爪	ウニ類殻板	ウニ類棘	魚骨	魚鱗	ヘビ類椎骨	鳥・獣骨	炭化米	不明微細種子	炭化材
ブロック名															
A1	○	○	○	○	0.22	-	0.01	-	○	0.10	1	○	20 ⁺	○	○
A2	○	○	○	○	-	2	0.03	-	○	0.26	-	○	10 ⁺	○	-
A3	○	○	○	○	0.06	-	-	0.01	○	0.25	-	○	20 ⁺	○	-
B1	○	○	○	○	0.67	-	0.01	-	○	0.44	1	○	9 ⁺	○	○
B2	○	○	○	○	0.27	-	-	-	○	0.34	-	○	16 ⁺	○	○
B3	○	○	○	○	0.46	-	-	-	○	0.04	-	○	1 ⁺	-	○

第2表 ブロック・サンプリング別遺物名一覧表
(単位:g,+印は破片があることを示す)

遺構番号	サンプル番号	層序	サイズ (cm)	体積 (cm)	時期
			タテ×ヨコ×厚さ		
S D03	A1	32	40×15×20	12,000	中期中葉・ 貝田町式期
	A2	41	40×30×10	12,000	
	A3	33	40×30×5	6,000	
S D06	B1	4	40×20×20	16,000	前期末葉・ 西志賀式期
	B2	6	40×20×20	16,000	
	B3	9	40×40×5	8,000	

2. 大型貝類 (第3・4表、写真1)

貝層の主体となる食用大型貝類は第3表に示すように、A・B両資料を合わせると腹足綱(巻貝)13種、斧足綱(二枚貝)9種が検出されている。種名において前者は後者の約1.5倍にあたり、資料Bにおいてもそれぞれ11・6種で、その比率に大きな違いはない。しかし数量的には逆で、後者の二枚貝が87～98%を占めている(第4表)。

それらのうちもっとも多いのはマガキ・ヤマトシジミ・ハマグリ(の3種であるが、各ブロックでは数的構成に顕著な違いがみられる。A1ではハマグリが多くヤマトシジミがこれに次ぐが、A2ではヤマトシジミが優先しハマグリがこれに次ぐ。A3ではハマグリが主体でマガキがこれに次ぐ。B2もこれに類似した傾向を示す。しかしB1・B3ではマガキが圧倒的に多い。巨視的にみると、マガキ優先型からハマグリ・ヤマトシジミ主体型に変化していると見ることができる。こうした傾向はすでに紅村弘氏により指摘されている(吉田・紅村1958)。

したがって遠浅砂底の海岸を主とし、河口域をも含めた採取地域が復元されてくる。これはより古い段階においてマガキの比重の高いことなどとともに、朝日遺跡の傾向と類似しているが(渡辺・久保2000)、タニシ類などの淡水域の貝類がきわめて少ないことは、朝日遺跡と異なる本遺跡の特徴である。

3. 微小貝類 (第5～7表、写真2)

非食用貝類の微小貝は14種検出された(第5表)。

それらのうち鹹水産幼貝2種、鹹水産微小貝3種、淡水産・汽水産微小貝各1種は大型貝類、あるいは海藻などの採集に付随して運ばれたものとみられるが、陸産微小貝7種は貝層形成後に侵入してきたものである。

それらの量的構成は第6表に示すとおりである。陸産微小貝がやや多く、他はきわめて少数である。前者のなかでもオカチョウジガイとヒメコハクガイが多いが、オカチョウジガイは人家庭園の地表、ヒメコハクガイは平地の灌木の根元や落葉下に棲む種類であり、貝層形成時の環境復元に示唆的である。

次にそれら陸産微小貝類の含有率を示したのが第7表である。そしてB1サンプルのみやや高率である。同様な傾向はかつて朝日遺跡においても確認することができ、含有率が10～32%を示すサンプルとそれ以下のサンプルとに大別され、それは水中堆積と非水中堆積との差を示していると指摘したことがある(渡辺・久保1988)。

B1サンプルは6サンプル中層位的にはもっとも新しく、中期中葉の貝田町式期に水位の低下があった

ことになる。上記の朝日遺跡も同時期であるが、その後の朝日遺跡別地点の調査では前期末～中期初頭に集中しており（渡辺・久保 2000）、自然環境の変化に原因するのではなく、防御的性格の変動などの、各環壕の個別事情がより大きな要因として想定される。

この問題は環壕の機能に密接な関係を有しており、今後さらに検討を進める必要がある。

4. 魚類（第8・9表、写真3）

魚類は21種が検出された（第8表）。その数量は第9表に示すとおりで、出現頻度の高いのは、軟骨魚類、フナ属、コイ科、スズキ、クロダイ、タイ科などの種類である。もっとも頻度の高いのはクロダイであるが、タイ科には他のマダイなどはまったくみられず、実質はすべてクロダイとみられ合計すると34.4%になり、突出して高い。サメ・エイ類などの軟骨魚類も合計9.3%でやや多い。以上は他の低率の種類とともに典型的な内湾性魚類であるが、淡水魚類のフナ属・コイ科も各10.9%を占めていて、河川の流入する湾奥部や水田における漁労活動が復元され、朝日遺跡と類似した形態を示している（渡辺・久保 2000）。

5. 哺乳類（第8・10～14表、写真4～7）

哺乳類は6種が検出された（第8表）。出現頻度の高いのは、イノシシとニホンジカである。主要4種について頻度数（%）をみると、ニホンジカ109（56.5%）、イノシシ75（38.9%）、イヌ7（0.04%）、キツネ2（0.01%）である（第10～12表）。次に最少個体数を比較すると、逆にニホンジカ4、イノシシ8で逆転している（第13・14表）。これは資料数が少ないためにみられる不安定性であろう。

なおイノシシについては、雌雄の判明する例ではオス4個体に対しメス2個体でオスが多く、また7個体中4個体が乳歯をもつ若い個体であり、イノシシのキーピングの行われていた可能性を示唆している。

6. 鳥類（第15表、写真8）

鳥類は、カモ類と不明種が少量出土している（第15表）。

7. その他（第2表）

動物遺体はこれらの他にごく少量ではあるが、フジツボ類、カニ類、ウニ類およびカエル類、ヘビ類などがみられる。植物遺体としては炭化米もみられるが、第2表に数量を示すとどめる。

8. おわりに

西志賀遺跡は、濃尾平野における弥生時代の拠点的な重要集落であるが、自然遺物については従来ほとんど報告されていない。今回の調査はその不備を補うものとしてきわめて重要な意義があり、同時代の清洲町朝日遺跡（渡辺・久保 2000）などとの比較が、今後の重要な検討課題である。

引用文献目録

吉田富夫・紅村 弘，1958：名古屋西志賀貝塚。名古屋市文化財叢書，19。

渡辺 誠・久保 禎子，1988：朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告。愛知県埋蔵文化財センター年報，昭和62年度。

———，2000：朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告。朝日遺跡VI。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書，83。

第3表 大型貝類種名一覧表

A. 腹足綱 GASTROPODA		
1. ニシキウズガイ科キサゴ		Umbonium(Suchium)costatum KIENER
2. リュウテン科サザエ		Turbo(Batillus)cornutus SOLANDER
3. リュウテン科スガイ		Lunella coronata coreensis RECLUZ
4. タニシ科オオタニシ		Cipangopaludina japonica MARTENS
5. カワニナ科カワニナ		Semisulcospira bensoni PHILLIPI
6. ウミナナ科ウミナナ		Batillalia multiformis LISCHKE
7. ウミナナ科イボウミナナ		Batillalia zonalis BRUGUIERE
8. ウミナナ科ヘナタリ		Cerithidea(Cerlithideopsilla)cingulata BRUGUIERE
9. ウミナナ科フトヘナタリ		Cerithidea(S.)
10. アクキガイ科アカニシ		Rapana thomasi GROSSE
11. アクキガイ科イボニシ		Rurpura clavigera KUSTER
12. アクキガイ科レイシ		Thais bronni DUNKER
13. オリレイヨウバイ科アラムシロ		Triria(Hinia)festivas POWYS
B. 斧足綱 PELECYPODA		
1. フネガイ科サルボウ		Anadnra(Scapharca)subcrenata LISCHKE
2. フネガイ科ハイガイ		Anadara (Tegillarca) bisensis SCHENCK et REINHART
3. イタボガキ科マガキ		Grassostrea gigas THUNBERG
4. シジミ科ヤマトシジミ		Corbicula japonica PRIME
5. マルスダレガイ科ハマグリ		Meretrix lusoria RODING
6. マルスダレガイ科カガミガイ		Dosinia (Phacosoma) japonicum REEVE
7. マルスダレガイ科オキシジミ		Cyclina sinensis GMERIN
8. バカガイ科シオフキ		Mactra veneriforms REEVE
9. エゾオオノガイ科オオノガイ		Mya (Arenomya) arenaria oonogai MAKIYAMA

第4表 貝類構成比一覧表

種名	構成比	A1			A2			A3			B1			B2			B3		
		l/r	最小 個体数	%	l/r	最小 個体数	%	l/r	最小 個体数	%	l/r	最小 個体数	%	l/r	最小 個体数	%	l/r	最小 個体数	%
腹足綱	キサゴ	-	1	0.62	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	サザエ	-	-	-	1	0.34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	スガイ	-	-	-	1	0.34	-	-	-	-	1	0.34	-	-	-	-	-	-	-
	カワニナ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.28	-	-	-	-	-
	ウミナナ	1	0.62	-	-	-	-	1	3.33	-	1	0.34	-	3	0.85	-	-	-	-
	イボウミナナ	8	4.94	-	7	2.38	-	-	-	2	0.68	-	1	0.28	-	-	-	-	-
	ヘナタリ	-	-	-	1	0.34	-	-	-	-	-	-	1	0.28	-	-	-	-	-
	フトヘナタリ	-	-	-	8	2.72	-	2	6.67	-	1	0.34	-	2	0.57	-	-	-	-
	アカニシ	7	4.32	-	-	-	-	1	3.33	-	1	0.34	-	3	0.85	-	-	-	-
	イボニシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.28	-	-	-	-	-
アラムシロ	1	0.62	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1.52	
小計		18	11.12		18	6.12		4	13.33		6	2.04		12	3.39		1	1.52	
斧足綱	ハイガイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0/1	1	0.28	-	-	-	-	-
	サルボウ	1/0	1	0.62	1/1	1	0.34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	マガキ	4/6	6	3.70	6/3	6	2.04	3/2	3	10.00	260/136	260	88.74	83/88	88	25.00	64/35	64	96.97
	ヤマトシジミ	55/52	55	33.95	180/176	180	61.22	2/1	2	6.67	1/3	3	1.02	36/48	48	13.64	-	-	-
	ハマグリ	66/79	79	48.77	74/86	86	29.25	20/8	20	66.67	22/19	22	7.51	179/156	179	50.85	0/1	1	1.52
	オオノガイ	0/3	3	1.85	3/0	3	1.02	0/1	1	3.33	2/1	2	0.68	15/24	24	6.82	-	-	-
小計		144	88.89		276	93.87		26	86.67		287	97.95		340	96.59		65	98.49	
計		162	100.01		294	99.99		30	100.00		293	99.99		352	99.98		66	100.01	

第7表 陸産微小貝の含有率

(1,000cm³当たり個体数)

サンプル 番号	体積 (cm ³)	個体数	含有率
A1	12,000	19	1.58
A2	12,000	7	0.58
A3	6,000	0	0
B1	16,000	273	17.06
B2	16,000	17	1.63
B3	8,000	0	0

第5表 微小貝類種名一覧表

A. 鹹水産幼貝	
1. ウミナナ科イボウミニナ	Batillaria zonalis BRUGUIERE
2. ウミナナ科ヘナタリ	Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata BRUGUIERE
B. 陸産	
1. ケシガイ科ニホンケシガイ	Carychium nipponense PILSBRY & HIRASE
2. キセルガイ科	Clausiliidae sp.
3. オカチヨウジガイ科マルオカチヨウジガイ	Allopeas brevispira PILSBRY & HIRASE
4. オカチヨウジガイ科オカチヨウジガイ	Allopeas clavulinum kyotensis PILSBRY & HIRASE
5. オカチヨウジガイ科ホソオカチヨウジガイ	Allopeas pyrgula SCHMACKER & BOETTGER
6. クガイ科ヒメコハクガイ	Hawaiiia minuscula REINHARDET
7. ベッコウマイマイ科ヒメベッコウガイ	Discoconulus sinapidium REINHARDT
C. 淡水産	
1. ミズツボ科ホラアナミジンナ	Bythineta (Moria) nipponica MORI
D. 汽水産	
1. カワザンショウガイ科カワザンショウガイ	Assiminea lutea japonica v. MARTENS
E. 鹹水産	
1. カワザンショウガイ科ヘソカドガイ	Paludinella japonica PILSBRY
2. オニツノガイ科マキミズズメモツボ	Diala stricta HABE
3. オニツノガイ科シマハマツボ	Australaba picta (A. ADAMS)

第6表 微小貝類構成比一覧表

種名	ブロック番号 構成比	A 1		A 2		A 3		B 1		B 2		B 3	
		個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
幼貝	イボウミニナ	-	-	-	-	1	100.00	-	-	2	8.70	-	-
	ヘナタリ	-	-	1	12.50	-	-	-	-	1	4.35	-	-
	小計	0		1	12.50	1	100.00	0		3	13.04		
陸産	ニホンケシガイ	-	-	-	-	-	-	11	4.00	-	-	-	-
	キセルガイ科	-	-	-	-	-	-	2	0.73	-	-	-	-
	マルオカチヨウジガイ	2	8.70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	オカチヨウジガイ	4	17.39	1	12.50	-	-	131	47.64	3	13.04	-	-
	ホソオカチヨウジガイ	-	-	-	-	-	-	7	2.55	-	-	-	-
	ヒメコハクガイ	11	47.83	6	75.00	-	-	106	38.55	11	47.83	-	-
	ヒメベッコウガイ	2	8.70	-	-	-	-	16	5.82	3	13.04	-	-
	小計	19	82.61	7	87.50	0		273	99.27	17	73.91	0	
淡水産	ホラアナミジンナ	2	8.70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	小計	2	8.70	0		0		0		0		0	
汽水産	カワザンショウガイ	-	-	-	-	-	-	2	0.73	-	-	-	-
	小計	0		0		0		2	0.73	0		0	
鹹水産	ヘソカドガイ	2	8.70	-	-	-	-	-	-	-	-	1	50.00
	マキミズズメモツボ	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4.35	1	50.00
	シマハマツボ	-	-	-	-	-	-	-	-	2	8.70	-	-
	小計	2	8.70	0		0		0		3	13.04	2	100.00
計		23	100.01	8	100.00	1	100.00	275	100.00	23	99.99	2	100.00

第8表 動物遺体種名一覧表（貝類・微小貝類は除く）

脊椎動物門	VERTEBRATA	
軟骨魚綱	CHONDRICHTHYES	
1 エイ目		Rajiformes sp.
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES	
1 ニシン科マイワシ		Sardinops melanostictus TEMMINCK et SCHLEGEL
2 アユ科アユ		Plecoglossus altivelis TEMMINCK et SCHLEGEL
3 ウナギ科ウナギ		Anguilla japonica TEMMINCK et SCHLEGEL
4 コイ科フナ属		Carassius sp.
5 コイ科		Cyprinidae sp.
6 ナマズ科ナマズ		Parasilurus asotus LINN_
7 ボラ科		Mugilidae sp.
8 スズキ科スズキ		Lateolabrax japonicus CUVIER
9 キス科		Sillaginidae sp.
10 アジ科マアジ		Trachurus japonicus TEMMINCK et SCHLEGEL
11 タイ科クロダイ		Acanthopagrus schlegeli BLEEKER
12 タイ科		Sparidae sp.
13 サバ科サバ属		Scomber sp.
14 サバ科カツオ		Katsuwonus pelamis LINNAEUS
15 サバ科マグロ属		Thunnus sp.
16 ハゼ科マハゼ属		Acanthogobius sp.
17 コチ科		Platycephalidae sp.
18 ヒラメ科		Paralichthyidae sp.
19 カレイ科		Pleuronectidae sp.
20 フグ科		Tetraodontidae sp.
両生綱	AMPHIBIA	
無尾目（カエル類）		Anura sp.
爬虫綱	REPTILIA	
へび亜目		Ophidia sp.
鳥綱	AVES.	
1 カモ類		Anas sp.
哺乳綱	MAMMALIA	
1 モグラ科		Talpidae sp.
2 ネズミ科		Muridae sp.
3 イヌ科イヌ		Canis familiaris LINNAEUS
4 イヌ科キツネ		Vulpus vulpus japonica GRAY
5 イノシシ科イノシシ		Sus scrofa LINNAEUS
6 シカ科ニホンジカ		Cervus nippon TEMMINCK

第9表 魚類数量表

種名	部位	地点					S D 0 3													SD06		小計	計	出現率 (%)		
		ブロック・サンプリング					目 層													目層						
		A1	A2	A3	B1	B2	B3	目層1			目層2			目層3			中層			目層						
						XA20q	XA20r	XA1r	XA1q	XA1r	XA1s	XA20q	XA20r	XA1r	XA20r	XA1r	XA20r	XA1p	XA20r	XA1r	XA1s					
軟骨魚類	脊椎骨	2				2		9	3	1	7		4	1		1	2						35	35	6.9	
エイ類	歯板								2		1			1						2			6			
	尾棘										1				2					2	1		6	12	2.4	
マイワシ	脊椎骨	7	1		2	1																	11	11	2.2	
アユ	脊椎骨				3	3	3													1			10	10	2.0	
フナ属	脊椎骨	3	8	1	7	9				2	2				8	2	3		4	5		1	55	55	10.9	
コイ科	基後頭骨																						1			
	主上顎骨																				r1		1			
	歯骨												11	r1							r1		3			
	角骨						11		r1				r1	r1									4			
	主髁蓋骨														r1		11						2			
	眼窩骨				r1			r1					11	r1			r1			11	11	r1	9			
	脊椎骨	2					2	r1	3	2	2		1	6	7		2		2	2	2	1	32			
	胸鰓棘	1	1																				1			
	臀鰓棘	1	1		1																		2			
	ナマズ	歯骨													11								1			
	角骨																				r1		1			
	脊椎骨										2												2	4	0.8	
ウナギ	脊椎骨	2		1	4	6	1				2				1	3			1	4			23	23	4.6	
ボラ科	脊椎骨									1		1							1		1		4	4	0.8	
スズキ	主上顎骨							11									11			11		3				
	前上顎骨							r1														1				
	歯骨						r1		r1					r1						11		4				
	角骨						r1		r1								r1				r1		3			
	方骨							11	r1								11					3				
	主髁蓋骨							r1									11					1				
	第1脊椎骨																					2				
	脊椎骨	1	2		3	1					1		1	3	2		1		12	1			30			
	上腕頭骨				11																		1		48	9.5
	キス科	脊椎骨	1																				1	1	0.2	
マアジ	脊椎骨	1												1								2	2	0.4		
クロダイ	主上顎骨		r1				11	r4	r1	11	12	r2		r1	r1	14	r2			13	r1	13	r1	28		
	前上顎骨		r1				11	r2	r2	11	r1	12	r2		r1	11	18	r4		r1	14	r6	r3	41		
	歯骨						12	r1		r1	11	r2				r1	11	r4			13	r3	15	24		
	口蓋骨																				r1		11	2		
	主髁蓋骨													r1						r1	11		4		99	19.6
タイ科	歯骨					11															r1		2			
	角骨						r1				11	r1								13	r2	11	11	r2	r1	13
	方骨						12	r1			12	r1		r1	r1	r2						12	r2	11	15	
	角舌骨					r1																		1		
	尾舌骨			1																				1		
	前鰓蓋骨															r1							1			
	主髁蓋骨					12																	2			
	脊椎骨	2		2	1		1	2	1		6		3	3	8		3				2	1	2	37		
	眼頭骨	1																					1			
	臀鰓第2棘																					1		1		
臀鰓血管前棘																					1		1	75	14.9	
マハゼ	脊椎骨			3	3																	6	6	1.2		
サハ属	脊椎骨			1																		1	1	0.2		
カマノ	脊椎骨													1								1	1	0.2		
マグロ	脊椎骨																					1	1	0.2		
コナ科	主上顎骨																				r1		2			
	歯骨									11	r1												2			
	角骨																				11		1			
	脊椎骨													1	1							2		7	1.4	
ヒラメ	主上顎骨																				11		1			
	前上顎骨																				11		1			
	方骨																				r1		1			
	脊椎骨													1			1				1		3	6	1.2	
カレイ	主上顎骨																				11		1			
	角骨																				11		1			
フグ科	脊椎骨	1			1									2								6	1	11	13	2.6
	歯板上																						1			
不明	脊椎骨																						1	2	0.4	
	方骨						11				r1											2				
計		24	18	2	31	39	9	17	26	17	12	42	1	18	26	64	4	26	1	65	51	11	6	504	504	100.0

第10表 シカ部位別一覧表

遺構	層位	部位 地区	頭蓋骨		上顎骨		角坐骨		角坐		鹿角		下顎骨			肩胛骨		上腕骨			桡骨			尺骨			手根骨													
			r	l	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r												
			近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位										
SD 03	中層	IXA20q											1	1																										
		XA1r	1																																					
		XA1s																																						
	下層	IXA20q																																						
		IXA20r																																						
		XA1q																																						
	最下層	IXA20r																																						
XA1r																																								
XA1q																																								
貝層	XA1r																																							
	XA1s																																							
	XA1s																																							
貝層2	IXA20q																																							
	IXA20r																																							
	XA1r																																							
貝層3	IXA20q																																							
	IXA20r																																							
	XA1r																																							
不明	IXA1s																																							
	XA1s																																							
	XA1q																																							
SD 04	中層	IXA1q																																						
	下層	IXA1q																																						
	上層	IXA1p																																						
SD 06	貝層	IXA1p																																						
	貝層2	IXA1p																																						
	貝層2	IXA1p																																						
SX01	IXA1s																																							
土塁	IXA1q																																							
南壁コン	IXA1q																																							
計			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	3	1	0	1	2	4	0	2	2	0	2	5	2	1	0	3	2	3	1	0	0	1	0	0	3	1

遺構	層位	部位 地区	中手骨		寛骨		大腿骨						脛骨			距骨		踵骨		足根骨		中足骨		基節骨		末節骨		環椎		軸椎		頸椎		胸椎		腰椎		肋骨		計	
			近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	
			近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位	遠位	近位
SD 03	中層	IXA20q																																							
		XA1r																																							
		XA1s																																							
	下層	IXA20q																																							
		IXA20r																																							
		XA1q																																							
	最下層	IXA20r																																							
XA1r																																									
XA1q																																									
貝層	IXA1q																																								
	XA1r																																								
	XA1s																																								
貝層2	IXA20q																																								
	IXA20r																																								
	XA1r																																								
貝層3	IXA20q																																								
	IXA20r																																								
	XA1r																																								
不明	IXA1s																																								
	XA1q																																								
	XA1q																																								
SD 04	中層	IXA1q																																							
	下層	IXA1q																																							
	上層	IXA1p																																							
SD 06	貝層	IXA1p																																							
	貝層2	IXA1p																																							
	貝層2	IXA1p																																							
SX01	IXA1s																																								
土塁	IXA1q																																								
南壁コン	IXA1q																																								
計			1	1	0	1	1	0	0	2	0	1	2	1	3	5	2	3	4	1	0	2	1	1	0	1	1	0	1	1	2	4	4	2	1	7	4	1	1		

第 11 表 イノシシ部位別一覧表

遺構	層位	部位 地区	下顎骨		肩胛骨				上腕骨						橈骨						尺骨								
			l		r		l		r		l		r		l		r		l		r		l		r				
			1	体 枝	体 枝	近位	体 遠位																						
SD 03	中層	IXA20r		2																									
		IXA20s XA1q XA1r XA1s																			1	1			1				
	下層	XA1q XA1r XA1s	1				1	1		1	1									1	1			1	1				
		XA1q XA1r						1		1	1																		
	貝層	IXA20q IXA20r XA1q XA1s					2																			1	1		
		IXA20r XA1r																			1	1	2				1	1	
		IXA20r XA1r																									1		
トシ	XA1s					1																				1	1		
SD 04	中層	XA1q																											
SD 06	下層	XA1q																											
		XA1p								1																			
貝層	IXA20q IXA20r		1	1																									
		XA1s									1																		
SX01	トシ貝層下	XA1s							1																				
	南壁トシ	XA1q																											
計			1	1	2	1	0	0	5	1	3	0	4	2	0	1	1	0	0	0	3	3	3	2	2	0	5	3	0

遺構	層位	部位 地区	手根骨		寛骨		大腿骨						脛骨						腓骨	距骨		踵骨		足根骨	基節骨	環椎	頸椎	腰椎	計		
			l	r	l	r	l		r		l		r		l		r			l	r	l	r								
			1	体 枝	体 枝	近位	体 遠位	近位	体 遠位	近位	体 遠位	近位	体 遠位																		
SD 03	中層	IXA20r																												2	
		IXA20s XA1q XA1r XA1s				1																								0	
	下層	XA1q XA1r XA1s																													0
		XA1q XA1r																													1
	最下層	XA1q XA1r																													7
		XA1q XA1r																													1
	貝層	IXA20q IXA20r XA1q XA1s																													2
IXA20q IXA20r XA1q XA1s																														0	
IXA20r XA1r																														2	
貝層2	IXA20r XA1r																													4	
	IXA20r XA1r																													2	
貝層3	IXA20r XA1r																													0	
	IXA20r XA1r																													3	
トシ	XA1s																													3	
SD 04	中層	XA1q																												0	
SD 06	下層	XA1q																												0	
		XA1p																													1
貝層	IXA20q IXA20r																														3
		XA1s																													0
SX01	トシ貝層下	XA1s																													1
	南壁トシ	XA1q																													0
計			0	1	1	2	2	3	0	0	2	0	0	2	2	0	1	1	1	1	2	3	0	2	1	1	1	2	2	43	

第12表 小型哺乳類数量表

種名	部位	遺構	SD03				SD06	計	出現頻度数
			貝層		貝層2	貝層			
			IXA20q	IXA20 r	X A1 r	X A1 r	X A1 p		
イヌ	下顎骨	l					2	7	
		r					1		
	肩胛骨	r	1				1		
	中手骨	r		1			1		
	基節骨				1		1		
	中節骨				1		1		
キツネ	下顎骨	r					1	2	
	下顎遊離歯	r, P1		1					1
		l, P1			1				1
	脛骨	r			1				1
	距骨	l					1		1

第13表 シカ歯牙一覧表 (Iは門歯, Cは犬歯, Pは小白歯, Mは大白歯, 下線は顎骨に伴っていることを示し, カッコは脱落を示す)

部位	遺構	層位	地区	r											l										
				M3	M2	M1	P3	P2	P1	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	M1	M2	M3		
上顎	SD03	貝層	IX A20q	M2																					
			X A1 q																			M3			
		貝層2	IX A20q																			M1	M2	M3	
			IX A20 r	P1																			M1		
			X A1 r	P1																					
		貝層3	X A1 r	M1																					
			X A1 r	M1																					
SD06	貝層	X A1 p																			P2				
下顎	SD03	貝層	X A1 s												I1										
		貝層2	IX A20q																			M3			
			X A1 r	M2																					
		中層	IX A20q																			P1	P2	P3	M1
下層	X A1 r	<u>M3</u>	<u>M2</u>	<u>M1</u>	<u>P3</u>	<u>P2</u>	<u>P1</u>																		

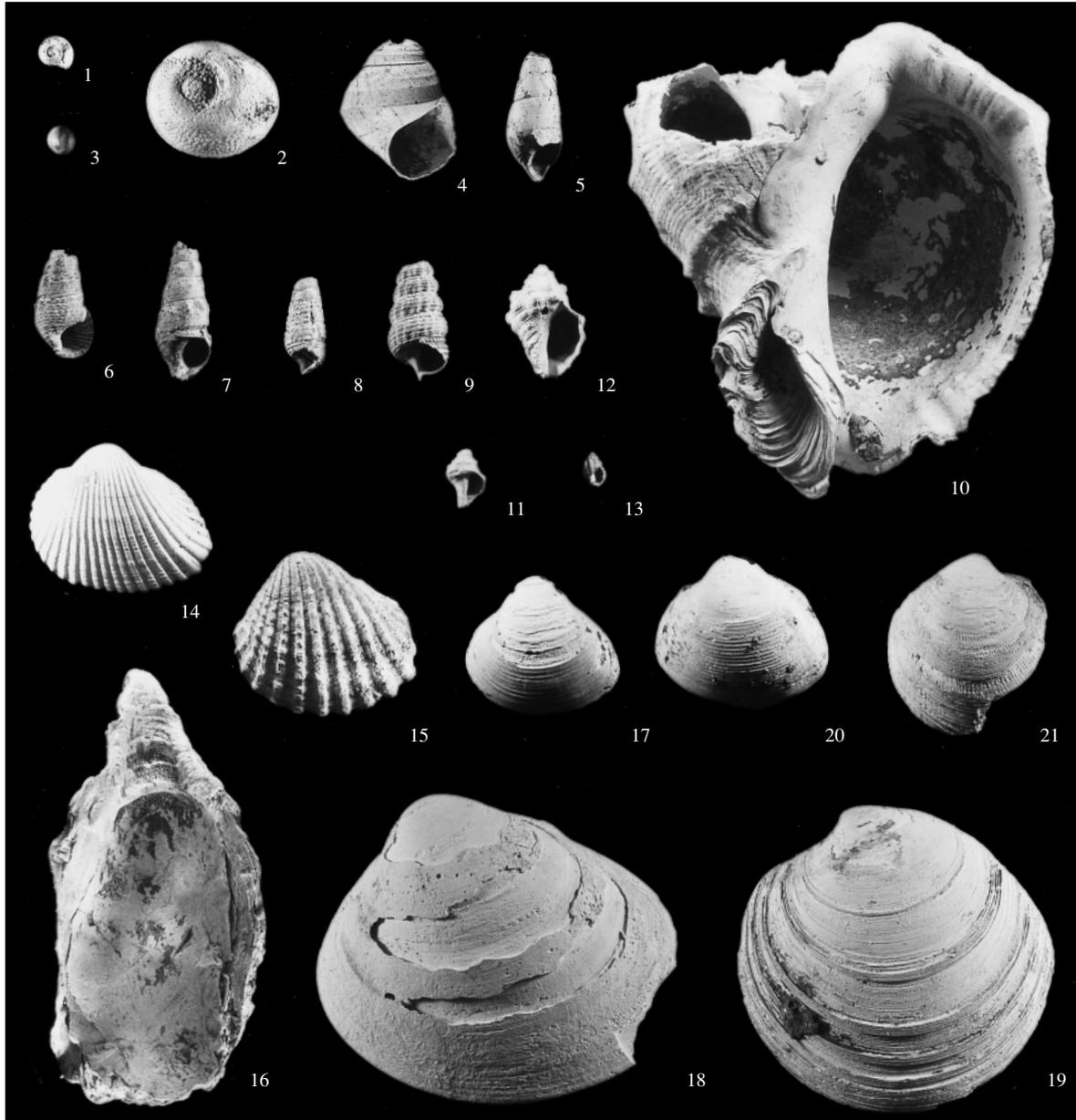


写真1 大型貝類 (縮尺3分の2)

1:キサゴ, 2:サザエ, 3:スガイ, 4:オオタニシ, 5:カワニナ, 6:ウミニナ, 7:イボウミニナ, 8:ヘナタリ, 9:フトヘナタリ, 10:アカニシ, 11:イボニシ, 12:レイシ, 13:アラムシロ, 14:サルボウ, 15:ハイガイ, 16:マガキ, 17:ヤマトシジミ, 18:ハマグリ, 19:カガミガイ, 20:オキシジミ, 21:シオフキ.

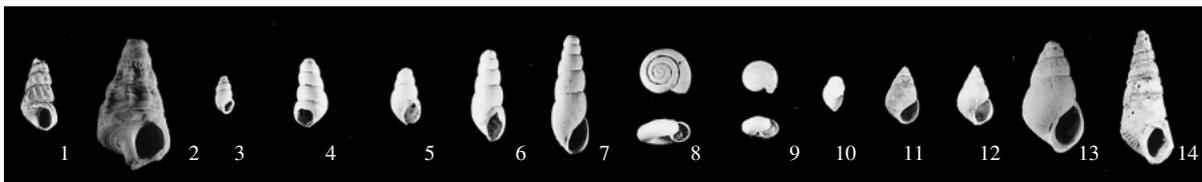


写真2 微小貝類 (縮尺:3倍大)

1:イボウミニナ, 2:ヘナタリ, 3:ニホンケシガイ, 4:キセルガイ科, 5:マルオカチョウジガイ, 6:オカチョウジガイ, 7:ホソオカチョウジガイ, 8:ヒメコハクガイ, 9:ヒメコハクガイ, 10:ホラアナミジンナ, 11:カワザンショウガイ, 12:ヘソカドガイ, 13:マキミヅスズメツボ, 14:シマハマツボ.

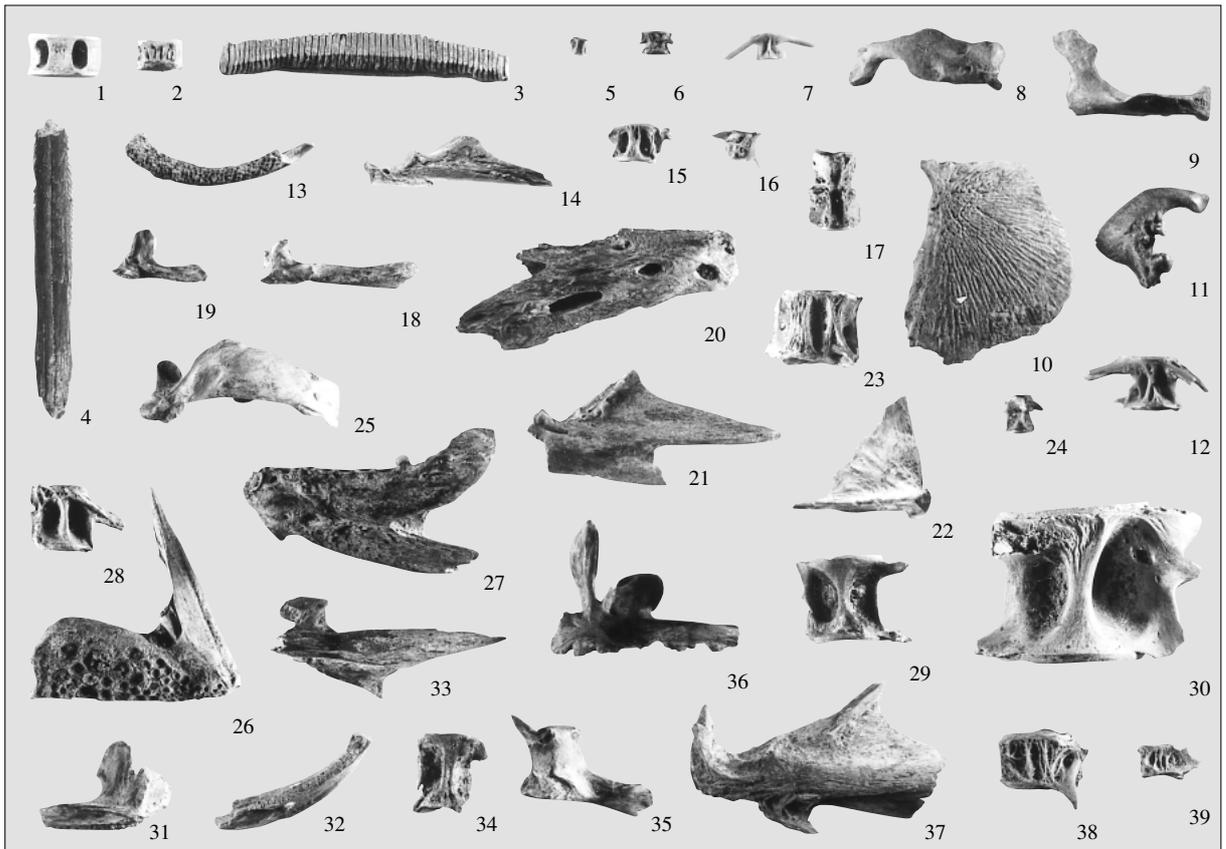


写真3 魚類 (縮尺:実大)

1・2:軟骨魚類脊椎骨, 3:エイ類歯板, 4:同尾棘, 5:マイワシ脊椎骨, 6:アユ脊椎骨, 7:フナ属脊椎骨, 8:コイ科主上顎骨 r, 9:同歯骨 r, 10:同主鰓蓋骨 l, 11:同咽頭骨 r, 12:同脊椎骨, 13:ナマズ歯骨 l, 14:同角骨 r, 15:同脊椎骨, 16:ウナギ脊椎骨, 17:ボラ科脊椎骨, 18:スズキ主上顎骨 l, 19:同前上顎骨 l, 20:同歯骨 r, 21:同角骨 r, 22:同方骨 r, 23:同脊椎骨, 24:マアジ脊椎骨, 25:クロダイ主上顎骨 l, 26:同前上顎骨 l, 27:同歯骨 l, 28:タイ科脊椎骨, 29:カツオ脊椎骨, 30:マグロ脊椎骨, 31:コチ科前上顎骨 r, 32:同歯骨 r, 33:同角骨 l, 34:同脊椎骨, 35:ヒラメ科主上顎骨 l, 36:同前上顎骨 l, 37:同角骨 r, 38:同脊椎骨, 39:カレイ科脊椎骨.

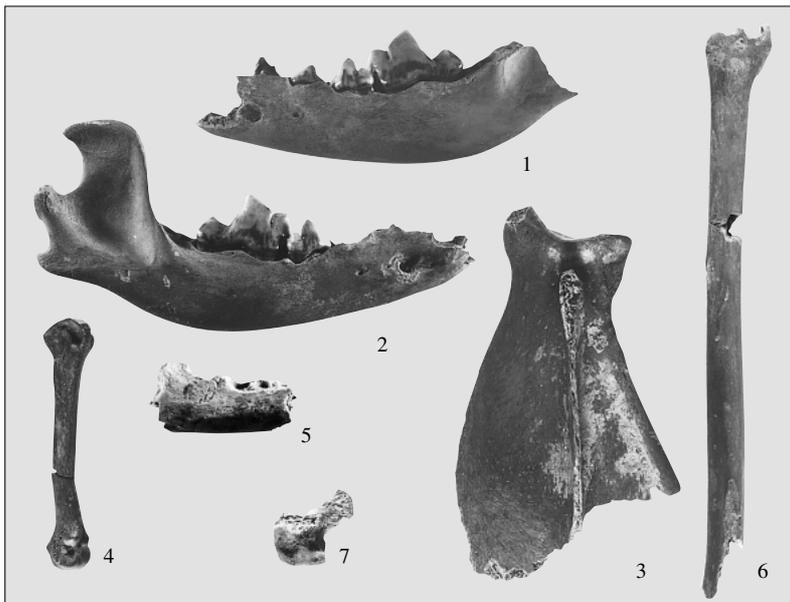


写真4 哺乳類1 (縮尺:3分の2)

1・2:イヌ下顎骨 l・r, 3:同肩胛骨 r, 4:同中手骨 r, 5:キツネ下顎骨 l, 6:同脛骨 r, 7:同距骨 l.



写真8 鳥類 (縮尺:実大)

1:カモ類鳥口骨 r, 2:同肩胛骨 l, 3:同中手骨 l, 4:同脊椎骨.



写真5 哺乳類2 (縮尺3分の2)

1: イノシシ下顎骨 l r (♂), 2: 同下顎骨 r, 3: 同下顎遊離歯 l・C (♂), 4: 同上腕骨 l, 5: 同橈骨 r, 6: 同尺骨 l, 7: 同寛骨 l, 8: 同大腿骨 l, 9: 同脛骨 l, 10: 同距骨 l, 11: 同踵骨 r, 12: 同環椎, 13: 同頸椎, 14: 同腰椎 l.

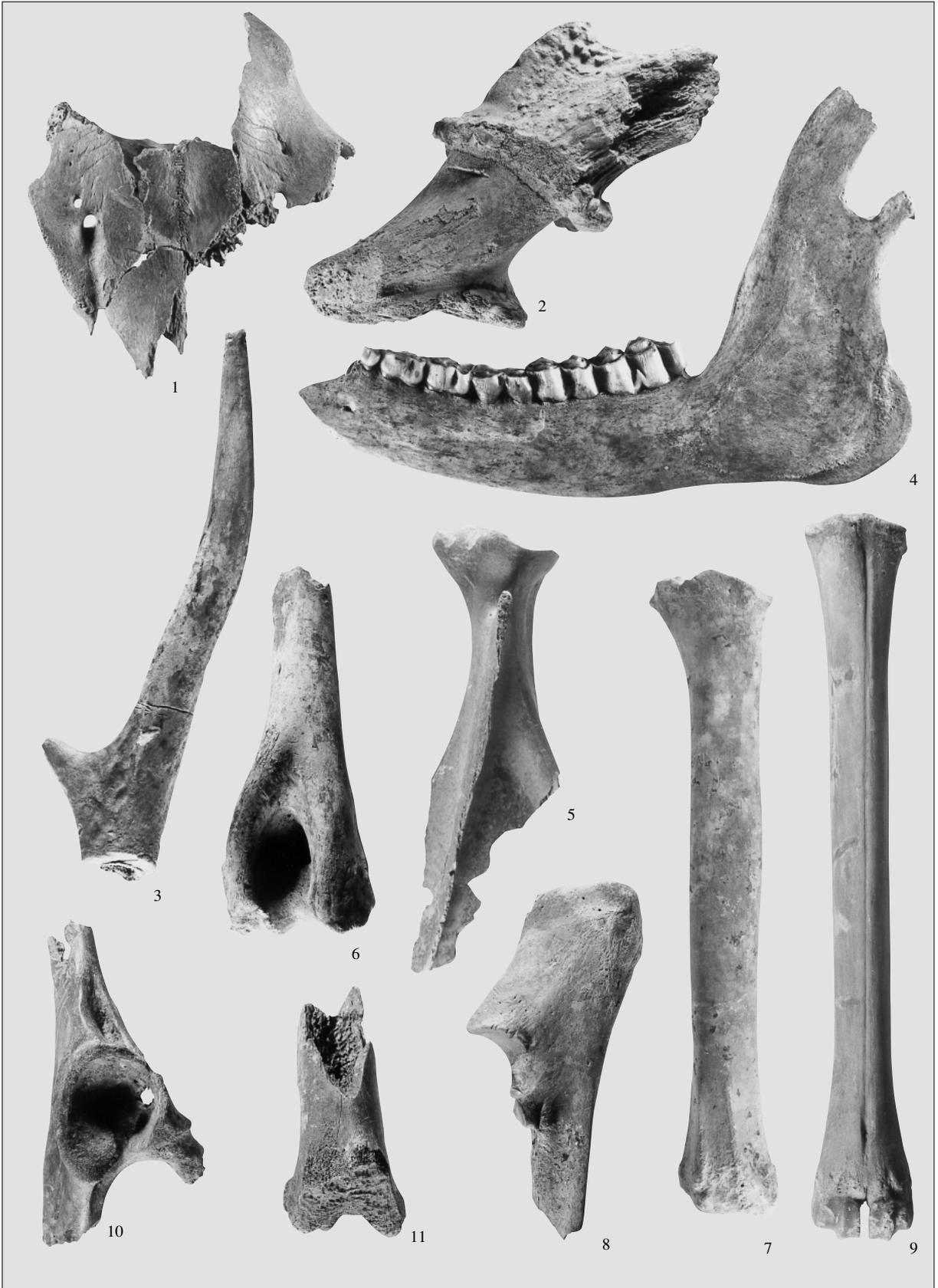


写真6 哺乳類3 (縮尺3分の2)

1: シカ前頭骨, 2: 同角坐+角坐骨 l, 3: 鹿角 l (第4枝分岐部), 4: 同下顎骨 l, 5: 同肩胛骨 r, 6: 同上腕骨 l, 7: 同橈骨 r, 8: 同尺骨 l, 9: 同中手骨 l, 10: 同寛骨 r, 11: 大腿骨 r.



写真7 哺乳類4 (縮尺3分の2)

1: シカ脛骨 r, 2: 同距骨 l, 3: 同踵骨 l, 4: 同基節骨, 5: 同中節骨, 6: 同末節骨, 7: 同環椎, 8: 同軸椎, 9: 同頸椎, 10: 同胸椎,

付載 2. 西志賀遺跡資料調査報告

— 名古屋市博物館所蔵「吉田富夫コレクション」の資料実測 —

永井宏幸・田原和美（名古屋市見晴台考古資料館）

西志賀遺跡の発見は、昭和5（1930）年、吉田富夫による現地踏査が発端である。その後、10数回におよぶ発掘調査は、1000 m²に満たない地区で進められてきた*。今回報告する資料は、名古屋市博物館が所蔵する「吉田富夫コレクション（以下、吉田コレクションと略する）」の一部である。吉田コレクションは、名古屋市博物館において常設展・企画展**などで展示公表されている。今回は、コンテナ約20箱（2,160点***）の中から、最も資料数の多い弥生時代前期の土器113点を実測し、掲載することにした。

弥生時代前期の土器のうち既報告資料（吉田1934aほか）は、約30点ある。今回報告する113点のうち、既報告資料の再実測は11点ある。また、すべての資料が吉田コレクションとして名古屋市博物館が所蔵しているわけではない。例えば、古くから吉田をはじめ多くの研究者が紹介した遠賀川系土器の壺と甕（名古屋市博1988/P61-410・P59-377）については南山大学所蔵品である。逆に、樋口敬治（独峯）旧蔵資料（2-13・14・23・43・61）なども含まれている。

今回報告する資料を概観すると、前期後葉（尾張第I-5～6様式）を中心に、若干前期前半（尾張第I-2～3様式）の資料（12・13・31・60・61）が含まれている。これら古い時期の資料群は、平手町遺跡において見られない。一方、明治大学所蔵資料は前期中葉（尾張第I-4様式）を中心に、奈良文化財研究所所蔵資料は前期後葉（尾張第I-5～6様式）を中心に報告されている****。両者とも若干の前期前半資料を含む。これらの状況から、西志賀遺跡の中心は前期後半の資料が中心であるが、前期前半に遡る資料も含まれていることが注目できる。すなわち、朝日遺跡の最古段階に相当する資料群が存在し、現状の資料では、ほぼ同時期に両遺跡の出現を捉えておきたい。問題は、縄文時代晩期終末（突帯紋期）に遡って遺跡が出現しているかである。蛇足ながら吉田コレクションに突帯紋系土器は含まれていない。

今回は、名古屋市博物館のご好意により所蔵資料の実測および報告を快諾いただいた。今回の目的は資料の共有化を最優先とし、西志賀遺跡資料の全容を再評価するための一助となれば幸いである。今後は、他の既存資料も対象として、西志賀遺跡を解明していきたい。

吉田コレクションを寄贈された吉田緑氏をはじめ、資料の実測作業にご協力いただいた、名古屋市博物館の梶山勝氏、浅野弘子氏に記して感謝いたします。

*吉田の発掘調査内容などは紅村弘との共著（吉田・紅村1958）に詳しい。他の調査機関との位置関係については、「1.5 西志賀遺跡調査の軌跡」を参照されたい。
**名古屋市博物館編1982『吉田富夫コレクション』（第6回収蔵品展図録）、名古屋市博物館編1988『特別展考古学の風景』
***名古屋市博物館編1996『名古屋市博物館蔵品目録』第1分冊総集・考古編に登録されている点数。
****明治大学資料は1961杉原荘介・岡本勇『愛知県西志賀遺跡』『日本農耕文化の生成』本文編東京堂、奈良文化財研究所資料は2002『愛知県西志賀貝塚資料』【山内清男考古資料13】（奈良文化財研究所史料第58冊）を参考とした。

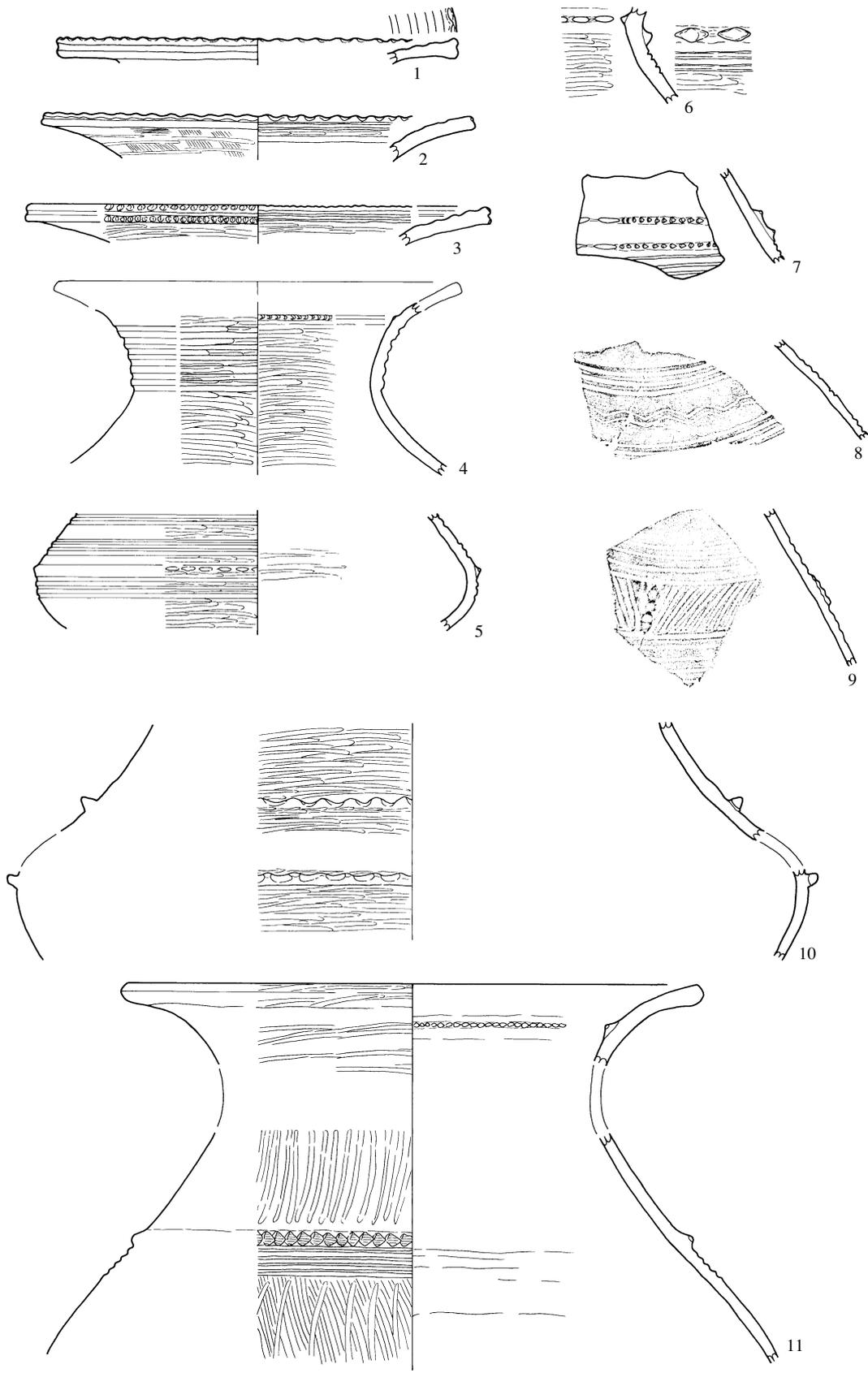


図1 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料(1) S=1:4

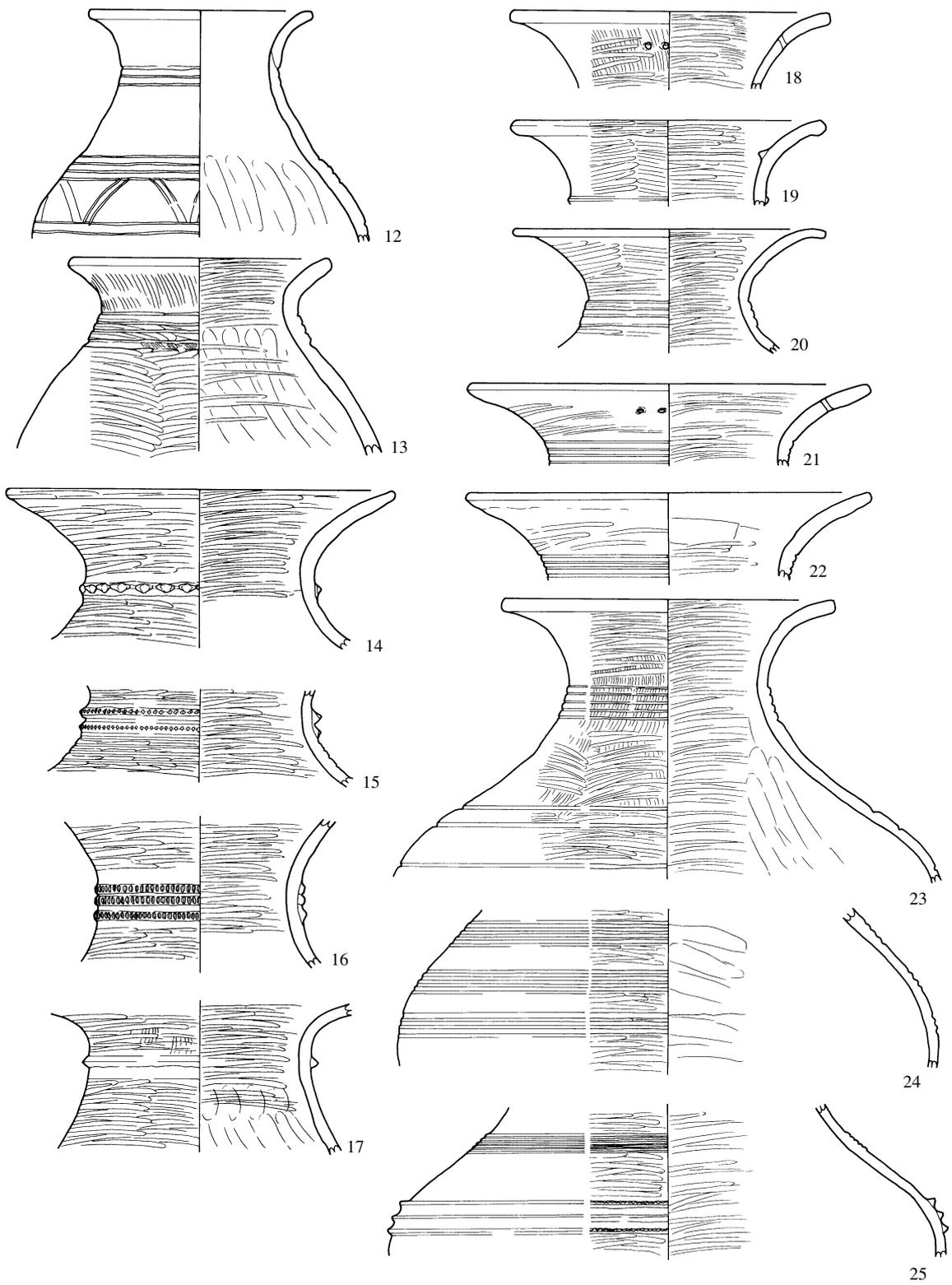


図2 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料(2) S=1:4

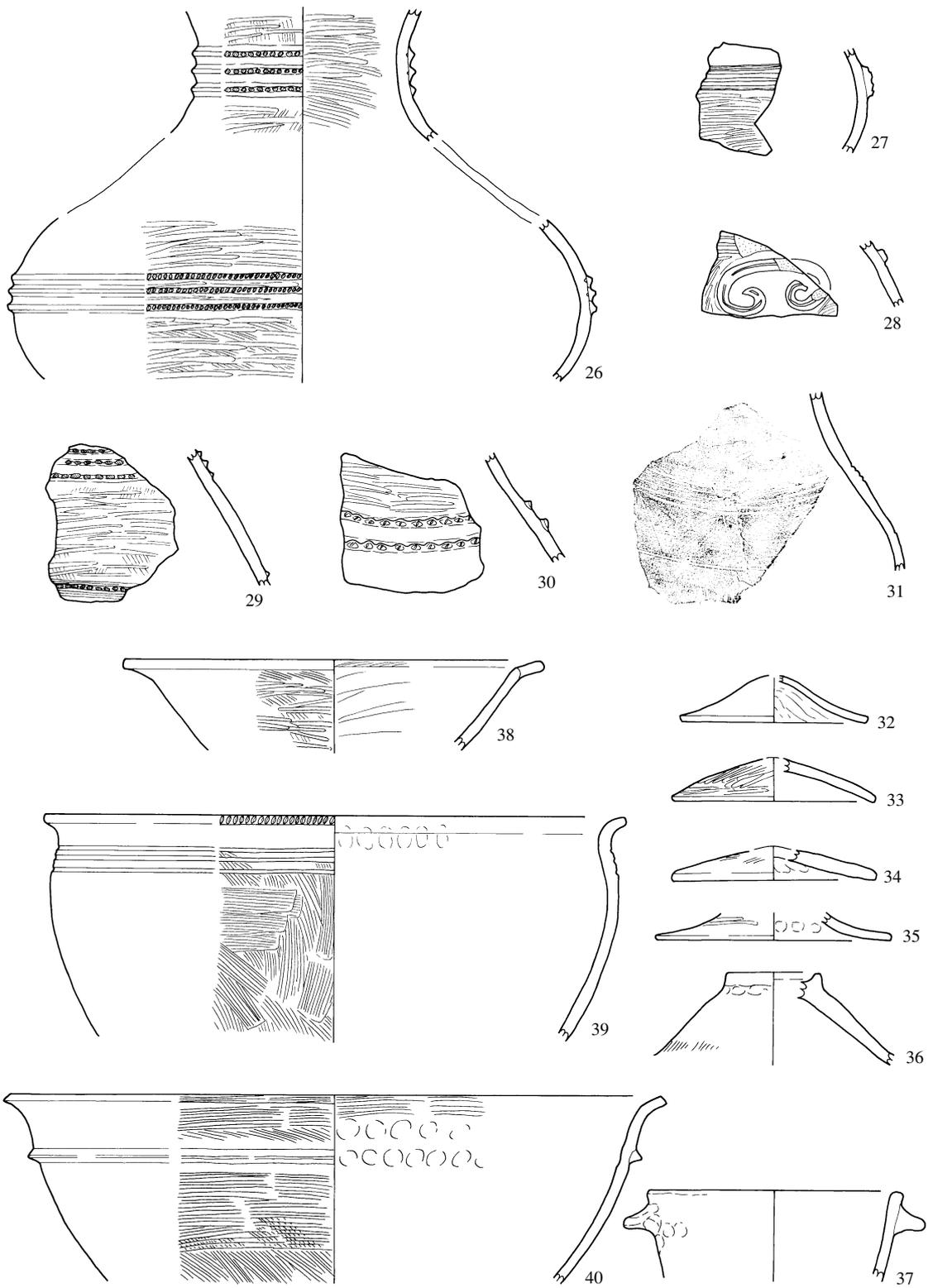


図3 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料(3) S=1:4

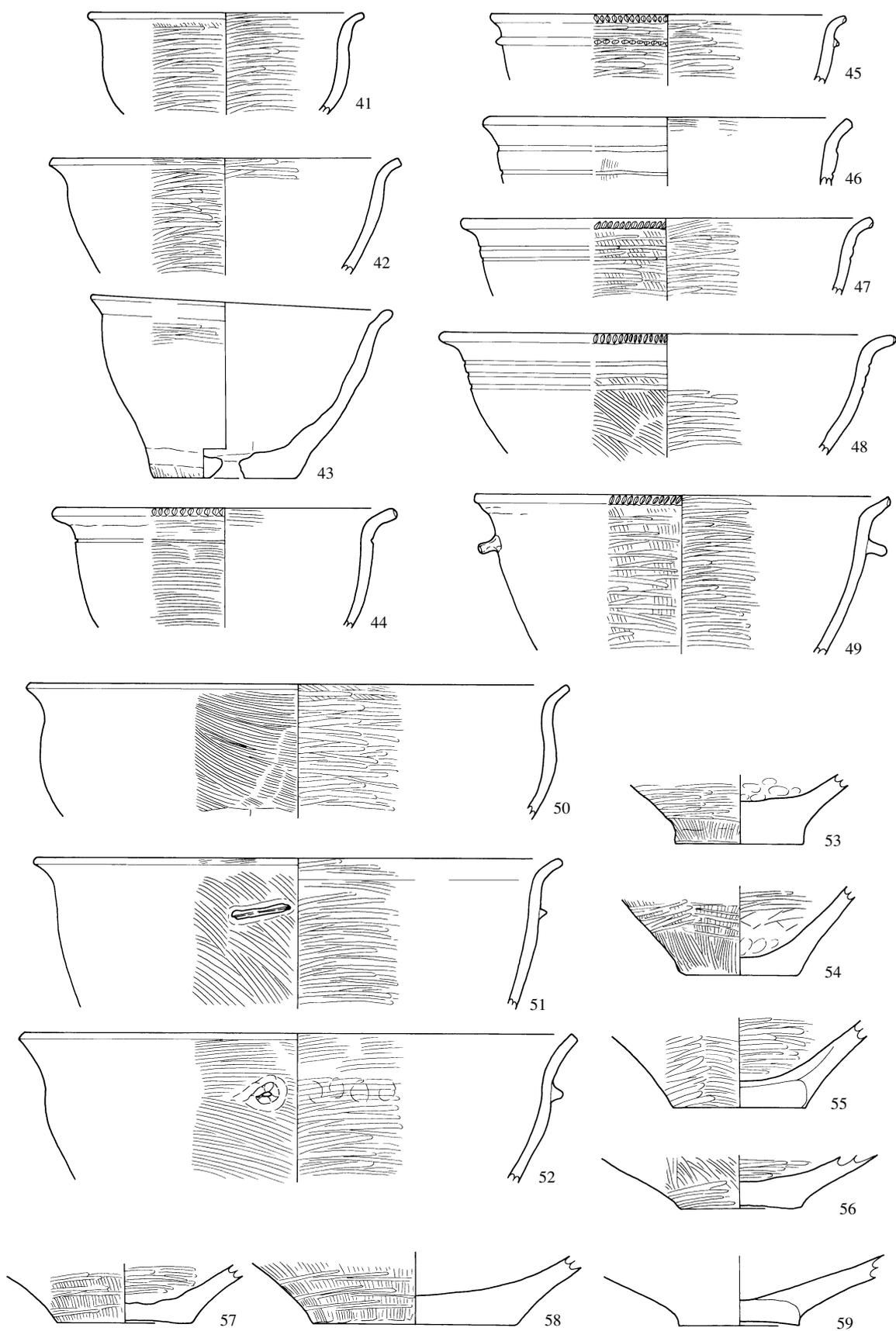


図4 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料(4) S=1:4



図5 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料(5) S=1:4

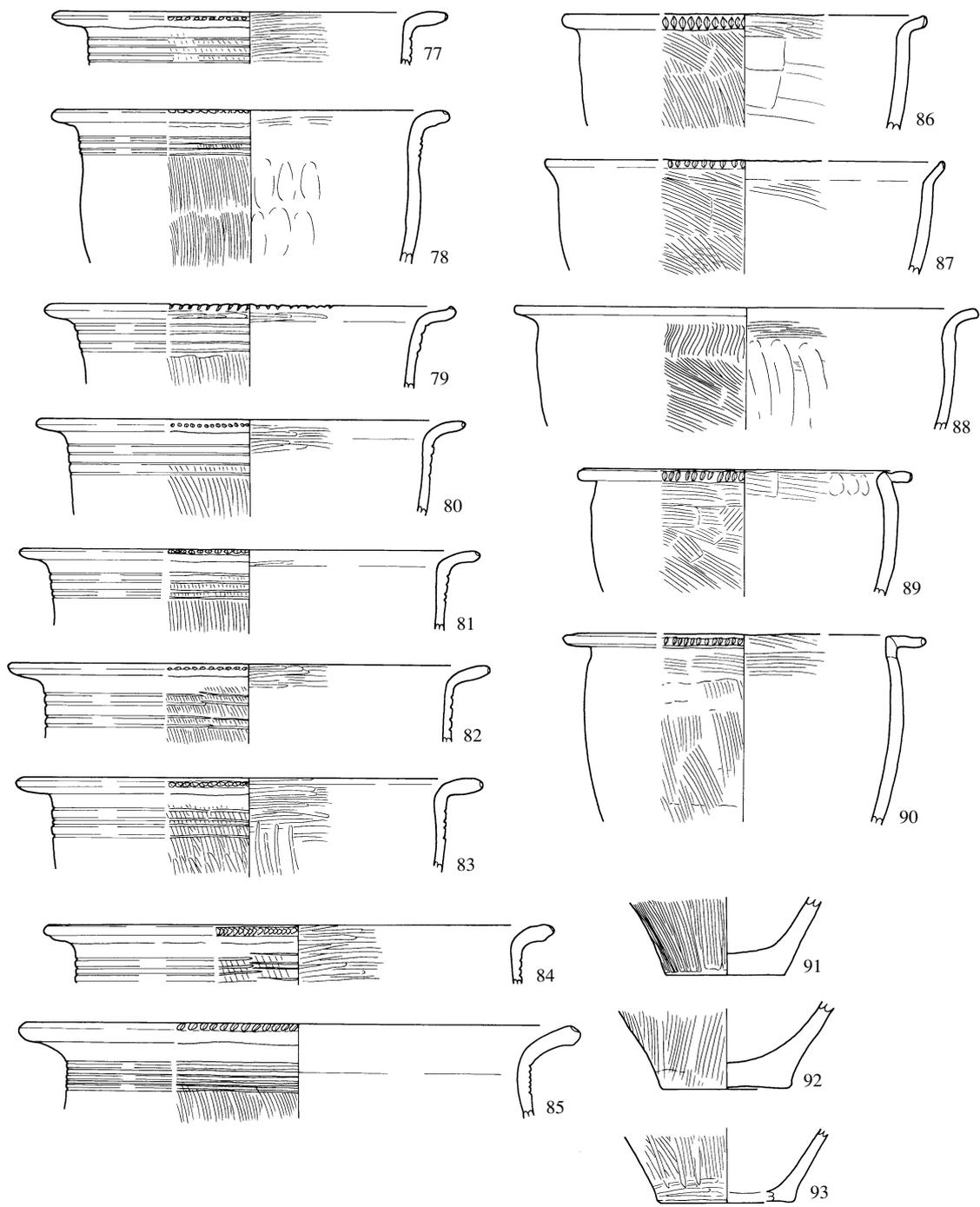


図6 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料(6) S=1:4

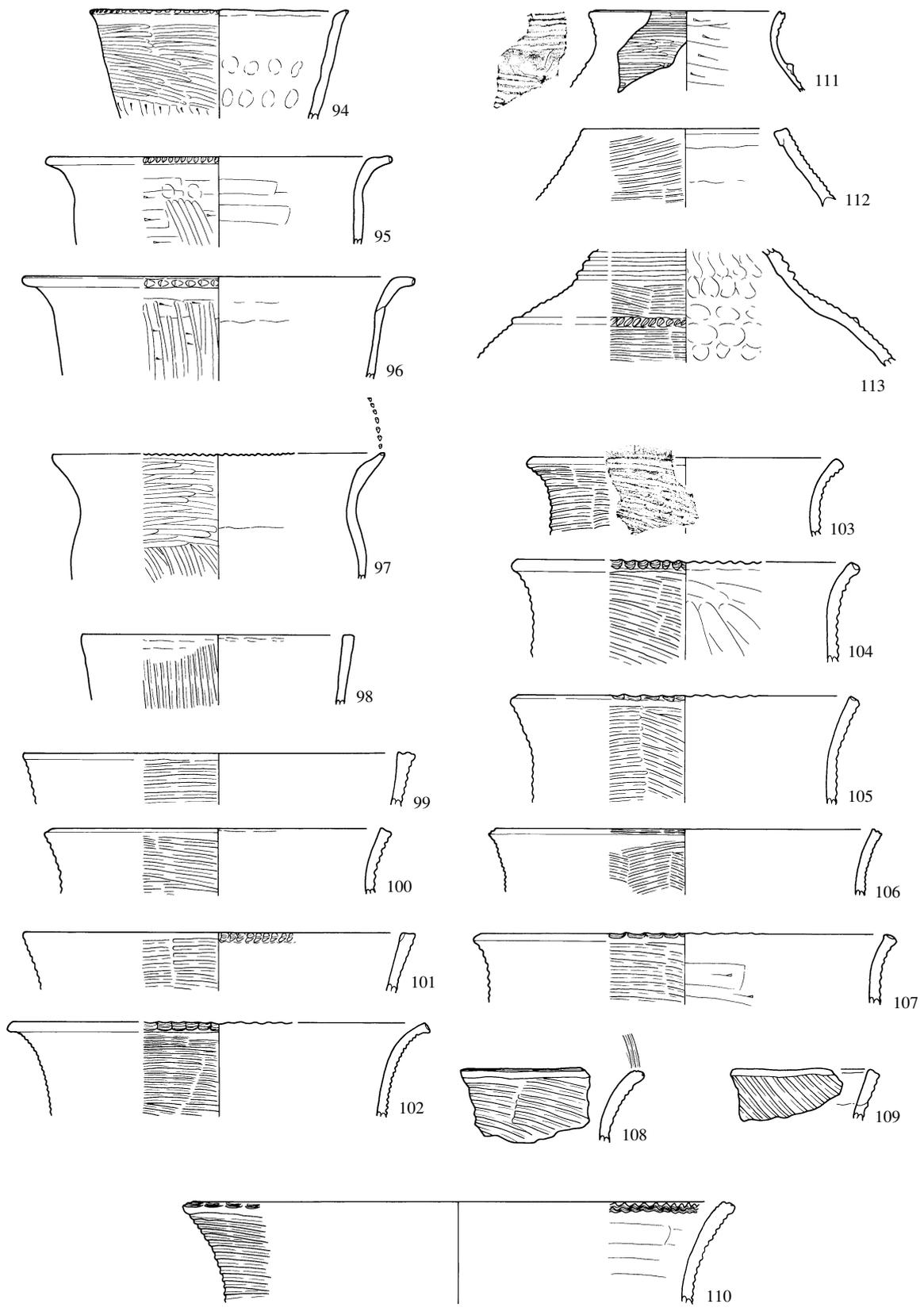


図7 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料(7) S=1:4

表1 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料一覧表(1)

図版番号	器種	系統・分類	名古屋市博物館箱番号	【採集(出土)年月日】・既報告文献・備考
1	壺	遠賀川系土器B類	20-9	雲母混。
2	壺	遠賀川系土器B類	20-9	藤沢・小林1934第2図 雲母なし。
3	壺	遠賀川系土器B類	20-13	雲母混。
4	壺	遠賀川系土器B類	20-14	
5	壺	遠賀川系土器B類	20-14	雲母多混。
6	壺	遠賀川系土器B類	20-14	雲母混。
7	壺	遠賀川系土器B類	20-14	
8	壺	遠賀川系土器B類	21	【1932.03.04・05】と【1936.11.01】(樋口旧蔵)が接合。吉田1934a第5図5/森本・小林1938第17図10/吉田1941第1図2
9	壺	遠賀川系土器B類	21	【1931.11.13】 藤沢・小林1934第10図/吉田1934b第12図/森本・小林1938第17図17/吉田1941第1図7
10	壺	遠賀川系土器B類	20-14	黒色塗布による紋様?所々赤彩残る。
11	壺	遠賀川系土器B類	20-14	【1936.11.07】(樋口旧蔵)
12	壺	遠賀川系土器A類	20-1	【1935.02.03】と【1936.11.01】(樋口旧蔵)が接合。小林・杉原1964・68P151-1/森本・小林1938第30-O1
13	壺	遠賀川系土器A類	21	【1936.11.01】(樋口旧蔵) 頸部横位沈線帯下位にハケによる削出。
14	壺	遠賀川系土器A類	20-14	【1936.11.01】(樋口旧蔵) 頸部に指腹押圧突帯。
15	壺	遠賀川系土器A類	20-14	
16	壺	遠賀川系土器A類	20-14	内外面に赤彩。
17	壺	遠賀川系土器A類	20-14	
18	壺	遠賀川系土器A類	20-13	口縁部下に焼成前穿孔。
19	壺	遠賀川系土器A類	20-6	【1937.07.09】(斎藤旧蔵) 口縁部内面突帯は注ぎ口状?
20	壺	遠賀川系土器A類	20-1	【1931.12.17】(新川工事出土)
21	壺	遠賀川系土器A類	20-14	口縁部の孔は焼成前穿孔。
22	壺	遠賀川系土器A類	20-9	【1934.03.04】頸部の横位沈線帯の上下はハケによる削出し痕がみえる。
23	壺	遠賀川系土器A類	20-15	【1936.11.01】(樋口旧蔵)
24	壺	遠賀川系土器A類	21	雲母混。
25	壺	遠賀川系土器A類	21	【1936.11.01】(樋口旧蔵)横位沈線帯と横位貼付突帯の間に赤彩が残る。
26	壺	遠賀川系土器A類	20-14	藤沢・小林1934第6図 胴部黒色塗布?雲母混。
27	壺	遠賀川系土器A類	20-14	
28	壺	遠賀川系土器A類	20-14	小栗1934P23/森本・小林1938第17図12
29	壺	遠賀川系土器A類	20-14	突帯上の押圧は二枚貝頂部による?
30	壺	遠賀川系土器A類	20-14	突帯上の刻みは指先(爪痕)による。
31	壺	遠賀川系土器A類	21	【19320304・05】 【1934.03.04】 森本1933図1/吉田1934b第5図10/森本・小林1938第17図11/吉田1941第1図4
32	壺蓋	遠賀川系土器A類	20-10	
33	壺蓋	遠賀川系土器A類	20-7	【1932.03.04・05】
34	壺蓋	遠賀川系土器A類	20-9	
35	壺蓋	遠賀川系土器A類	20-7	【1932.03.04・05】
36	甕蓋	遠賀川系土器A類	20-10	【1935.01.12】「D地点発掘 II(1~2尺)」の注記あり。内面袖部付近、スス・ヨゴレ付く。
37	鉢	遠賀川系土器A類	20-12	1対の把手が付く。煮炊き痕あり。
38	高杯	遠賀川系土器A類	20-5	【1931.12.19】
39	鉢	遠賀川系土器A類	20-12	図版番号48と同一個体か?

表2 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料一覧表(2)

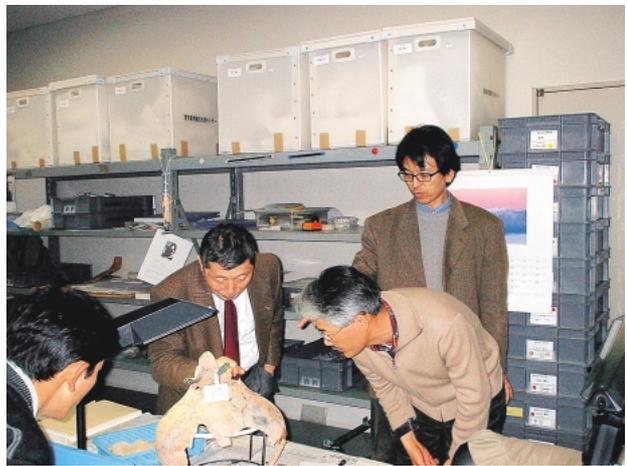
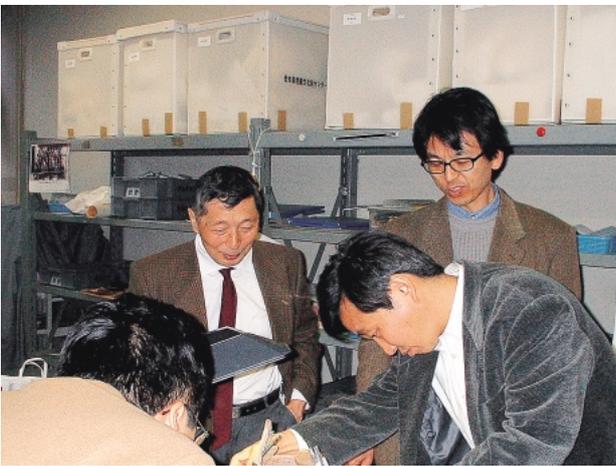
図版番号	器種	系統・分類	名古屋市博物館番号	【採集(出土)年月日】・既報告文献・備考
40	鉢	遠賀川系土器A類	20-8	口縁部周辺内外面に赤彩あり。
41	鉢	遠賀川系土器A類	20-1	【1931.12.17】
42	鉢	遠賀川系土器A類	20-10	【1935.01.12】 「D地点発掘 II (1~2尺)」の注記あり。
43	鉢	遠賀川系土器A類	20-20	【1932.01.20】 (樋口旧蔵) 小林・杉原1964・68PI51-18 低部に焼成後穿孔あり。
44	鉢	遠賀川系土器A類	20-1	【1930.06.17】 内面アバタ状剥離。
45	鉢	遠賀川系土器A類	20-2	【1936.06.30】 内面に赤彩?
46	鉢	遠賀川系土器A類	20-2	
47	鉢	遠賀川系土器A類	20-12	
48	鉢	遠賀川系土器A類	20-9	【1934.03.04】 図版番号39と同一個体か?
49	鉢	遠賀川系土器A類	20-12	外面は粗雑なミガキ、内面は密なミガキ調整。
50	鉢	遠賀川系土器A類	20-6	【1937.07.09】 (藤沢旧蔵)
51	鉢	遠賀川系土器A類	20-12	
52	鉢	遠賀川系土器A類	20-9	【1934.03.04】
53	壺・鉢	遠賀川系土器A類	20-5	
54	壺・鉢	遠賀川系土器A類	20-5	【1931.12.22】
55	壺・鉢	遠賀川系土器A類	20-9	
56	壺・鉢	遠賀川系土器A類	20-9	
57	壺・鉢	遠賀川系土器A類	20-9	
58	壺・鉢	遠賀川系土器A類	20-5	
59	壺・鉢	遠賀川系土器A類	20-9	
60	甕	遠賀川系土器A類	20-2	【1930.06.30】 頸部有段甕。
61	甕	遠賀川系土器A類	20-12	【1936.11.01】 (樋口旧蔵) 頸部有段甕。雲母混。
62	甕	遠賀川系土器A類	20-12	
63	甕	遠賀川系土器A類	20-12	
64	甕	遠賀川系土器A類	20-12	微粒雲母混。
65	甕	遠賀川系土器A類	20-2	内面アバタ状剥離。
66	甕	遠賀川系土器A類	20-6	
67	甕	遠賀川系土器A類	20-12	
68	甕	遠賀川系土器A類	20-12	森本・小林1938第17図20
69	甕	遠賀川系土器A類	20-2	【1930.06.30】
70	甕	遠賀川系土器A類	20-2	【1930.06.30】
71	甕	遠賀川系土器A類	20-12	
72	甕	遠賀川系土器A類	20-12	
73	甕	遠賀川系土器A類	20-12	内面アバタ状剥離。雲母混。
74	甕	遠賀川系土器A類	20-1	【1931.12.17】
75	甕	遠賀川系土器A類	20-2	【1930.06.30】
76	甕	遠賀川系土器A類	20-12	【1930.06.30】
77	甕	遠賀川系土器B類	20-6	頸部の横位沈線は半截竹管状工具による。雲母混。
78	甕	遠賀川系土器B類	20-12	雲母多混。

表3 名古屋市博物館所蔵吉田富夫コレクション資料一覧表(3)

図版 番号	器種	系統・分類	名古屋市博 箱番号	【採集(出土)年月日】・既報告文献・備考
79	甕	遠賀川系土器B類	20-2	【1930.06.30】 頸部の横位沈線は半截竹管状工具による。
80	甕	遠賀川系土器B類	20-9	内面アバタ状剥離。頸部の横位沈線は半截竹管状工具による。
81	甕	遠賀川系土器B類	20-2	頸部の横位沈線は半截竹管状工具による。
82	甕	遠賀川系土器B類	20-2	【1930.06.30】 内面アバタ状剥離。頸部の横位沈線は半截竹管状工具による。
83	甕	遠賀川系土器B類	20-2	【1930.06.30】 雲母多く混。頸部の横位沈線は半截竹管状工具による。
84	甕	遠賀川系土器B類	20-6	頸部の横位沈線は半截竹管状工具による。雲母混。
85	甕	遠賀川系土器B類	20-2	【1930.06.30】 内面アバタ状剥離。頸部の横位沈線は半截竹管状工具による。
86	甕	遠賀川系土器A類	20-2	【1930.06.30】 雲母混。
87	甕	遠賀川系土器A類	20-2	【1930.06.30】
88	甕	遠賀川系土器A類	20-7	【1932.03.04・05】
89	甕	遠賀川系土器A類	20-2	【1930.06.30】 口縁に鐔状の刻み目突帯が付く。
90	甕	遠賀川系土器A類	20-12	口縁に鐔状の刻み目突帯が付く。
91	甕	遠賀川系土器A類	20-6	内面アバタ状剥離。
92	甕	遠賀川系土器A類	20-10	
93	甕	遠賀川系土器B類	20-9	底部にミガキ調整。
94	鉢	削痕系土器	20-14	胴部外面の調整は縦方向のケズリのち上位に横方向のミガキをおこなう。
95	甕	削痕系土器	20-12	
96	甕	削痕系土器	20-2	
97	深鉢	削痕系土器	20-12	内面アバタ状剥離。頸胴部の調整方向を変える。
98	深鉢	条痕紋系土器	20-2	二枚貝調整・施紋。
99	深鉢	条痕紋系土器	20-2	二枚貝調整・施紋。
100	深鉢	条痕紋系土器	20-2	【1930.06.30】 二枚貝調整・施紋。
101	深鉢	条痕紋系土器	20-2	二枚貝調整・施紋。
102	深鉢	条痕紋系土器	20-12	二枚貝調整・施紋。他に同一個体片あり。
103	深鉢	条痕紋系土器	20-5	二枚貝調整・施紋。
104	深鉢	条痕紋系土器	20-6	【1937.07.09】 (高藤旧蔵) 二枚貝調整・施紋。
105	深鉢	条痕紋系土器	20-2	【1930.06.30】 二枚貝調整・施紋。
106	深鉢	条痕紋系土器	20-6	二枚貝調整・施紋。
107	深鉢	条痕紋系土器	20-2	【1930.06.30】 二枚貝調整・施紋。
108	深鉢	条痕紋系土器	20-9	二枚貝調整・施紋。
109	深鉢	条痕紋系土器	20-9	二枚貝調整・施紋。
110	深鉢	条痕紋系土器	20-9	【1934.03.04・05】 二枚貝調整・施紋。
111	壺	浮線渦巻紋系土器	21	吉田・紅村1958第2図7
112	内傾口縁 土器	条痕紋系土器	20-1	【1930.07.20】 二枚貝使用。
113	壺	条痕紋系土器	20-14	条痕紋系土器と遠賀川系土器B類の折衷土器。頸部から胴部の調整は二枚貝条痕。雲母多混。

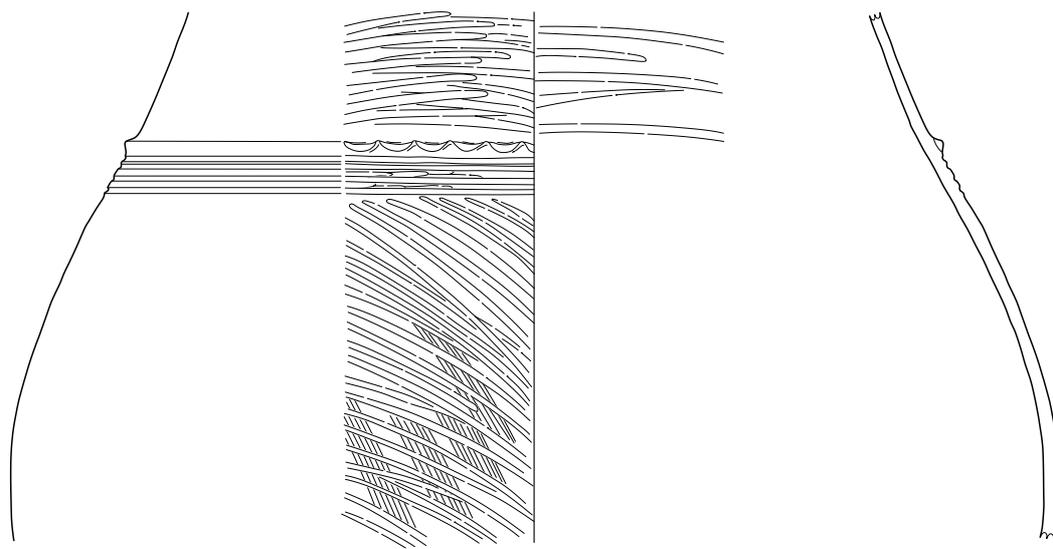
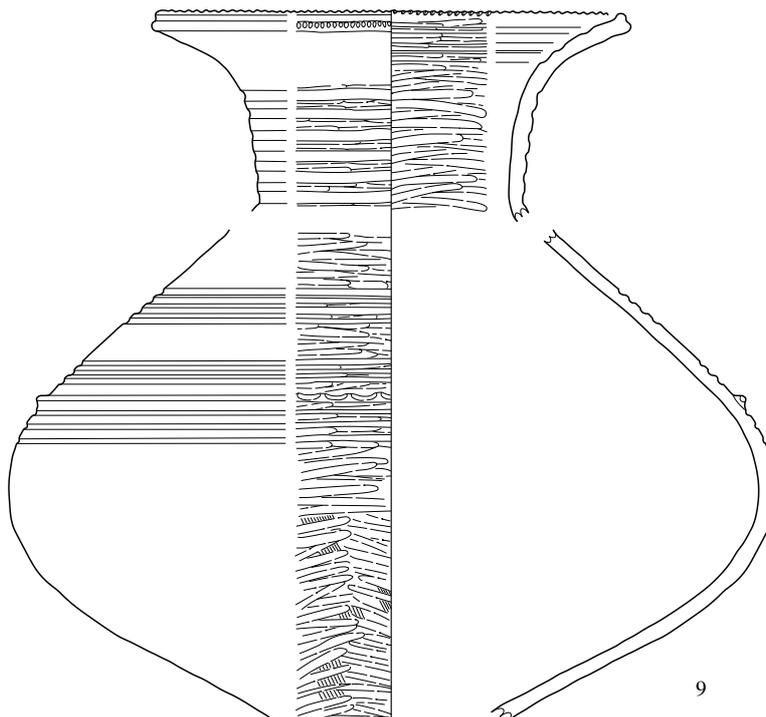
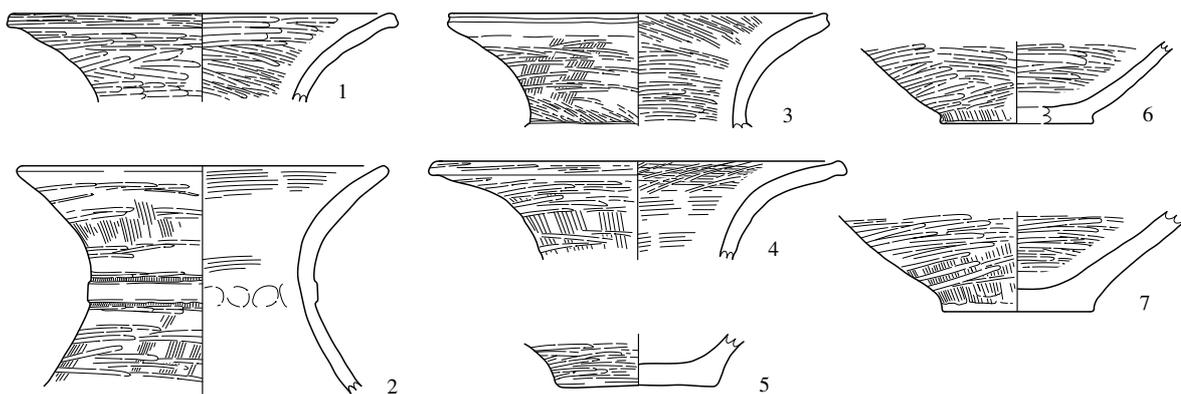
1933 森本六爾「弥生式土器葉状文の一新例一名古屋市西志賀貝塚発見品一」『考古学』第4巻第2号東京考古学会
 1934a 吉田富夫「尾張西志賀貝塚発見の土器に就いて」『考古学』第5巻第1号東京考古学会
 1934b 吉田富夫「尾張西志賀貝塚発見の土器に就いて(II)」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
 1934 藤沢一夫・小林行雄「尾張国西志賀の遠賀川系土器」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
 1934 小栗鐵次郎「名古屋西志賀貝塚(其二)」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第12愛知県
 1938 森本六爾・小林行雄「弥生式土器集成図録」『東京考古学会学報』第1冊東京考古学会
 1941 吉田富夫「尾張国西志賀に於ける初期弥生式文化の複合」『古代文化』第12巻第9号日本古代文化学会
 1964・68 小林行雄・杉原莊介「弥生式土器集成」本編東京堂出版

遺物図版



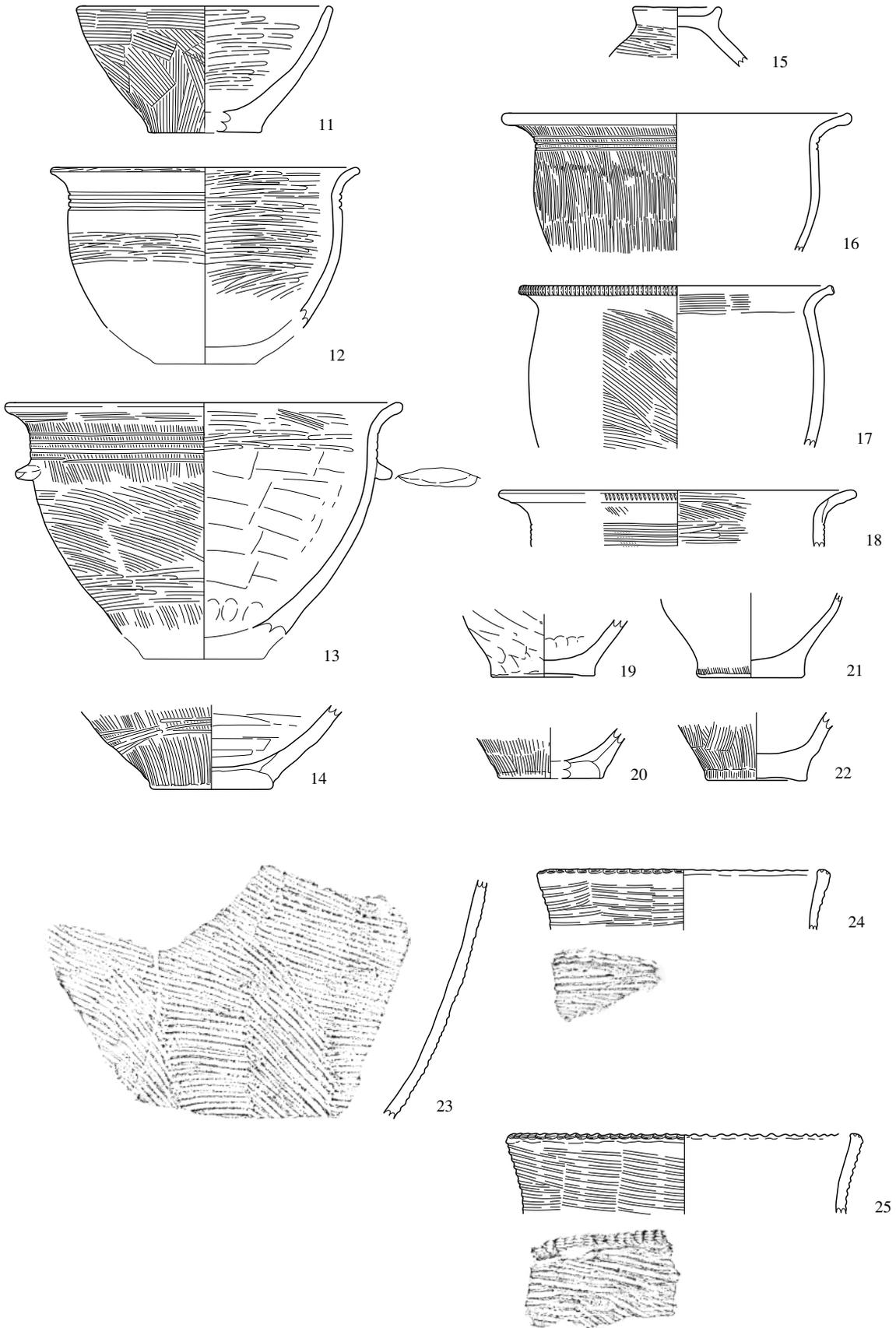
遺物実測作業と平手町遺跡指導の様子

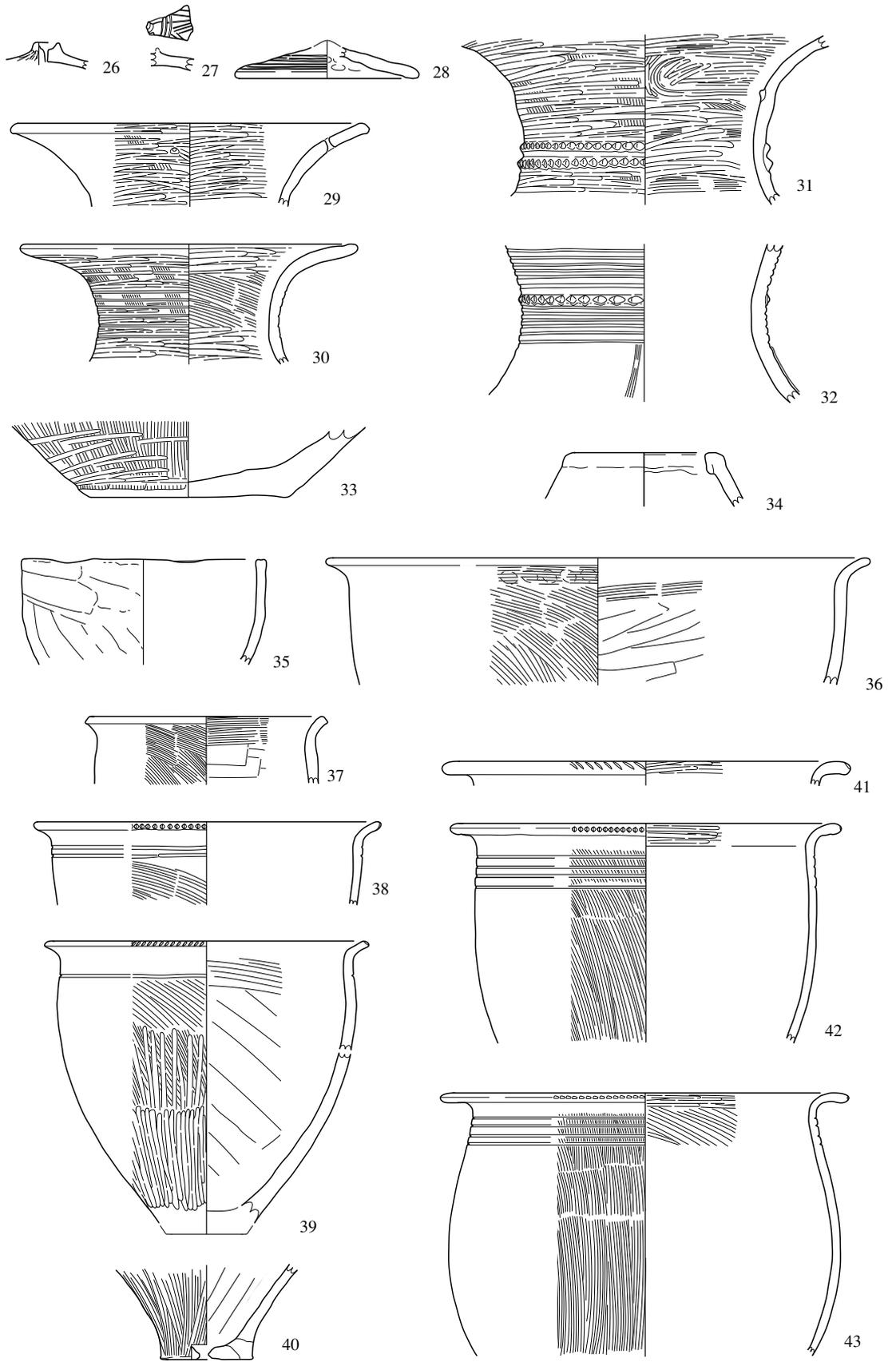
実測図および拓影図の縮率は、1 : 4 を基本とする。
ただし、図版 34 ~ 36 については、1 : 2 と 1 : 1 の縮率を含む。



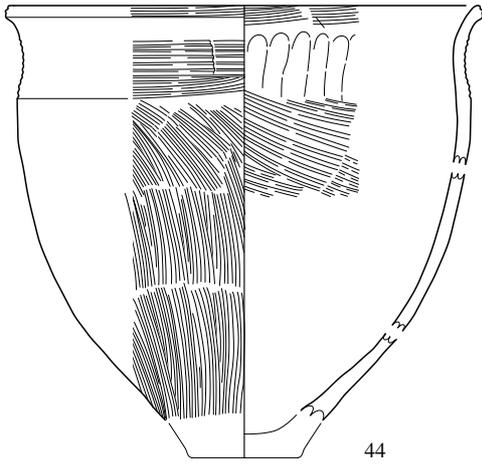
10

图版 02

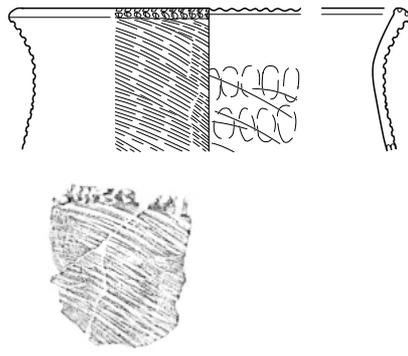




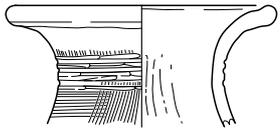
图版04



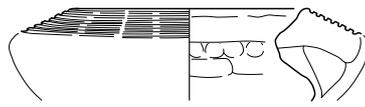
44



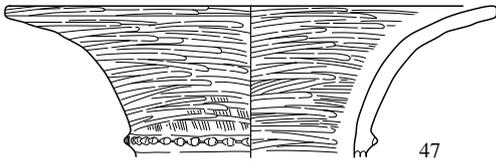
45



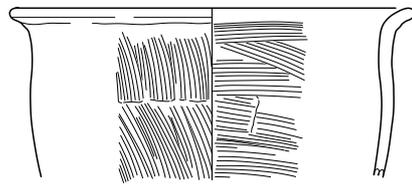
46



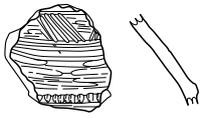
48



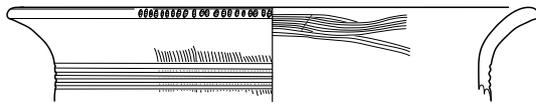
47



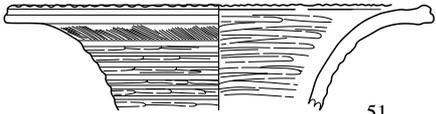
49



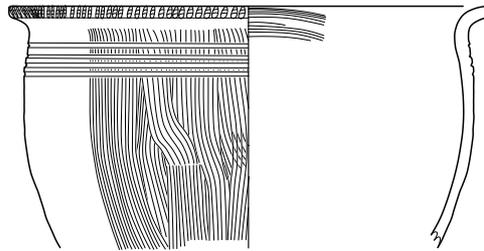
50



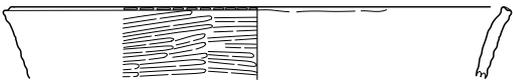
52



51



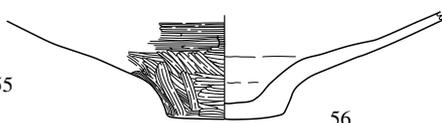
53



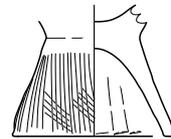
54



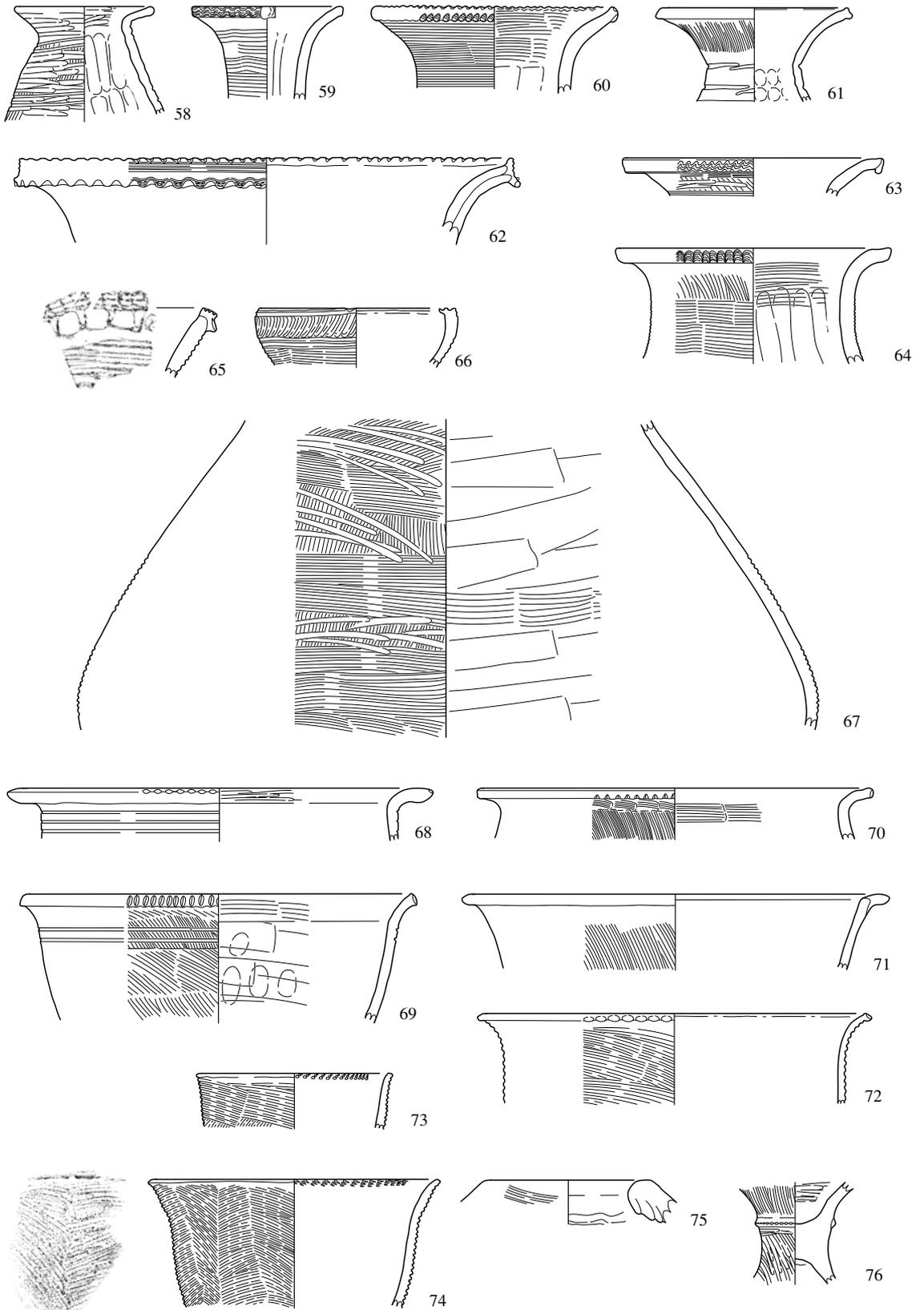
55



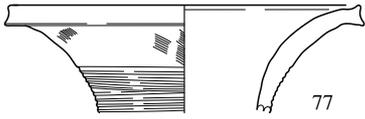
56



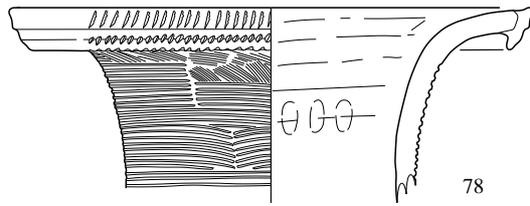
57



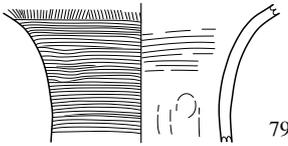
图版 06



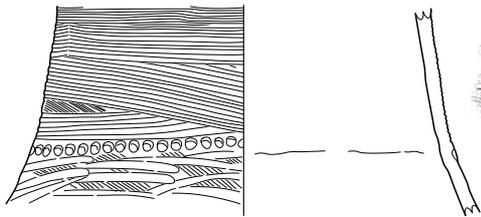
77



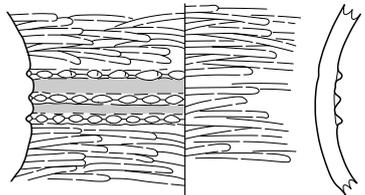
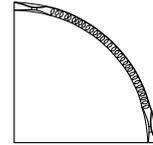
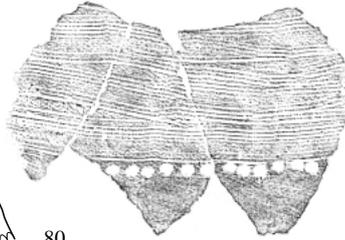
78



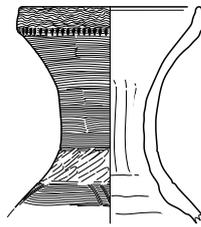
79



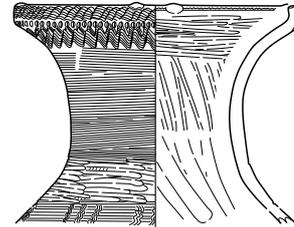
80



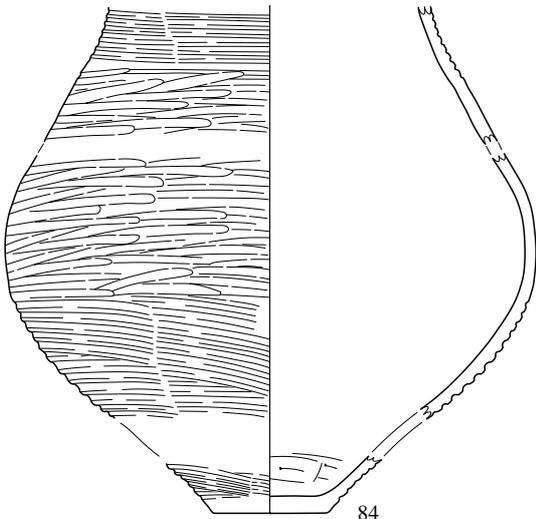
81



82



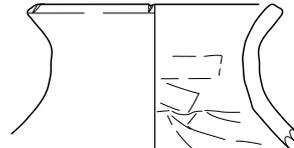
83



84



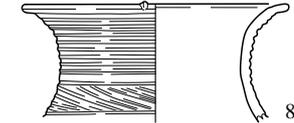
85



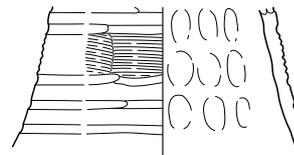
86



87

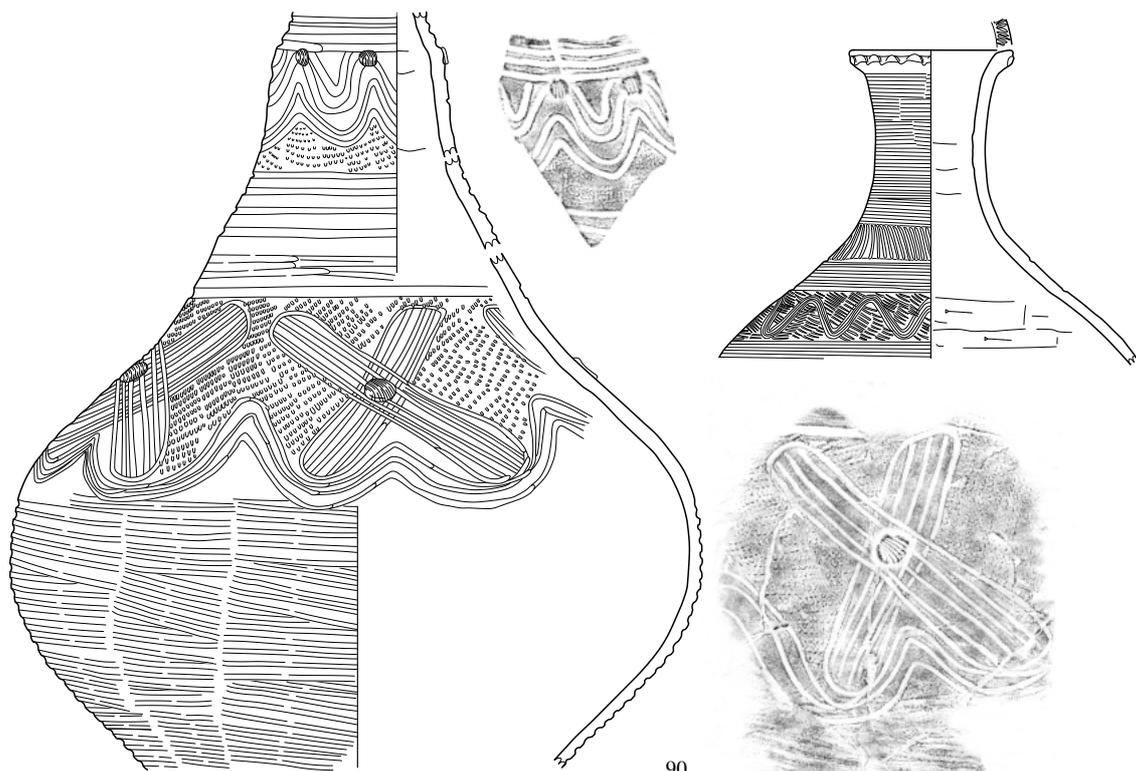


88



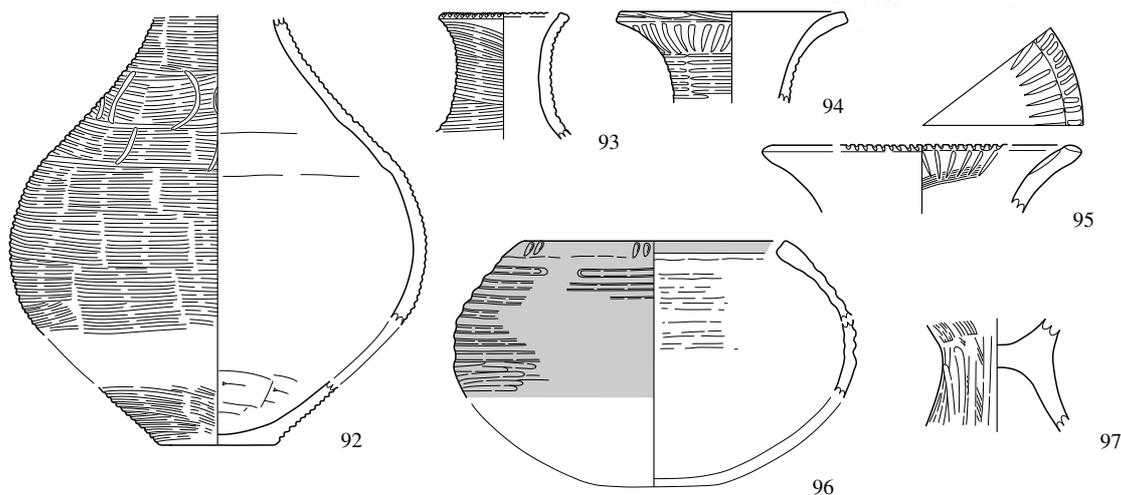
89





91

90



92

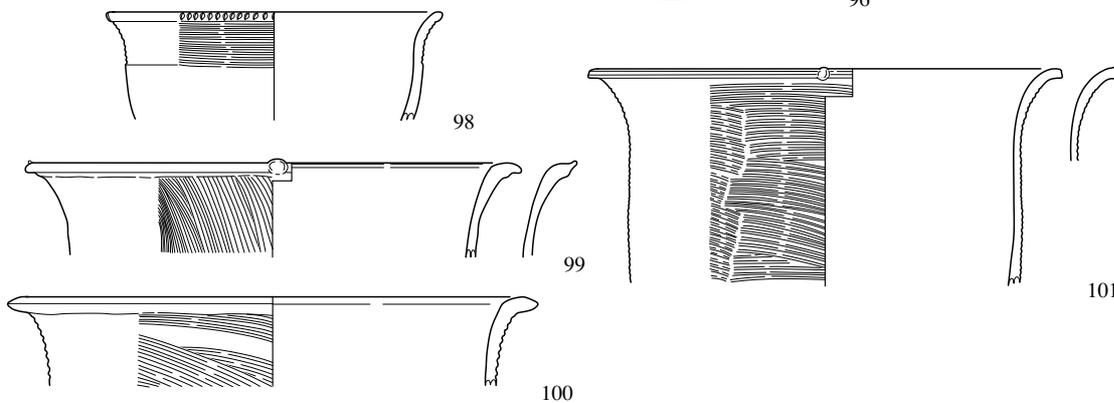
93

94

95

96

97



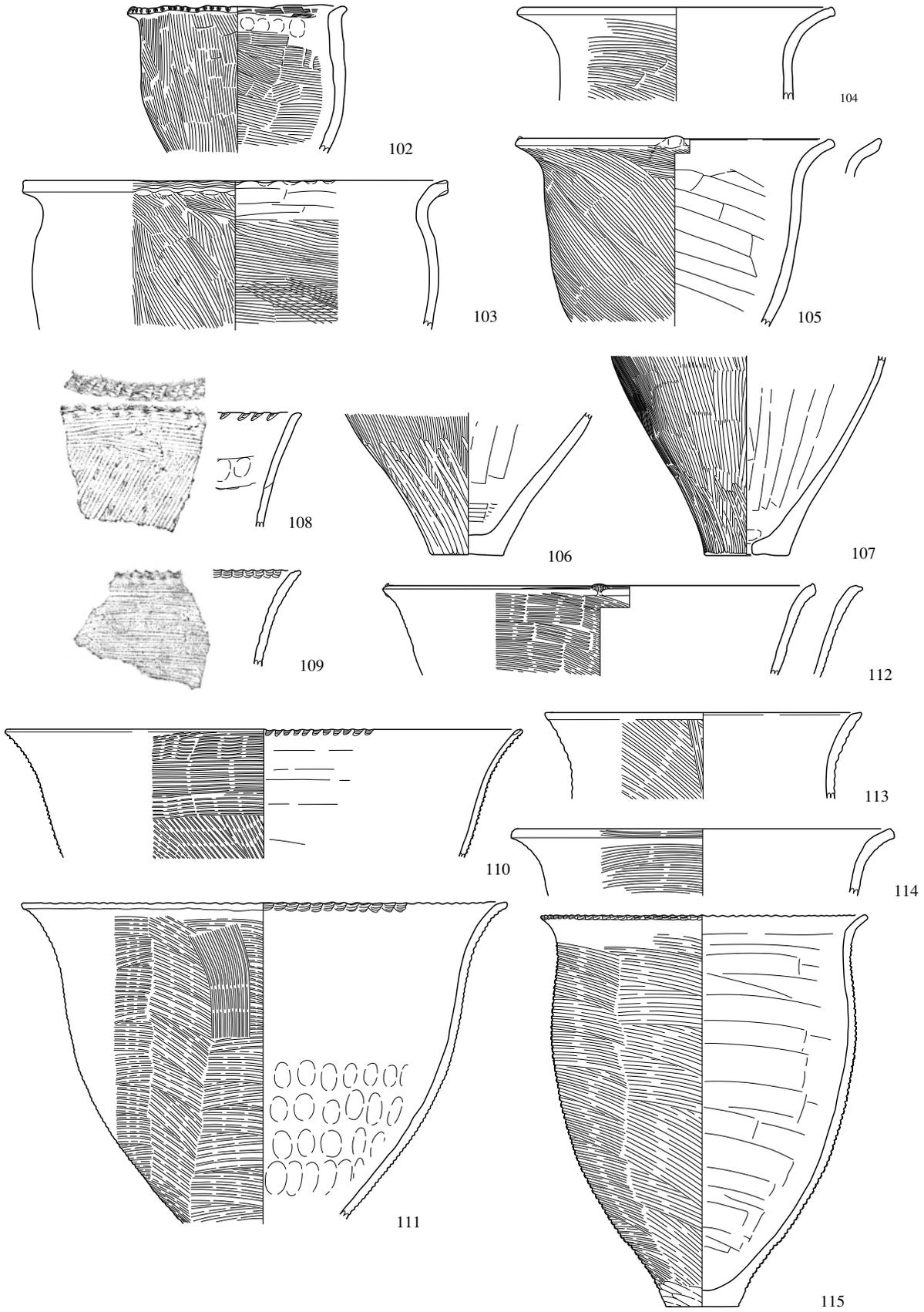
98

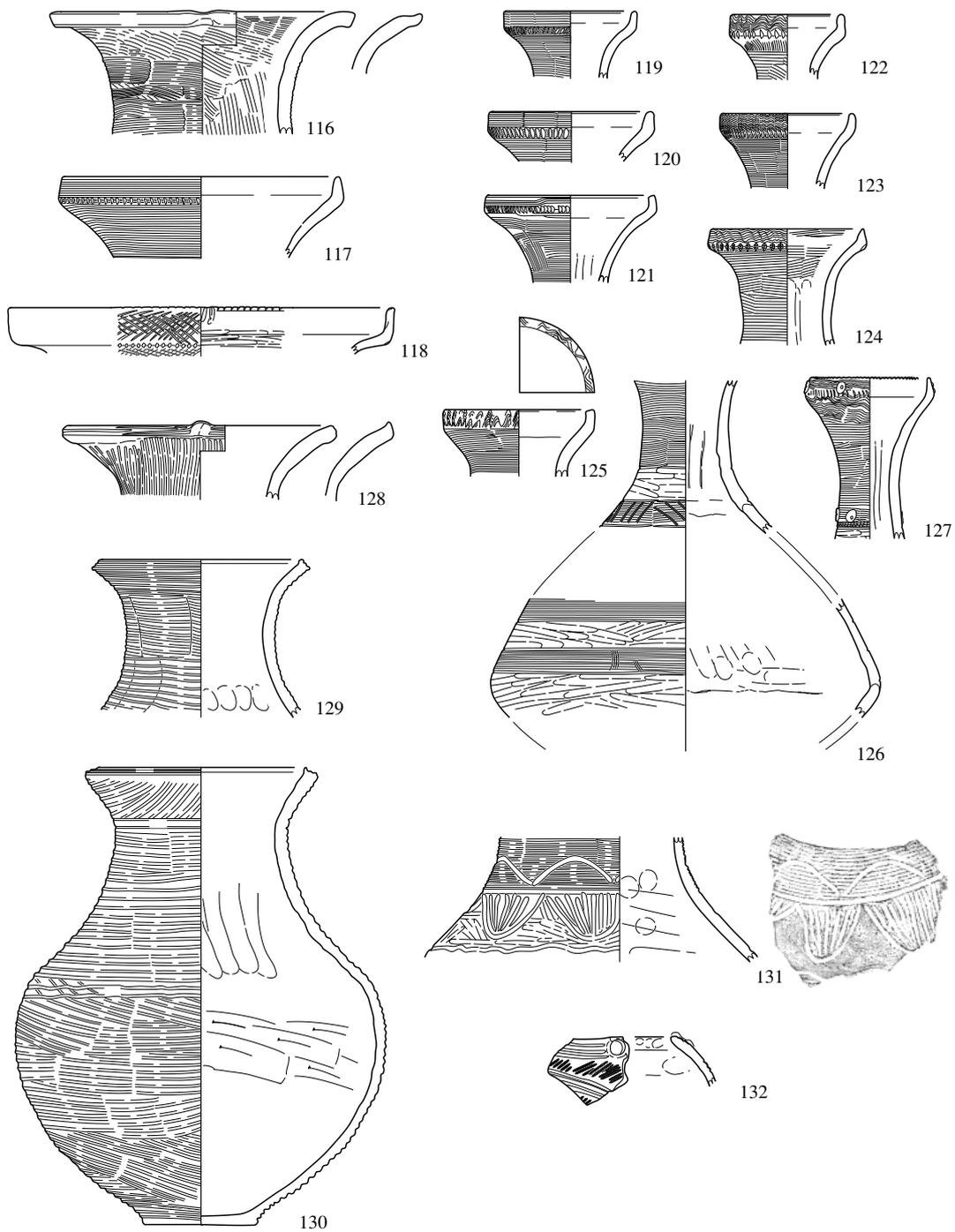
99

100

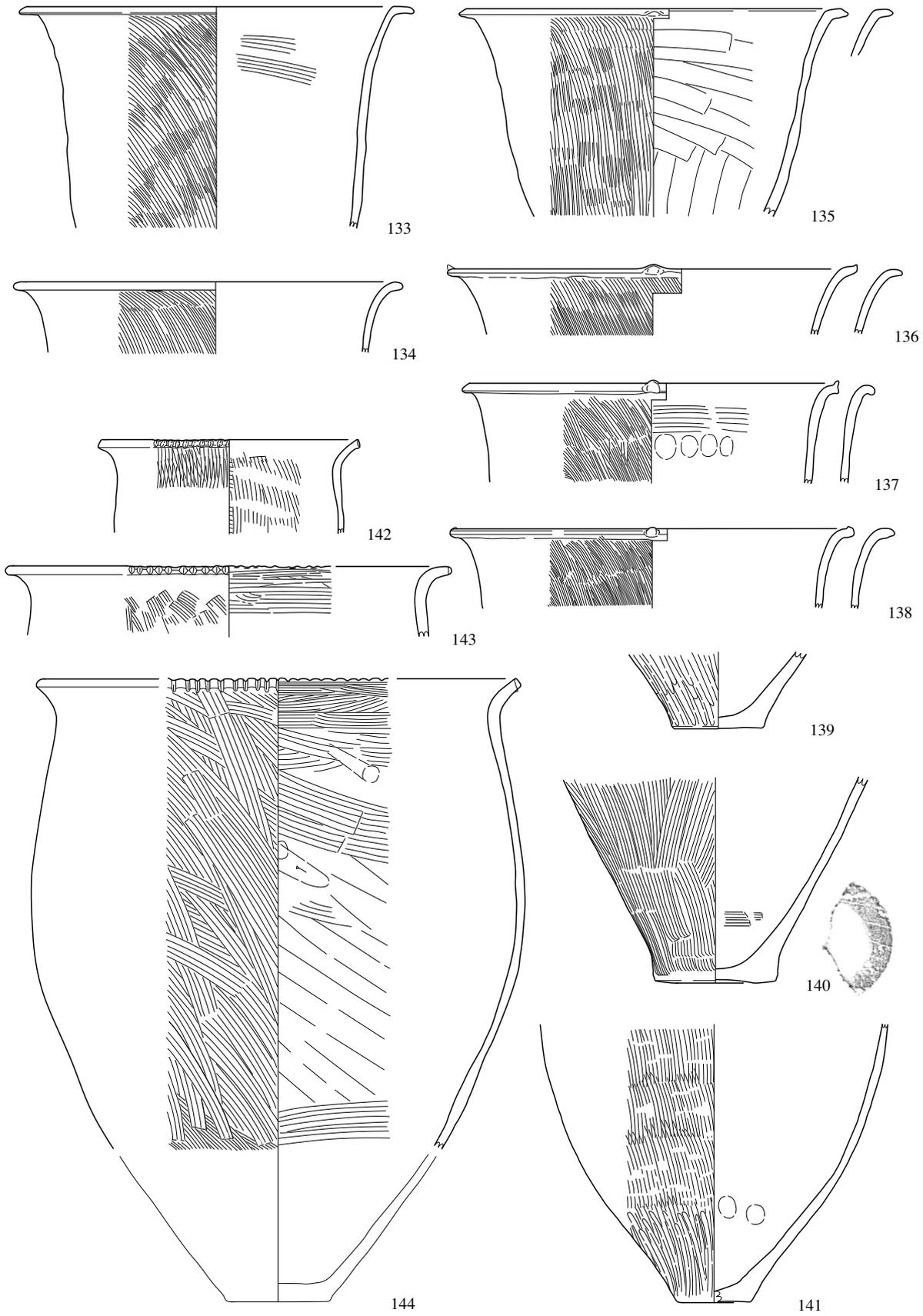
101

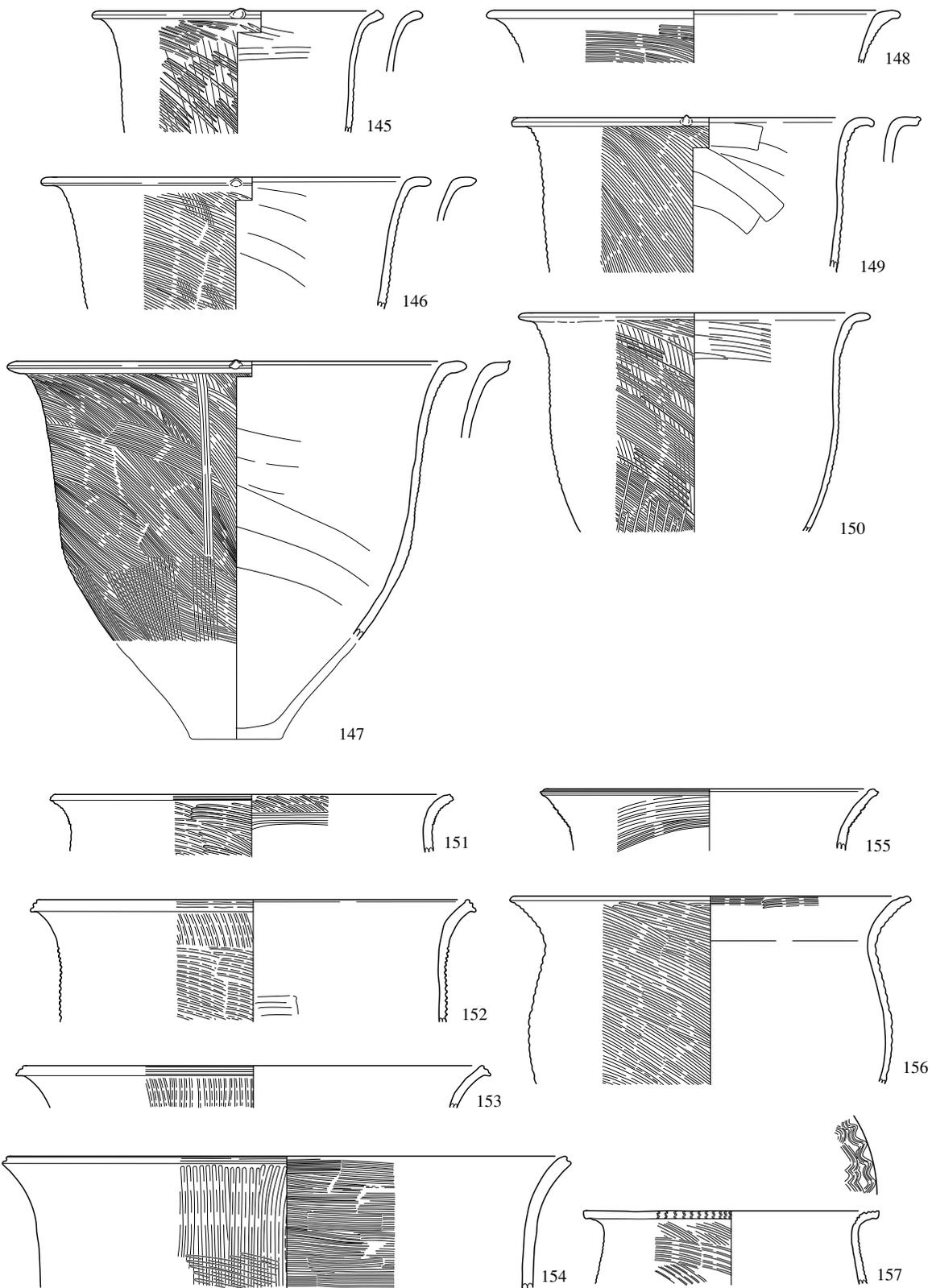
图版 08



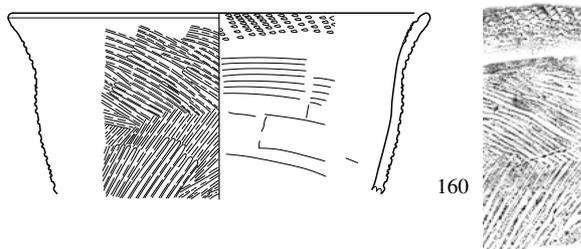
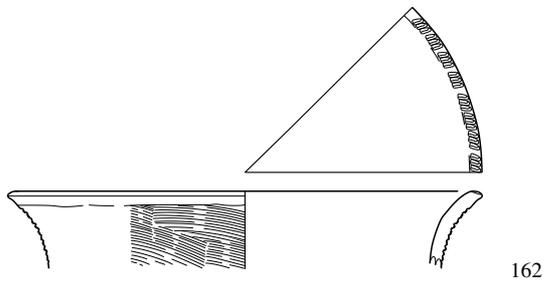
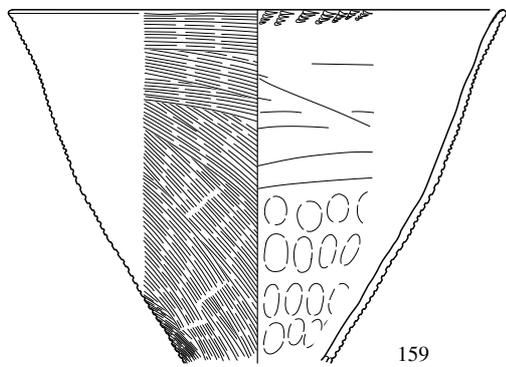
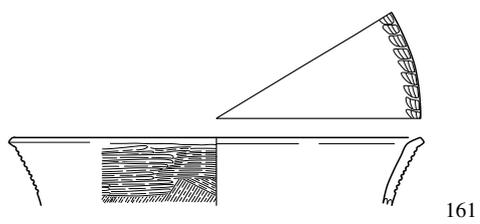
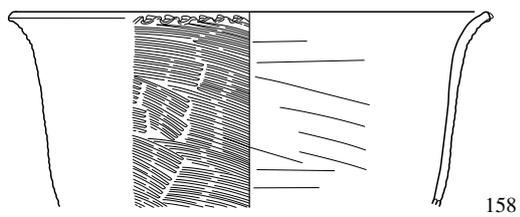


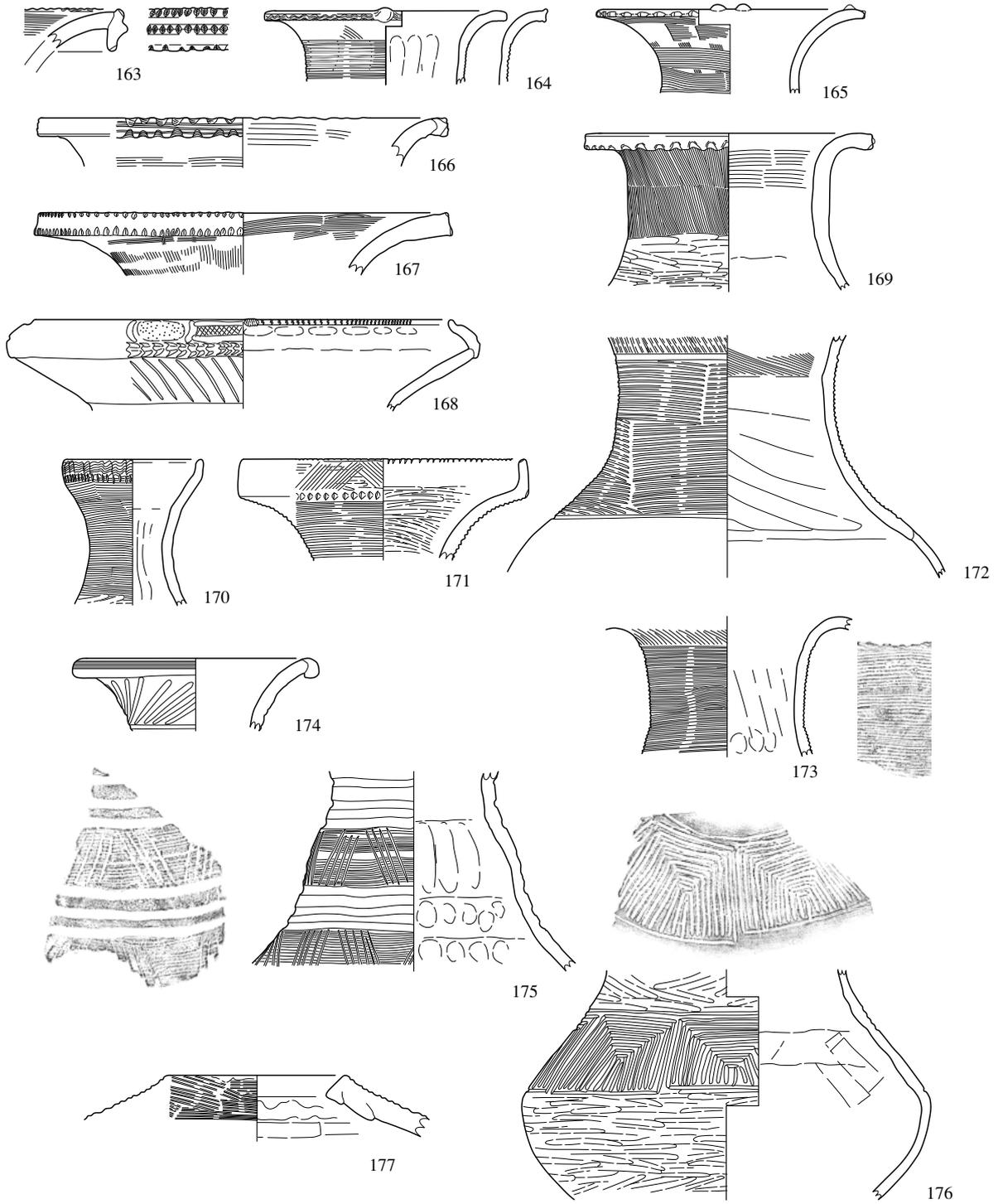
图版 10



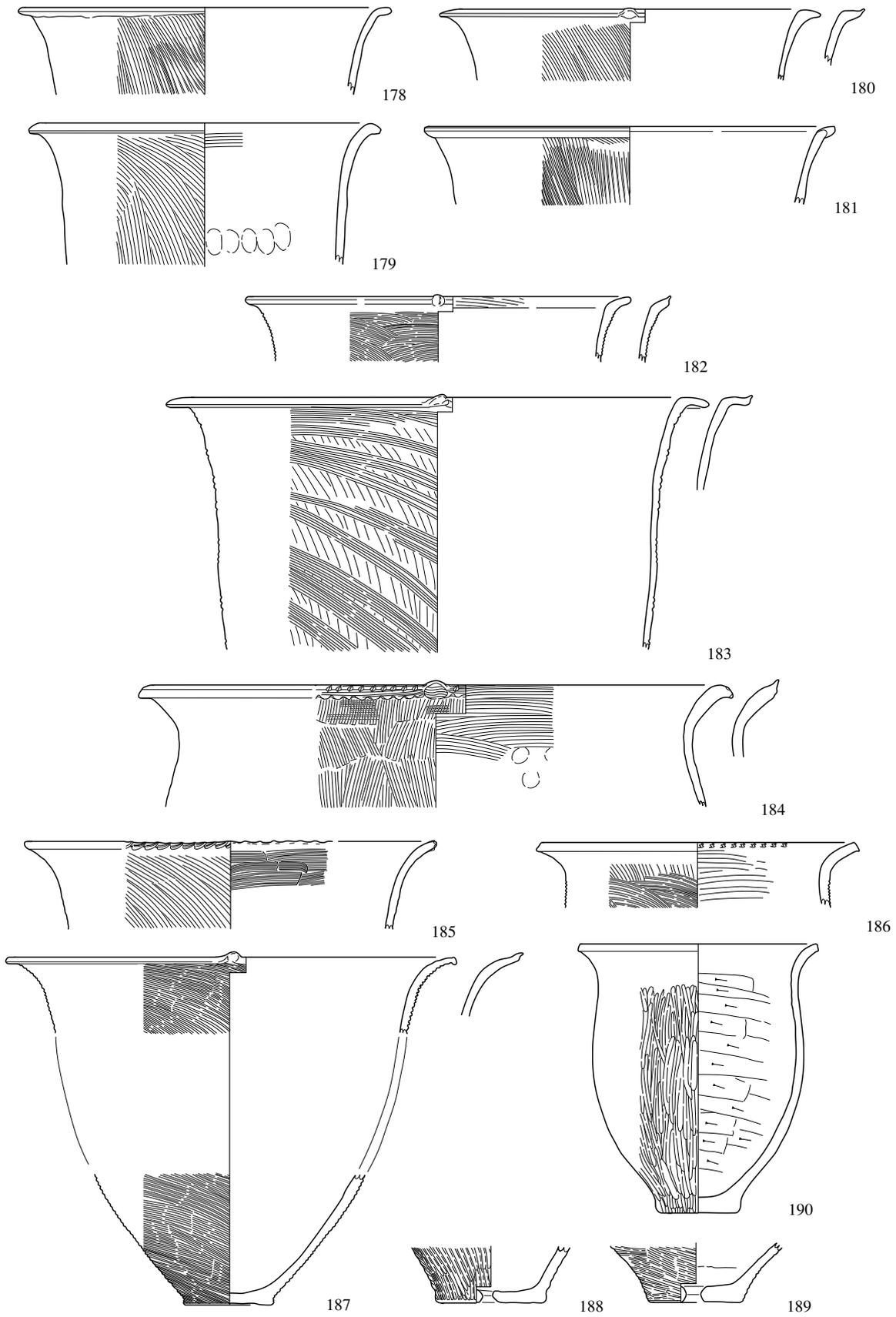


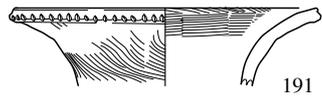
図版 12



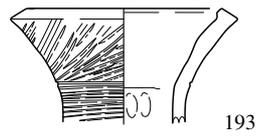


图版 14

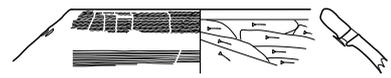




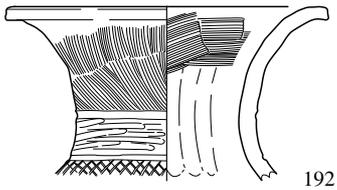
191



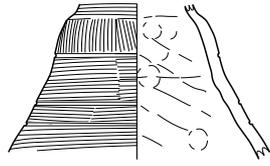
193



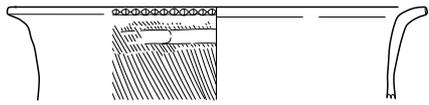
195



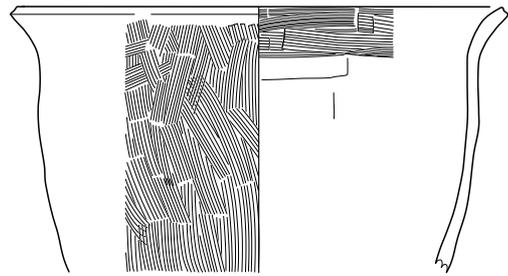
192



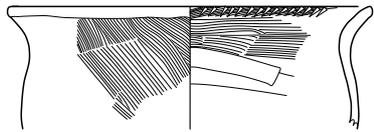
194



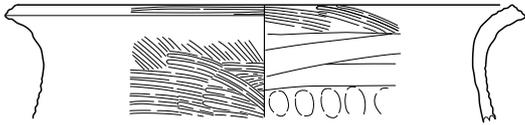
196



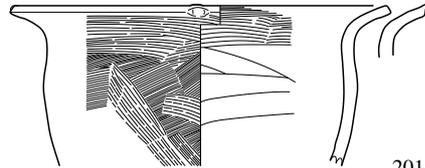
198



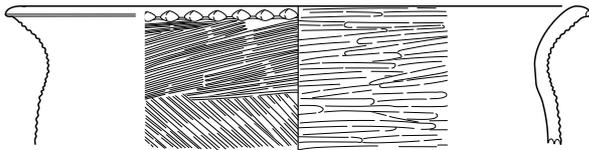
197



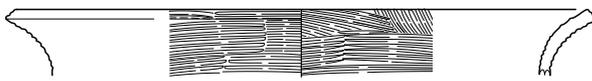
199



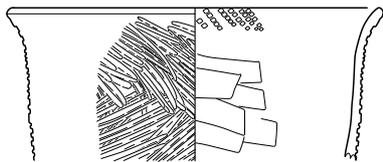
201



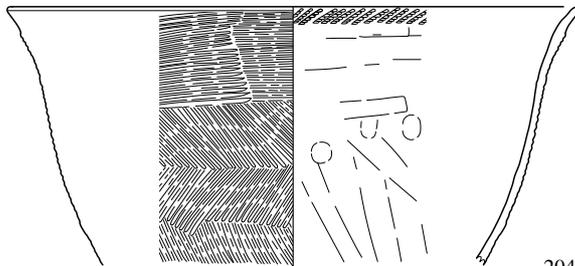
200



202



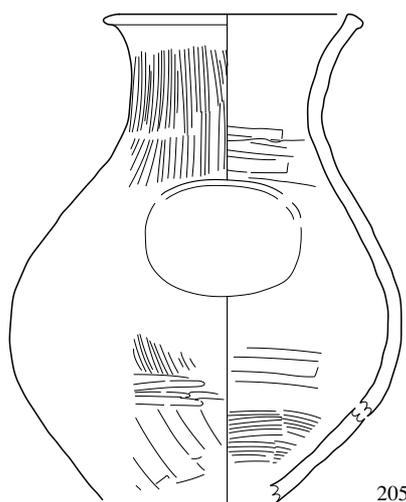
203



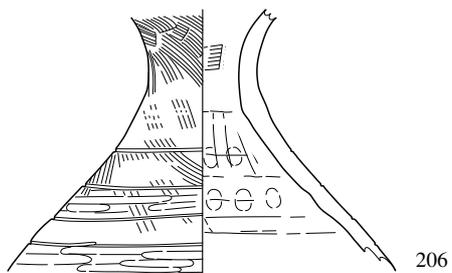
204



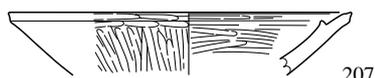
图版 16



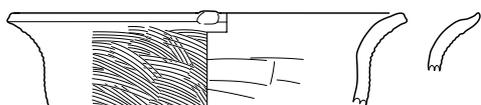
205



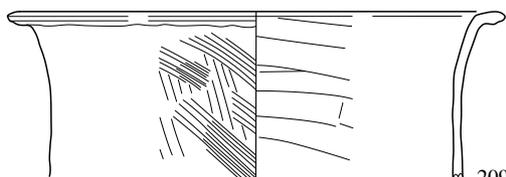
206



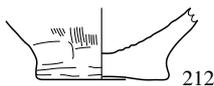
207



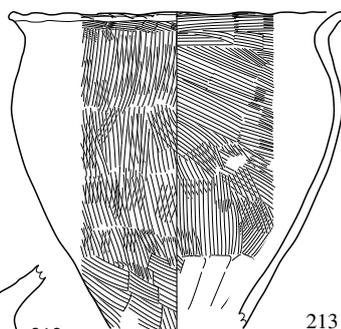
208



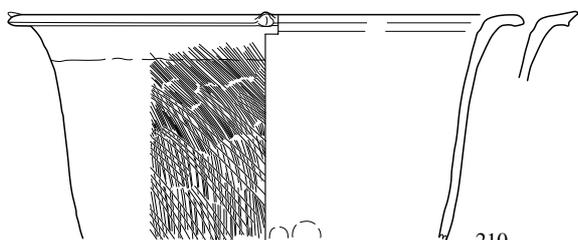
209



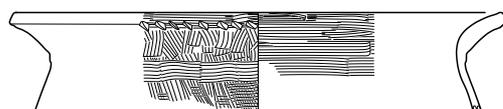
212



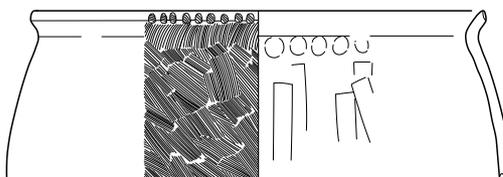
213



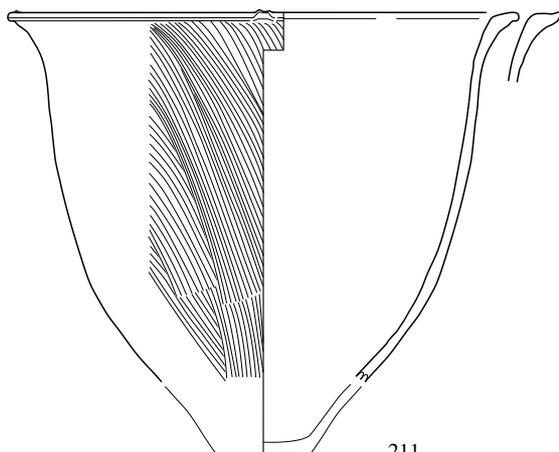
210



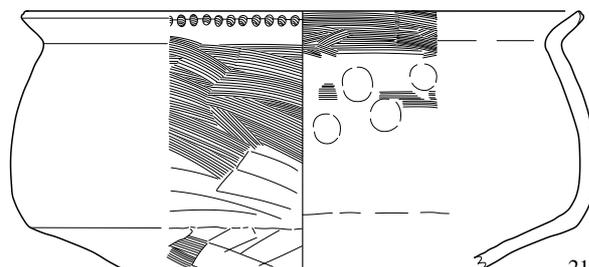
214



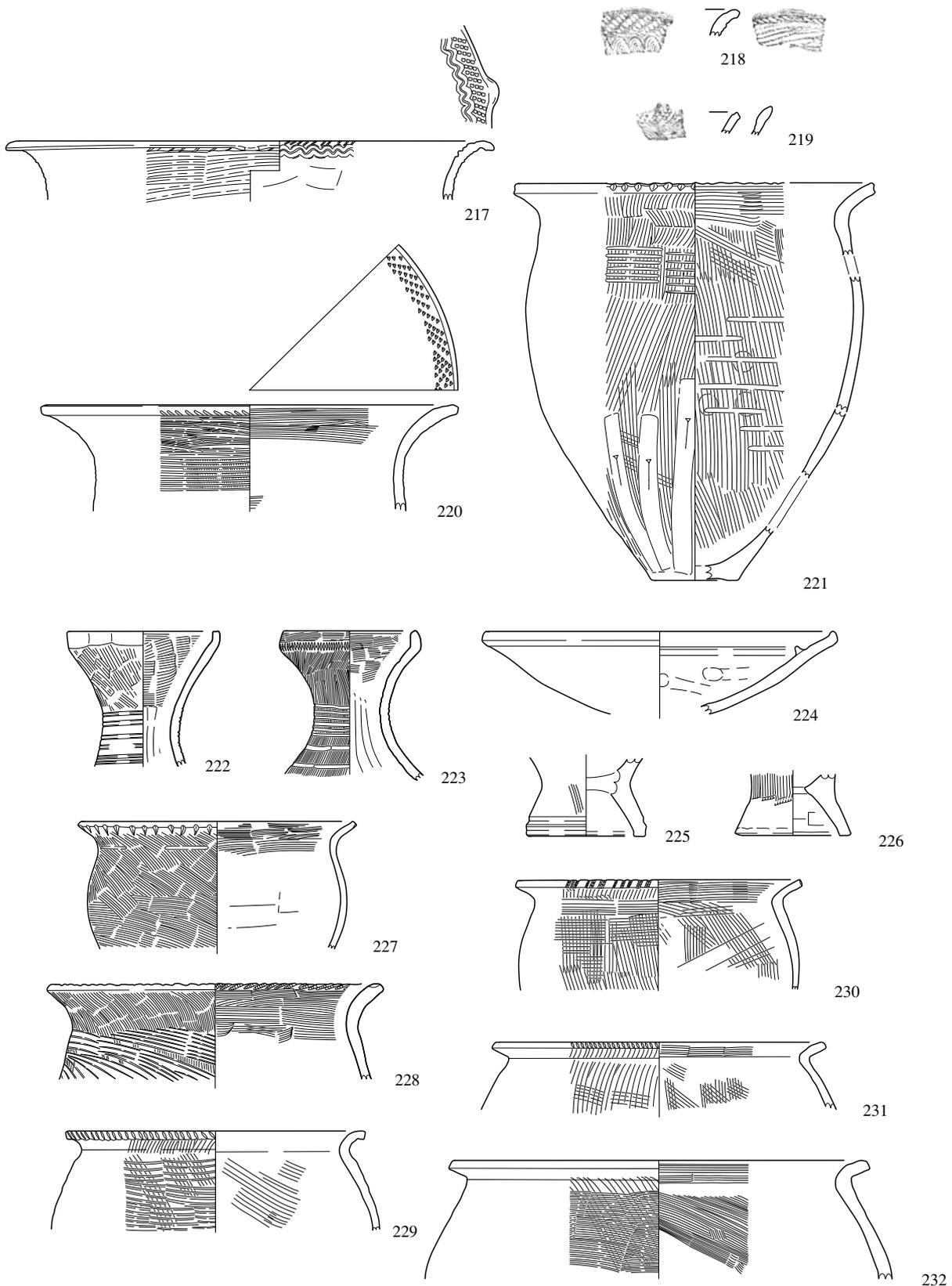
215



211

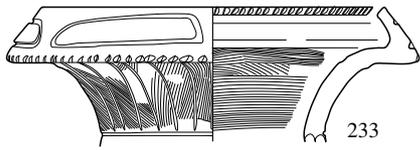


216

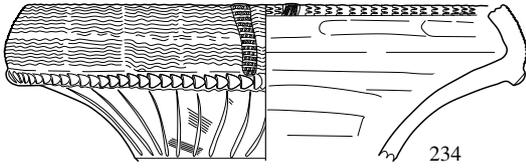


217 ~ 221 : SD03 貝層 222 ~ 232 : SD03 上層

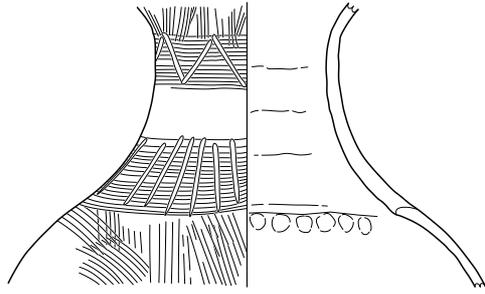
図版 18



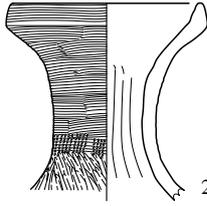
233



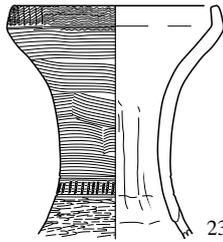
234



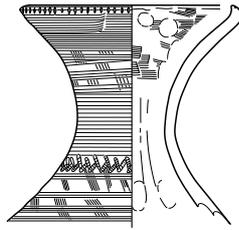
235



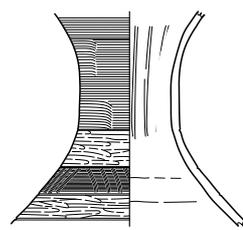
236



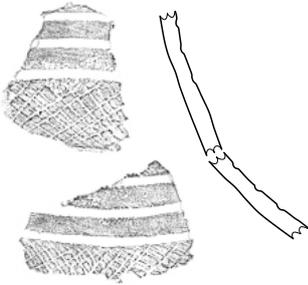
237



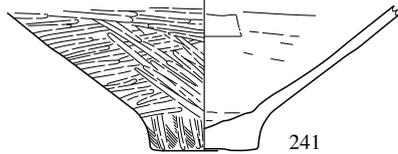
238



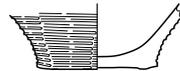
239



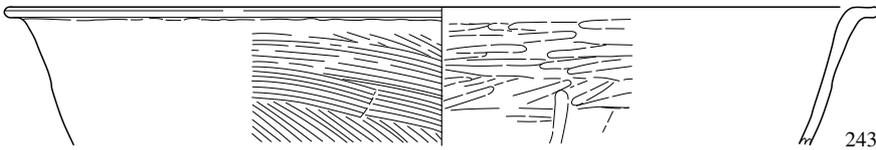
240



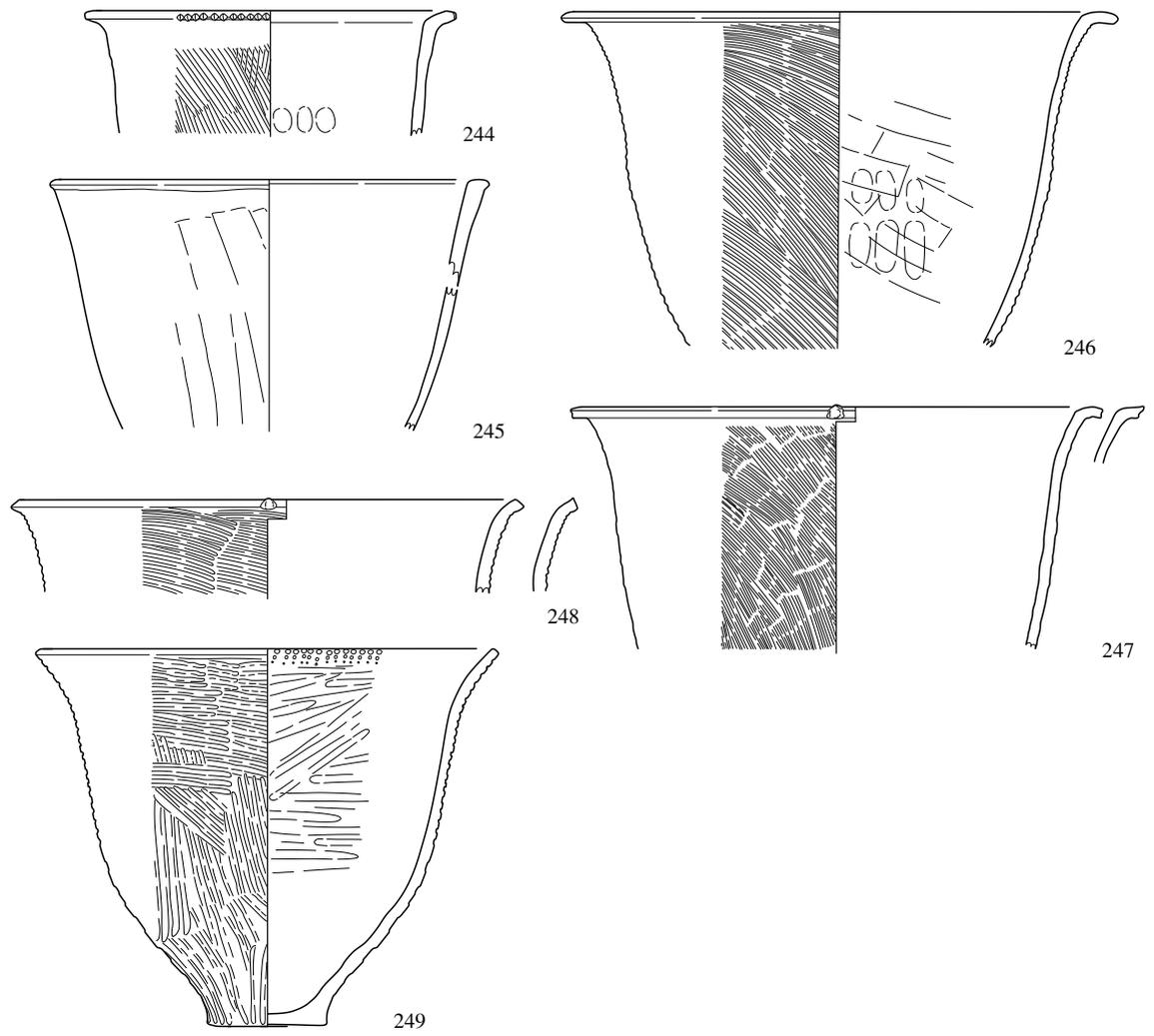
241



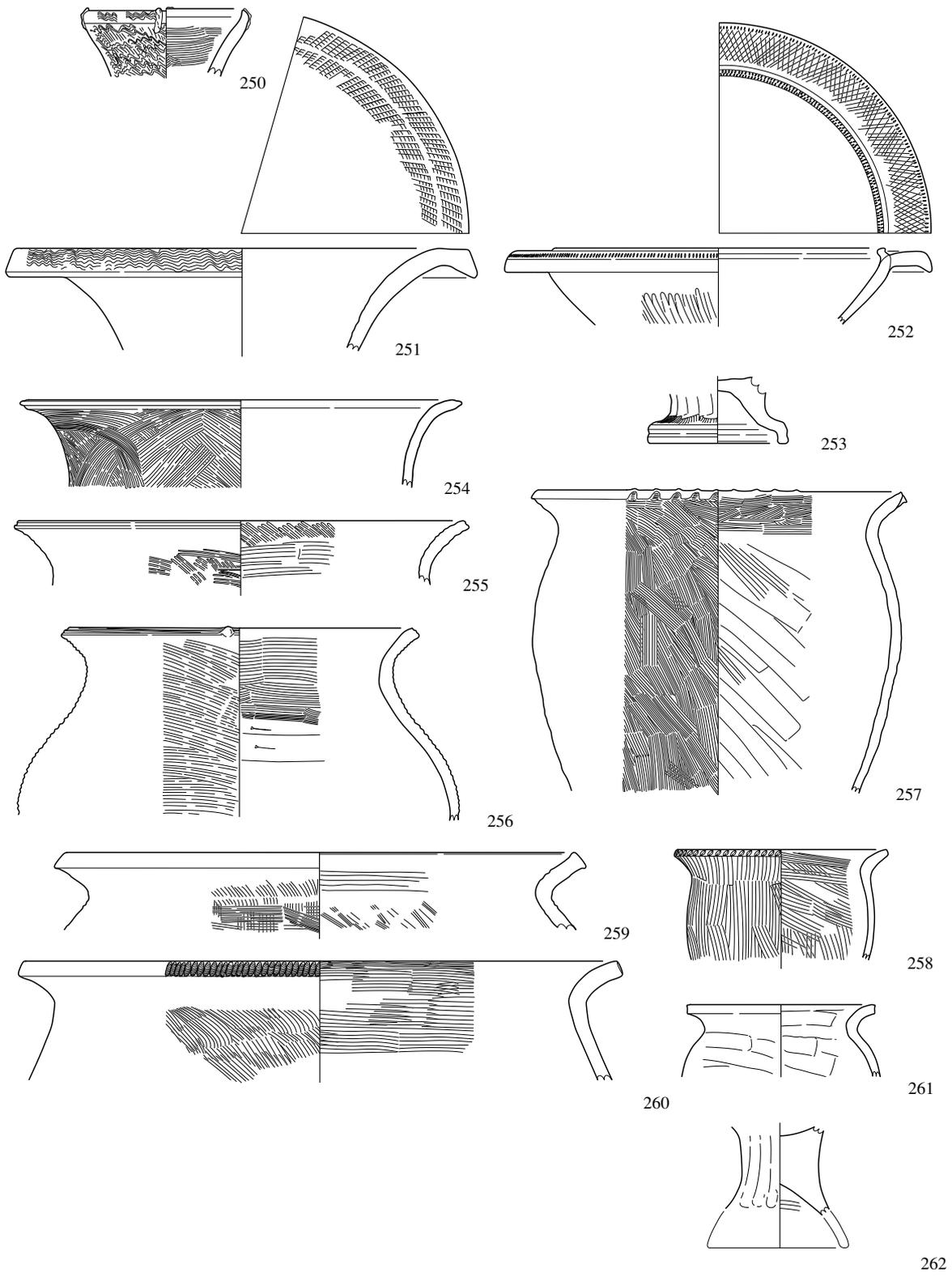
242

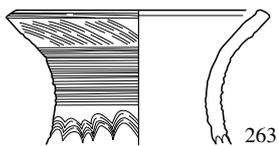


243

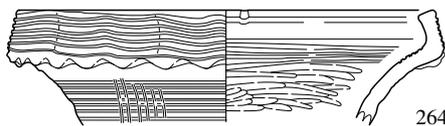


图版 20

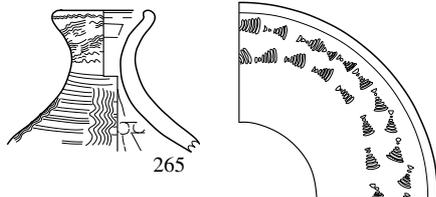




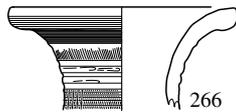
263



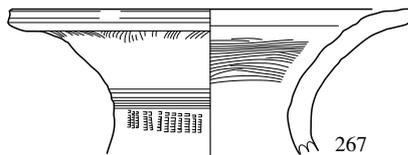
264



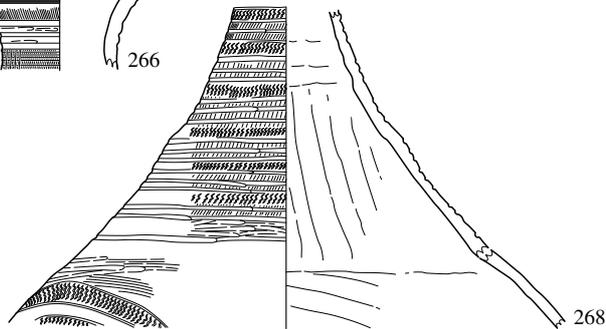
265



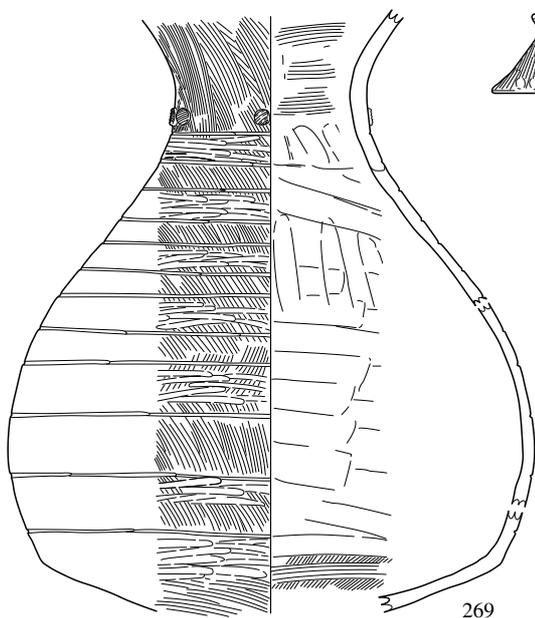
266



267



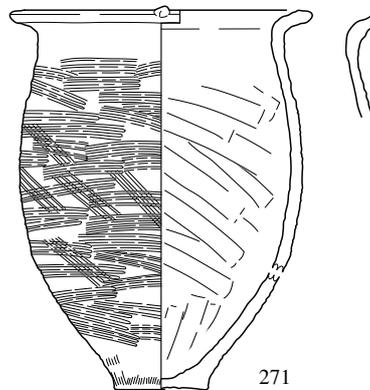
268



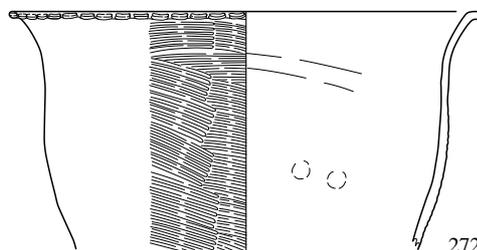
269



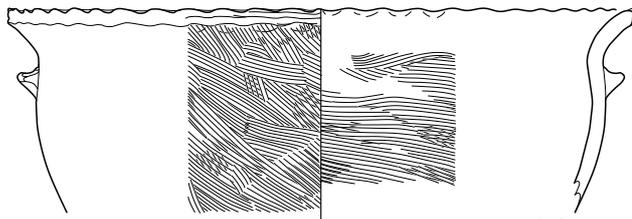
270



271

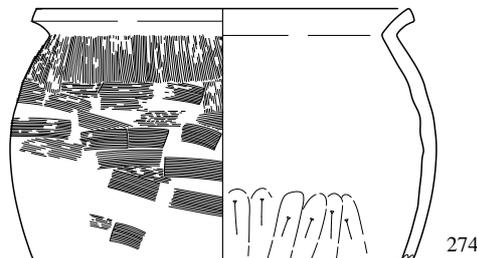


272

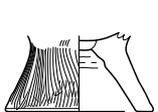


273

HR0021-3



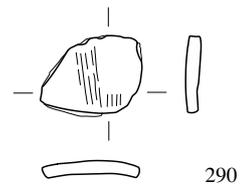
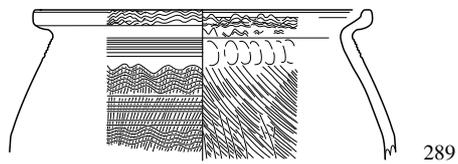
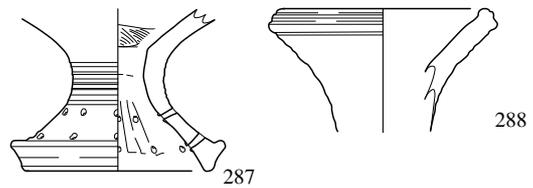
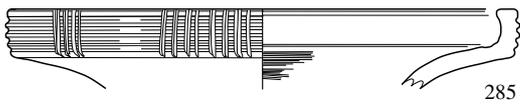
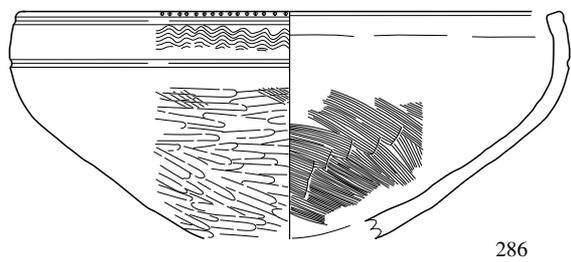
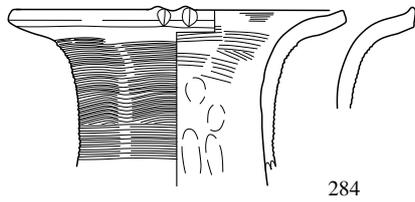
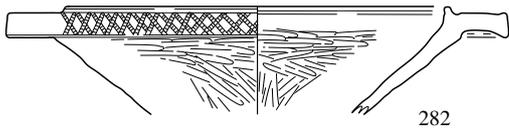
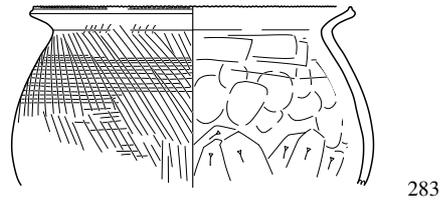
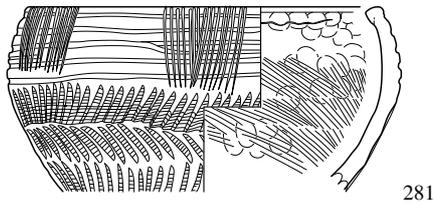
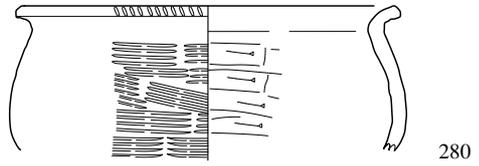
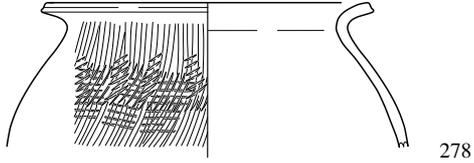
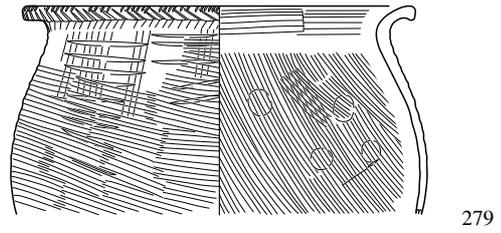
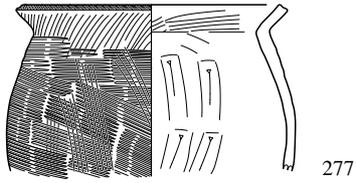
274

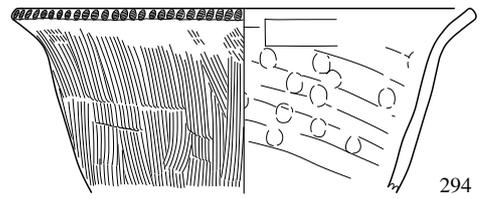
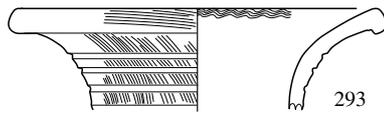
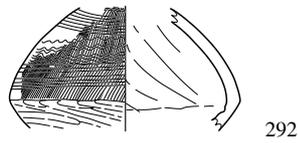
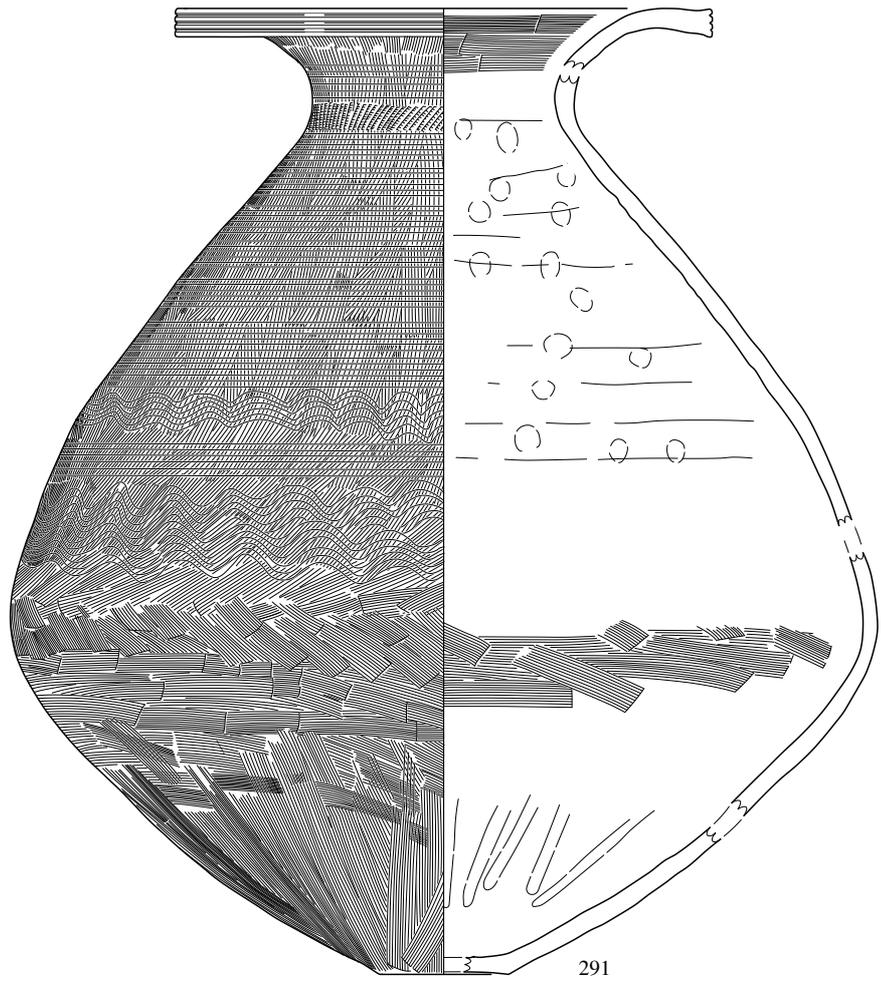


275

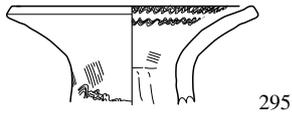


276

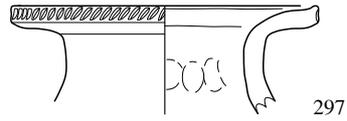




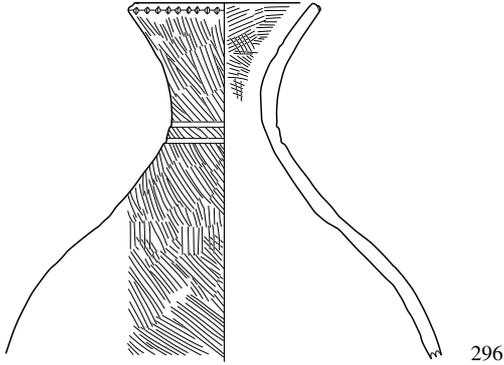
图版 24



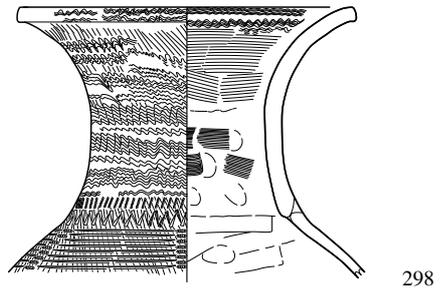
295



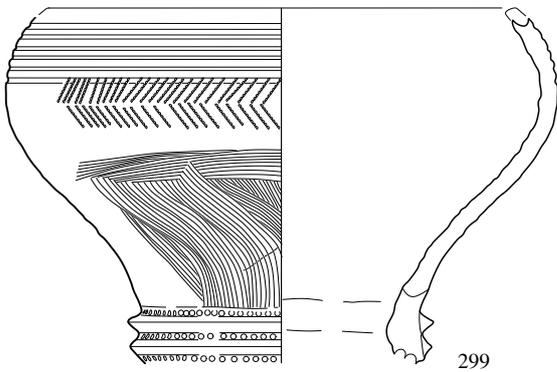
297



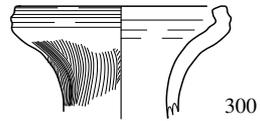
296



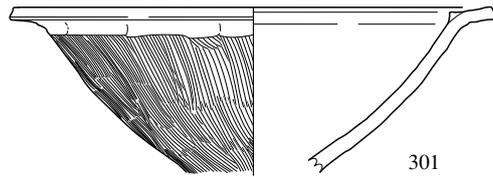
298



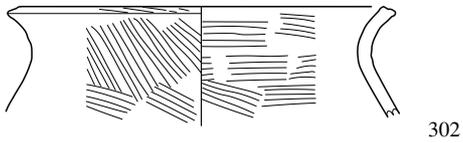
299



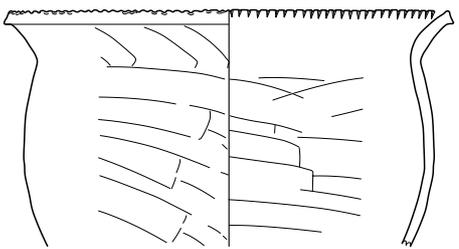
300



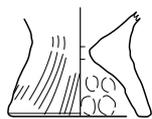
301



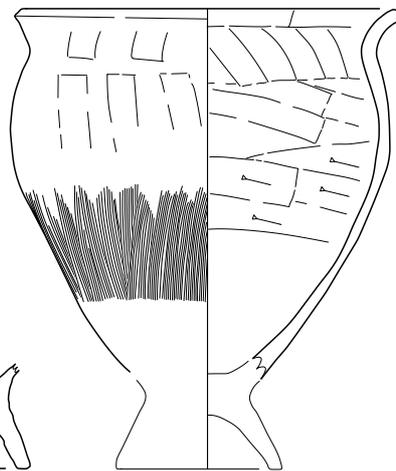
302



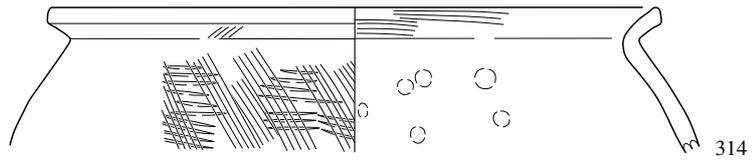
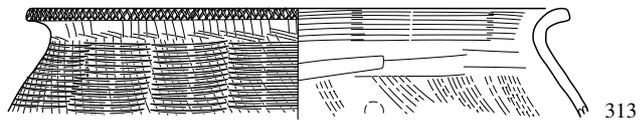
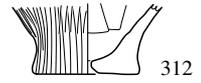
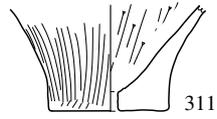
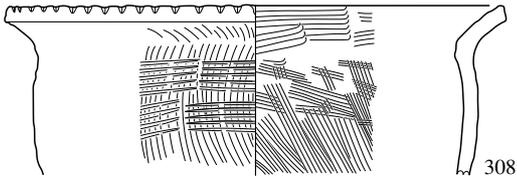
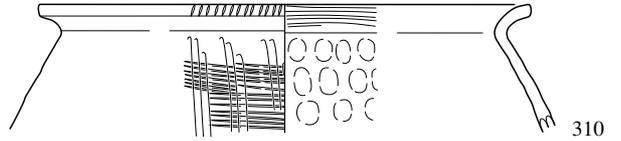
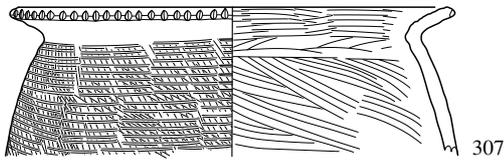
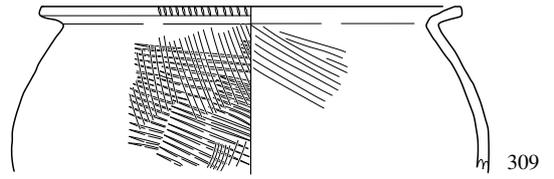
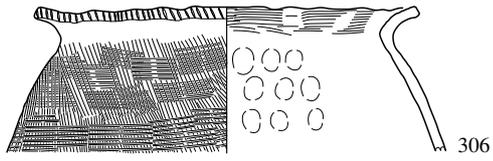
303



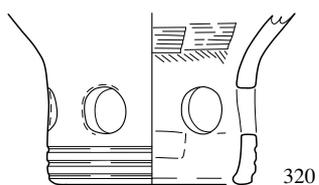
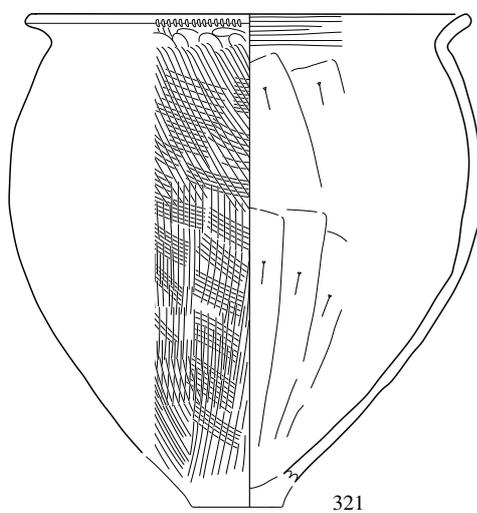
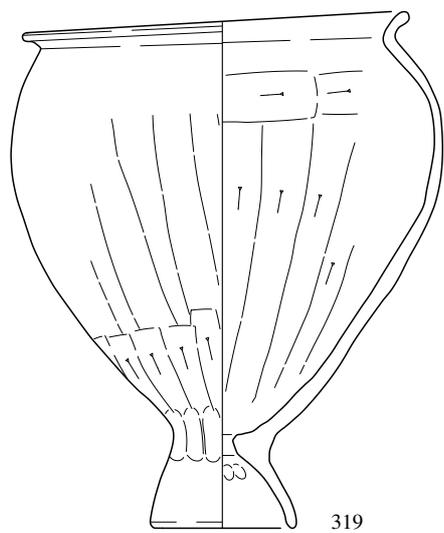
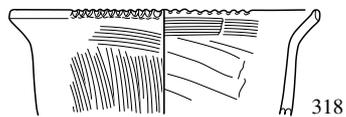
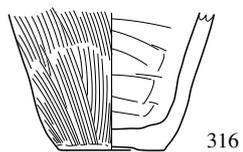
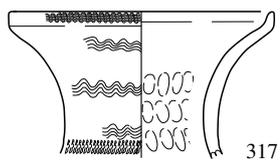
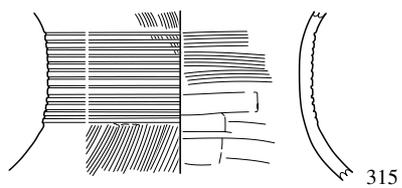
304

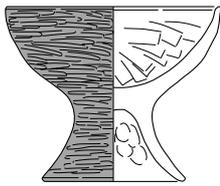


305

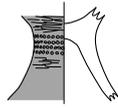


图版 26

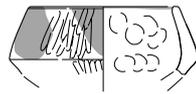




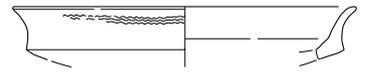
322



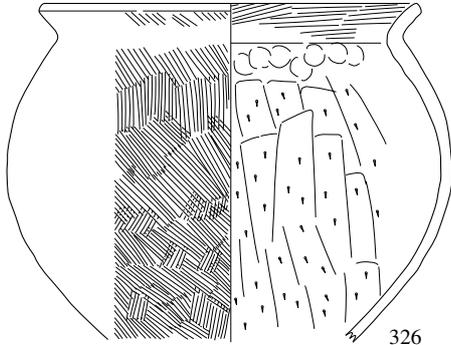
323



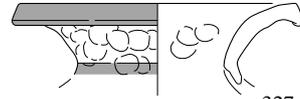
324



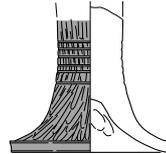
325



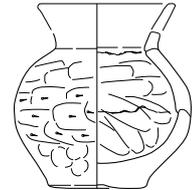
326



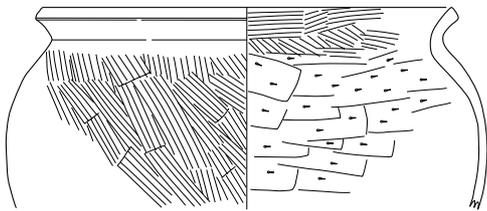
327



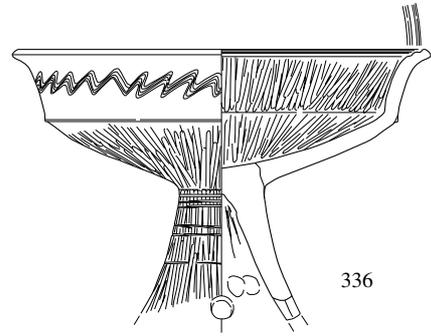
328



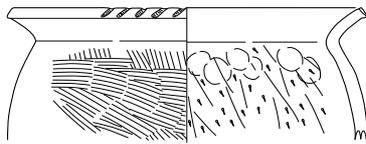
329



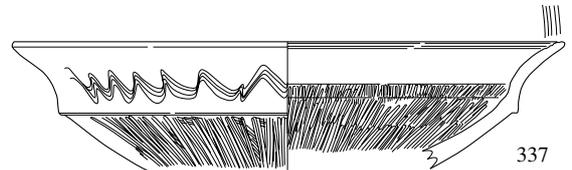
330



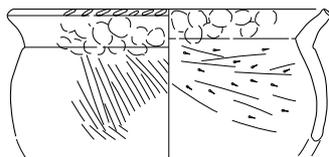
336



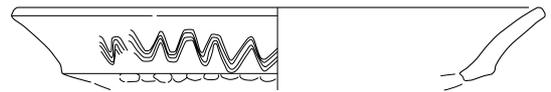
331



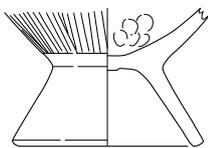
337



332



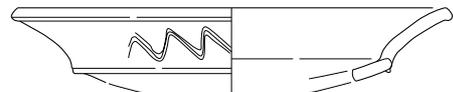
338



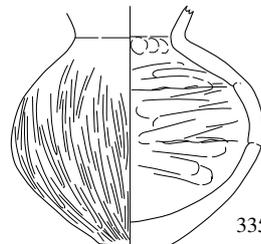
333



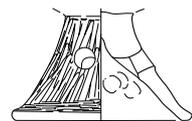
334



339

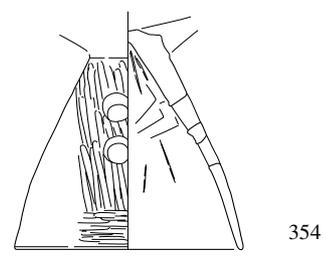
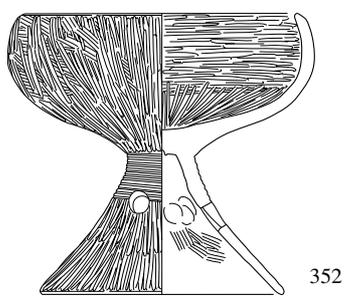
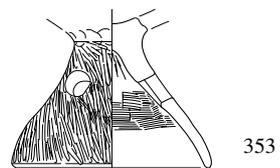
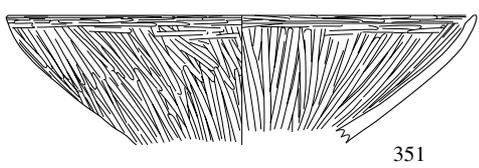
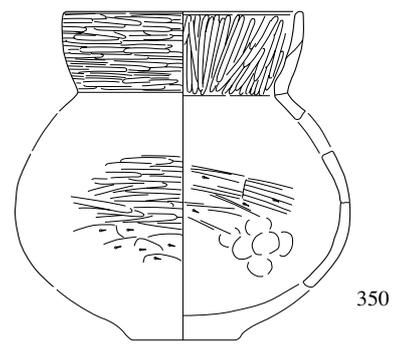
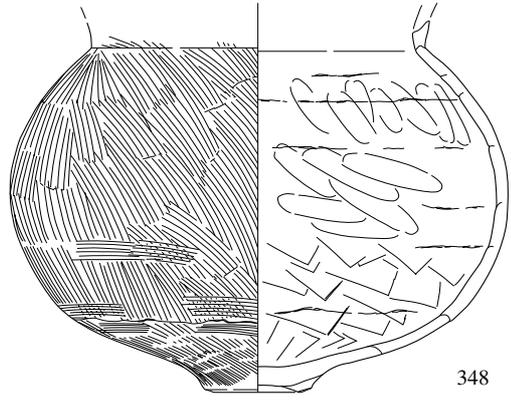
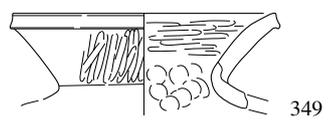
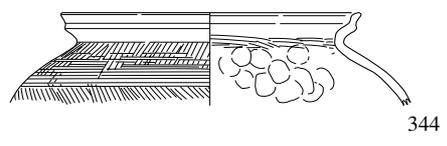
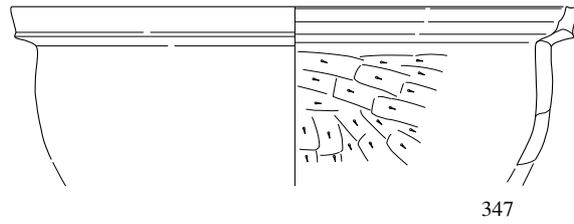
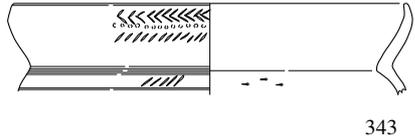
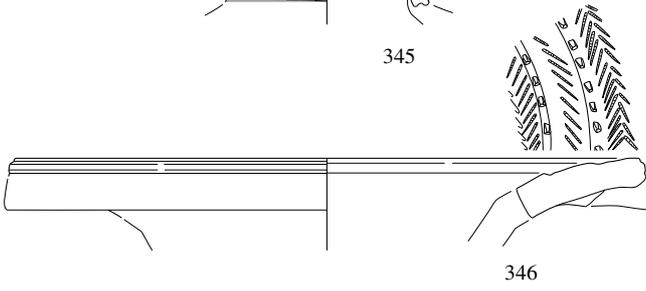
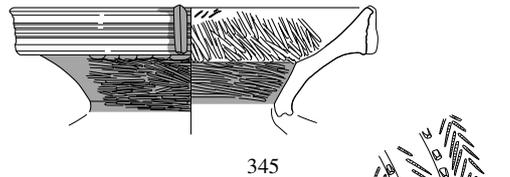
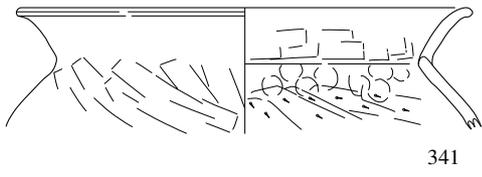


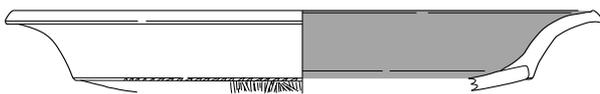
335



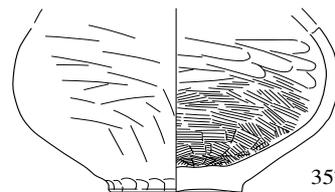
340

图版 28

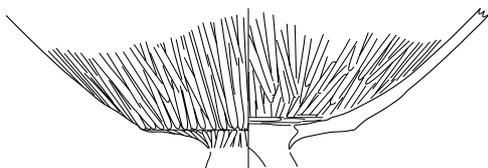




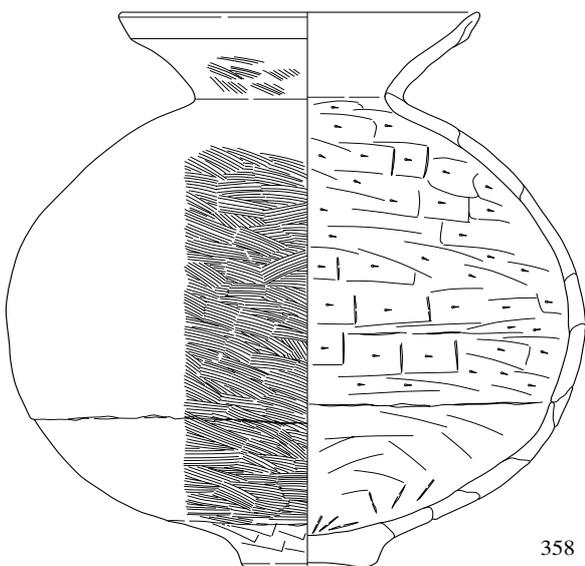
355



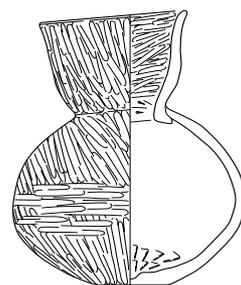
357



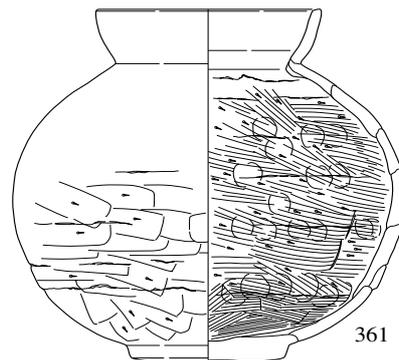
356



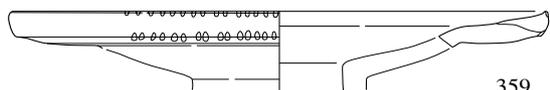
358



360



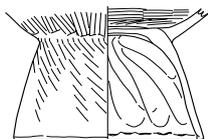
361



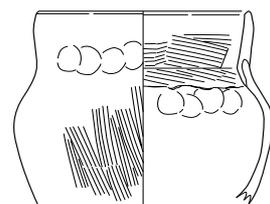
359



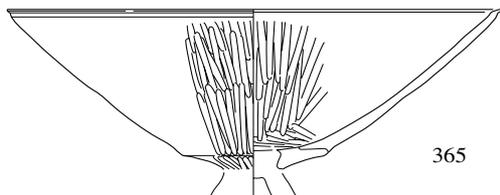
362



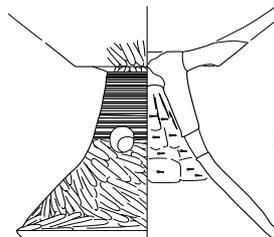
363



364

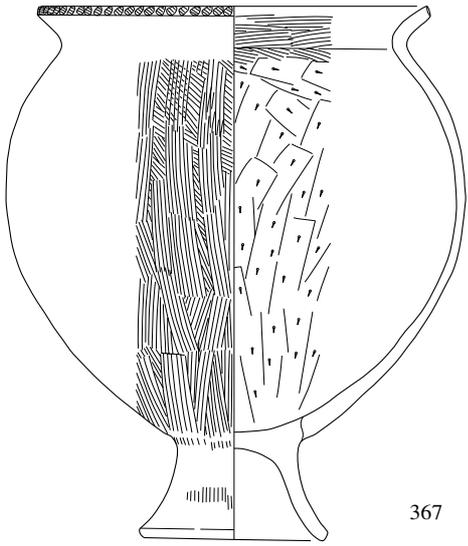


365

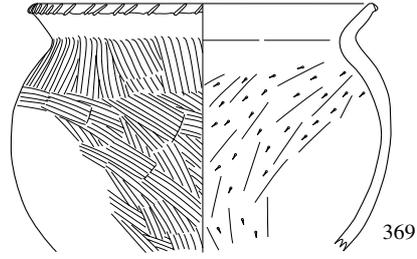


366

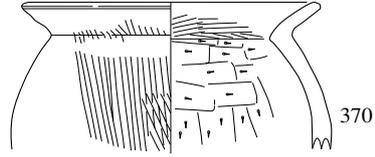
图版 30



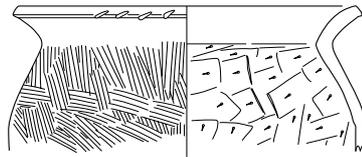
367



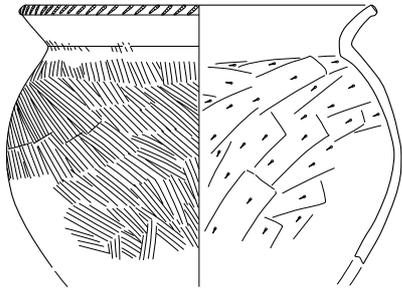
369



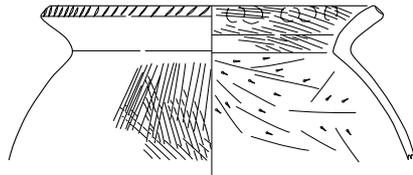
370



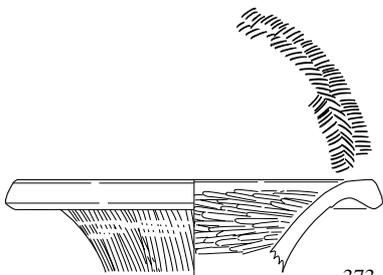
371



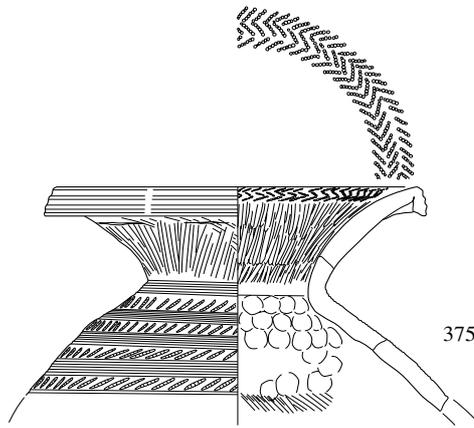
368



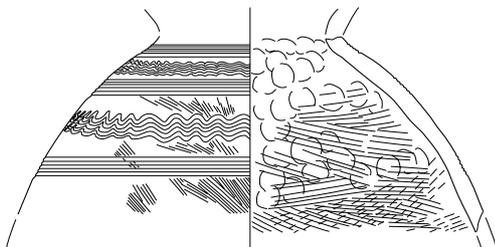
372



373



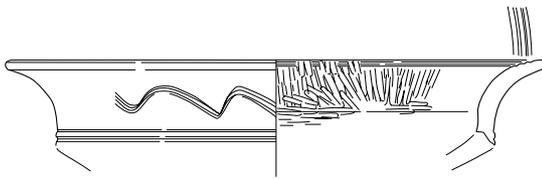
375



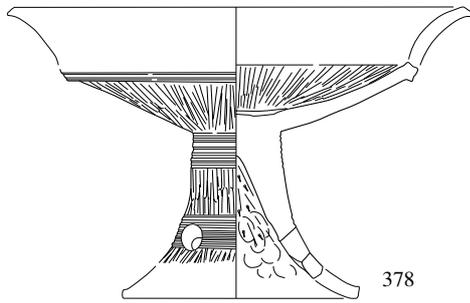
374



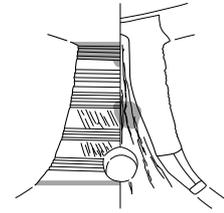
376



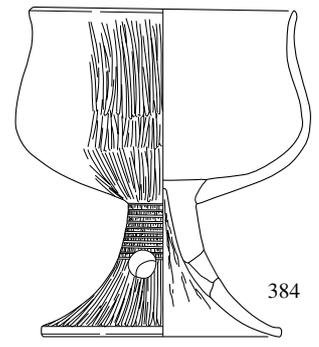
377



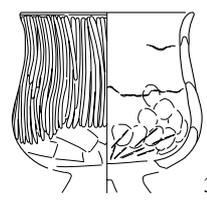
378



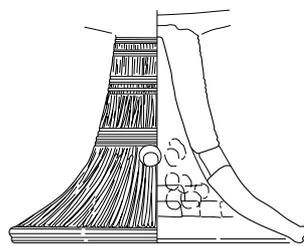
379



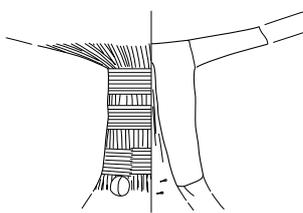
384



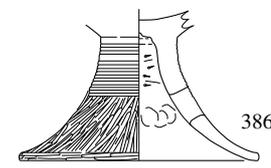
385



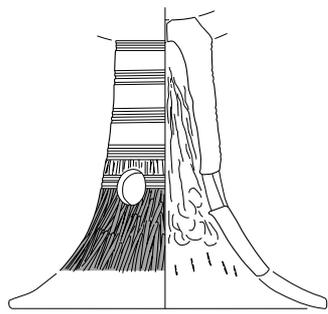
380



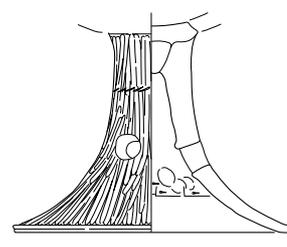
381



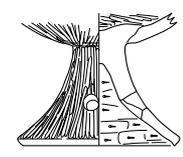
386



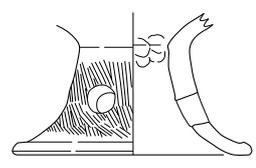
382



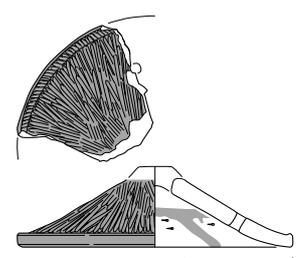
383



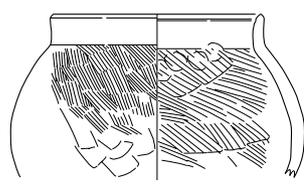
387



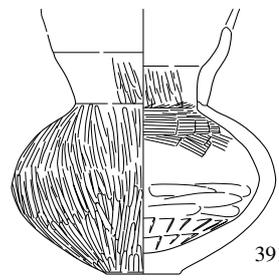
388



389



390

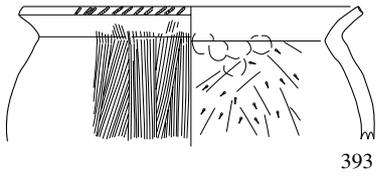


391

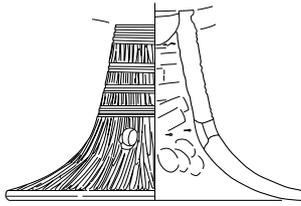


392

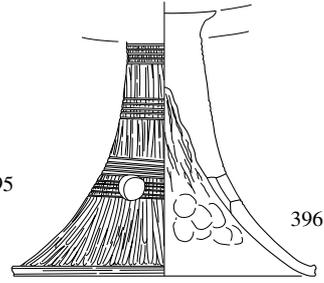
图版 32



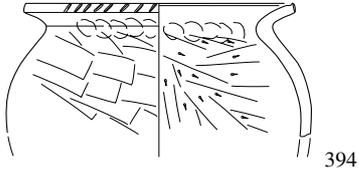
393



395



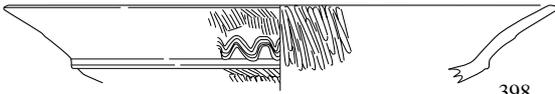
396



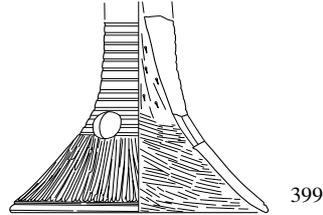
394



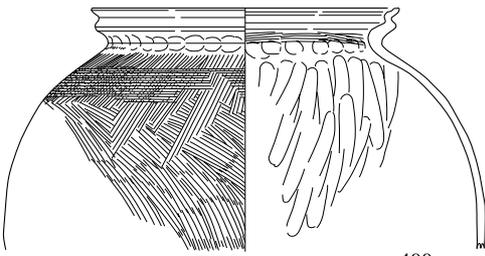
397



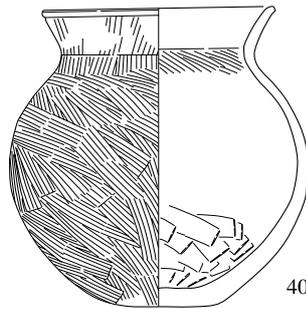
398



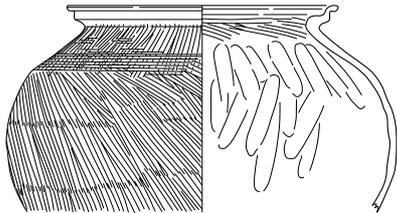
399



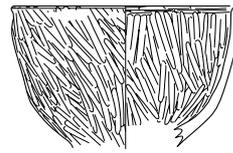
400



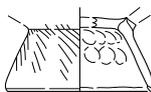
403



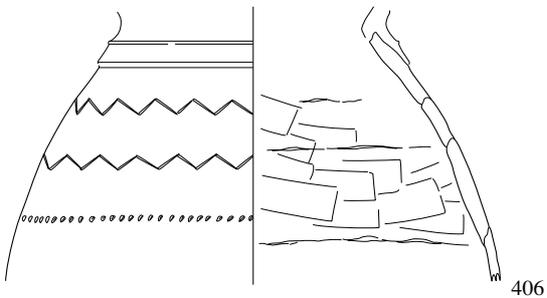
401



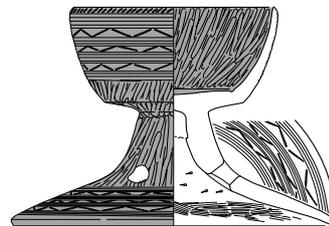
404



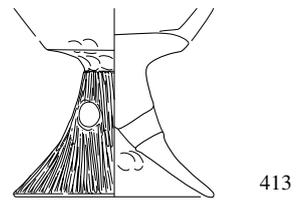
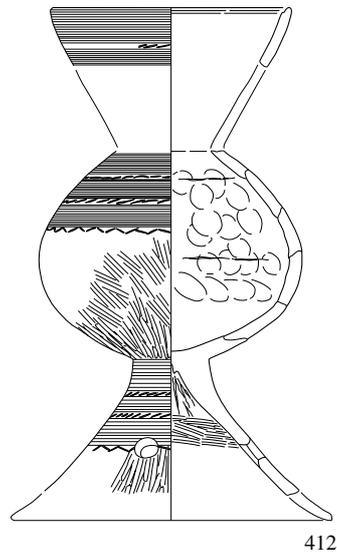
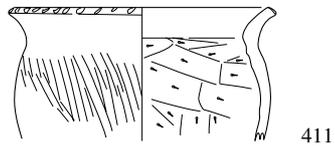
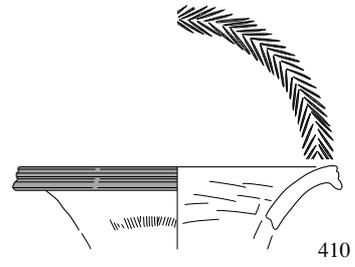
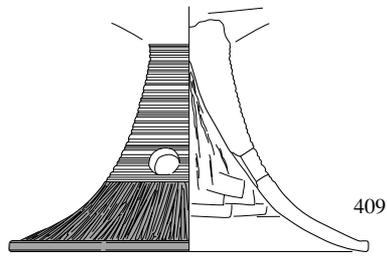
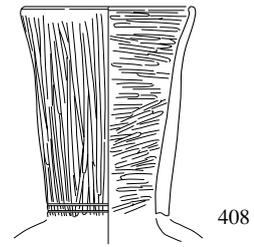
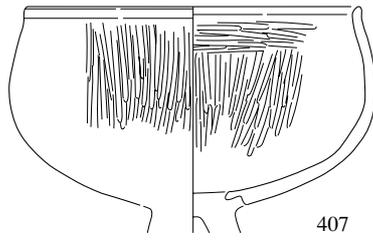
402



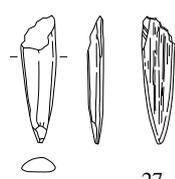
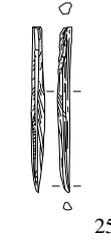
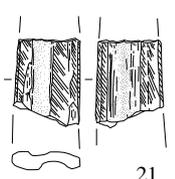
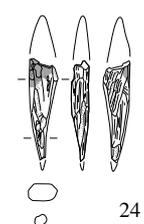
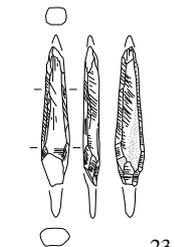
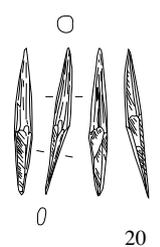
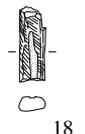
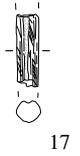
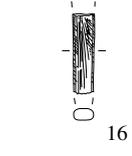
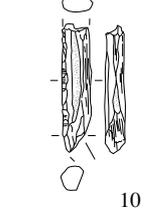
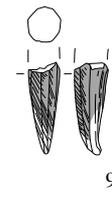
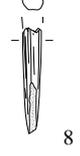
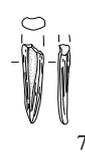
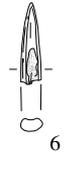
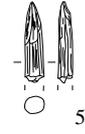
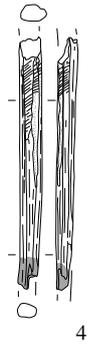
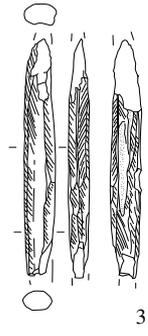
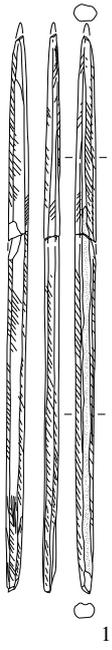
406

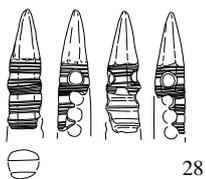


405

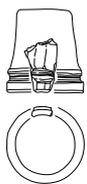


图版 34

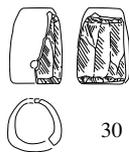




28



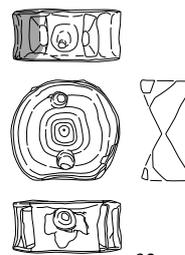
29



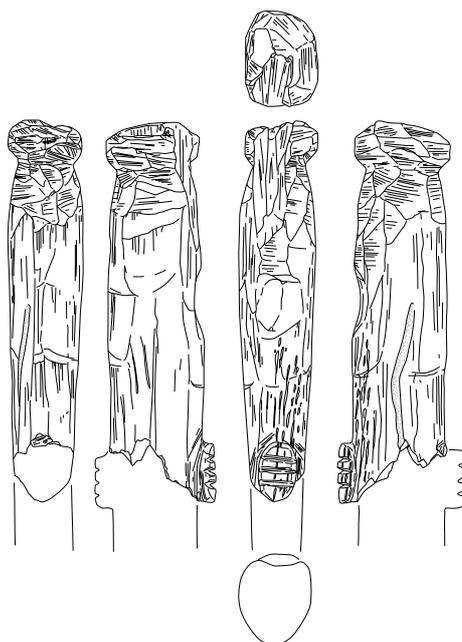
30



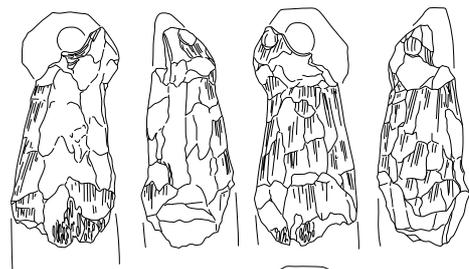
31



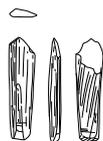
32



33



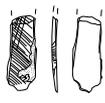
34



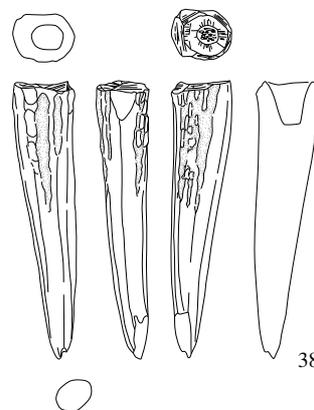
35



36

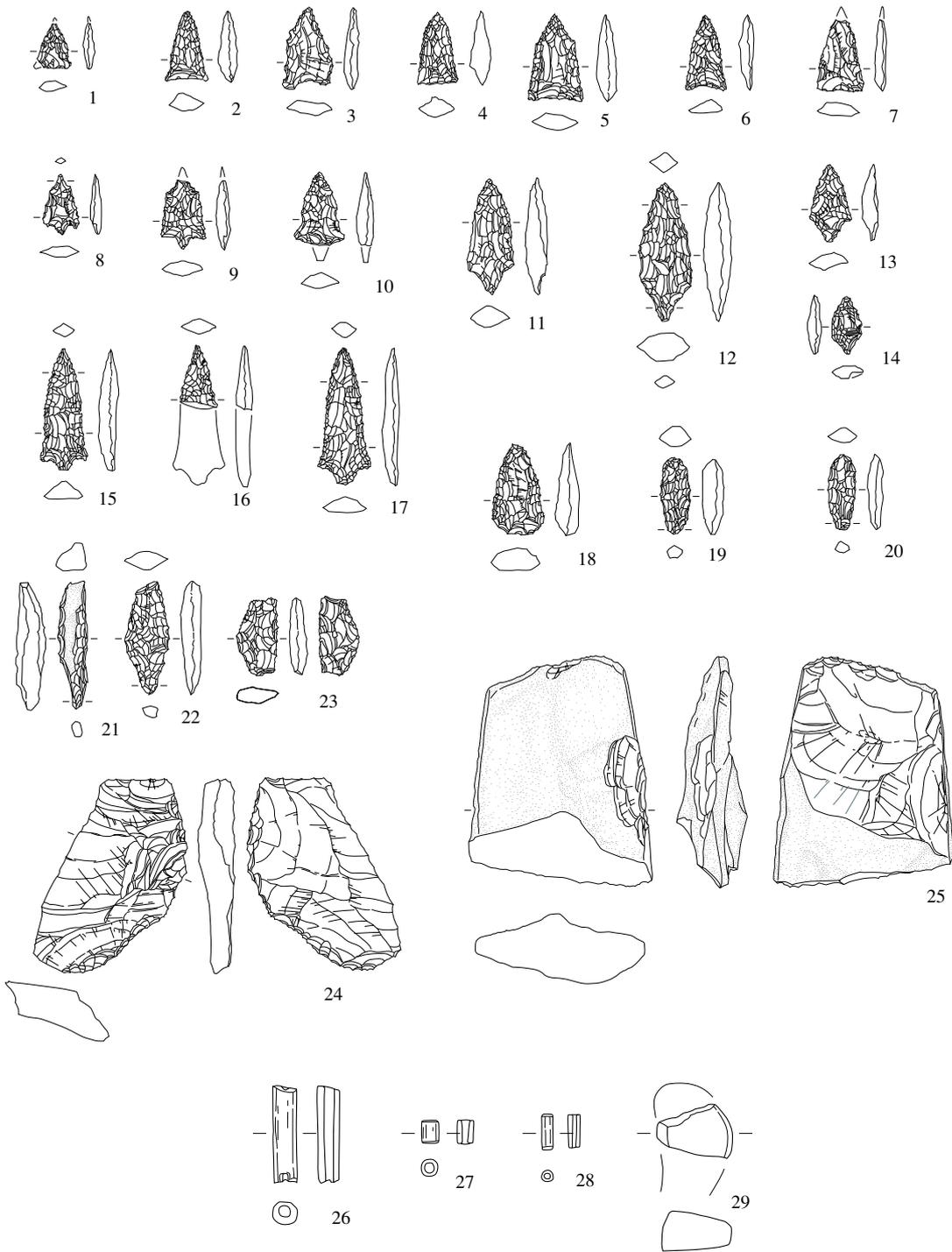


37



38

图版 36





平手町遺跡



写真図版

名古屋駅JRセントラルタワーズ展望台から望む



遺構写真（1）

弥生時代前期から中期の遺構全景（北西から）
写真の下にSD06（前期）、中央にSD03（中期）の環濠。



上：弥生時代前期から中期の遺構（北東からみる） 手前がSD03、奥がSD06。
下：SD03（北西からみる） 奥に見えるのがSD03 セクションベルト。

遺構写真（2）



遺構写真 (3)

上：SD03 セクションベルト (北西からみる)
下：SD03 セクション・調査区北壁 (南西からみる) 貝層の堆積



上：SD06 セクションベルト（北西からみる）
下：SD06 セクション・調査区西壁（東からみる）



遺構写真 (5)

上：SB01 周辺遠景 (西からみる)
下：SB01 (北西からみる)



SK01 遺物出土状態（北からみる）

遺構写真（6）



遺構写真（7）

古墳時代前期の遺構全景（北東からみる）

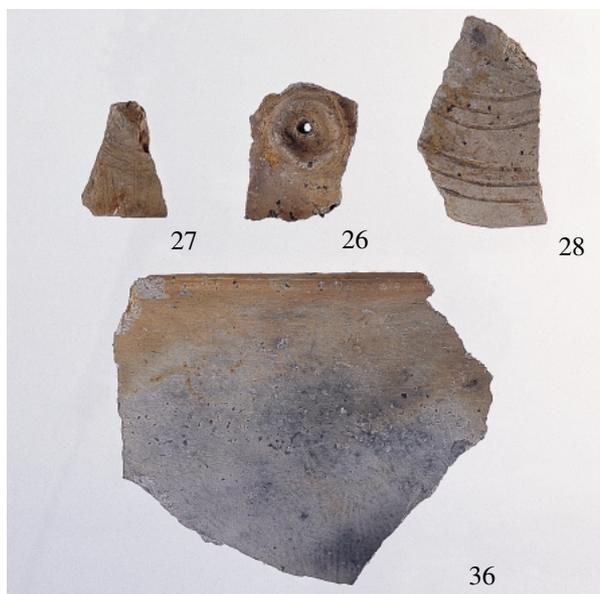


上：SD01 セクション（北西からみる）SD04 を再掘削した溝。
下：SD04 セクション（北西からみる）ホースの右、黒色土がSD04 の埋土。



遺構写真（9）

上：SD02 セクション（北西からみる）
下：作業風景



弥生前期の土器 (1)



弥生前期の土器（2）



10-1



10-2

弥生前期の土器（3）



弥生前期の土器（4）







91



左下：90の体部の紋様と籠目痕 右下：91の口縁部と体部の紋様 弥生中期の土器（3）



弥生中期の土器（4）



93



83



129



82



弥生中期の土器（6）



弥生中期の土器（7）





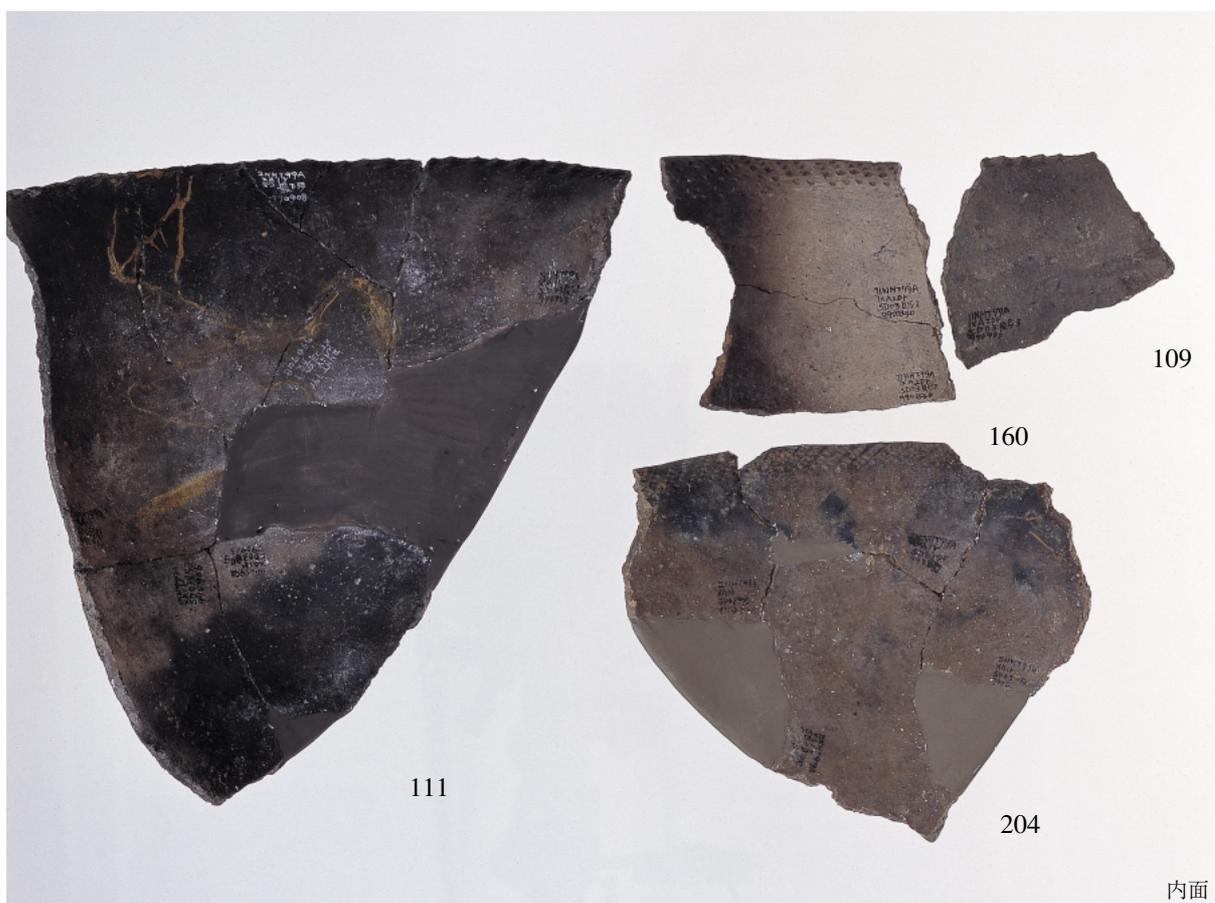
211



弥生中期の土器（9）



弥生中期の土器 (10)



弥生中期の土器 (11)



外面



内面

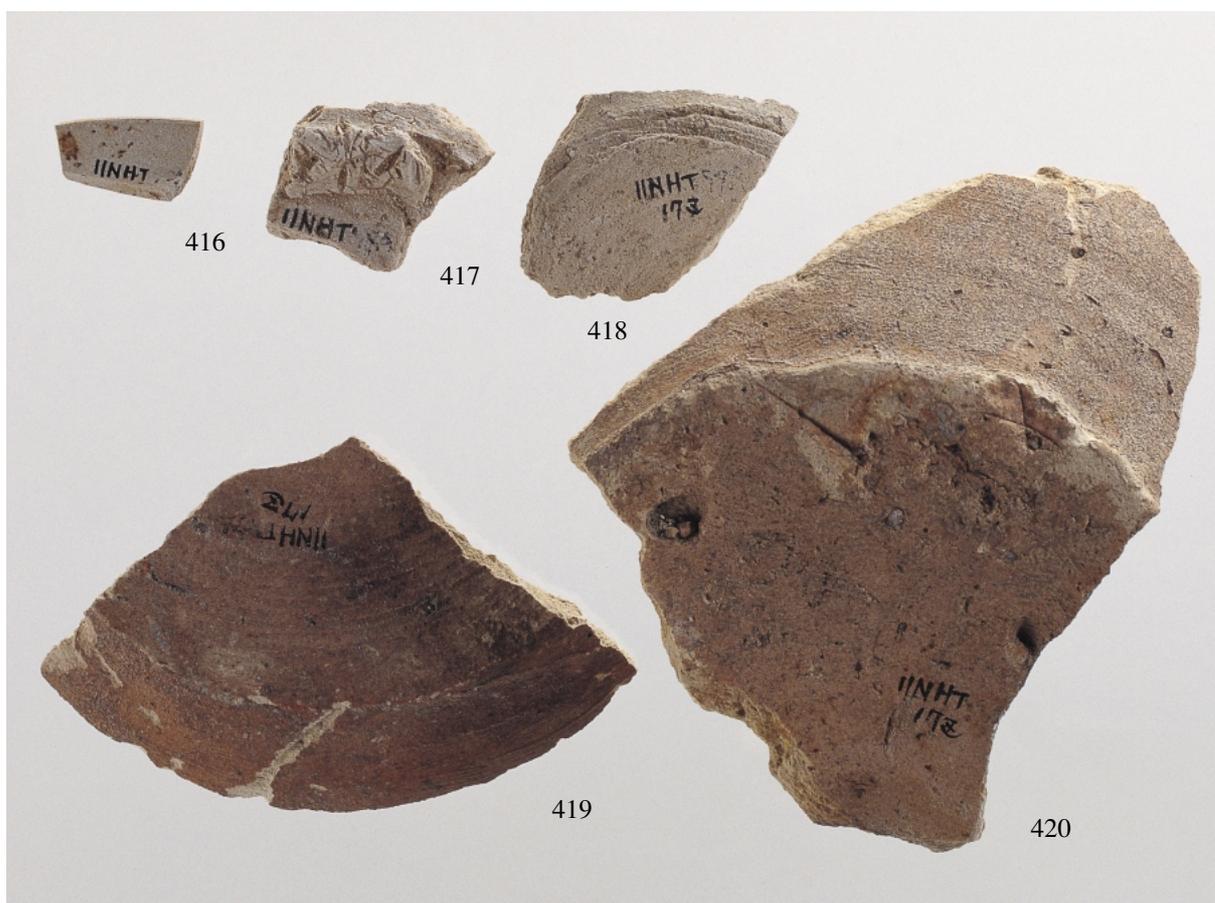
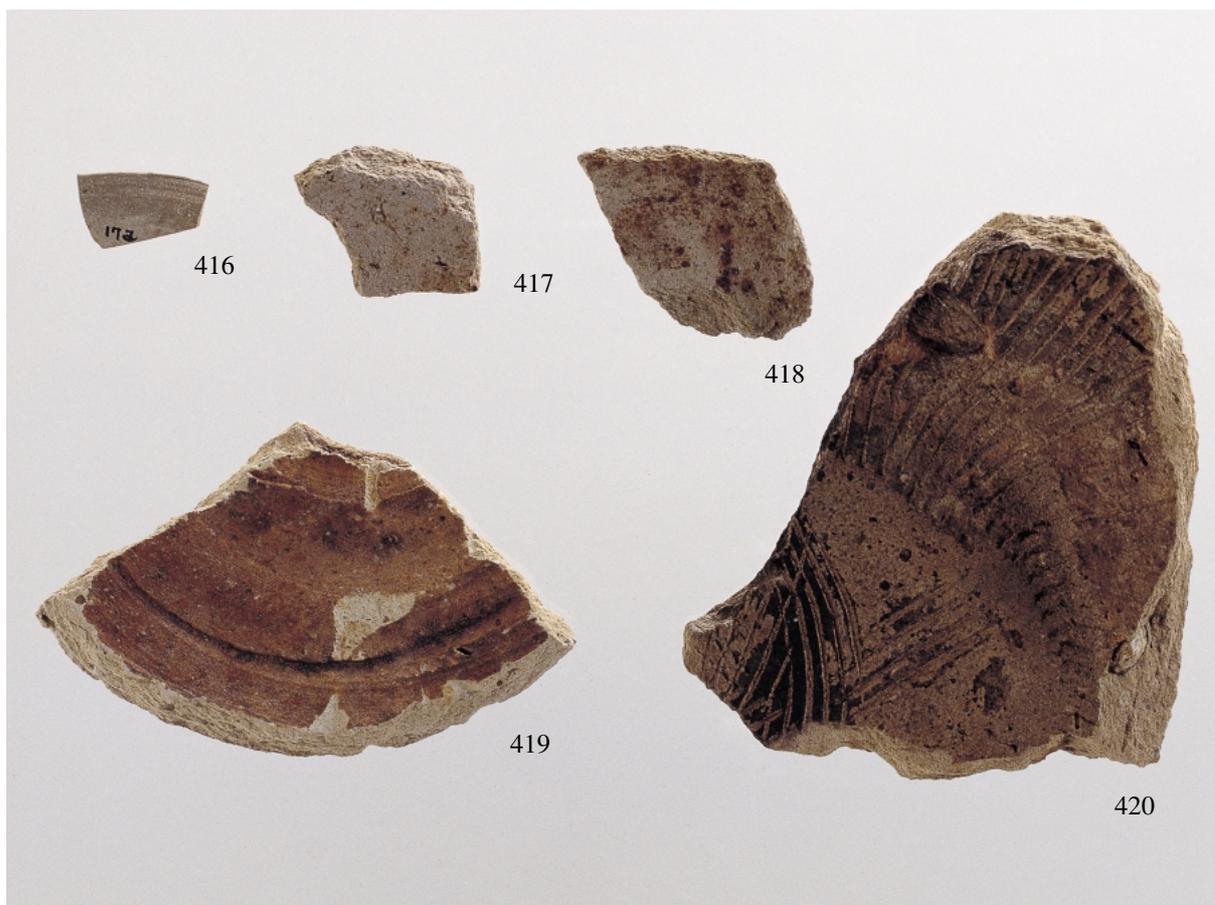
弥生中期の土器（12）※25は弥生前期の土器



弥生後期から古墳前期の土器（1）



弥生後期から古墳前期の土器（2）



中世以降の土器





骨角製品

ふりがな	ひらてちょういせき
書名	平手町遺跡
副書名	西志賀遺跡北東地点の調査
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第101集
編著者名	永井宏幸（編著）・早野浩二・川添和暁・渡邊誠・パリノサーヴェイ
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 2002年 8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらてちょう 平手町遺跡	なごやしきたく 名古屋市北区 ひらてちょう 平手町1丁目	23102		35 度 11 分 54 秒	136 度 54 分 14 秒	199905～ 199909	1,500m ²	独立行政法人産業 技術総合研究所 中部センター 平手サイト 環境整備工事に 伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平手町遺跡	集落	弥生前期	溝（環濠）	弥生土器・石器	西志賀遺跡の北西端を めぐる環濠の可能性が 高い。
		弥生中期	溝（環濠）・竪穴住居	弥生土器・石器	
		弥生後期	溝	弥生土器	
		古墳前期	溝	土師器	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第101集

平手町遺跡

2002年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社